は北妻で総長3.6m、柱間は西から1.5m・1.2m・1.0mとみられる。方向は東側柱列で測るとN−18°−Eである。柱穴は径20〜40cmの円形もしくは楕円形で、深さは20cm前後ある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ2551建物跡】（図版213・214）

東西２間、南北２間の身舎の東側に縁もしくは廂が１間付く東西棟建物跡である。ＳＢ1057建物跡より新しく、ＳＢ2552建物跡より古い。柱穴は身舎で７個、縁または廂で３個検出しており、身舎と縁（または廂）でそれぞれ２ヶ所ずつ径９〜12cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが南側柱列で総長4.8m、柱間寸法は西から1.9m・2.0mで、縁（または廂）の出は0.8m、梁行きは東妻で総長3.6m、柱間は北から2.1m・1.5mとみられる。方向は南側柱列で測るとE−27°−Sである。柱穴は身舎、縁（または廂）とも径20〜45cmの円形もしくは楕円形で、深さは身舎が30cm、縁（または廂）は10cmである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ2552建物跡】（図版213・216）

東西１間、南北２間の建物跡である。ＳＢ1057・2551建物跡より新しい。柱穴は６個すべて検出しており、うち３ヶ所で径10〜16cmの柱痕跡を確認した。平面規模は東側柱列で総長4.2m、柱間寸法は2.1m等間、南側柱列で3.9mである。方向は東側柱列で測るとN−16°−Eである。柱穴は径25〜40cmの円形もしくは楕円形で、深さは10〜20cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ2553建物跡】（図版213・216）

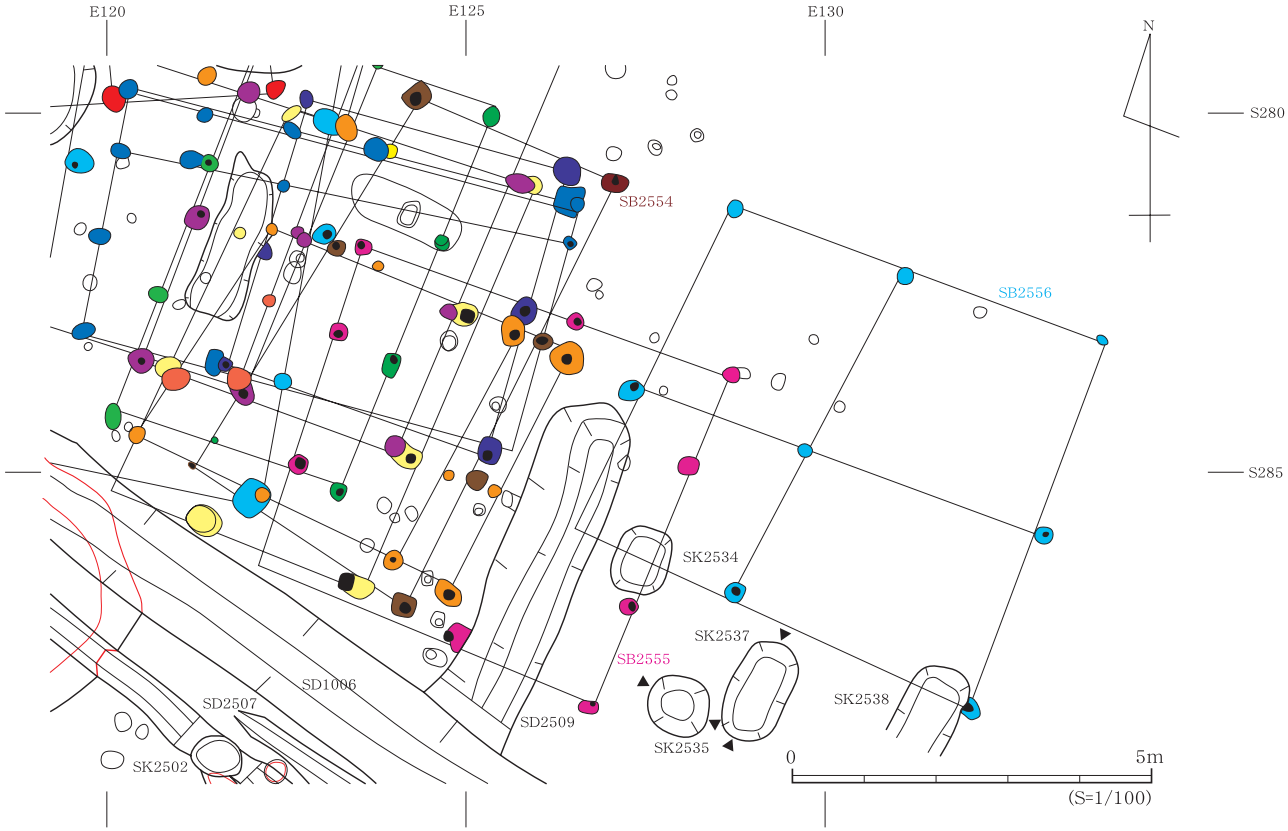
東西２間、南北３間の南北棟建物跡である。ＳＢ1054・1058建物跡より古い。柱穴は９個検出しており、うち３ヶ所で径10〜20cmの柱痕跡、１ヶ所で柱抜取穴を確認した。平面規模は桁行きが東側柱列で総長6.2m、柱間寸法は北から2.1m・2.1m・2.0m、梁行きは北妻で総長3.6m、柱間は西から1.5m・2.1mとみられる。方向は東側柱列で測るとN−24°−Eである。柱穴は径20〜30cmの円形もしくは楕円形で、深さは20〜40cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ2554建物跡】（図版215）

東西１間、南北３間の南北棟建物跡である。柱穴は７個検出しており、うち５ヶ所で径10〜20cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが東側柱列で総長6.6m、柱間寸法は北から2.5m・2.1m・2.1m、梁行きは北妻で3.0m、南妻で3.6mである。方向は東側柱列で測るとN−26°−Eである。柱穴は径30〜40cmの隅丸方形で、深さは15〜30cmある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ2555建物跡】（図版215）

東西２間、南北３間の東西棟建物跡である。ＳＤ2509溝跡より古い。柱穴は９個検出しており、うち７ヶ所で径９〜15cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長5.4m、柱間は西から3.2m・2.2m、梁行きは東妻で総長5.0m、柱間寸法は北から1.4m・2.1m・1.5mとみられる。方向は北側柱列で測るとE−20°−Sである。柱穴は径20〜30cmの円形もしくは楕円形で、深さは20〜40cmある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトである。柱穴埋土や柱痕跡よりかわらけが出



図版215　SB2554～2556建物跡

土している。

【ＳＢ2556建物跡】（図版215）

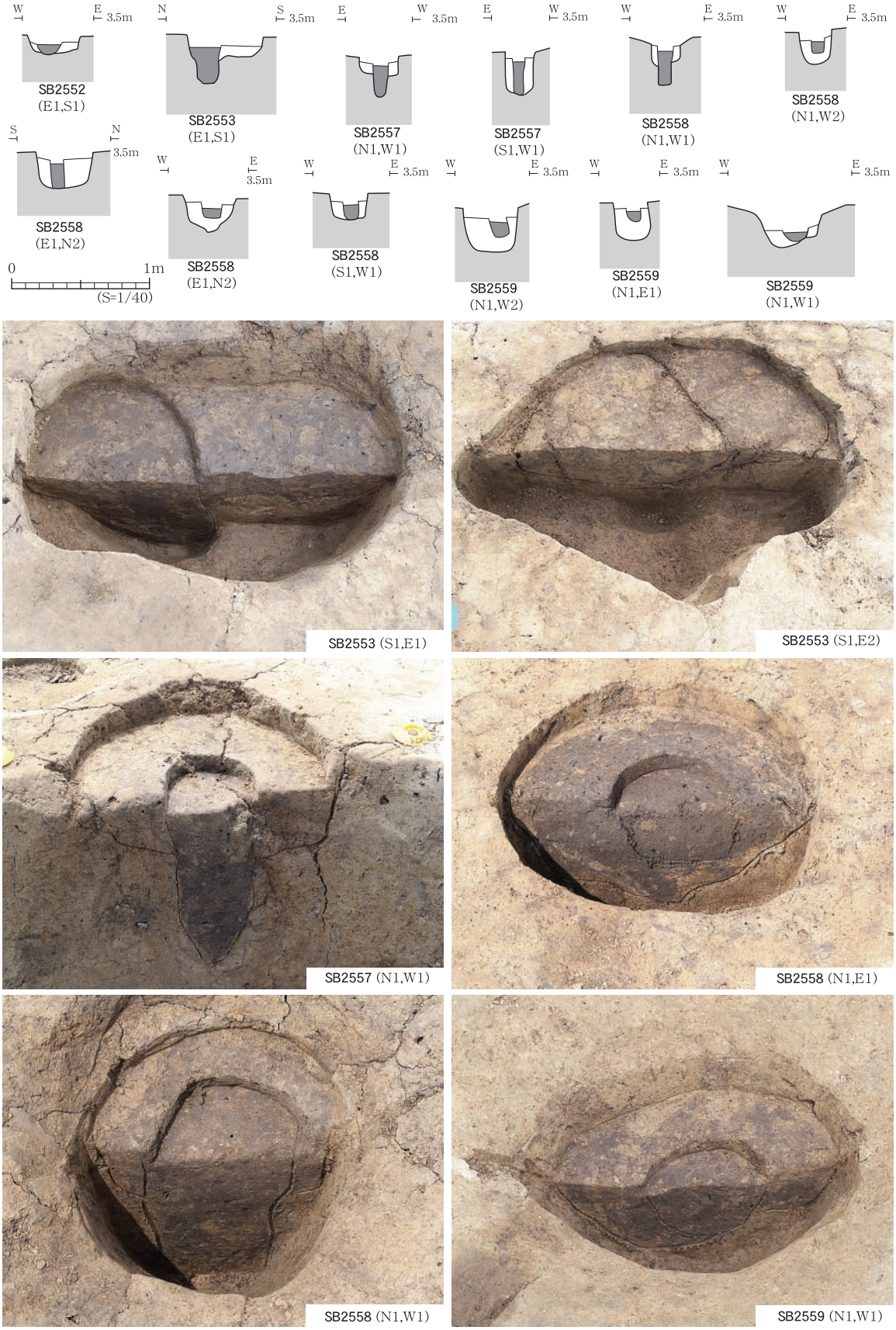
東西２間、南北２間の総柱建物跡である。ＳＫ2538土壙、ＳＤ2509溝跡より古い。柱穴は８個検出しており、うち５ヶ所で径９～13cmの柱痕跡を確認した。平面規模は東側柱列が総長5.5m、柱間寸法は北から2.8m・2.7m、北側柱列で総長5.4m、柱間は西から2.5m・2.9mとみられる。方向は北側柱列で測るとＥ-21°-Ｓである。柱穴は径25～35cmの円形もしくは楕円形で、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ2557建物跡】（図版213・216）

東西１間、南北１間の建物跡である。ＳＫ1008土壙より新しい。柱穴は４個すべて検出しており、うち３ヶ所で径10cm前後の柱痕跡、１ヶ所で柱抜取穴を確認した。平面規模は西側柱列が4.2m、南側柱列で3.7mである。方向は西側柱列で測るとＮ-28°-Ｅである。柱穴は一辺が25cmほど隅丸方形で、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ2558建物跡】（図版213・216）

東西２間、南北２間の建物跡である。柱穴は８個すべて検出しており、うち５ヶ所で径９～14cmの柱痕跡を確認した。平面規模は北側柱列が総長3.8m、柱間寸法は1.9m等間、西側柱列で総長3.5m、柱間は北から1.6m・1.9mとみられる。方向は北側柱列で測るとＥ-35°-Ｓである。柱穴は径20～40cmの円形もしくは楕円形で、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトで



図版216　SB2552・2553・2557~2559建物跡柱穴断面

調査区	遺構名	建物間数		棟方向	平面規模						建物の方向		柱痕跡	柱穴掘方		備考	図版No.
		桁行	梁行		桁行総長(m)/測定柱列/柱間寸法(m)			梁行総長(m)/測定柱列/柱間寸法(m)			角度/計測柱列		(cm)	規模(cm)	平面形		
B区	SB1054	3	2	南北	6.0	西	2.0+1.8+2.2	3.8	南	1.6+2.2	N−21−E	西	10～12	30～50	楕円形	内部柱あり	平:213 断:214
B区	SB1055	3	2	南北	5.6	東	1.9+1.8+2.0	3.5	南	1.6+1.9	N−22−E	東	15	20～25	楕円形、隅丸方形	**埋土）**かわらけ	平:213 断:214
B区	SB1056	(5)	2+1	東西	6.5	北	1.1+1.2+1.2+3.1(2間分)	3.4	西	0.8+1.2+1.4	E−14−S	北	11～18	20～45	楕円形	北面に廂または縁が付く	平:213 断:214
B区	SB1057	4	1	南北	7.4	東	2.0+1.5+2.2+1.7	3.5	北	3.5	N−9−E	東	9～12	25～50	円形、楕円形		平:213
B区	SB1058	(3)	3	南北	5.0	東	3.8(2間分)+1.2	3.6	北	1.5+1.2+1.0	N−18−E	東		20～40	楕円形		平:213 断:214
B区	SB2551	2+1	2	東西	4.8	南	1.9+2.0+0.8	3.6	東	2.1+1.5	E−27−S	南	9～12	20～50	円形、楕円形	東面に廂または縁が付く	平:213 断:214
B区	SB2552	2	1	南北	4.1	東	2.1+2.1	3.9	南	3.9	N−16−E	東	10～16	25～40	隅丸方形、楕円形		平:213 断:216
B区	SB2553	3	2	南北	6.2	東	2.1+2.1+2.0	3.6	北	1.5+2.1	N−24−E	東	8～23	25～30	隅丸方形		平:213 断:216
B区	SB2554	3	1	南北	6.6	東	2.5+2.1+2.1	3.6	南	3.6	N−26−E	東	10～18	30～40	隅丸方形		平:215 断:216
B区	SB2555	2	3	東西	5.4	北	3.2+2.3	5.0	東	1.4+2.1+1.5	E−20−S	北	9～15	20～30	円形	**埋土）**かわらけ **柱痕跡）**かわらけ	平:215 断:216
B区	SB2556	2	2	−	5.5	東	2.8+2.7	5.4	北	2.5+2.9	E−21−N	北	9～13	25～35	楕円形	内部柱あり	平:213
B区	SB2557	1	1	−	4.2	西	4.2	3.7	北	3.7	N−28−E	西	9～11	20～25	隅丸方形		平:213 断:216
B区	SB2558	2	2	−	3.8	北	1.9+1.9	3.5	西	1.6+1.9	E−35−S	北	9～14	20～40	隅丸方形、円形	**埋土）**常滑片口鉢	平:213 断:216
B区	SB2559	3	1	東西	6.2	北	2.0+2.4+1.8	3.9	東	3.9	E−34−S	北	11～17	25～40	隅丸方形、円形		平:213 断:216

※（　）内の数値は推定値
※ 建物間数の欄で「2+1」とあるのは、「身舎2間、廂（または縁）1間」であることを示す。
※ 柱間寸法は、東西方向のものは西から、南北方向のものは北から順に記した。
※ 柱間寸法の**ゴシック体数字**は廂または縁の柱間寸法を示す。

第13表　B区建物跡属性表

ある。柱穴埋土から常滑産片口鉢が出土している。

【ＳＢ2559建物跡】（図版213・216）

東西３間、南北１間の東西棟建物跡である。柱穴は７個検出しており、うち３ヶ所で径15㎝前後の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長6.2ｍ、柱間は西から2.0ｍ・2.4ｍ・1.8ｍ、梁行きは東妻で3.9ｍとみられる。方向は北側柱列で測るとＥ−34°−Ｓである。柱穴は径25～40㎝の円形もしくは楕円形で、深さは20～30㎝ある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトである。柱穴埋土から常滑産甕が出土している。

ｂ．井戸跡

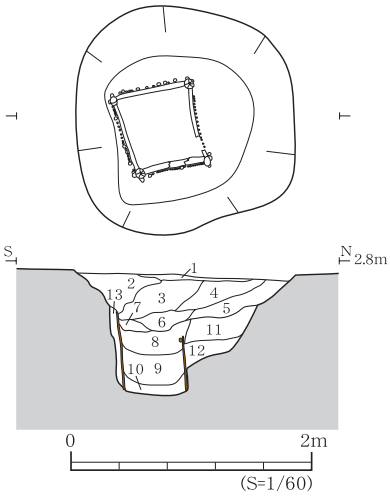
井戸跡は９基確認した。分布をみると、東端に散在するが、ＳＸ1397遺物包含層と重複する６基は、いずれもＳＸ1397より新しい。このうち、枠を有するＳＥ2480は個別に、他は一括して概要を述べることとし、個別データは、第14表にまとめた。

（ｉ）井戸側を有するもの

【ＳＥ2480井戸跡】（図版217）

Ｂ３区東側で確認した細い心持材や竹材を簾状に組んだ枠をもつ井戸跡である。掘方の平面形は確認面で2.0×1.8ｍの円形、底面では一辺0.７ｍの方形で、深さは1.0ｍある。断面形は東壁に段を持つ逆台形である。枠の内法は一辺60㎝で、径２～４㎝ほどの心持材や竹材を縦方向に簾状に立てて側とし、それを隅柱に組み込んだ横桟で保持している。側材の中には樹皮が残るものも認められた。横桟は上下40㎝ほどの間隔で２段確認できた。隅柱は径５～７㎝の心持材を使用しており、残りの良いものは高さが120㎝あり、なかには樹皮を残すものもあった。ほぞ穴は４×３㎝の方形である。横桟は径４㎝ほどの心持材の両端を加工している。

堆積土は枠抜取穴堆積土（１～７）と枠内堆積土（８～10）、掘方埋土（11～13）に分けられ、枠



断面写真（東から）

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR6/1)粘土質シルト		枠抜取穴
2	黒褐色(10YR3/1)粘土		
3	褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト	地山ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR3/1)シルト		
5	灰黄褐色(10YR4/2)		
6	褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト	地山ブロックを含む	
7	褐灰色(10YR4/1)粘土		

No.	土色・土性	混入物など	備考
8	褐灰色(10YR4/1)粘土		枠内堆積土
9	暗青灰色(10BG4/1)粘土質シルト		
10	青灰色(10BG5/1)砂		
11	灰黄褐色(10YR6/2)シルト		埋土
12	灰黄褐色(10YR5/2)シルト		
13	褐灰色(10YR4/1)粘土		

井戸側内部完掘写真（北東から）

西辺側板

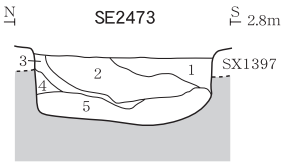
南東隅柱と横桟・側板アップ

南西隅柱と横桟・側板アップ

南西隅柱
（縮尺：任意）

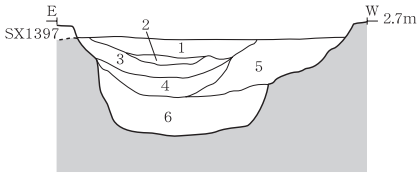
図版217　SE2480井戸跡

SE2473



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR5/1)粘土		
2	褐灰色(10YR4/1)粘土	炭化物を含む	
3	褐灰色(7.5YR4/1)粘土	地山ブロックを含む	
4	褐灰色(10YR3/1)粘土		
5	黒褐色(10YR3/1)粘土		

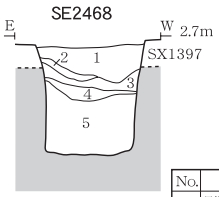
SE2466



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト		
2	灰褐色(10YR5/2)粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR3/1)粘土		
4	黒褐色(10YR3/1)粘土	3より粘質	
5	褐灰色(10YR4/1)シルト		人為堆積？
6	黒褐色(10YR3/1)粘土		
7	暗緑灰(7.5GY4/1)砂		

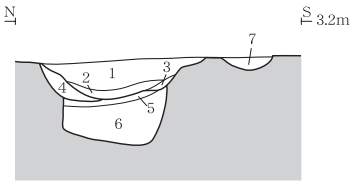
SE2468断面写真（北から）

SE2468



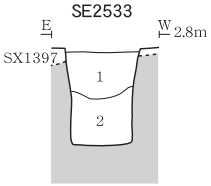
No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		
2	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	
3	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		
4	淡黄色(2.5Y8/4)粘土質シルト		
5	黒褐色(10YR3/1)粘土		

SE2491・SD2506・SD2505



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト		SD1007堆積土
2	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
3	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		
4	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山粒をラミナ状に含む	SD2506堆積土
5	灰黄褐色(10YR4/2)粘土		SE2505堆積土
6	黒褐色(10YR3/1)粘土	灰黄褐色(10YR5/2)粘土との互層	
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	地山ブロックを多く含む	溝跡堆積土

SE2533

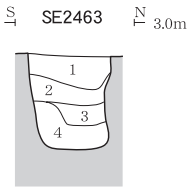


No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)粘土		
2	黒褐色(10YR3/2)粘土	地山小ブロックを多く含む	

SE2491・SD2506・SD2505断面写真（西から）

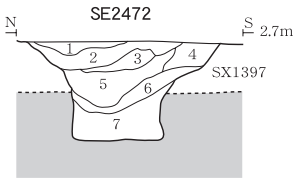
0　2m
(S=1/60)

SE2463



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		
2	灰黄褐色(10YR4/2)粘土		
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土	地山ブロックを多く含む	壁崩落土
4	灰黄褐色(10YR4/2)粘土	均質な層	自然堆積

SE2472



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		
2	褐灰色(10YR4/1)シルト	地山ブロックを含む	
3	褐灰色(10YR5/1)粘土		
4	褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト		
5	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	炭化物を含む	
6	炭化物層		
7	褐灰色(10YR4/1)粘土		

SE2472断面写真（西から）

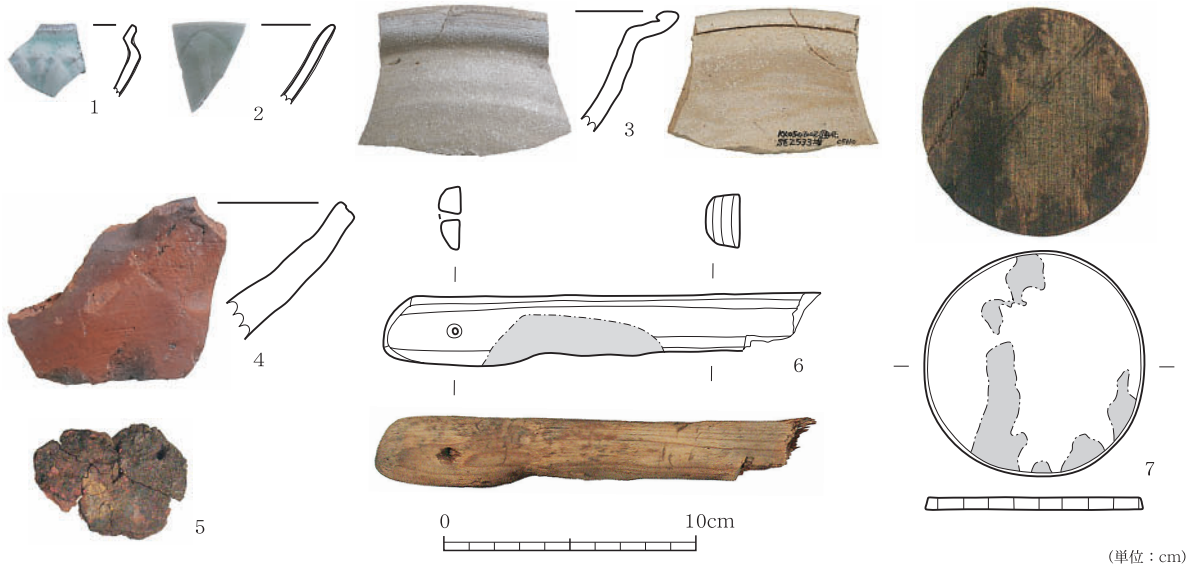
図版218　B区井戸跡

抜取りののち埋戻されている。遺物は確認面から青磁小壺（図版219－1）が出土している。

（ⅱ）素掘りのもの（図版218）

８基検出した。平面形は確認面で楕円形が３基のほかは、円形もしくは円形とみられるが、下部の平面形はすべて円形である。断面形は箱形が６基、漏斗形が２基認められる。規模は確認面の径が0.6～2.4m、下部径0.5～1.6m、深さは0.5～1.0mあるが、下部径、深さとも0.6～1.0mのものは４基ある。堆積土はいずれも自然堆積で、下部は壁の崩落土を多く含む。

遺物は堆積土から出土している（図版219）。ＳＥ2473の上層から鉄滓（５）、堆積土から鎌柄（６）、ＳＥ2533の堆積土から瀬戸美濃産陶器煙硝擂（３）、在地産片口鉢（４）・甕、ＳＥ2539の堆積土から龍泉窯系鎬蓮弁文椀（２）や柄杓（７）が出土している。



（単位：cm）

No.	出土遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	SE2480　確認面	青磁	小壺	龍泉窯系	画花文（花＋蓮弁）	05174
2	SE2539　堆積土	青磁	鎬蓮弁文椀	龍泉窯系		05175
3	SE2533　堆積土	陶器	煙硝擂	瀬戸美濃	【17c末～18c初】	05110
4	SE2533　堆積土	陶器	片口鉢	在地		05036
5	SE2473　上層	鉄滓				05111
6	SE2473　堆積土	木製品	鎌柄		長(17.3)　幅2.8　厚1.3	05112
7	SE2539　堆積土	木製品	柄杓底板		径8.8　厚0.5　内面：黒色漆塗り	05113

図版219　B区井戸跡出土遺物

遺構No.	構造	平面形	断面形	規模（m）			堆積土の状況	出　土　遺　物	備　　考	図No.	
				確認面	下部	深さ				平面	断面
ＳＥ2463	素掘	円形？	箱形	0.7×0.6以上	径0.6	0.8	自然			210	218
ＳＥ2466	素掘	楕円形	箱形	2.4×1.6	径1.4	0.9	自然？		ＳＸ1397→ＳＥ2466　西壁に段　**第Ⅶ期か**	210	218
ＳＥ2468	素掘	円形	箱形	1.1×0.9	径0.7	1.0	自然		ＳＸ1397→ＳＥ2468　**第Ⅶ期か**	210	218
ＳＥ2472	素掘	楕円形	漏斗形	1.6×1.3	径0.7	0.8	自然		ＳＸ1397→ＳＥ2472　**第Ⅶ期か**	209	218
ＳＥ2473	素掘	円形	箱形	1.6×1.4	―	0.6	自然？	**上層）**鉄製品　**堆）**鎌柄	ＳＸ1397→ＳＥ2473　**第Ⅶ期か**	209	218
ＳＥ2480	木組	円形	逆台形	2.0×1.8	―	1.0	自然→人為	**確）**青磁小壺	縦簾組隅柱横桟止め（側：一辺0.6m）**第Ⅶ期か**	208	217
ＳＥ2505	素掘	円形	箱形	1.0×0.8	―	0.7	自然		ＳＥ2505→ＳＤ1007	209	218
ＳＥ2533	素掘	円形	箱形	0.7×0.6	径0.5	0.8	自然	**堆）**瀬戸美濃-陶-煙硝擂、在地片口鉢・甕	ＳＸ1397→ＳＥ2533　**第Ⅶ期**	210	218
ＳＥ2539	素掘	楕円形	漏斗形	1.4×1.0	径0.7	0.5	自然	**堆）**青磁鎬椀、柄杓	ＳＸ1397→ＳＥ2539　**第Ⅶ期か**	210	

※　出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、在地は宮城県内の在地窯で生産された中世陶器を指す
※　出土遺物の陶器は近世陶器を指す

第14表　B区井戸跡属性表

ｃ．墓壙

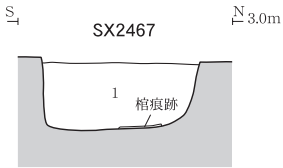
Ｂ３区北部で径もしくは一辺が0.6～1.7ｍで、深さ0.5ｍ以内の比較期浅い土壙を20基確認した。これと似た形態は隣接する市教委４次調査区の北側でも発見されており、総数は50基を超えるとみられる。これらは東西30ｍ、南北20ｍの比較的狭い範囲に群集すること、ＳＸ2467から人の歯や六道銭が出土したこと、ＳＸ2514から人骨が出土したことから、墓壙と考えられる。このうち、ＳＸ2467・2514は個別の記述を行うこととし、個別のデータは第15表にまとめた（図版221）。

【ＳＸ2467墓跡】（図版220）

Ｂ区北東部で確認した。平面形は1.3×0.9ｍの隅丸方形である。断面形は箱形で、深さは0.5ｍある。北壁に近い底面直上に木質がわずかに認められ、その周囲から人の歯と六道銭である銭貨「永楽通寶」（初鋳1408年）が６枚出土した（図版222）。

【ＳＸ2514墓跡】（図版220）

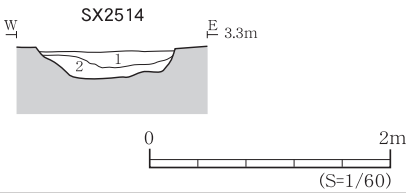
Ｂ区北部中央で確認した。平面形は径1.2ｍの円形である。断面形は皿形で、深さは0.3ｍある。底面から人骨１体分出土したが保存状況は悪かった。



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	人為堆積

SX2467 断面写真（東から）

SX2467底面 銭貨出土状況アップ

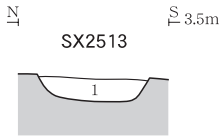


No.	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(7.5YR7/4)粘土質シルト		
2	褐灰(10YR6/1)粘土質シルト		

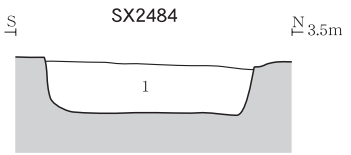
SX2514 断面写真（南から）

SX2514 人骨検出状況

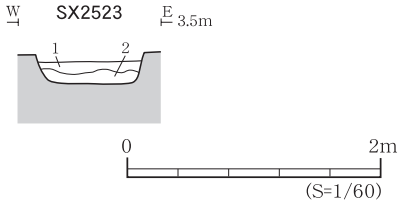
図版220　SX2467・2514墓跡



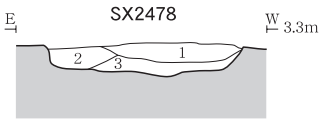
No.	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)砂	黒褐色(10YR3/1)シルトブロックを多く含む	



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	暗褐色(10YR3/4)砂	地山ブロックを層下部に多く含む	



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)砂質シルト	地山ブロックを含む	
2	褐色(10YR4/4)砂	黒褐色シルトブロックを含む	

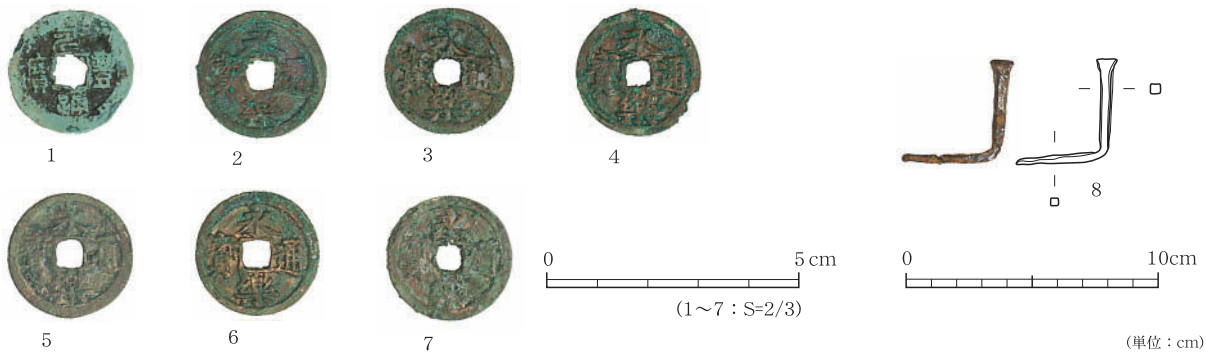


No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)シルト	炭化物を含む	
2	にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト		
3	にぶい黄橙色(10YR7/3)シルト		
4	にぶい黄橙色(10YR7/3)砂		

SX2523 断面写真（南から）

SX2478 断面写真（北から）

図版221　B区墓壙



（単位：cm）

No.	出土遺構・層位	種別	器種	特徴	登録
1	SX2484　確認面	銅製品	銭貨	「元豊通寶」（初鋳1078年）	05106
2	SX2467　底面	銅製品	銭貨	「永楽通寶」（初鋳1408年）	05116
3	SX2467　底面	銅製品	銭貨	「永楽通寶」（初鋳1408年）	05117
4	SX2467　底面	銅製品	銭貨	「永楽通寶」（初鋳1408年）	05118
5	SX2467　底面	銅製品	銭貨	「永楽通寶」（初鋳1408年）	05119
6	SX2467　底面	銅製品	銭貨	「永楽通寶」（初鋳1408年）	05120
7	SX2467　底面	銅製品	銭貨	「永楽通寶」（初鋳1408年）	05121
8	SX2513　堆積土	鉄製品	釘	長4.3　幅0.4　厚0.4	05108

図版222　B区墓壙出土遺物

遺構No.	平面形	断面形	規模(m)	深さ(m)	分類	堆積土の状況	出　土　遺　物	備　　考	図 No.	
									平面	断面
ＳＸ2467	隅丸方形	箱形	1.3×0.9	0.5		人為	**底）**銭「永楽通寶」（初鋳1408年）**第Ⅴ～Ⅵ期）**	銭は６枚出土→六道銭	210	220
ＳＸ2477	楕円形	皿形	1.6×0.8	0.3		人為？			210	
ＳＸ2478	円形	箱形	1.6×1.5	0.3		人為			208	221
ＳＸ2484	円形	箱形	径1.7	0.4		人為？	**確）**銭「元豊通寶」（初鋳1078年）		208	221
ＳＸ2486	楕円形	箱形	1.2×0.7	0.4					208	
ＳＸ2512	円形？	箱形	1.2×0.7以上	0.2		人為			210	
ＳＸ2513	楕円形	箱形	0.9×0.6	0.2		人為	**堆）**鉄釘		210	221
ＳＸ2514	円形	皿形	径1.2	0.3		人為	**２層）**人骨		208	220
ＳＸ2518	楕円形	皿形	0.7×0.5	0.1		人為			210	
ＳＸ2519	楕円形	皿形	0.9×0.5	0.1		人為			208	
ＳＸ2520	円形	皿形	径0.6	0.1		人為			208	
ＳＸ2521	楕円形	皿形	1.1×0.6	0.1		人為			210	
ＳＸ2523	円形	箱形	0.9×0.7	0.2		人為			208	221
ＳＸ2524	円形？	皿形	1.7×0.4以上	0.1		人為			208	
ＳＸ2525	円形	皿形	0.6×0.4以上	0.1		人為			208	
ＳＸ2526	楕円形	皿形	0.9×0.5	0.1		人為			208	
ＳＸ2529	円形	皿形	径0.6	0.2		人為			208	
ＳＸ2531	円形	皿形	径0.7	0.1					208	
ＳＸ2532	円形	皿形	径0.7	0.1		人為			208	
ＳＸ2565	隅丸方形	箱形	1.0×0.7	0.2					208	

第15表　Ｂ区墓壙属性表

ｄ．土壙

36基確認した。これらは規模や平面形から４類に分けられる。このうちＳＫ1008・2475・2500は個別の記述を行うが、他の土壙の概要は分類にしたがって述べることとし、それぞれのデータは第16表にまとめた。

１類：径もしくは最大径が3.0ｍを超える大型土壙

【ＳＫ1008土壙】（図版223）

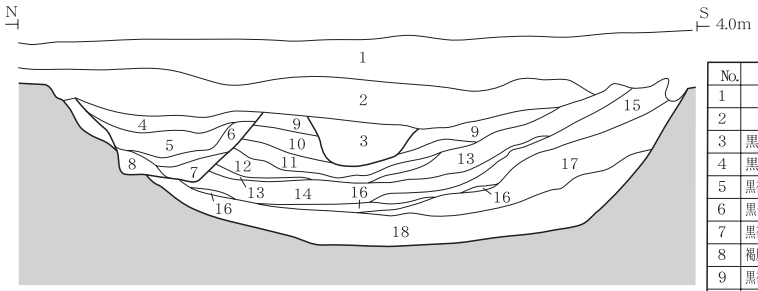
Ｂ２区中央部で確認した。ＳＢ2557建物跡、ＳＤ1006・1007溝跡より古い。1994年度に西半部を調査しており、その成果は『Ⅱ』で報告した。今回の調査で全体が判明したため、過去の成果を含めて報告する。平面形は径が4.8ｍの円形で、深さは1.3ｍある。断面形は逆台形で、底面は中央に向けてゆるやかに傾斜する。堆積土は10層に分けられたが、４層に大別できる。４層が自然堆積土、１～３層は焼土・炭化物・灰・植物遺体を含む廃棄層と自然堆積土である。

遺物は堆積土から出土した（図版225～227）。４層から常滑産甕や白磁椀（５）、３層からロクロかわらけ皿や白磁四耳壺（７）、２層から常滑産甕（11）、在地産甕や不明鉄製品（15・17）、２～３層からはロクロかわらけ小皿（４）、手づくねかわらけ皿（２）・小皿（３）、常滑産片口鉢（10・12・13）・甕（１）、在地産片口鉢（９）、漆椀（14）・片口鉢、白木皿、人物墨書礫（19）、不明鉄製品（16）、切石（18・20）、鉄滓やイシガイ科殻、ウリ科種実、モモ核、１層から在地産片口鉢や白磁四耳壺（６）、堆積土から常滑産甕（８）やかわらけが出土している。常滑産陶器は、４が１ｂ～２型式期、１は２～３型式期、10は３型式期、12・13は５型式期に位置付けられる（註１）。

【ＳＫ2475土壙】（図版224）

Ｂ３区北東部で確認した。ＳＸ1397遺物包含層より新しい。平面形は径が6.2ｍの円形で、深さは0.8ｍある。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は８層に分けられたが、３層に大別できる。下・中層が自然堆積土、上層が人為堆積土である。

遺物は底面と堆積土から出土した（図版228）。底面から中Ⅲ期の瀬戸産平碗（１）、底面直上か

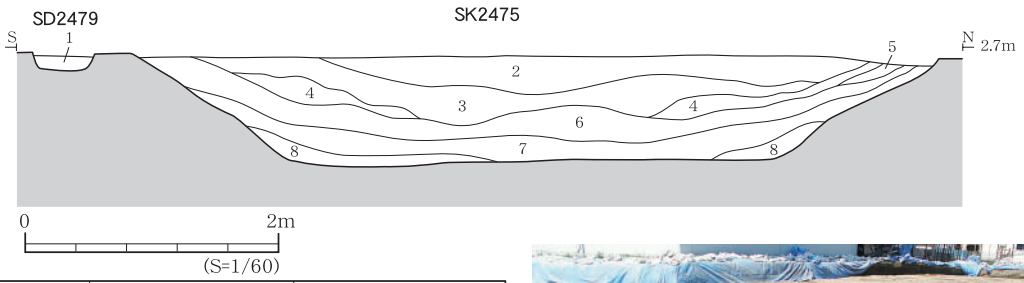


No.	土色・土性	混入物など	備考
1			第Ⅰb層
2			第Ⅱ層
3	黒褐色(10YR3/2)シルト		SD1007堆積土
4	黒褐色(10YR3/2)シルト		SD1006堆積土
5	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト		
6	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	炭化物を多く含む	
7	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト		
8	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		
9	黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト		SD1008大別1層
10	黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト	炭化物を多く含む	SD1008大別2層
11	黒色(10YR2/1)シルト質粘土		
12	黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土		
13	褐灰色(10YR4/1)粘土		SD1008大別3層
14	黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土		
15	褐灰色(10YR4/1)砂質シルト		
16	黄灰色(2.5Y4/1)粘土		
17	褐灰色(10YR4/1)シルト		
18	黒色(10YR2/1)粘土		SK1008大別4層

0　2m

断面写真（西から）

図版223　SK1008土壙



No.	土色・土性	混入物など	備考	
1	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山ブロックを多量に含む	SD2479 堆積土	
2	黒褐色(10YR2/3)シルト	地山ブロック含む	上層	SK2475 堆積土
3	黒褐色(10YR3/1)シルト粘土質	地山ブロックを多く含む		
4	黒褐色(10YR3/1) シルト	地山粒をラミナ状に含む		
5	黒褐色(10YR2/3)シルト	地山粒をラミナ状に含む		
6	黒褐色(10YR2/2)粘土		中層	
7	暗青灰(5B3/1)粘土	地山粒をラミナ状に含む	下層	
8	暗青灰(5B3/1)粘土	砂をラミナ状に含む、還元		

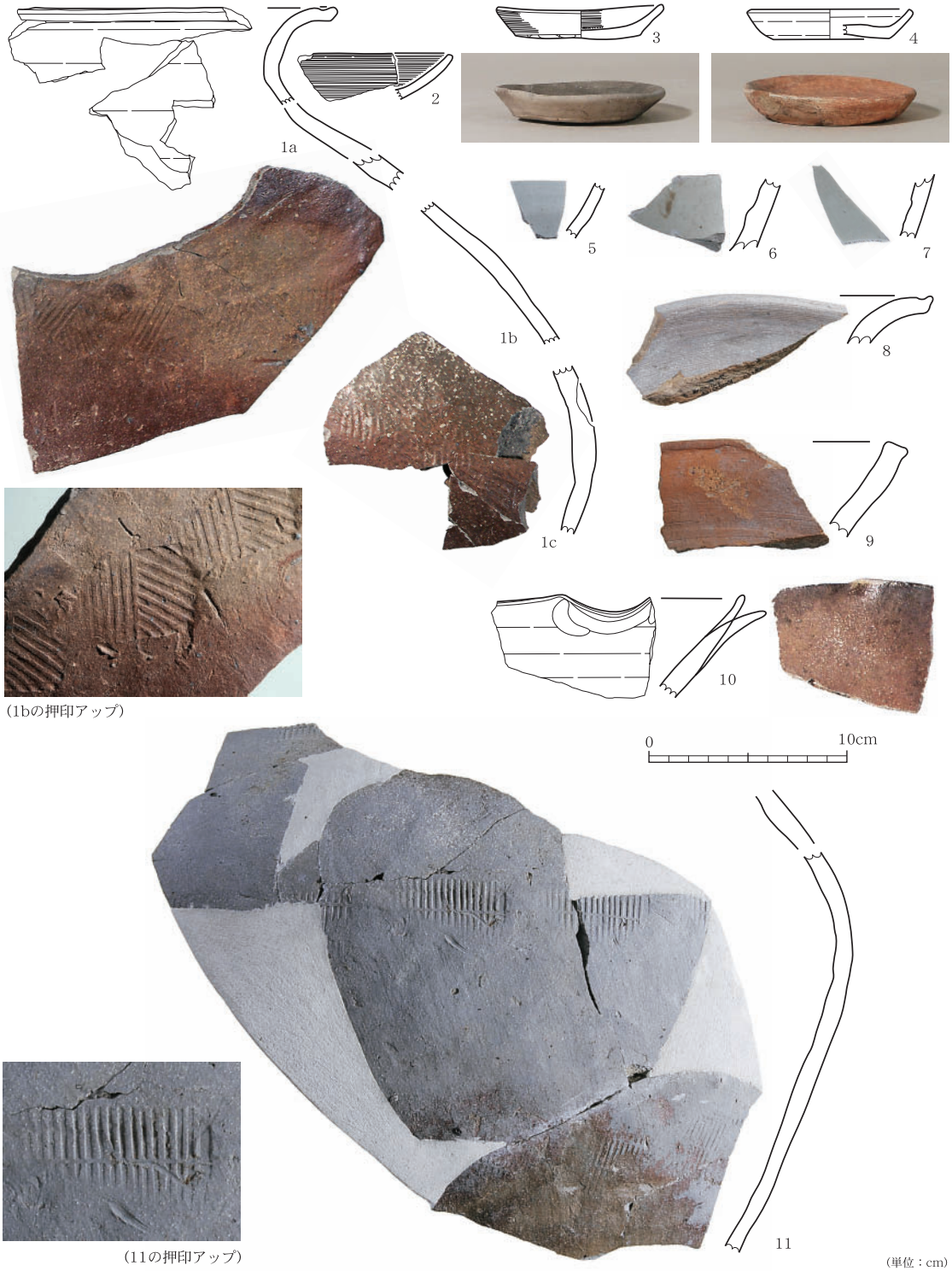
断面写真（北東から）

作業風景（東から）

底面 平碗出土状況

下層上面 鯨骨出土状況

図版224　SK2475土壙



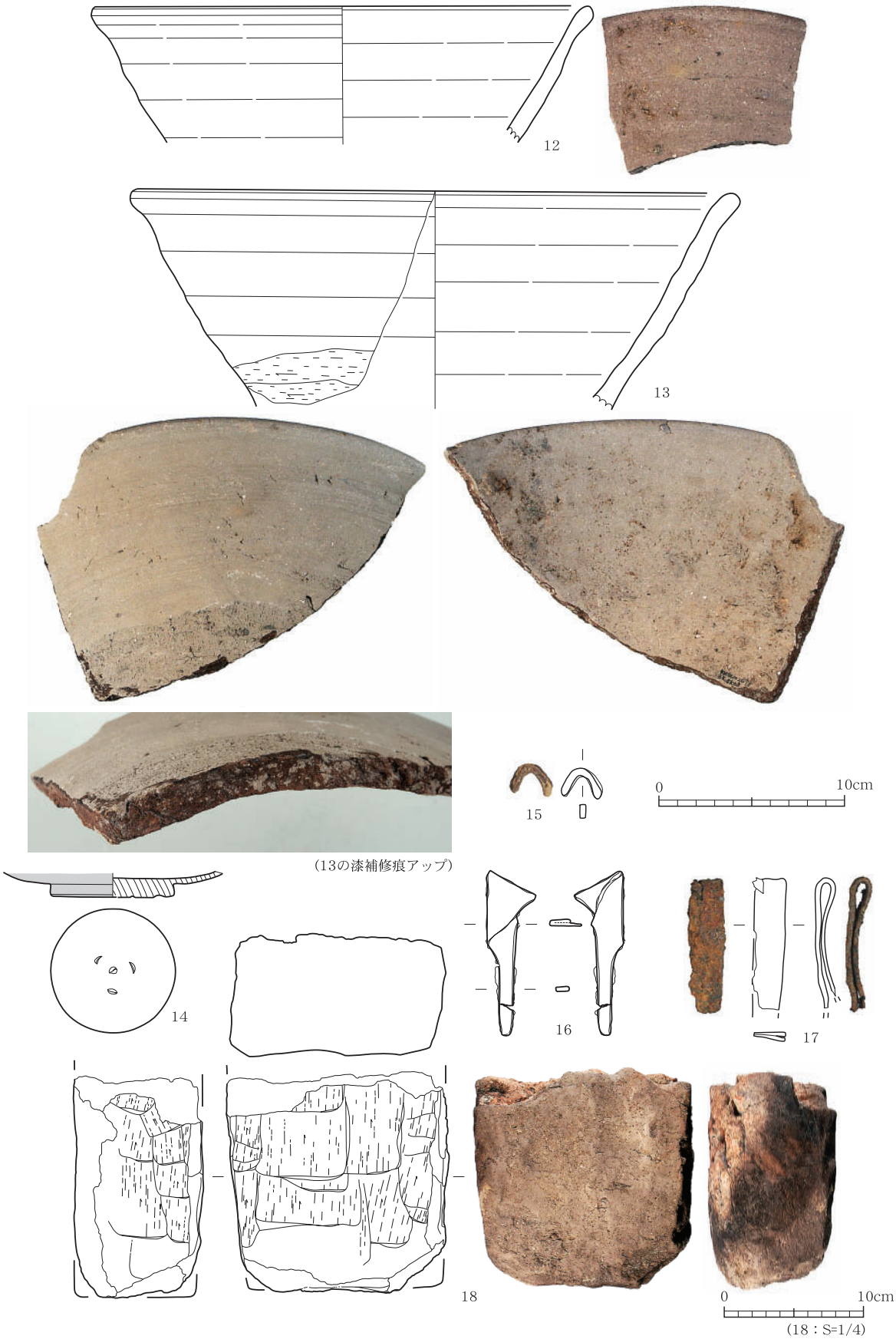
（1bの押印アップ）

（11の押印アップ）

（単位：cm）

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	2～3層	無釉陶器	甕	常滑	押印(3段以上　縦線+斜線）　漆継　【常滑2～3型式期】　Ⅱの再録	94004
2	2～3層	手づくねかわらけ	小皿		口縁部：一段ナデ　灯明皿に使用　Ⅱの再録	94046
3	2～3層	手づくねかわらけ	小皿		口径8.4　底径6.4　器高1.4　口縁部：一段ナデ　底部内面：一方向ナデ　Ⅱの再録	94001
4	2～3層	ロクロかわらけ	小皿		口径8.4　底径5.8　器高1.5　ロクロナデ　底部：回転糸切→板状圧痕　SD1007と接合　Ⅱの再録	94008
5	4層	白磁	玉縁椀ヵ		【大宰府分類Ⅹ Ⅰ´-2類ヵ】	05127
6	1層	白磁	四耳壺		7と同一個体ヵ	05129
7	3層	白磁	四耳壺			05128
8	堆積土	陶器	甕	常滑	【常滑1b～2型式期ヵ】	05126
9	1層	陶器	片口鉢	在地(白石ヵ)		05125
10	2～3層	陶器	片口鉢	常滑	【常滑3型式期】　Ⅱの再録	94009
11	2層	陶器	甕	常滑	押印(簾状)　SK1008-1～8層(94005)と接合	05123

図版225　SK1008土壙出土遺物（1）



図版226　SK1008土壙出土遺物（2）

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴		登　録
12	2～3層	陶器	片口鉢	常滑	口径27.0　【常滑5型式期】	Ⅱの再録	94051
13	2～3層	陶器	片口鉢	常滑	口径32.8　漆継　【常滑5型式期】　SD1007と接合	Ⅱの再録	94006
14	2～3層	漆器	椀		高台径6.5　内外面：黒色漆　底部：ロクロ爪跡　【横木取り】	Ⅱの再録	94007
15	2層	鉄製品	不明鉄製品		長2.2　幅0.7　厚0.4		05133
16	2～3層	鉄製品	不明鉄製品		残存長9.8　幅2.7　厚0.3	Ⅱの再録	94022
17	2層	鉄製品	不明鉄製品		残存長7.1　幅1.7　厚0.3		05130
18	2～3層	石製品	切石		残存長15.9　幅15.8　厚8.7　削り痕　焼けはじけ　【凝灰岩】	Ⅱの再録	94066
19	2～3層	石製品	墨書礫		残存長23.1　残存幅18.2　厚5.3　二人の人物全身像を描く　【砂岩】	Ⅱの再録	94075
20	2～3層	石製品	切石		残存長24.7　幅18.2　厚12.4　削り痕　焼けはじけ　【凝灰岩】	Ⅱの再録	94067

図版227　SK1008土壙出土遺物（3）

ら常滑産甕や在地産片口鉢（２）、下層からシカ角や同定不能骨、下層上面からクジラ椎骨、中層から常滑産三筋壺（５）・片口鉢・甕、在地産片口鉢・甕、須恵器系陶器壺、上層から在地産片口鉢、常滑産甕、渥美産甕や同定不能骨、堆積土から常滑産片口鉢・甕、渥美産甕、在地産片口鉢・甕、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文椀（４）、龍泉窯系青磁椀（３）、かわらけ、銭貨「元豊通寶」（初鋳1078年）（８・９）、転用砥（６）、砥石（７）やクルミ核が出土している。

２類：径もしくは長軸の長さが1.2m以上～3.0m未満の中型土壙（図版230）

６基検出した。Ｂ２区中央部（ＳＫ2500・2537）とＢ３区南東部（ＳＫ2461・2462・2464・2465）に点在する。平面形は円形もしくは楕円形で、深さは0.2～0.9mあり、断面形は皿形が３基（ＳＫ2462・2500・2537）と逆台形２基（ＳＫ2461・2465）、擂鉢形１基（ＳＫ2464）である。堆積土は自然堆積と自然堆積ののち人為的に埋戻されているもの（ＳＫ2464・2500）がある。

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	底面	施釉陶器	平椀	瀬戸	高台径5.8　残存：2/5　ロクロナデ→回転ヘラケズリ　底部：高台接合後ロクロナデ　【古瀬戸中Ⅲ期ヵ】	05094
2	底面直上	陶器	片口鉢	在地	口径28.2　口唇に沈線　SX1600A東溝(94064)と同一個体	05034・05035
3	堆積土	青磁	小椀ヵ	龍泉窯系ヵ	胎土：白	05096
4	堆積土	青磁	鎬蓮弁文椀	龍泉窯系ヵ	胎土：灰色　釉厚が薄い	05095
5	ベルト中層	陶器	三筋壺	常滑	沈線(3本)：複線	05093
6	堆積土	陶器	転用砥	常滑	甕の破片を砥石に転用	05030
7	堆積土	石製品	砥石		残存長(10.2)　幅5.8　厚2.2	05261
8	堆積土	銅製品	銭貨		「元豊通寳」（初鋳1078年）	05100
9	堆積土	銅製品	銭貨		「元豊通寳」（初鋳1078年）	05101

図版228　SK2475土壙出土遺物

遺物は底面や堆積土から出土している（図版231）。ＳＫ2465は底面直上から柄杓（４）、２層から在地産甕、ロクロかわらけが出土した。他はいずれも堆積土からの出土しており、ＳＫ2461は陶器碗やモモ核、ＳＫ2462は陶器碗や常滑産甕（図版231－３）、ＳＫ2464は鍬（５）や曲物である。

【ＳＫ2500土壙】（図版208・229）

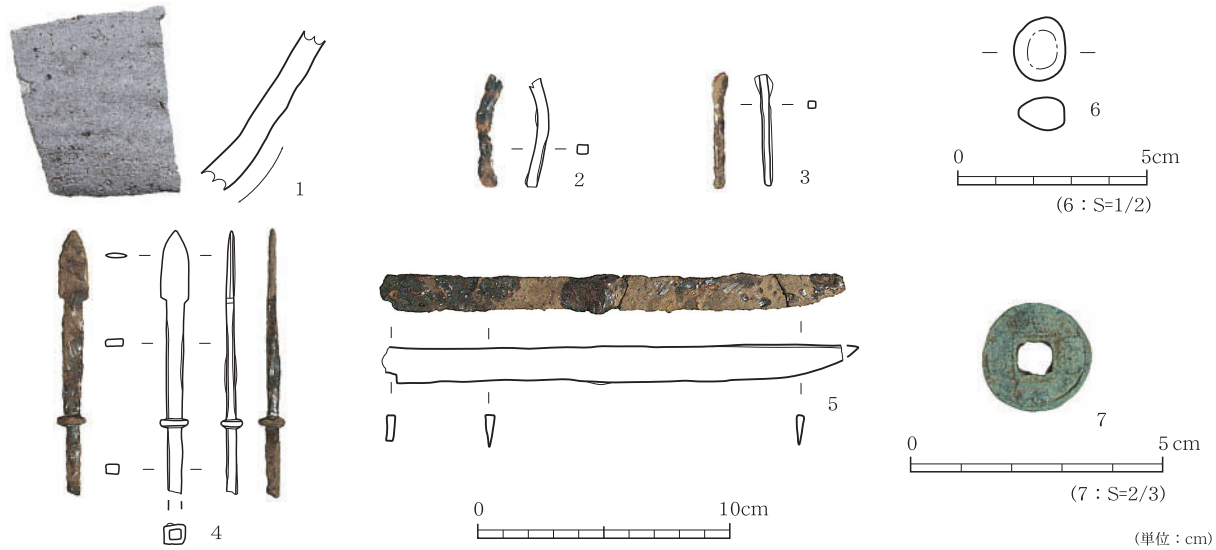
Ｂ２区中央部で確認した。ＳＤ2501溝跡より新しく、ＳＫ2503・2508土壙より古い。平面形は径が2.6×2.0ｍの楕円形で、深さは0.3ｍある。断面形は皿形で、底面は中央に向けてゆるやかに傾斜する。堆積土は３層に分けられるが、１・２層は人為堆積土と考えられる。１・２層から常滑産甕、かわらけ、転用砥（１）、碁石（６）、鉄鏃（２・４）・刀子（５）・不明鉄製品（３）や銭貨「皇宋通寶」（初鋳1038年）（７）が出土している（図版229）。

３類：径や長軸の長さが1.0m前後より小さな小型土壙（図版230）

18基検出した。Ｂ２区中央部からＢ３区北部に点在する。後者の中には位置的に建物群と重複するものがある。平面形は円形や楕円形で、深さは0.1～0.4ｍである。断面形は皿形が12基（ＳＫ2493・2502～2504・2508・2535・2541・2543・2544～2548）と多く、ほかに逆台形・擂鉢形がある。堆積土は２基（ＳＫ2534・2548）が人為堆積で、10基（ＳＫ2497・2502～2504・2541・2543～2548）は自然堆積とみられる。ＳＫ2503の堆積土から常滑産甕やかわらけ、ＳＫ2535の底面から砥石（図版231－６）、ＳＫ2549の堆積土から手づくねかわらけ小皿（図版231－１）が出土している。

４類：長径が1.7m以上、短径は長径の1/2以下となる楕円形の土壙（図版230）

10基検出した。Ｂ３区北部に６基（ＳＫ2515～2517・2522・2527・2538）が集中しており、ほかにＢ２区で３基（ＳＫ2483・2488・2538）、Ｂ３区東側で１基（ＳＫ2550）認められる。規模は長径が

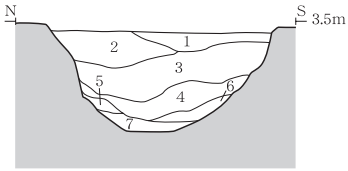


(単位：cm)

No.	出土層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
1	1・2層	転用砥		常滑産片口鉢の破片を砥石に転用　山茶碗系	05132
2	1・2層	鉄製品	鏃？	長(4.3)　幅0.4　厚0.4	05135
3	1・2層	鉄製品	不明鉄製品	長(4.5)　幅・厚0.3	05136
4	1・2層	鉄製品	鏃	長(10.5)　頚部長8.4　幅0.6～1.1　厚0.4	05107
5	1・2層	鉄製品	刀子	刀身：長(17.7)　幅1.4　厚0.4　茎：長(0.6)　幅1.0　厚0.4	05134
6	1・2層	石製品	碁石	径1.3　厚0.8	05264
7	1・2層	銅製品	銭貨	「皇宋通寶」(初鋳1038年)	05137

図版229　SK2500土壙出土遺物

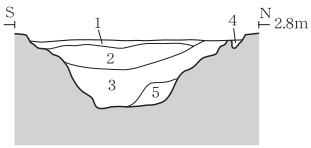
SK2464



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)砂質シルト		
2	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	
3	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
4	褐灰色(10YR4/1)粘土		
5	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		
6	明緑灰色(7.5GY7/1)粘土	グライ化	
7	暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土	木片を多量に含む	

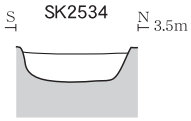
SK2464断面写真（西から）

SK2465



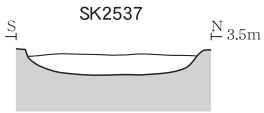
No.	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト		
2	淡黄色(2.5Y8/4)粘土質シルト	地山ブロックをやや多く含む	
3	褐灰色(10YR4/1)粘土		人為堆積
4	褐灰色(10YR4/1)粘質シルト		
5	淡黄色(2.5Y8/4)粘土		
6	淡黄色(2.5Y8/4)シルト		

SK2534



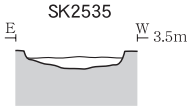
No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	

SK2537



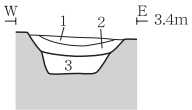
No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト	地山ブロックを含む	

SK2535



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		

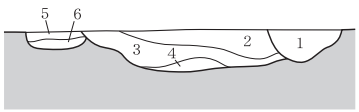
SK2488・2497



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト		SK2488 堆積土
2	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山ブロックを多く含む	
3	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト	地山ブロックを多く含む、炭化物を含む	SK2497 堆積土

SK2488・2497断面写真（南から）

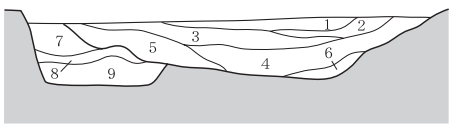
E　SD2501　SK2500　SK2508　W 3.7m



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山小ブロック・炭化物を含む	SK2508堆積土
2	黒褐色(10YR2/2)シルト	炭化物を多く含む、遺物を多く含む	SK2500堆積土
3	黒褐色(10YR2/2)シルト	地山ブロックを多く含む	
4	灰黄褐色(10YR4/2)砂	地山主体、黒褐色シルトを含む	
5	黒褐色(10YR3/2)シルト		SD2501堆積土
6	地山ブロック主体	黒褐色シルトを含む	

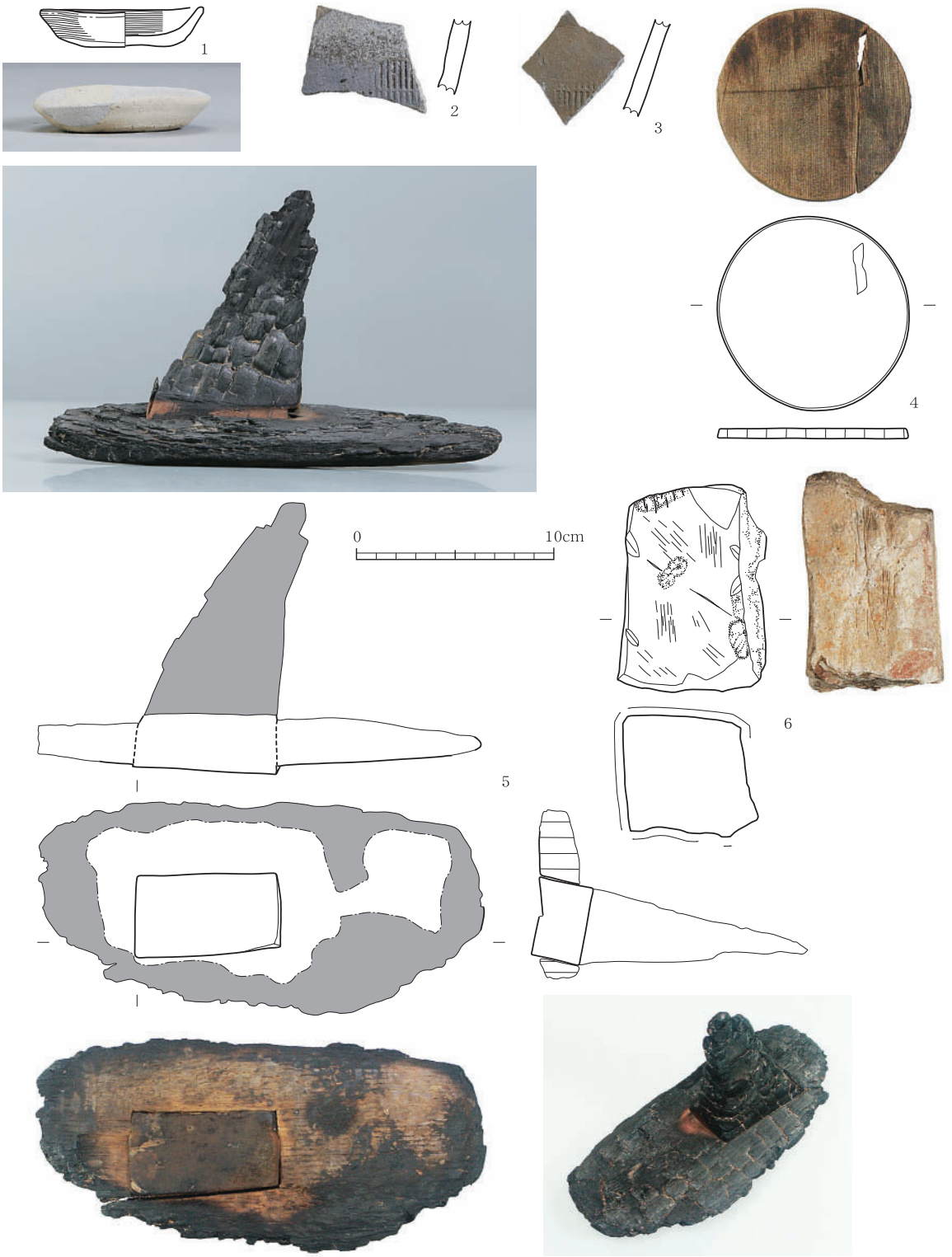
0　2m
(S=1/60)

S　SK2483　SD2474　N 2.8m



No.	土色・土性	混入物など	備考	
1	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山粒・炭化物粒をラミナ状に含む、動物遺体を含む	上層	SD2474堆積土
2	褐灰色(10YR5/1)シルト	地山粒をラミナ状に含む		
3	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山粒をラミナ状に含む	中層	
4	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		下層	
5	にぶい黄褐色(10YR6/3)細砂	地山粒をラミナ状に含む		
6	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山ブロックを含む		
7	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山粒をラミナ状に含む、炭化物を多く含む	SK2483堆積土	
8	黒褐色(10YR2/3)粘土	炭化物を多く含む		
9	黒褐色(10YR2/3)粘土	地山粒をラミナ状に含む		

図版230　B区土壙



（縮尺：任意）

（単位：cm）

No.	出土遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	SK2549　1層	手づくねかわらけ	小皿		口径(8.3)　器高(1.9)　残存3/5　口縁部：一段ナデ	05032
2	SK2488　堆積土	陶器	甕	常滑	押印(簾状)	05131
3	SK2462　堆積土	陶器	甕	常滑	押印(簾状)	05033
4	SK2465　底面直上	木製品	柄杓底板		径9.7　厚0.5	05105
5	SK2464　堆積土	木製品	鍬		長(25.6)　幅(10.7)　厚(2.4)　残存高13.8	05114
6	SK2535　底面	石製品	砥石		長(10.2)　幅(6.5)　厚(5.6)	05266

図版231　B区土壙出土遺物

2.0～3.9m、短径は0.8～1.2mで、深さは0.2～0.3mあり、断面形は逆台形が５基（ＳＫ2483・2488・2515・2517・2538）、皿形が３基（ＳＫ2522・2527・2530）、箱形が２基（ＳＫ2516・2550）である。堆積土は北部の２基が自然堆積、中央部南側の４基が人為堆積とみられる。中央部南側の２類土壙は墓域の中にあり、埋め戻されるものがあることから、墓壙の可能性が考えられる。遺物はＳＫ2488の堆積土から、常滑産甕（図版231－２）やかわらけが出土している。

（註１）遺物図版は、『Ⅱ』で報告したものも再度収録している。それらは、2005年度出土品と区別するため観察表の備考欄に「Ⅱの再録」と記載した。なお、1994年度の出土層位は今回報告する大別２～３層に対応する。

遺構No.	平面形	断面形	規模(m)	深さ(m)	分類	堆積土の状況	出土遺物	備考	図No. 平面	図No. 断面
ＳＫ1008	円形	逆台形	径4.8	1.3	1	自然＋人為	**4層）**常滑甕、白磁椀　**3層）**白磁四耳壺、ロクロ皿　**2層）**常滑甕、在地甕、鉄製品　**1層）**在地片口鉢、白磁四耳壺　**2・3層）**ロクロ小皿、手づくね皿・小皿、常滑片口鉢・甕、在地甕、漆椀・片口鉢、曲物、白木皿、札状木製品、鉄製品、切石、人物墨書礫、イシガイ科殻、ウリ科種実、モモ核	ＳＢ2557→ＳＫ1008→ＳＤ1006・1007　**第Ⅳ期**	208	223
ＳＫ2461	円形	逆台形	1.9×1.8	0.3～0.4	2	自然	**堆）**陶器碗、モモ核	ＳＤ2241→ＳＫ2461　**第Ⅶ期**	210	
ＳＫ2462	円形	皿形	径1.6	0.2	2	自然	**堆）**陶器碗、常滑甕	ＳＤ2241→ＳＫ2462　**第Ⅶ期**	210	
ＳＫ2464	円形	擂鉢形	1.9×1.8	0.9	2	自然→人為	**堆）**鍬、曲物		210	230
ＳＫ2465	円形	逆台形	径1.6	0.6	2	自然？	**底面上）**柄杓　**2層）**在地甕、ロクロ		210	230
ＳＫ2475	円形	逆台形	径6.2	0.8	1	自然→人為	**底）**瀬戸産平碗　**底面上）**在地片口鉢、常滑甕　**下層）**シカ角　**下層上）**クジラ椎骨　**中層）**常滑三筋壺・片口鉢・甕、在地片口鉢・甕、須恵器系壺　**上層）**常滑甕、渥美甕、在地片口鉢　**堆）**青磁鎬椀、かわらけ、在地片口鉢・甕、渥美甕、常滑片口鉢・甕、銭「元豊通寶」(初鋳1078年)-２枚、転用砥、砥石、クルミ核	ＳＸ1397→ＳＫ2475　**第Ⅳ期**	209	224
ＳＫ2483	楕円形	逆台形	2.7×1.0	0.6	4			ＳＫ2483→ＳＤ2474	209	230
ＳＫ2488	楕円形	皿形	3.6×0.8	0.1	4	自然	**堆）**常滑甕、かわらけ	ＳＫ2497→ＳＫ2488	208	230
ＳＫ2493	楕円形	皿形	0.7×0.4	0.1	3				208	
ＳＫ2496	円形	箱形	0.7×0.6	0.4	3				208	
ＳＫ2497	円形	逆台形	0.8×0.6	0.3	3	自然？		ＳＫ2497→ＳＫ2488	208	230
ＳＫ2500	楕円形	皿形	2.6×2.0	0.3	2	自然→人為	**1層）**常滑甕、かわらけ、碁石？　鉄鏃、不明鉄製品、銭「皇宋通寶」(初鋳1038年)	ＳＤ2501→ＳＫ2500→ＳＫ2503・2508　**第Ⅳ期**	208	230
ＳＫ2502	円形	皿形	0.7×0.6	0.2	3	自然		ＳＫ2504・ＳＤ1007→ＳＫ2502	208	
ＳＫ2503	楕円形	皿形	0.8×0.5	0.2	3	自然	**堆）**常滑甕、かわらけ	ＳＫ2500→ＳＫ2503・2508	208	
ＳＫ2504	楕円形	皿形	0.5×0.3	0.1	3	自然		ＳＫ2504→ＳＫ2502	208	
ＳＫ2508	楕円形	擂鉢形	0.9×0.6	0.3	3			ＳＫ2500→ＳＫ2503・2508	208	230
ＳＫ2515	楕円形	逆台形	3.0×1.0	0.3	4				208	
ＳＫ2516	楕円形	箱形	2.4×1.1	0.2	4	自然？			208	
ＳＫ2517	楕円形	逆台形	3.5×1.0	0.3	4	人為？			208	
ＳＫ2522	楕円形	皿形	2.5以上×1.2	0.2	4	人為？			208	
ＳＫ2527	楕円形	皿形	3.5×1.2	0.2	4	人為？			208	
ＳＫ2530	楕円形	皿形	2.0×0.8	0.2	4	人為？			208	
ＳＫ2534	楕円形	逆台形	0.9×0.6	0.3	3	人為			208	230
ＳＫ2535	円形	皿形	0.9×0.8	0.1	3		**底）**砥石		208	230
ＳＫ2536	楕円形	逆台形	0.8×0.5	0.3	3				208	
ＳＫ2537	楕円形	皿形	1.4×0.8	0.2	2				208	230
ＳＫ2538	楕円形	逆台形	2.6×0.8	0.2	4				208	
ＳＫ2541	円形	皿形	0.6×0.5	0.1	3	自然			208	
ＳＫ2543	楕円形	皿形	0.8×0.3	0.2	3	自然			208	
ＳＫ2544	楕円形	皿形	0.7×0.3	0.2	3	自然			208	
ＳＫ2545	楕円形	皿形	0.6×0.3	0.1	3	自然？			208	
ＳＫ2546	楕円形	皿形	0.5×0.3	0.2	3	自然			208	
ＳＫ2547	楕円形	皿形	1.0×0.5	0.1	3	自然			208	
ＳＫ2548	楕円形	皿形	0.7×0.4	0.2	3	人為？			208	
ＳＫ2549	円形	逆台形	径0.7	0.3	3		**堆）**手づくね小皿	ＳＸ1397→ＳＫ2549	209	
ＳＫ2550	楕円形	箱形	2.2×0.8	0.6	4	自然		ＳＫ2550→ＳＸ1397→ＳＤ2241	210	

※ 出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、在地は宮城県内の在地窯で生産された中世陶器を指す
※ 出土遺物の陶器は、近世陶磁器を指す

第16表　B区土壙属性表

⑥．溝跡

20条検出した。このうちＳＤ1006・1007・1017・2241・2474・2485は概要を述べ、個々のデータは第17表にまとめた。なお、『Ⅱ』で溝跡としたＳＤ1040・1045は、今回の調査で近世より新しい遺構であり、水田跡の可能性が高いと考えられたため、溝跡から除外した。

【ＳＤ1006溝跡】（図版208・209・232）

Ｂ２区中央部で確認したＬ字形の溝跡である。『Ⅱ』で西側部分を報告しており、今回の調査で規模を確定することができた。以下、『Ⅱ』の成果を含めて述べる。ＳＫ1008土壙、ＳＤ1007・1019・2495・2509溝跡より新しい。検出総長は南北が10.9m、東西27.9mである。上幅1.0～1.3m、下幅0.4～0.6m、深さは0.4mある。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。方向は東西部分でN-30°～40°-Ｓである。堆積土は６層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。

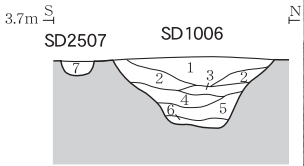
堆積土からロクロかわらけ皿（２・３）、ロクロかわらけ小皿（４）、常滑産片口山茶碗（１）・片口鉢・甕（６）、在地産甕（７）、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文椀（５）、銭貨「皇宋通寶」（初鋳1038年）（８）、鉄鏃（９）、釘（10）や砥石（11）が出土している（図版234）。

【ＳＤ2485溝跡】（図版209・232）

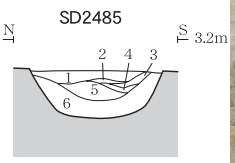
Ｂ２区からＢ３区の東側で確認した南北溝跡である。ＳＸ1397遺物包含層の西岸に沿うように南へ延びる。検出長は18.5mである。上幅0.8～1.3m、下幅0.4～0.6m、深さは0.6mある。方向はN-30°-Ｅ前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は６層に分けられるが、いずれも自然堆積である。

堆積土よりかわらけ皿、常滑産片口鉢・甕、在地産片口鉢・甕（図版234－17）、龍泉窯系青磁盤（図版234－18）が出土している。

図版232　SD1006・2485溝跡（北東から）



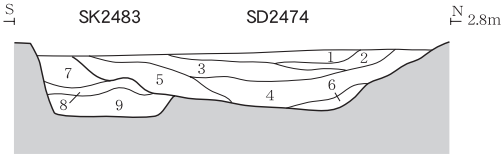
SD1006断面写真（東から）

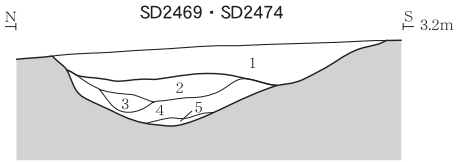


SD2485断面写真（西から）

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)シルト	地山粒ブロック・炭化物を含む	SD1006 堆積土
2	褐色(10YR4/4)シルト	黒褐色シルト・黒色粘土質シルトを含む	
3	褐灰色(10YR5/1)細砂	地山粒をラミナ状に含む	
4	明黄褐色(10YR6/6)シルト	黒色粘土質シルトを含む	
5	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト	地山ブロックを多く含む、炭化物を含む	
6	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	炭化物・地山ブロックを含む	
7	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山ブロックを含む	SD2507 堆積土

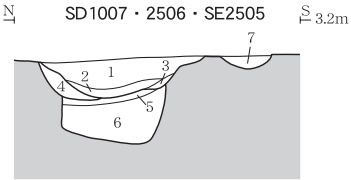
No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト	炭化粒を含む	
2	炭化物層		
3	黒褐色(10YR3/2)シルト		
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂		
5	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山ブロック・炭化物を含む	
6	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	





No.	土色・土性	混入物など	備考	
1	黄褐色(10YR4/2)シルト	地山粒・炭化物粒をラミナ状に含む、動物遺体を含む	上層	SD2474 堆積土
2	褐灰色(10YR5/1)シルト	地山粒をラミナ状に含む		
3	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山粒をラミナ状に含む	中層	
4	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		下層	
5	にぶい黄褐色(10YR6/3)細砂	地山粒をラミナ状に含む		
6	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山ブロックを含む		
7	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山粒をラミナ状に含む、炭化物を多く含む	SK2483 堆積土	
8	黒褐色(10YR2/3)粘土	炭化物を多く含む		
9	黒褐色(10YR2/3)粘土	地山粒をラミナ状に含む		

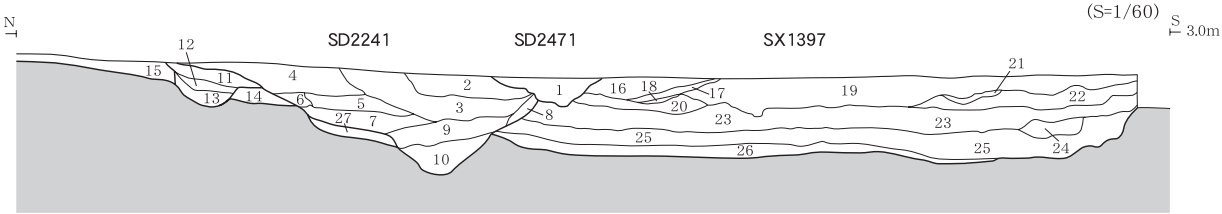
No.	土色・土性	混入物など	備考	
1	暗褐色(10YR3/3)Sシルト	地山ブロックを多く含む	SD2469 堆積土	
2	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山粒をラミナ状に含む	上層	SD2474 堆積土
3	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	地山粒をラミナ状に含む	中層	
4	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	黒褐色粘土質シルト粒・地山粒をラミナ状に含む	下層	
5	にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂			



SD2474、SX1397接続部（西から）

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト		SD1007 堆積土
2	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
3	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		
4	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山粒をラミナ状に含む	SD2506 堆積土
5	灰黄褐色(10YR4/2)粘土		SE2505 堆積土
6	黒褐色(10YR3/1)粘土	灰黄褐色(10YR5/2)粘土との互層	
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	地山ブロックを多く含む	溝跡堆積土

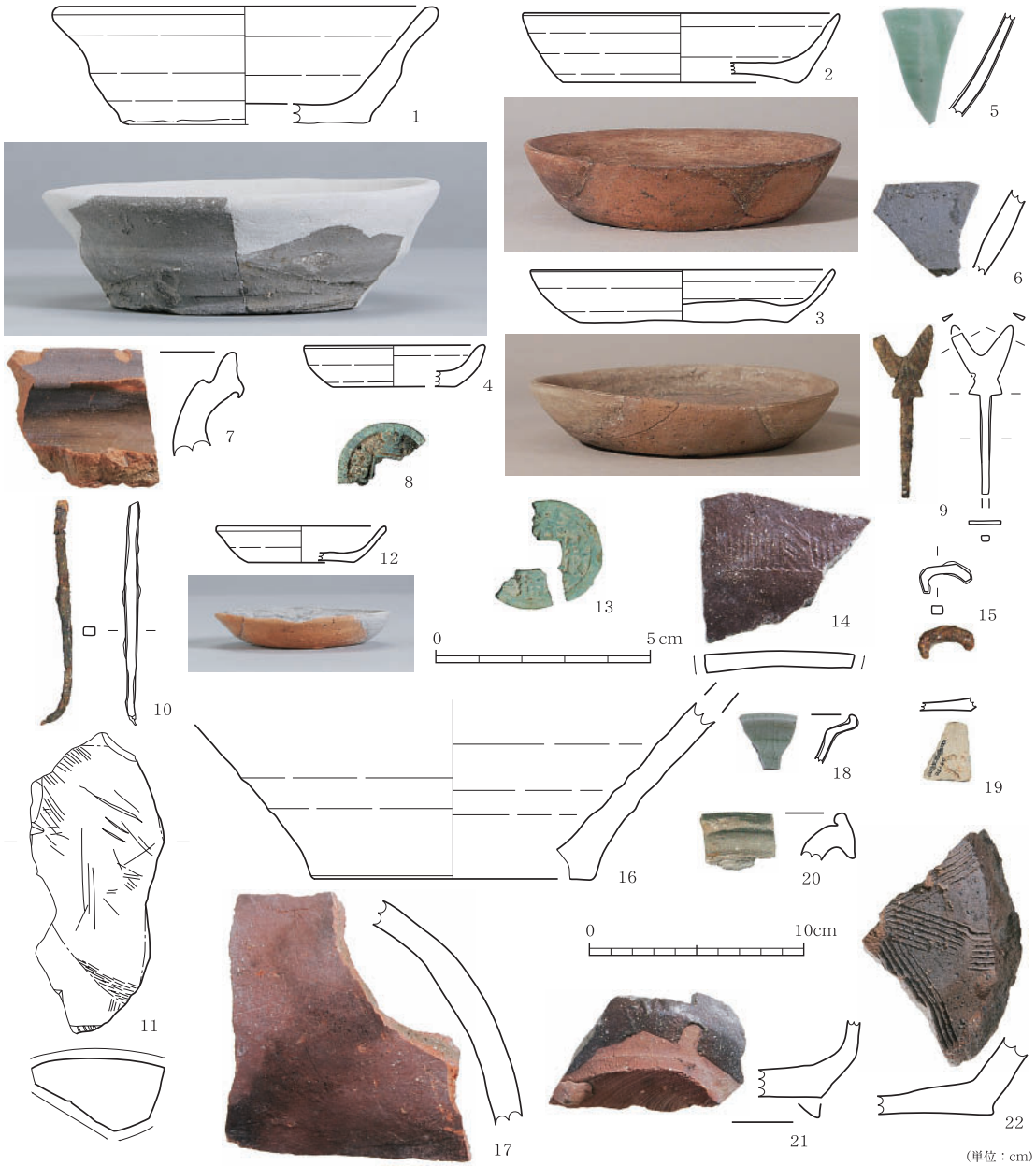
0　2m
(S=1/60)



No.	土色・土性	混入物など	備考	
1	灰黄褐色(10YR7/2)粘土質シルト			SD2471 堆積土
2	灰黄褐色(10YR5/2)粘土	褐灰色(10YR4/1)粘土ブロックをやや多く含む		SD2241 堆積土
3	黒褐色(10YR3/1)粘土			
4	にぶい黄橙色(10YR7/4)粘土			
5	灰黄褐色(10YR5/2)粘土			
6	黒褐色(10YR3/1)粘土		崩壊土	
7	褐灰色(10YR4/1)粘土			
8	浅黄色(2.5Y7/4)粘土		崩壊土	
9	褐灰色(10YR5/1)粘土			
10	暗青灰色(5BG4/1)粘土	木片をやや多く含む		
11	褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト	炭化物をやや多く含む		SX1397 堆積土
12	浅黄色(2.5Y7/3)粘土質シルト			
13	褐灰色(10YR4/1)粘土	地山ブロックを含む		
14	褐灰色(10YR4/1)粘土			

No.	土色・土性	混入物など	備考	
15	褐灰色(10YR5/1)粘土			SX1397 堆積土
16	にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト			
17	灰黄褐色(10YR5/2)シルト			
18	にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト			
19	にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト			
20	にぶい黄橙色(10YR7/4)粘土		崩壊土	
21	黒褐色(10YR3/1)粘土			
22	灰黄褐色(10YR6/2)粘土質シルト	地山ブロックを含む		
23	黒褐色(10YR3/1)粘土	炭化物をやや多く含む		
24	黒褐色(10YR3/1)粘土			
25	灰黄褐色(10YR4/2)粘土	木片・炭化物を多量に含む		
26	灰黄褐色(10YR4/2)粘土	木片・炭化物を多量に含む		
27	青灰色(5BG4/1)シルト			

図版233　B区溝跡



(単位：cm)

No.	出土遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	SD1006　堆積土	陶器	片口山茶碗	常滑	口径(18.0)　底径(11.6)　器高5.5　残存：一部　底面が剥離　底面内面に使用痕　SK1311(01057)と接合	05143
2	SD1006　堆積土	ロクロかわらけ	皿		口径14.8　底径11.0　器高3.2　ロクロナデ　底：回転糸切　Ⅱの再録	94002
3	SD1006　堆積土	ロクロかわらけ	皿		口径14.2　底径9.7　器高3.2　ロクロナデ　底：回転糸切　Ⅱの再録	94003
4	SD1006　堆積土	ロクロかわらけ	小皿		口径8.5　底径5.6　器高2.0　ロクロナデ　底：回転糸切　Ⅱの再録	94043
5	SD1006　堆積土	青磁	鎬蓮弁文椀	龍泉窯系		05149
6	SD1006　堆積土	陶器	甕	常滑	押印(斜線)	05144
7	SD1006　堆積土	陶器	甕	在地		05142
8	SD1006　堆積土	銅製品	銭貨		「皇宋通寳」(初鋳1039年)　Ⅱの再録	94015
9	SD1006　堆積土	鉄製品	鏃		残存長7.9　茎部0.4×0.3	05154
10	SD1006　堆積土	鉄製品	釘		長(10.4)　幅0.6　厚0.4	05155
11	SD1006　堆積土	石製品	砥石		長(13.7)　幅(6.1)　厚3.6	05252
12	SD1007　堆積土	ロクロかわらけ	小皿		口径(18.0)　底径(5.6)　器高1.7　残存：1/4　ロクロナデ　底：回転糸切	05152
13	SD1007　堆積土	銅製品	銭貨		「祥符元寳」(初鋳1009年)	05156
14	SD1007　堆積土	転用砥			常滑産甕の破片を砥石に転用　押印(縦線＋斜線)	05153
15	SD1007　堆積土	鉄製品	不明鉄製品		長(2.5)　幅0.5　厚0.4	05273
16	SD2485　堆積土	陶器	擂鉢		底径(13.2)　漆継ぎ	05164
17	SD2485　堆積土	陶器	甕	在地	両面ナデ	05163
18	SD2485　堆積土	青磁	盤	龍泉窯系		05151
19	SD2492　確認面	陶器	椀？			05150
20	SD2469　堆積土	陶器	甕	常滑	【常滑6b型式期】	05167
21	SD2469　堆積土	陶器	香炉		底面に文様　鉄釉　底：糸切→足接合	05168
22	SD2509　堆積土	陶器	片口鉢	在地	内面：卸目　底部：板状痕跡	05148

図版234　B区溝跡出土遺物

【ＳＤ1007溝跡】（図版208・209・233）

Ｂ２区中央部で確認した東西溝跡である。『Ⅱ』で西側部分を報告しており、今回の調査で全体を確定することができた。以下、『Ⅱ』の成果を含めて述べる。ＳＥ2505井戸跡、ＳＫ1008土壙、ＳＤ2506溝跡、ＳＸ1397遺物包含層より新しく、ＳＫ2502土壙、ＳＤ1006溝跡より古い。検出総長は56.6mである。上幅0.8～1.3m、下幅0.4～0.6m、深さは0.6mある。方向はN-30°～40°-Sである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は３層に分けられ、２・３層が人為堆積、１層は自然堆積である。

堆積土からロクロかわらけ皿（12）、常滑産甕、銭貨「祥符元寳」（初鋳1009年）（13）、転用砥（14）、不明鉄製品（15）やウマ上顎歯が出土している（図版234）。

【ＳＤ1017溝跡】（図版65）

Ｂ２区中央部で確認した東西溝跡である。『Ⅱ』で西側や東側を報告しており、今回の調査で全体を確定することができた。以下、『Ⅱ』の成果を含めて述べる。ＳＫ1048・1311土壙、ＳＸ1397遺物包含層より新しく、ＳＫ1018土壙、ＳＤ1045溝跡より古い。検出総長は80.5mである。上幅0.7～1.3m、下幅0.4～0.6m、深さは0.4mある。方向はE-15°～20°-Sである。底面は中央がやや凹み、断面形は逆台形である。堆積土は４層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。

堆積土からロクロかわらけ皿、常滑産甕、在地産片口鉢、銭貨「熙寧元寳」（初鋳1068年）、弓が出土している。

【ＳＤ2241溝跡】（図版66・233）

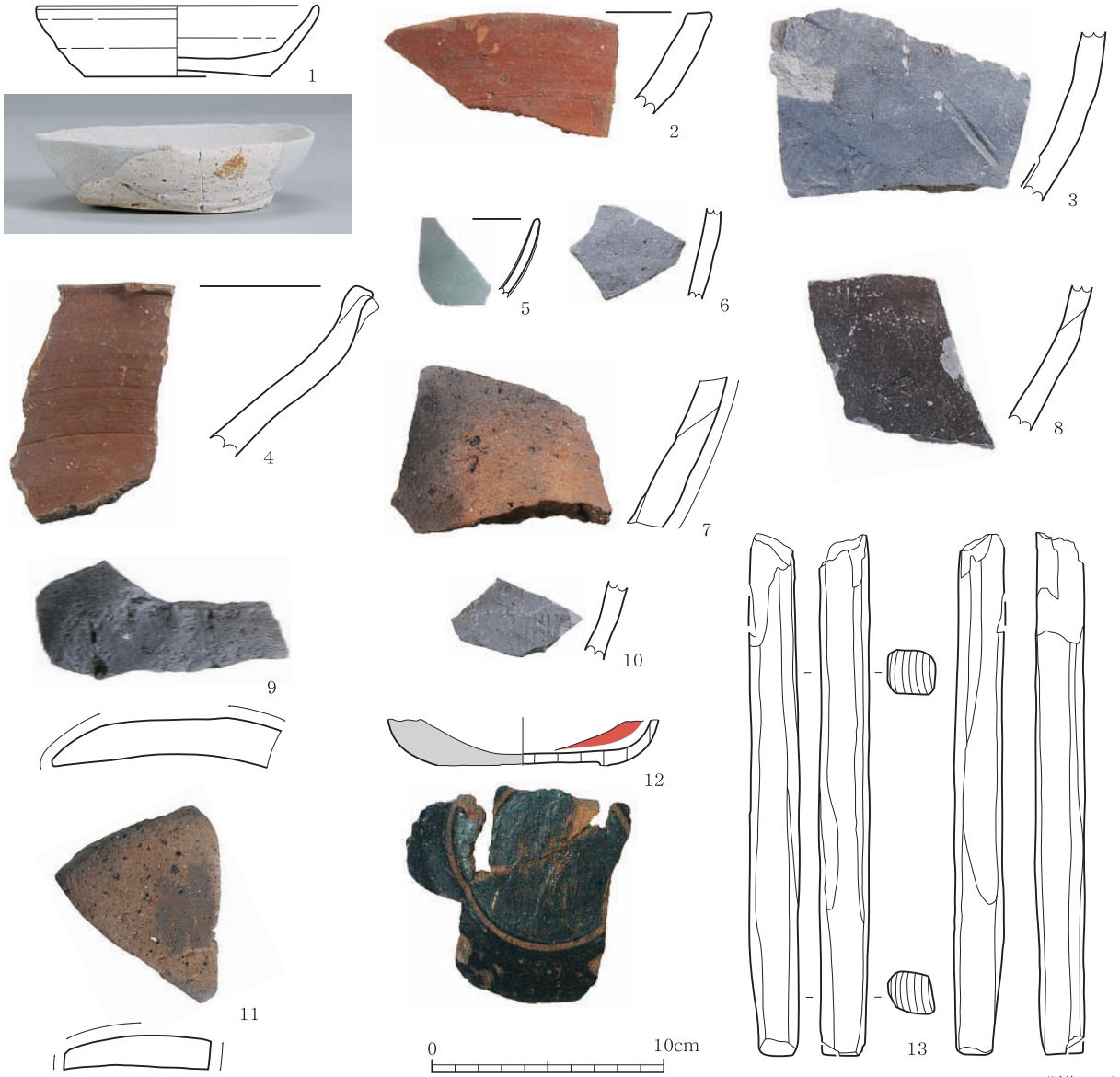
Ｂ区東側で確認した南北溝跡で、ＳＸ1397が形成された湿地跡の中央部に設けられる。Ｄ区から続いており、検出総長は232.1mとなる。Ｂ２区北東部やＢ３区南東部では東へ分岐している。『Ⅲ』でＤ区分は報告済みであるため、今回はＢ区分の概要を述べる。また、『Ⅱ』で報告したＳＸ1397Ｄとは一連の遺構であることが判明したため、その成果を含めて述べる。

ＳＫ2550土壙、ＳＤ2474溝跡、ＳＸ1397遺物包含層より新しく、ＳＫ2461・2462土壙、ＳＤ2471溝跡より古い。上幅1.2～2.0m、下幅は0.6～1.1m、深さは0.6～1.1mある。方向はＢ２区でN-30°-E前後あり、Ｂ３区南端で西へ向きを変える。断面形は逆台形である。堆積土は６層に分けられるが、いずれも自然堆積である。

遺物は下層からウマ下顎骨、堆積土からロクロかわらけ（１）、在地産片口鉢（２・４）、常滑産片口鉢・甕（６・８・10）、渥美産甕（３）、龍泉窯系青磁椀（５）、転用砥（７・９・11）、漆椀（12）、漆丸盆（14）、柄（13）、砥石、モモ核やシカ角が出土している（図版235・236）。

【ＳＤ2474溝跡】（図版209・233）

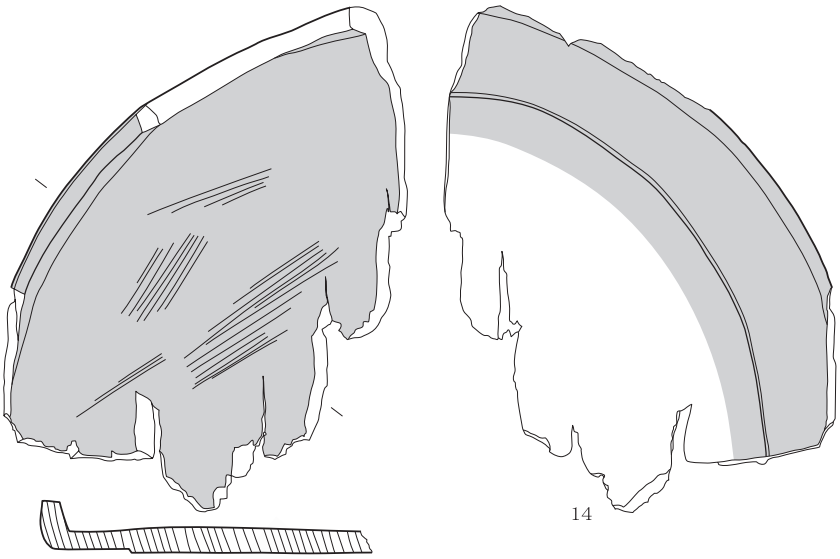
Ｂ２区東側で確認した南北溝跡で、『Ⅱ』で報告したＳＸ1397Ｃと一連であるため、その成果を含めて述べる。ＳＫ1322・2483土壙、ＳＸ1397遺物包含層より新しく、ＳＤ2241・2469溝跡より古い。検出総長は67.1mである。方向はN-０°～25°-Wで、Ｂ２区南東部で東へ向きを変える。上幅2.5～3.0m、下幅は1.3～1.8m、深さは0.6mある。断面形は逆台形である。堆積土は大別して３層に分けられるが、いずれも自然堆積である。部分的な調査であるため、洪水等で一時的に形成された流路



（単位：cm）

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	堆積土	ロクロかわらけ	皿		口径(12.1)　底径8.0　器高3.1　残存：1/2　ロクロナデ　内：ロクロナデ→一方向ナデ　底部：回転糸切→板状圧痕	05017
2	堆積土	陶器	片口鉢	在地		05037
3	堆積土	陶器	甕	渥美	押印(簾状＋×)	05018
4	堆積土	陶器	片口鉢	在地		05021
5	堆積土	青磁	小椀	龍泉窯系	胎土：灰色	05082
6	堆積土	陶器	甕	常滑	押印(縦線)　10と同一個体ヵ	05024
7	堆積土	転用砥			在地産？壺？の破片を砥石に転用	05022
8	堆積土	陶器	甕	常滑	押印(縦線＋斜線)	05023
9	堆積土	転用砥			在地産甕の破片を砥石に転用	05019
10	堆積土	陶器	甕	常滑	押印(縦線)　6と同一個体ヵ	05025
11	堆積土	転用砥			在地産甕の破片を砥石に転用	05020
12	堆積土	漆器	椀		高台径(7.4)　残存高2.0　残存：1/3　外・底部：黒色漆塗り　内：赤色漆塗り	05078
13	堆積土	木製品	道具柄		残存長22.5　幅2.1　厚1.9　端部付近が焼け焦げている　【カラマツ属】　Ⅱの再録	01242

図版235　SD2241溝跡出土遺物（1）



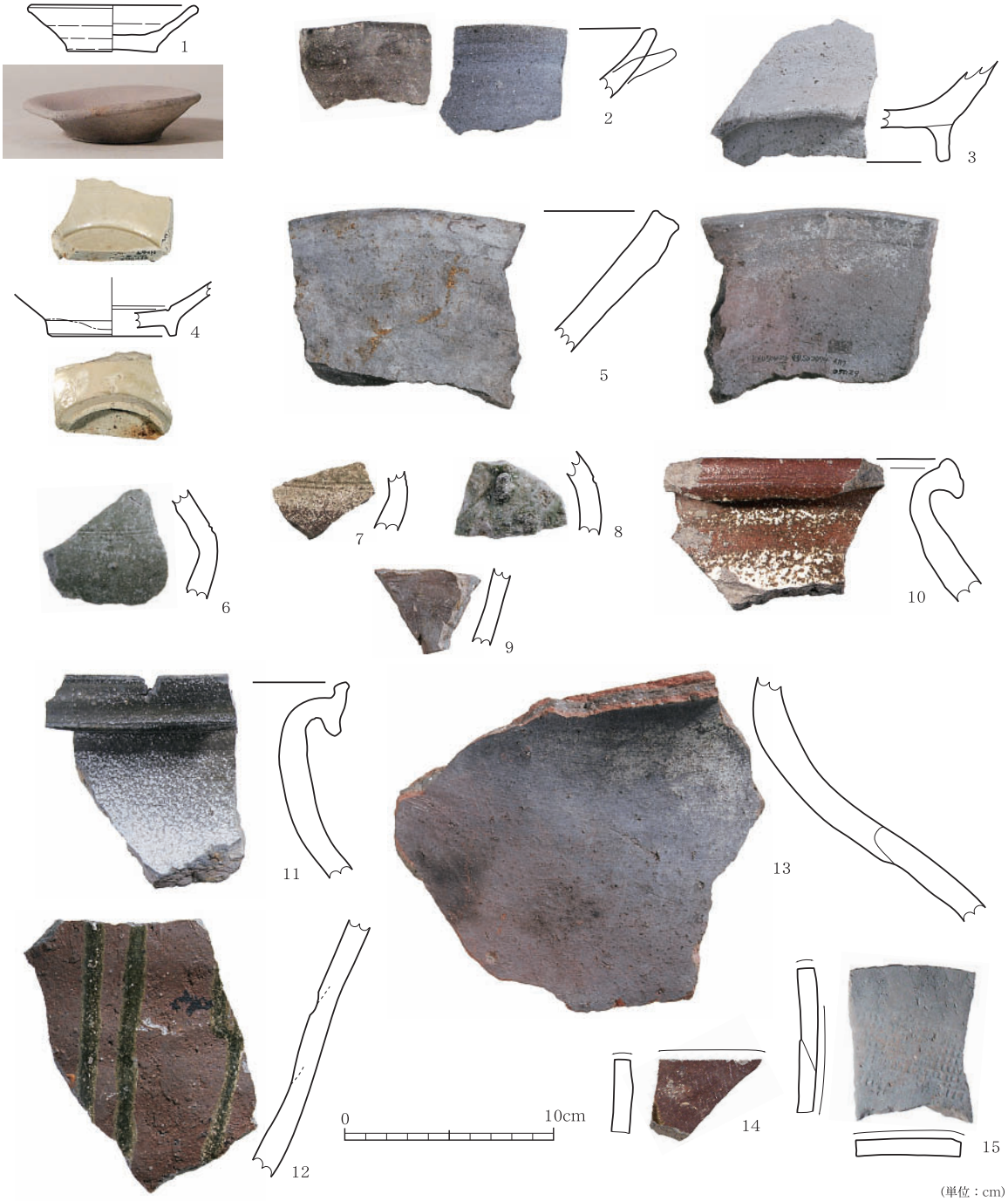
（単位：cm）

No	出土層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
14	堆積土	漆器	盆	器高2.2　厚1.1　残存：一部　内外面：黒漆塗り　【ケヤキ】　Ⅱの再録	01232

図版236　SD2241溝跡出土遺物（2）

跡である可能性も残る。

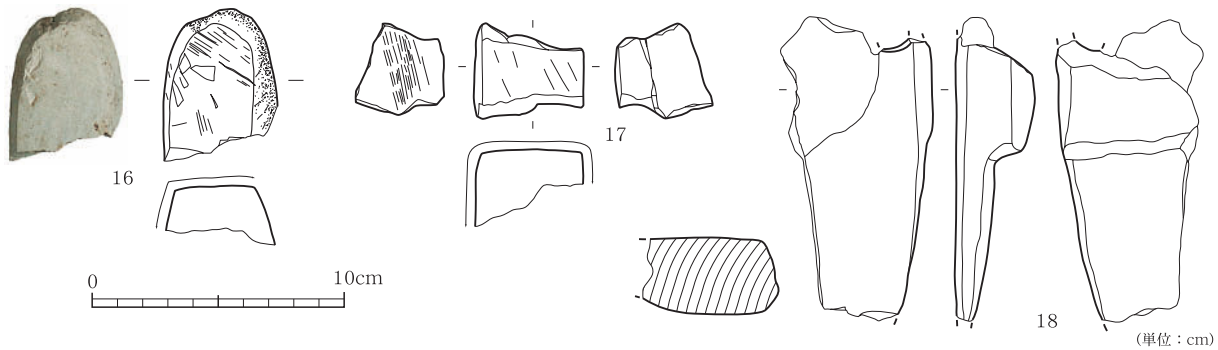
遺物は下層から常滑産片口鉢（３）・甕、中層から在地産甕（13）、上層からロクロかわらけ、常滑産甕、砥石（16）やモモ核、堆積土からロクロかわらけ皿・小皿（１）・柱状高台皿、常滑産三筋壺（６・７）・片口鉢・甕（９～12）、在地産片口鉢・甕、白磁椀（４）、転用砥（14・15）、連歯下駄（18）、砥石（17）やモモ核が出土している（図版237・238）。常滑産陶器のうち、10は５型式期、11は６型式期に位置付けられる。



（単位：cm）

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	堆積土	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.2)　底径4.3　器高2.2　残存：1/2　ロクロナデ　底部：回転糸切　Ⅱの再録	01705
2	堆積土	陶器	片口鉢	常滑	SX1397-C期堆積土(01069)と同一個体	05031
3	下層	陶器	片口鉢	常滑	SX1397-4層(05003)と同一個体　山茶碗系	05027
4	堆積土	白磁	椀		高台径(6.2)　内面立上がり部に沈線　Ⅱの再録	01067
5	確認面	陶器	片口鉢	常滑	SX1397-確認面(05016)と同一個体	05029
6	堆積土	陶器	三筋壺	常滑	沈線(複線)	05028
7	堆積土	陶器	三筋壺	常滑	平行沈線(２本一組)　Ⅱの再録	01074
8	確認面	陶器	三筋壺ヵ	常滑	沈線(単線)	05088
9	堆積土	陶器	甕	常滑	押印(花文？)	05087
10	堆積土	陶器	甕	常滑	【常滑5型式期】　Ⅱの再録	01068
11	上層	陶器	甕	常滑	【常滑6型式期】	05026
12	堆積土	陶器	甕	常滑		05086
13	中層	陶器	甕	在地(白石ヵ)		05085
14	堆積土	転用砥			押印(縦線+斜線)　常滑産甕の破片を砥石に転用　Ⅱの再録	01071
15	堆積土	転用砥			押印(細格子)　常滑産壺の破片を砥石に転用　Ⅱの再録	01070

図版237　SD2474溝跡出土遺物（1）



No.	出土層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
16	上層	石製品	砥石	残存長5.2　残存幅4.4　残存厚1.7	05259
17	堆積土	石製品	砥石	残存長2.5　幅4.3　厚2.8　【砂岩】　Ⅱの再録	01401
18	堆積土	木製品	連歯下駄	残存長12.0　残存幅6.1　厚1.5　Ⅱの再録	01346

図版238　SD2474溝跡出土遺物（2）

遺構№	検出長(m)	断面形	規模(m) 上幅	下幅	深さ	方　向	堆積土	出土遺物	備　考	図№ 平面	断面
SD1006	L字：東西27.9、南北10.9	逆台形	1.0～1.3	0.4～0.6	0.4	東西(E30°～40°S)	自然	**堆)** 常滑甕、在地甕、常滑片口鉢・片口山茶碗・甕、ロクロ皿・小皿　銭「皇宋通寶」(初鋳1038年)、鉄鏃、鉄釘？　砥石	SK1008→SD1007→SD1006　SD1019→SD1006　**第Ⅳ期**	208 209	233
SD1007	東西56.6	逆台形	0.8～1.3	0.4～0.6	0.6	東西(E30°～40°S)	人為→自然	**堆)** 常滑甕、ロクロ皿、鉄製品、銭「祥符通寶」(初鋳1009年)、ウマ上顎歯	SK1008→SD1007→SD1006　「祥符通寶」は、SD2501と接合　**第Ⅳ期**	208 209	233
SD1017	東西80.5	逆台形	0.7～1.3	0.4～0.6	0.4	東西(E15°～20°S)	自然	**堆)** 常滑甕、在地片口鉢、ロクロ皿、銭「熙寧元寶」(初鋳1068年)、弓	**第Ⅳ期**	65	
SD1019	南北6.6	逆台形	0.6～0.8	0.3	0.4	南北(E10°E前後)			SD2489→SD1019→SD1006　**第Ⅳ期以前**	66	233
SD2241	南北232.1	逆台形	1.6～2.0	0.8～1.1	0.3	南北(B区北半：N30°E前後)	自然	**下層)** ウマ下顎骨　**堆)** ロクロ、在地片口鉢、常滑片口鉢・壺・甕、渥美甕、漆椀・丸盆、柄？　砥石、モモ核、シカ角	SD1650南東隅に接続し、SX1397の中央を南へ延びる　B区南端で二つに分岐する　SX1397→SD2474→SD2241→SK2461・2462　**第Ⅴ期か**	40・65	233
SD2469	L字：東西6.2、南北11.8	皿形	2.8	1.9	0.3	南北(N25°E前後)	自然	**堆)** 常滑甕、陶器香炉	SD2474・2482→SD2469　浅い　堆積土新しい　**第Ⅶ期**	209	233
SD2471	東西8.3	逆台形	0.9	0.3	0.2	東西(E10°S前後)	自然	**堆)** 在地鉢・甕	SX1397→SD2241→SD2471	210	233
SD2474	南北67.1	逆台形	2.5～3.0	1.3～1.8	0.6	南北(N0°～25°W)	自然	**下層)** 常滑片口鉢・甕　**中層)** 在地甕　**上層)** 常滑甕、ロクロ、砥石、モモ核　**堆)** 常滑三筋壺・片口鉢・甕、在地産片口鉢・甕、白磁椀、ロクロ、転用砥、連歯下駄、砥石、モモ核　**確)** 常滑三筋壺・片口鉢、在地片口鉢・甕、かわらけ	SX1397→SD2474→SD2241　**第Ⅳ期**	209	233
SD2479	東西8.5	皿形	0.5	0.4	0.1	東西(E35°S前後)	自然		SX1397→SD2479	210	224
SD2482	南北3.1	逆台形	0.3	0.1	0.2	南北(N15°W前後)			SD2482→SD2469		
SD2485	南北18.5	逆台形	1.1	0.8	0.4	南北(N30°E前後)		**堆)** 青磁盤、在地甕・片口鉢、常滑甕・片口鉢、かわらけ皿、	**第Ⅳ期**	209	233
SD2489	南北6.8	皿形	0.3	0.1	0.1	南北(N30°～60°E)		**堆)** 在地甕	SD2489→SD1019　**第Ⅳ期以前**	208	
SD2492	南北6.3	皿形	0.5	0.2	0.1	南北(N25°E前後)		**確)** 瀬戸？、常滑甕、砥石		208	
SD2495	南北12.3	皿形	0.7	0.4	0.2	南北(N10～15°E)	自然	**下層)** ロクロ	SD2495→SD1006　**第Ⅳ期**	209	
SD2498	南北7.6	皿形	0.3	0.1	0.1	南北(N25°E前後)				209	
SD2499	南北5.2	皿形	0.2	0.1	0.1	南北(N25°E前後)				209	
SD2501	南北5.0	皿形	0.5	0.4	0.1	南北(N40°E前後)	自然	**堆)** 銭「祥符通寶」(初鋳1009年)	SD2501→SK2488・2500　「祥符通寶」はSD1007と接合　**第Ⅳ期**	208	230
SD2506	東西6.9	逆台形	0.4	0.2	0.3	東西(E30°S前後)			SD2506→SD1007	209	233
SD2507	東西6.5	皿形	0.3	0.2	0.1	東西(E40°S前後)	自然？	**堆)** ロクロ	SD2506と一連か	208	
SD2509	南北5.1	逆台形	1.1	0.5	0.3	南北(N20°E前後)	自然→人為	**堆)** 常滑片口鉢、在地片口鉢	SD2509→SD1006　**第Ⅳ期**	208	

※検出長、方向、出土遺物は過去の調査で確認したものを含める。
※出土遺物のロクロはロクロかわらけ、手づくねは手づくねかわらけ、在地は宮城県内の生産地、鎬椀は鎬蓮弁文椀を指す
※出土遺物の陶器は近世陶器を指す

第17表　B区溝跡属性表

Ｄ．考　察

第Ｉ章で述べたとおり、宮城県教育委員会による中野高柳遺跡の発掘調査は８年に及んだ。今回報告を行ったのは、住宅地区の５区、流通地区のＤ区とＢ区南東部である。検出した遺構は、第Ⅶ層で区画溝に囲まれた畑跡と水田跡、第Ⅴ層で畑跡、第Ⅳ層で中・近世の屋敷の区画溝跡11、掘立柱建物跡89、井戸跡118、墓壙20、土壙223、溝跡96などである。以下、報告した地区の遺構や出土遺物の特徴を述べ、その後中・近世については屋敷の構成について検討する。

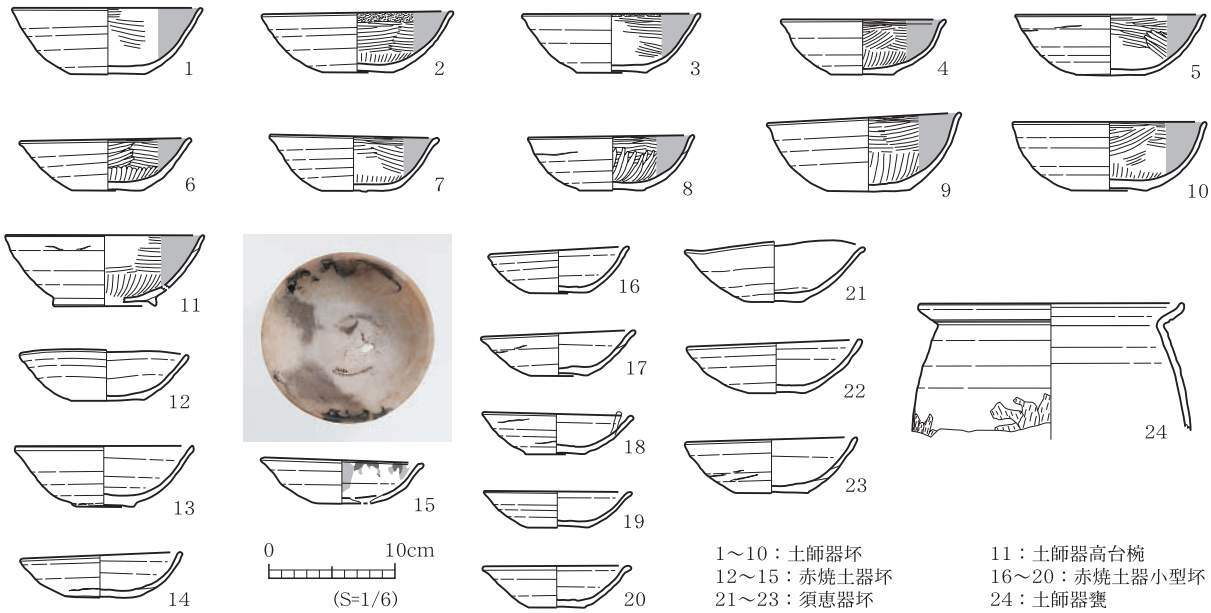
１．古代の遺物と遺構の概要

（１）遺物

【ＳＸ2030土器集積遺構出土土器】（図版239）

ＳＸ2030は、灰白色火山灰の降下によってＳＤ2027畑区画溝の屈曲部が埋まったのちの凹地で検出された土器集積遺構である。土器食器が口縁部を上にして数枚重なった状況で出土した。図示した25点の土器のうち、土師器・赤焼土器・須恵器の坏22点は残存率が高く、完形のまま置かれたと考えられる。

坏類の内訳は土師器坏10点（１～10）、赤焼土器坏４点（12～15）、赤焼土器小型坏５点（16～20）、須恵器３点（21～23）である。いずれも回転糸切りで、再調整は認められず、体部下半に膨らみを持つ椀形の器形である。須恵器は焼成が不充分であり、灰白色・軟質で、内外に黒斑が認められる。土師器坏・椀の内面は、ミガキの幅が広く、ミガキが及ばない部分があったりと仕上げが雑である。焼物の別に関係なく底面に回転糸切りののちスノコ状圧痕が認められるものがある。赤焼土器や須恵器の中には内面に顕著なコテナデが認められるものがある。また、灯明皿として使用された15の小型坏は、内面に油煙状付着物が顕著に認められ、底部が外から穿孔されている。



図版239　SX2030土器集積遺構出土土器

こうした特徴をもつ土器群は、多賀城やその周辺から数多く出土している。山王遺跡ＳＸ543土器溜（多賀城市教育委員会1991）、同遺跡ＳＫ2861土壙（宮城県教育委員会1998）、高崎遺跡ＳＸ1080土器捨て場跡（多賀城市教育委員会1995）などで、灰白色火山灰降下前後に認められる。したがって、ＳＸ2030は10世紀前葉と考えられる。

【ＳＤ2400区画溝跡出土遺物】

ＳＤ2400区画溝跡は、第Ⅶ層で検出したＳＦ2401畑跡の東辺を区画する溝跡である。土師器坏２点が出土した。器形や調整の特徴はＳＸ2030の土師器と類似することから、年代は10世紀前葉と考えられる。

（２）遺構

【第Ⅶ層上面】（図版16）

北部から中央部のＳＤ1100河川跡左岸の自然堤防でＳＦ2401畑跡やＳＤ2026・2400区画溝跡、北部左岸の自然堤防縁辺から後背湿地でＳＦ1916水田跡、また、ＳＤ2027の屈曲部でＳＸ2030土器集積遺構を確認している。

ＳＦ2401畑跡は、河川とコ字形に接続する溝（ＳＤ2027・2400）で三方を区画されたとみられる。畝は河川や区画溝の際まで認められ、方向は河川の向きにほぼ直交する。耕作域は東西25～30ｍ、南北約297ｍで、面積は約8,200㎡である。ＳＦ2401は、畝間の下層に灰白色火山灰の１次堆積（第Ⅵａ層）が認められること、畝は残存せず、その上を火山灰の２次堆積層（第Ⅵｂ層）や洪水による堆積層（第Ⅴ層）が覆うことから、灰白色火山灰の降下で廃絶し、その後に起きた洪水によって畝が失われるとともに埋没したと考えられる。ＳＦ2401南端の区画溝（ＳＤ2027）屈曲部では、火山灰降下後の凹地に土器食器22個体を据えた跡（ＳＸ2030）が確認されており、何らかの祭祀行為や飲食儀礼に用いられた土器が一括廃棄された跡と考えられる。

ＳＦ1916水田跡は、自然堤防の縁辺部に設けた溝で画される。水田１枚の規模は一辺12.0ｍ×7.3ｍ以上である。方向はＳＦ2401と異なり、東へ傾斜するためＳＦ2401とは別時期に機能していた可能性がある。。

第Ⅶ層検出遺構は、ＳＸ2030出土土器の年代観と灰白色火山灰との関係から10世紀前葉に機能していたと考えられる。その後、これらの遺構は河川の氾濫（第Ⅴ層）によって埋没する。

【第Ⅴ層】（図版27）

北部左岸の自然堤防縁辺部でＳＦ1919畑跡を確認した。耕作域の面積は東西8.1ｍ、南北8.9ｍで、面積は72㎡以上である。第Ⅶ層のＳＦ2401畑跡と比較すると、区画溝が伴わず、畝の方向も異なる。年代は、同時期と考えられるＳＦ1303畑跡（『Ｉ』）の年代から10世紀中葉とみられる。

２．中世・近世の遺物と遺構の概要

（１）遺構の特徴と年代

遺構や遺物包含層から、かわらけ・陶磁器・土製品・石製品・木製品・金属製品・動物遺体・植物遺体が出土している。ここでは、ある程度遺物がまとまって出土した遺構について、特徴や年代を考

える。また、中野高柳遺跡の検出遺構は、大別して７期に整理されており（『Ｉ』　第18表）、大別遺構期への位置付けも行う。その際、中世以降は奢侈品である瀬戸産陶器や輸入磁器（青磁・青白磁・白磁）、貯蔵具である陶器壺・甕などは伝世したり使用期間が長期にわたるケースも考えられるため、これらより使用期間が短いと考えられるかわらけや陶磁器碗、陶器片口鉢・擂鉢、瓦質土器、木・漆製食器の年代を優先し、奢侈品や貯蔵具については補助的に扱う。

中世陶器の年代観は、常滑が中野晴久氏（中野晴久1994）、瀬戸は藤沢良祐氏（藤沢良祐1994・1997）の文献を参考とした。また、本遺跡から出土した中世の在地産陶器は、器形や胎土、製作技法からみて白石窯跡群の製品と考えられる。同群は一本杉・東北・黒森・市ノ沢の４支群からなる。一本杉支群は20基の窯が調査され、生産年代は13世紀中頃～14世紀初頭であり（菊池逸夫2003）、他群もほぼ同時期の操業とみられる。さらに、漆器については中世期が東北地方で編年作業が進んでいないため、北陸地方の編年（四柳嘉章1997）を参考とし、近世期については、仙台藩領内の漆器変遷をまとめた関根達人氏の論考を参考とした（関根達人1998）。

遺構期	年　代	主　な　遺　構	備　　考	掲載書
第Ⅰ期	10C前葉	溝に囲まれた畑跡・水田跡	灰白色火山灰で廃絶→洪水で埋没	
		ＳＦ1334・1593＋ＳＤ1256・1257・1592		Ⅰ・Ⅱ
		ＳＦ1493・2401＋ＳＤ2027・2400・2402		Ⅳ
		ＳＦ1199（水田跡）＋ＳＤ1155・1156		Ⅰ
		ＳＦ1916（水田跡）＋ＳＤ1911		Ⅳ
		ＳＸ2030（土器集積遺構）	土器食器22個出土	Ⅳ
		ＳＤ1100（河川跡）		Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ
第Ⅱ期	10C中葉	溝に囲まれた畑跡	洪水で廃絶	
		ＳＦ1303＋SD1150・1151		Ⅰ
		ＳＦ1333＋ＳＤ1309・1330		Ⅰ
		ＳＦ1919		Ⅳ
		ＳＸ1151（洪水跡）		Ⅰ
		ＳＤ1100（河川跡）		Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ
第Ⅲ期	12C	屋敷跡、道路跡？　遺物包含層		
		屋敷跡Ｌ・Ｍ・Ｎ		Ⅳ
		ＳＸ1200（遺物包含層）	土器・陶磁器・漆器・木器・金属器　鉄地銅象嵌轡	Ⅲ
第Ⅳ期	13C～14C	屋敷跡、道路跡、遺物包含層		
		屋敷跡Ａ		Ⅰ
		屋敷跡Ｇ・Ｇ’	屋敷Ｇ→屋敷Ｇ’	Ⅱ・Ⅳ
		屋敷跡Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ・Ｐ		Ⅳ
		ＳＸ1600（南北道路跡）	２時期、南北とも遺跡外へ延びる	Ⅰ・Ⅱ
		ＳＸ1397（遺物包含層）	土器・陶磁器・漆器・木器・金属器	Ⅱ・Ⅳ
第Ⅴ期	15C～16世紀後半	屋敷跡		
		屋敷跡Ｂ・Ｂ’	屋敷Ｂ→屋敷Ｂ’　南辺に土橋	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ
		屋敷跡Ｉ	南辺に土橋	Ⅳ
		屋敷跡Ｑ		Ⅳ
第Ⅵ期	16C後半～17C前半	屋敷跡		
		屋敷跡Ｃ	屋敷Ｃ→屋敷Ｅ　二区画　南辺に土橋	Ⅰ・Ⅳ
		屋敷跡Ｅ	三区画　南辺に土橋	Ⅰ
		屋敷跡Ｊ	南辺に土橋	Ⅳ
第Ⅶ期	17C後半～19C	屋敷跡、道路跡？　墓跡		
		屋敷跡Ｈ		Ⅳ
		屋敷跡Ｆ	区画溝から土器・陶磁器・漆器・木器・金属器	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ
		屋敷跡Ｋ		Ⅳ
		屋敷跡Ｒ	内部は三つに細分？	Ⅳ
		屋敷跡Ｓ	屋敷Ｆ南側	Ⅲ
		屋敷跡Ｔ	遺跡南端	Ⅱ

第18表　中野高柳遺跡の遺構期と主な検出遺構

－遺物包含層－

【ＳＸ1397】（図版240・241）

遺跡南部の湿地跡に形成された遺物包含層である。下層から手づくねかわらけ皿（１）・小皿、ロクロかわらけ皿・小皿（２～９）・柱状高台皿、常滑産片口鉢（14～16）・三筋壺（18）・甕（10～13）、在地産片口鉢（17）、瀬戸産仏花瓶（19）、須恵器系陶器壺、白磁壺、漆椀（20・21）・皿（22）、白木椀（23）が出土している。常滑産陶器は２～３型式期（12世紀中頃～後葉）の甕（10・11・13）、４型式期（12世紀末～13世紀第１四半期）の片口鉢（15・16）・甕（12）、５型式期（13世紀第２四半期頃）の片口鉢（14）が認められる（図版240）。

中層からは手づくねかわらけ皿・小皿（29）、ロクロかわらけ皿・小皿（30～36）・柱状高台皿、渥美産壺、常滑産片口鉢・三筋壺・甕、在地産片口鉢、須恵器系陶器壺、漆椀・小皿（37）が出土している（図版240）。上層からは、手づくねかわらけ皿（１）・小皿（２）、ロクロかわらけ皿（３・４）・小皿（５～10）、瀬戸前Ⅱ期（13世紀第２四半期頃）の卸皿（12）、在地産片口鉢（15・16）、常滑産片口鉢・三筋壺（13・14）、須恵器系陶器壺、白磁四耳壺、渥美産甕、漆椀（17）・皿（18）などが出土している（図版241）。

かわらけの胎土や色調をみると、砂粒を多く含み橙色や褐色を呈するものと、砂粒を含まない均質な胎土で黄橙色や褐灰色といった、白っぽい色調のものとがある。前者は手づくね、ロクロ双方に認められるが、後者は手づくねにのみ認められ、なかには器面の摩滅が著しいものがある。ＳＸ1397周辺の遺構では、前者は認められるが、後者の出土例はない。したがって、ＳＸ1397が形成されたときに使用されていたかわらけは、橙色を呈するかわらけであり、手づくねかわらけは小皿を主体とすると考えられる（註１）。

漆椀・皿は内外とも黒色漆で仕上げられる。漆椀は、総高台の内側を浅く削って高台とするため、底部が厚い。体部は内彎しながら立ち上がる椀形である。白木椀は漆椀と器形は同じで、底部は浅い抉りが施された総高台である。

各層の遺物を比較すると、以下の点で下層・中層と上層に違いが認められる。

❶ロクロかわらけ小皿：下層・中層は扁平なものと器高の高いもの組み合わせであるが、上層は扁平なタイプのみである。

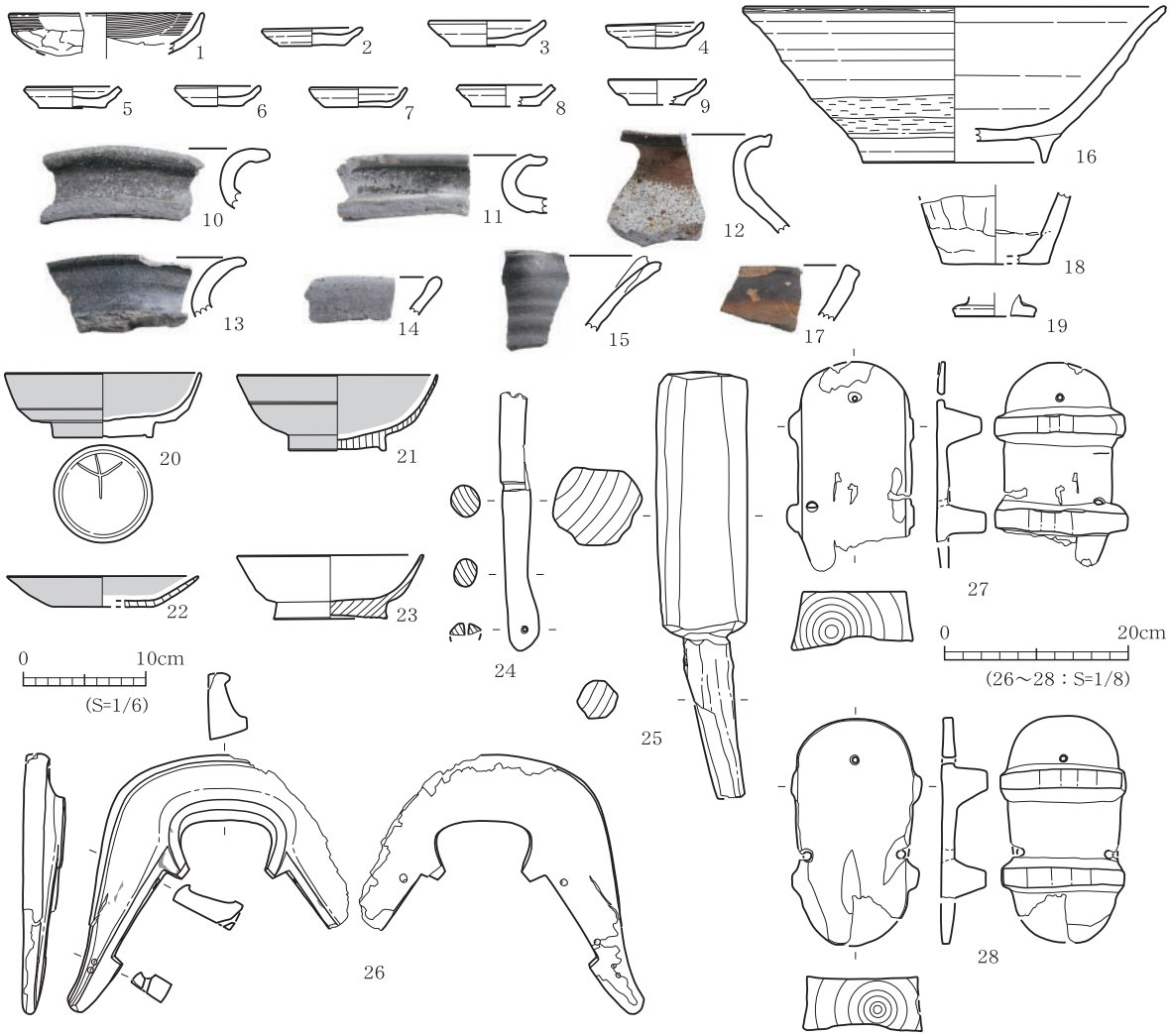
❷在地産陶器の割合：下層・中層は常滑産が主体で、在地産は非常に少ないが、上層は在地産を定量含む。

❸漆椀：下層・中層の器形は、口径に較べて身が浅く、体部の開きが大きいが、上層は身が深くなり、体部が内彎する（開きが小さくなる）。

このうち、中・下層と同じロクロかわらけ小皿の組合せは、ＳＫ2185でも認められる。また、漆椀の体部の内彎傾向が新しくなって強まる（体部の開きが小さくなる）傾向は、北陸地方でも認められている（四柳嘉章1997）（註２）。したがって、ＳＸ1397の出土遺物は下層・中層→上層という２段階の変遷が考えられる。

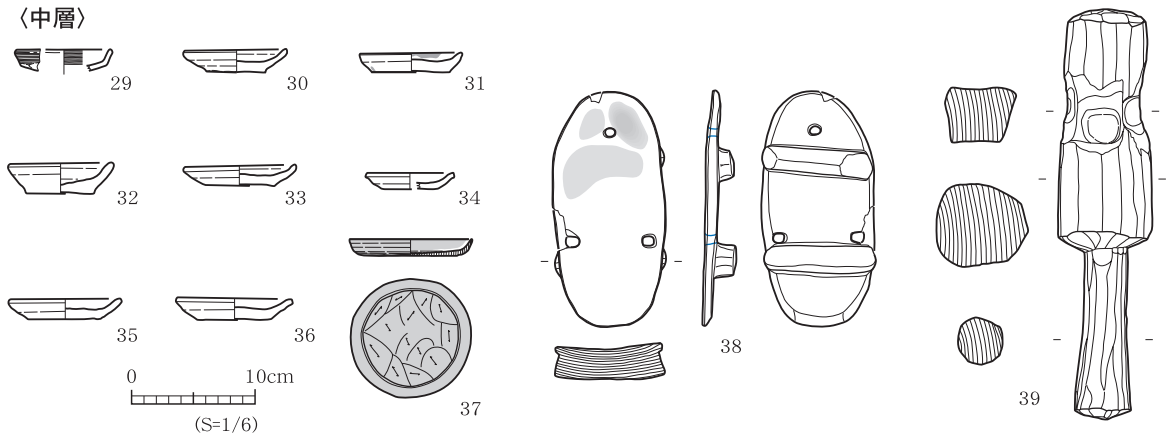
ＳＸ1397の年代は、常滑産片口鉢や瀬戸産卸皿の年代が12世紀末～13世紀第２四半期であること、

〈下層〉



1：手づくねかわらけ皿
2～9：ロクロかわらけ小皿
10～13：常滑産甕
14～16：常滑産片口鉢
17：在地産片口鉢
18：常滑産三筋壺
19：瀬戸産仏花瓶
20・21：漆椀
22：漆皿
23：白木碗
24：鎌柄
25：横槌
26：鞍・前輪
27・28：連歯下駄

〈中層〉



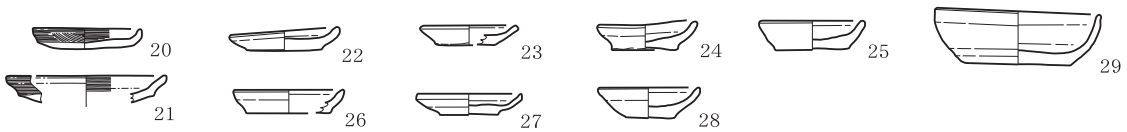
29：手づくねかわらけ小皿
30～36：ロクロかわらけ小皿
37：漆小皿
38：連歯下駄
39：横槌

図版240　SX1397遺物包含層出土遺物

〈SX1397上層〉

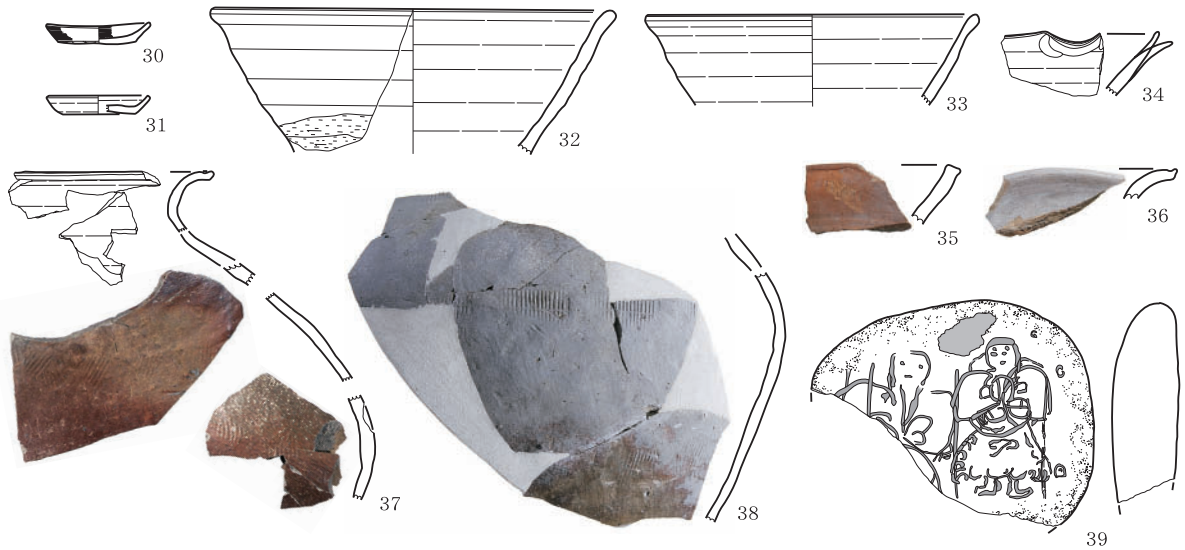
1：手づくねかわらけ皿　2：手づくねかわらけ小皿　3・4：ロクロかわらけ皿　5～10：ロクロかわらけ小皿
11：白磁四耳壺　12：瀬戸産卸皿　13・14：常滑産三筋壺　15・16：在地産片口鉢
17：漆椀　18：漆皿　19：包丁

〈SK2185〉



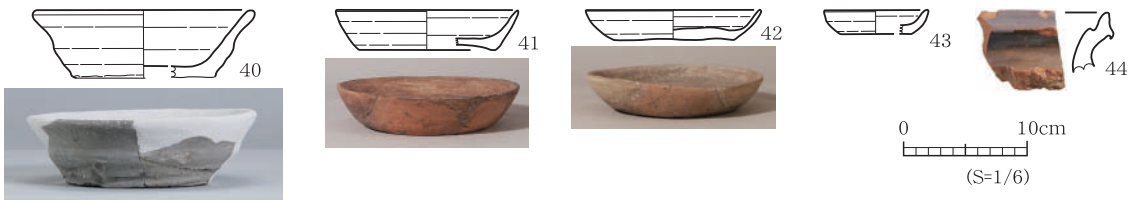
20：手づくねかわらけ小皿　21：手づくねかわらけ皿　22～28：ロクロかわらけ小皿　29：ロクロかわらけ皿

〈SK1008〉



30：手づくねかわらけ小皿　31：ロクロかわらけ小皿　32～34：常滑産片口鉢　35：在地産片口鉢
36～38：常滑産甕　39：墨書礫

〈SD1006〉



40：常滑産片口山茶碗　41・42：ロクロかわらけ皿　43：ロクロかわらけ小皿　44：常滑産甕

図版241　SX1397、SK1008・2185、SD1006出土遺物

在地産（白石産）陶器の生産年代が13世紀中頃～14世紀初頭であることから、13世紀代を中心とした年代観が与えられ、第Ⅳ期に位置付けられる。先述したように、出土遺物は中・下層→上層という変遷が考えられた。下層には量が少ないながらも５型式期の常滑産片口鉢や在地産片口鉢が認められる。このため、ＳＸ1397の年代は中・下層段階が13世紀前半～中頃、上層段階は13世紀後半頃とみられる。

－区画溝跡－

【ＳＤ1467】

５区で確認した東西溝跡で長さ21.0ｍ分を検出した。堆積土から近世以降の陶器、磁器、染付などが出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。

【ＳＤ1466】

５区で確認した東西溝跡で長さ17.1ｍ分を検出した。第Ⅶ期のＳＤ1467より古い。遺構の特徴や近世以降の遺物が出土していないことから、ＳＤ1828と一連の遺構と考えられる。

【ＳＤ1828】

５区で確認した西端が北に折れるＬ字形の溝跡である。東西45.5ｍ、南北42.3ｍ分を検出した。遺構の特徴や出土遺物からＳＤ1466と一連の遺構と考えられ、両者は東西45.0ｍ以上、南北81.0～85.0ｍの範囲**（区画Ｉ）**を画する。底面から青磁椀、堆積土から常滑産片口鉢・甕、在地産甕、青磁椀、ロクロかわらけ、漆椀、茶臼（上臼）などが出土している。ＳＤ1466・1828の年代は、第Ⅲ～Ⅳ期のＳＤ1821・1840・1845より新しく、第Ⅶ期のＳＤ1467より古いことから、第Ⅴ～Ⅵ期とみられる。

【ＳＤ1829】

５区で確認したＬ字形の溝跡で、南辺には幅3.0ｍの土橋（ＳＸ1902）が設けられる。東西は南辺で45.5ｍ、北辺で29.1ｍ、西辺は南西コーナーから北へ29.6ｍの地点で東へ折れ、さらに25.2ｍ延びて北辺と接する。ＳＤ1829は東西が南側で45.0ｍ以上、南北は40.0ｍの範囲**（区画Ｊ）**を画する。堆積土からロクロかわらけ、常滑産甕、茶臼（下臼）、白磁椀などが出土している。年代はＳＤ1828より新しく、遺物に近世陶磁器を含まないことから、第Ⅴ～Ⅵ期とみられる。

【ＳＤ1494】

５区で確認した西端が南に折れるＬ字形の溝跡で、東西61.9ｍ、南北27.0ｍ分を検出した。遺構の特徴や出土遺物から、Ｄ区のＳＤ1756・2301と一連の遺構と考えられる。ＳＤ1466・1756・2301は、東西65.0ｍ以上、南北53.0～61.0ｍの範囲**（区画Ｈ）**を画する。堆積土の３層から陶器碗・擂鉢、２層から17世紀初頭の志野織部陶器丸皿、陶器碗・鉢、１層から17世紀第３四半期の瀬戸美濃産陶器輪禿皿、陶器碗・小皿・擂鉢、染付碗・皿、磁器碗、青磁椀、堆積土から17世紀後半～18世紀前半の肥前産陶器大皿などが出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。

【ＳＤ2301】

Ｄ区で確認した東西溝跡で、38.8ｍ分を検出した。遺構の特徴や出土遺物から、５区南部で検出したＳＤ1494、Ｄ区北部で検出したＳＤ1756と一連の遺構と考えられる。また、ＳＤ2364と接続する可能性がある。堆積土下層から漆椀、上層から切込産とみられる磁器碗、18世紀末以降の陶器甕、陶器

徳利・鉢・ひょうそく、堆積土から陶器碗・擂鉢、染付徳利や磁器小坏などが出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。

【ＳＤ2364】

Ｄ区で確認した南北溝跡で、25.2ｍ分を検出した。堆積土から染付碗・皿・壺、陶器碗・鉢・土瓶・擂鉢・甕、軟質施釉土器焙烙、キセルなどが出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。

【ＳＤ2015】

Ｄ区で確認したコ字形をした溝跡である。東西40.0ｍ、南北27.5ｍ分を検出した。ＳＤ2015は東西40.0ｍ以上、南北27.5ｍの範囲**（区画Ｋ）**を画する。区画内部の建物跡の年代から第Ⅶ期とみられる。

【ＳＤ2363】

Ｄ区で確認した南北溝跡で、50.8ｍ分を検出した。堆積土から常滑産片口鉢・壺、５型式期（13世紀第２四半期）の常滑産甕、在地産片口鉢・壺・甕、ロクロかわらけ皿・小皿、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文椀などが出土しており、第Ⅳ期に位置付けられる。

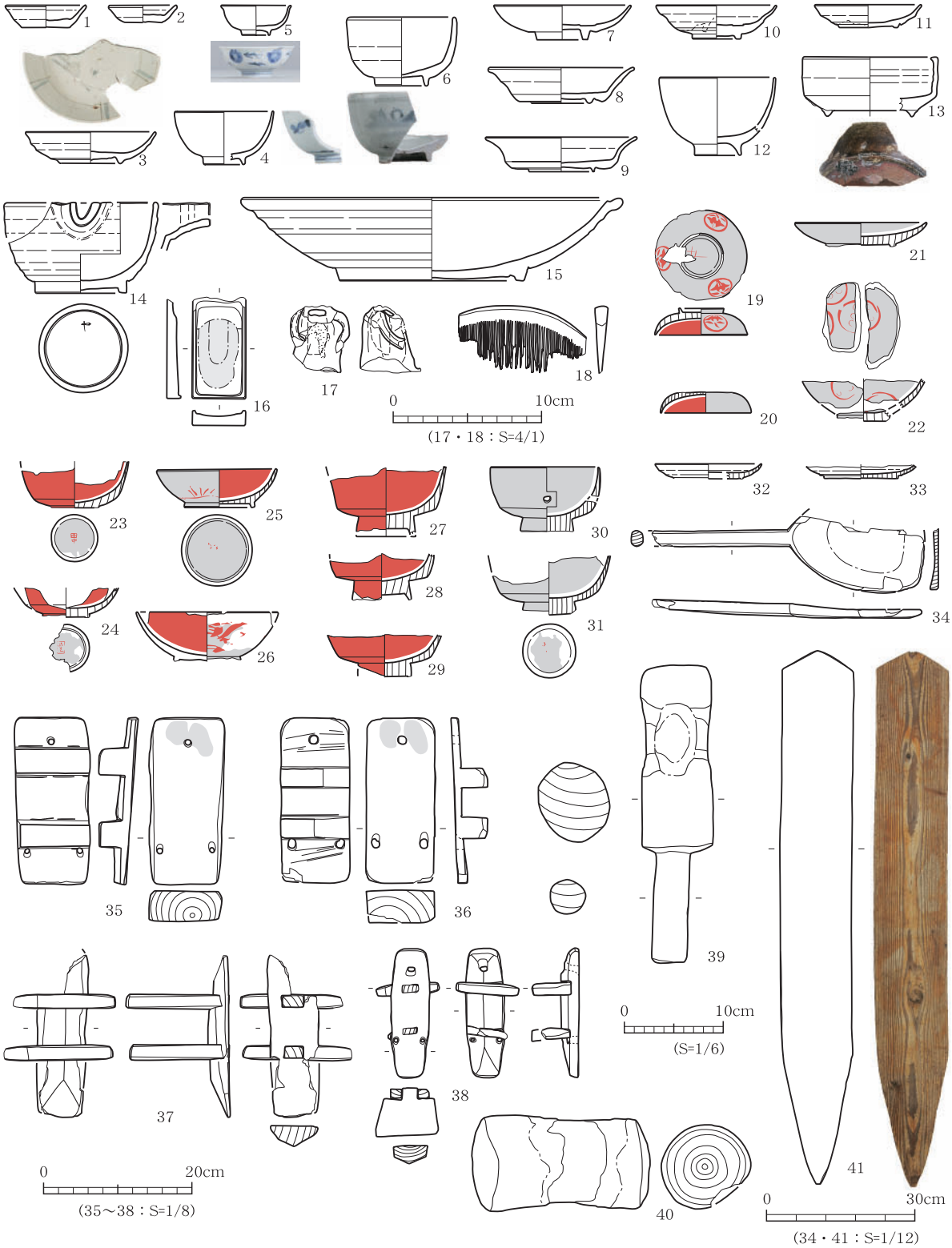
【ＳＤ1633Ｂ区画溝跡】（図版242・243）

Ａ区で確認した**屋敷Ｆ**の区画溝である。底面と堆積土から多量の陶磁器や漆器が出土しており、年代や産地が判明しているのは以下のとおりである。底面から17世紀後半の瀬戸美濃産陶器皿、下層からは17世紀前半の志野織部皿（11）、17世紀～18世紀中頃の瀬戸美濃産陶器皿・端反皿（８・９）・笠原鉢（15）・片口鉢（14）、17世紀後半～18世紀前半の岸産陶器香炉（13）・小甕・猿形水滴（17）、17世紀中頃～18世紀前半の肥前産陶器呉器手碗（12）・陶胎染付碗（６）・折縁皿（10）、磁器染付小碗（４）・小杯（５）・皿（３）・折縁皿・青磁皿（７）、漆椀（身：22～31、蓋：19・20）・皿（21）、白木小皿（32・33）が出土している（図版242）。

下層出土漆器は、内外もしくは片面が赤色漆仕上げとなるものが主体を占め、内外とも黒色漆仕上げは少ない。また、赤色漆で漆絵が描かれるものが認められる。漆椀（身）では、体部下半に稜を有する「一文字腰」が多い（23・24・27～31）。一文字腰をもつ漆椀は、江戸遺跡で17世紀後半に出現し、18世紀以降に一般的になるとされ（中井さやか1992）、同様の傾向は、仙台領内でも指摘されている（関根達人1998）。また、23・24のように高台内に朱書きされた長方形の枠と文字は、仙台城で17世紀末・18世紀初頭をピークとして18世紀後葉まで認められる装飾技法である（関根達人 前掲）。

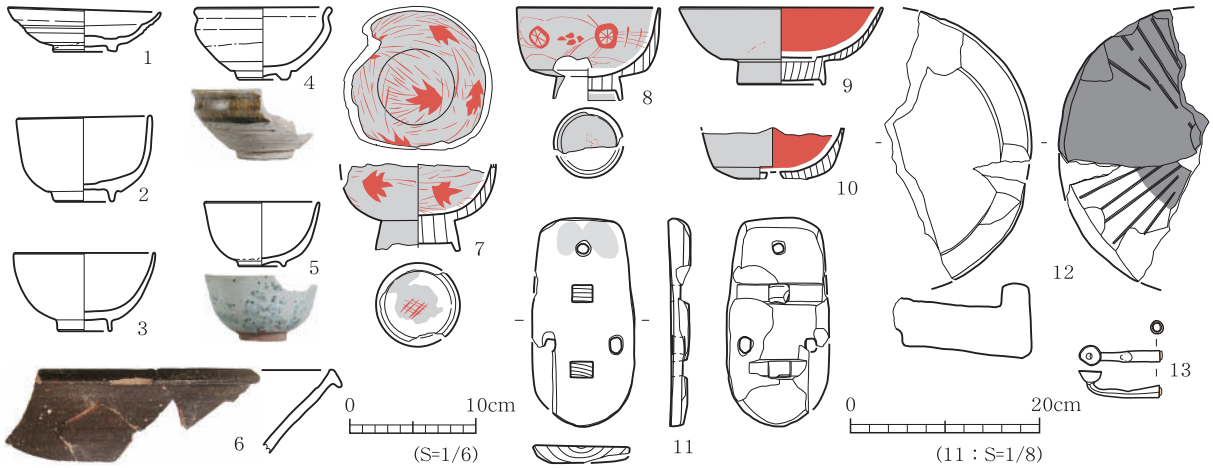
上層からは17世紀初頭の志野織部皿、17世紀後半の瀬戸美濃産天目茶碗（４）、18世紀前半の岸窯系陶器擂鉢（６）、18世紀の肥前産陶器碗（２・３）・折縁皿、19世紀前半の大堀相馬産陶胎染付碗（５）、19世紀の堤産軟質施釉土器焙烙、19世紀の陶器土瓶、漆椀（７～10）などが出土している。漆椀（身）は、内外もしくは片面が赤色漆仕上げとなるものと赤色漆で漆絵が描かれるものとが認められる。また、体部下半に稜を有する「一文字腰」椀（８・10）が４点出土した（図版243）。

以上の検討から、陶磁器や漆器からみたＳＤ1633Ｂの年代は、17世紀後半～19世紀と考えられ第Ⅶ期に位置付けられる。なお、上層から出土した台の先端が平坦で、後端が尖り気味に丸くなる露卯（差歯）下駄（図版243－11）は、伊達家家紋の三引両文が描かれた漆器（三引両文漆器）を出土する遺跡で出土する傾向が高いと指摘されている（高桑登2003）。



1・2：土師質土器灯明皿
3：染付(肥前)皿
4：染付(肥前)小碗
5：染付(肥前)小杯
6：陶胎染付(肥前)碗
7：青磁(肥前)皿
8・9：陶器(瀬戸美濃)端反皿
10：陶器(肥前)折縁皿
11：陶器(志野織部)皿
12：陶器(肥前)呉器手碗
13：陶器(岸)香炉
14：陶器(瀬戸美濃)片口鉢
15：陶器(瀬戸美濃)笠原鉢
16：硯
17：陶器(岸)水滴
18：横櫛
19・20：漆椀蓋
21：漆皿
22～31：漆椀
32・33：白木小皿
34：鋤
35・36：連歯下駄
37・38：差歯下駄
39：横槌
40：錘
41：塔婆

図版242　SD1633B区画溝跡下層出土遺物



1：陶器(肥前)折縁皿　2・3：陶器(肥前)碗　4：陶器(瀬戸美濃)天目茶碗　5：陶胎染付(大堀相馬)碗
6：陶器(岸系ヵ)擂鉢　7～10：漆椀　11：差歯下駄　12：石臼(上臼)　13：キセル(吸い口)

図版243　SD1633B区画溝跡上層出土遺物

－５区の遺構－

【井戸跡】64基検出した。井戸側を持つものは７基で、残りは素掘である。また、前者のうち４基は側がすべて抜き取られていた。

ＳＥ1881・2602は、葦を簾状に組んだ枠をもつ井戸跡である。ＳＥ1881はＳＫ1880、ＳＥ2602はＳＥ2601より新しい。両井戸跡とも年代を推定できる遺物が出土していない。葦簾組の井戸は、本遺跡で７基確認しており、構造的には隅柱を伴うもの（ＳＥ1647・2480・2602）と隅柱がないもの（ＳＥ1534・1539・1881・2199）に大別できる。年代がわかるものはＳＥ1647で、17世紀以降である。本遺跡の周辺で類似した構造を持つ井戸は、新田遺跡７次調査ＳＥ３や８次調査ＳＥ１・２（多賀城市埋蔵文化財調査センター1989）があげられる。その年代は15世紀頃と報告されていることから、ＳＥ1881・2602は中世以降（第Ⅳ期以降）と考えられる。

ＳＥ1786は縦板に丸太の周縁部を用いた縦板組隅柱横桟止めの井戸跡である。ＳＥ1811より新しい。枠内堆積土から陶器碗が出土しており、第Ⅶ期とみられる。

ＳＥ1456は素掘の井戸跡で、堆積土の下層（６層上面）から出土した漆椀は、高台が低く厚みがないこと、口縁部の開きが小さいことから北陸編年の第Ⅵ期（13世紀）に位置付けられ、第Ⅳ期とみられる。このほか、**ＳＥ1789・1790・1890**は出土遺物が12世紀のＳＸ1200（『Ⅲ』）や13世紀のＳＸ1397に類例があることから第Ⅲ～Ⅳ期、**ＳＥ1772**は在地産陶器が出土していることから第Ⅳ期、**ＳＥ1462**は出土遺物がＳＤ1633Ｂに類例があることから第Ⅶ期に位置付けられる。また、**ＳＥ1769**は第Ⅳ期のＳＥ1772より古いことから第Ⅳ期以前、**ＳＥ1774**は第Ⅳ期のＳＫ1761より古いことから第Ⅳ期以前に位置付けられる。

【土壙】64基検出した。これらは規模や平面形から１類：大型土壙（18基）、２類：中型土壙（29基）、３類：小型土壙（16基）、４類：楕円形土壙（１基）に分けられる。

【ＳＫ1454土壙】

５区北東端で確認した大型土壙である。下層から挽臼や砥石、中層から漆椀、漆大鉢、上層から常滑産片口鉢・甕などが出土している。中層の漆大鉢や内面が赤色漆、外面に漆絵が描かれる漆椀は北陸編年のⅧ期２段階（15世紀後半）に、上層の片口鉢は、常滑編年の10型式期（15世紀後半）に類例が求められる。したがって、年代は15世紀後半頃とみられ第Ⅴ期に位置付けられる。

【ＳＫ1458土壙】

５区北東端で確認した大型土壙である。ＳＫ1454より古い。中層から在地産片口鉢、上層から内面が赤色漆、外面は黒色漆で、両面に漆絵が描かれる漆小皿、堆積土から在地産片口鉢、常滑産甕などが出土している。在地産陶器が出土していること、上層出土の漆小皿は北陸編年のⅦ期１段階（14世紀前半）に類例があることから、年代は14世紀前半頃とみられ第Ⅳ期に位置付けられる。

【ＳＫ1880土壙】

５区中央部で確認した大型土壙である。４層からロクロかわらけ小皿、３層からロクロかわらけ、常滑産甕、龍泉窯系青磁椀、漆椀や曲物、２層からロクロかわらけ小皿・皿、１層からロクロかわらけや常滑産甕などが出土している。ロクロかわらけはＳＸ1200・1397に類例があり、年代は12～13世紀とみられ第Ⅲ～Ⅳ期に位置付けられる。

【その他の土壙】

ＳＫ1761は、径3.4ｍの大型土壙である。下層からロクロかわらけ小皿や常滑産片口鉢、中層からかわらけや常滑産甕、上層からロクロかわらけ小皿、在地産片口鉢が出土している。遺物の特徴は、ＳＸ1397に類例があることから第Ⅳ期に位置付けられる。**ＳＫ1883**は、径4.0ｍほどの大型土壙である。第Ⅲ～Ⅳ期のＳＫ1880より古いこと、出土量は少ないが堆積土より常滑産片口鉢・甕が出土していることから、第Ⅲ～Ⅳ期とみられる。**ＳＫ1844**は第Ⅲ～Ⅳ期とみられるＳＤ1821より古いが、堆積土から常滑甕が出土しており第Ⅲ～Ⅳ期とみられる。**ＳＫ1782**は径1.5ｍほどの中型土壙で、堆積土より陶器小皿が出土していることから第Ⅶ期に位置付けられる。

このほか、**ＳＫ1762**は５型式期（13世紀第２四半期頃）の常滑産片口鉢が出土していることから第Ⅳ期、**ＳＫ1460・1784・1797・1878**は出土遺物がＳＤ1633Ｂに類例があることから第Ⅶ期に位置付けられる。また、**ＳＫ1773**は第Ⅳ期のＳＫ1761より古いことから第Ⅳ期以前、**ＳＫ1846～1848**は、第Ⅲ～Ⅳ期のＳＤ1845より古いことから第Ⅳ期以前に位置付けられる。

【溝跡】29条検出した。

ＳＤ1495は南北溝跡で、検出総長は107.6ｍである。３時期（Ａ→Ｂ→Ｃ）の変遷があり、Ｄ区のＳＤ2020溝跡と一連の遺構と考えられる。また、ＳＤ1821東西溝跡と一連の遺構である可能性がある。その場合、検出総長は南北257.1ｍ、東西70.0ｍとなる。Ｂ期堆積土からロクロかわらけ皿・小皿や常滑産甕、Ｃ期堆積土からロクロかわらけ皿・小皿、常滑産片口鉢・甕などが出土している。ＳＸ1200やＳＸ1397出土遺物の特徴と共通しており、第Ⅲ～Ⅳ期に位置付けられる。

ＳＤ1821は上幅1.8～2.4ｍの東西溝跡で、市教委５次調査区を含めた検出総長は70.0ｍである。ＳＤ1495南北溝跡と一連の遺構である可能性がある。第Ⅲ～Ⅳ期とみられるＳＫ1844より新しく、第Ⅴ

期とみられるＳＤ1828より古い。堆積土から常滑甕やかわらけ、確認面から渥美産とみられる三筋壺、常滑産甕、かわらけなどが出土している。遺構の重複関係や出土遺物がＳＸ1200・1397に類似することから第Ⅲ～Ⅳ期とみられる。

ＳＤ1840は上幅1.2～1.5ｍの南北溝跡で、市教委５次調査区分を含めた検出総長は39.1ｍである。東に1.0～3.5ｍ離れてＳＤ1845が併行する。ＳＫ1839、ＳＦ1842や第Ⅵ期とみられるＳＤ1829より古い。堆積土から常滑甕やかわらけ、青磁椀などが出土しており、第Ⅲ～Ⅳ期とみられる。

ＳＤ1845は上幅2.4ｍ前後の南北溝跡で、市教委５次調査区分を含めた検出総長は36.7ｍである。西に1.0～3.5ｍ離れてＳＤ1840が併行する。第Ⅲ～Ⅳ期とみられるＳＫ1846～1848より新しく、ＳＫ1839、ＳＦ1842、第Ⅵ期のＳＤ1829より古い。堆積土からロクロかわらけ、常滑産片口鉢・甕、青磁椀、銭貨「永楽通寶」（初鋳1408年）などが出土している。「永楽通寶」は１層からの出土でほかに15世紀以降の遺物がないこと、遺構の重複関係や２・３層の出土遺物はＳＸ1200・1397に類似することから第Ⅲ～Ⅳ期とみられる。

ＳＤ1853・1854は上幅0.8～0.9ｍの南北溝跡で、市教委５次調査区分を含めた検出総長はＳＤ1853が50.1ｍ、ＳＤ1854は56.0ｍである。両者は0.8～1.5ｍ離れて併行しており、道路側溝の可能性が考えられる。このほか、**ＳＤ1483**は第Ⅳ期のＳＫ1761、第Ⅲ～Ⅳ期のＳＫ1762より古いことから、第Ⅳ期以前に位置付けられる。

－Ｄ区の遺構－

【井戸跡】45基検出した。井戸側を持つものは６基で、残りは素掘である。また、前者のうち２基は、側がすべて抜き取られている。

ＳＥ2105は縦板組隅柱横桟止め井戸跡である。年代は中世以降（第Ⅳ期以降）である。**ＳＥ2162**は横板井籠組とみられる井戸跡である。第Ⅴ期とみられるＳＤ2165より新しく、第Ⅶ期のＳＥ2161より古い。枠内堆積土から磁器染付碗、枠抜取穴から近世陶器碗・鉢、磁器染付碗が出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。

ＳＥ2199は葦を簾状に組んだ枠をもつ、縦簾組横桟止め井戸跡である。第Ⅴ期とみられるＳＤ2113より新しく、第Ⅶ期のＳＤ2015より古い。側が簾状となる井戸のうち年代のわかるものは、Ａ区のＳＥ1647で17世紀以降であることから、第Ⅶ期とみられる。

ＳＥ2204は隅柱横桟止め井戸跡で、側板はすべて抜き取られている。年代は中世以降（第Ⅳ期以降）である。**ＳＥ2273**は素掘の井戸跡である。堆積土から磁器染付碗や陶器碗などが出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。また、椀形滓が出土していることから、付近で鍛冶が行われていたと考えられる。

このほか、**ＳＥ2151・2154・2155・2159・2161・2167・2170・2171・2173・2180・2211・2212・2244・2361**は出土遺物がＳＤ1633Ｂに類例があることから第Ⅶ期に位置付けられる。また、**ＳＥ2283**は第Ⅶ期のＳＤ2291・2291より新しいことから第Ⅶ期以降に位置付けられ、**ＳＥ2152**は第Ⅶ期のＳＫ2153より古いが、周辺の井戸４基（ＳＥ2151・2154・2155・2159）がすべて第Ⅶ期であることから、

第Ⅶ期とみられる。

【土壙】123基検出した。これらは規模や平面形から１類：大型土壙（11基）、２類：中型土壙（50基）、３類：小型土壙（55基）、４類：楕円形土壙（７基）に分けられる。

【ＳＫ2183土壙】

Ｄ区南東部で確認した。下層からロクロかわらけ小皿、上層から手づくねかわらけ皿、ロクロかわらけ小皿・皿、５型式期の常滑産片口鉢、白磁口禿椀などが出土している。手づくねかわらけの胎土はロクロかわらけと同じ橙色で砂粒を含む。かわらけの形態はＳＸ1397出土品の中に類例があること、常滑５型式期は13世紀第２四半期頃、白磁口禿椀は13世紀を中心に認められることから、年代は13世紀代と考えられ第Ⅳ期に位置付けられる。

【ＳＫ2185土壙】（図版241）

Ｄ区南東部で確認した。下層から手づくねかわらけ小皿（20）、１層から手づくねかわらけ小皿・皿（21）、ロクロかわらけ小皿（22～28）・皿（29）などが出土している。ロクロかわらけ小皿は、器高の高いものと扁平タイプとの組み合わせであることから、ＳＸ1397中・下層段階に併行し13世紀前半～中頃とみられ、第Ⅳ期に位置付けられる。

【ＳＫ2246土壙】

Ｄ区中央部北側で確認した。４層から常滑産片口鉢・三筋壺・甕、在地産甕、２層から常滑産片口鉢・甕、在地産短頸壺・甕、１層から瀬戸中Ⅱ期（14世紀前葉）とみられる折縁中皿、瀬戸産瓶子、常滑産三筋壺・甕、在地産壺などが出土している。瀬戸産陶器や在地産陶器から、年代は13世紀後半～14世紀前半とみられ第Ⅳ期に位置付けられる。

【その他の土壙】

ＳＫ2209は径が9.0ｍを超える大型土壙である。ＳＤ2208より新しく、ＳＫ2113土壙より古い。底面からロクロかわらけ、在地産片口鉢、常滑産甕、堆積土下層から青磁椀、白磁皿、常滑産甕、在地産甕、中層から在地産片口鉢やロクロかわらけ、上層から瀬戸産折縁中皿、常滑産甕、在地産片口鉢・甕やロクロかわらけなどが出土している。ロクロかわらけは小破片のみで、図化できるものはなかった。遺物の特徴はＳＸ1397と類似することから、第Ⅳ期に位置付けられる。

ＳＫ2213は径が4.7ｍの大型土壙である。第Ⅳ期のＳＫ2209より新しいが、下層から常滑産甕、堆積土から青白磁皿や常滑産甕が出土しており、第Ⅳ期に位置付けられる。**ＳＫ2238**は長径が5.0ｍの大型土壙である。堆積土の１～７層よりロクロかわらけ小皿が４枚出土している。器形はＳＸ1397と類似することから13世紀とみられ、第Ⅳ期に位置付けられる。**ＳＫ2294**は長径2.3ｍの中型土壙でＳＤ2291・2291より新しく、ＳＫ2295より古い。底面から陶器鉄絵皿と土師質土器皿が２枚重なって出土した。出土状況から墓壙の可能性がある。鉄絵皿は17世紀後半の瀬戸美濃産であることから、第Ⅶ期に位置付けられる。

このほか、**ＳＫ2300**は出土遺物がＳＸ1200・1397に類例があることから第Ⅲ～Ⅳ期、**ＳＫ2018・2112・2153・2157・2168・2174・2190・2191・2196・2216・2217・2225・2230・2240・2250・2252・2253・2256～2258・2303・2311・2341**は出土遺物がＳＤ1633Ｂに類例があることから第Ⅶ期に位置付

けられる。また、**ＳＫ2156・2243・2295**は、それぞれ第Ⅶ期のＳＫ2157、ＳＫ2250、ＳＫ2294より新しいことから、第Ⅶ期以降と考えられる。

【溝跡】47条検出した。

ＳＤ2020Ａ・Ｂは第Ⅳ期のＳＸ1397遺物包含層の東岸に沿って延びる南北溝跡である。126.9ｍ分を検出した。２時期（Ａ→Ｂ）の変遷があり、５区のＳＤ1495溝跡と一連の遺構と考えられる。Ｂ期堆積土から龍泉窯系青磁鎬蓮弁文椀、常滑産片口鉢・甕、在地産甕やロクロかわらけなどが出土しており、ＳＸ1200・1397と特徴が類似することから第Ⅲ～Ⅳ期に位置付けられる。

ＳＤ2165Ａ・Ｂは東西溝跡で、66.0ｍ分を検出した。２時期（Ａ→Ｂ）の変遷があり、第Ⅳ期のＳＤ2020やＳＸ1397より新しく、第Ⅶ期のＳＥ2161・2162・2244、ＳＫ2250、ＳＤ1633より古い。Ａ期堆積土から青磁椀や常滑産甕、Ｂ期堆積土から常滑産甕、在地産甕などが出土している。遺構の重複関係から第Ⅴ期のＳＤ1650と同時期の可能性が考えられる。

ＳＤ2150・2195は上幅0.6～1.0ｍの東西溝跡で、前者は46.0ｍ分、後者は一連とみられるＳＤ2148を含めて59.0ｍ分を検出した。ＳＤ2150は第Ⅳ期のＳＤ2020より新しく、第Ⅶ期のＳＫ2190より古い。ＳＤ2195は第Ⅶ期のＳＫ2191・2196より古い。両者は、2.0ｍ前後離れて併行することから道路側溝とみられる。ＳＤ2195は堆積土から陶器皿が出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる

このほか、**ＳＤ2269・2291**は出土遺物がＳＤ1633Ｂに類例があることから第Ⅶ期に位置付けられる。また、**ＳＤ2113**は第Ⅳ期のＳＤ2020より新しく、第Ⅶ期のＳＤ2015より古いことから第Ⅴ～Ⅵ期、**ＳＤ2104**は第Ⅳ期のＳＤ2020より新しく、ＳＤ2113と同じ方向をとることから第Ⅴ～Ⅵ期とみられる。**ＳＤ2292**は第Ⅶ期のＳＤ2291より新しく、ＳＫ2294より古いことから第Ⅶ期に位置付けられる。

－Ｂ区の遺構－

【井戸跡】

９基検出した。井戸側を持つものは１基で、残りは素掘である。**ＳＥ2480**は細い心持材や竹材を簾状に組んだ側をもつ、縦簾組隅柱横桟止め井戸跡である。底面や堆積土から遺物は出土していない。年代は中世以降（第Ⅳ期以降）である。中野高柳遺跡で側が簾状となる井戸のうち年代がわかるものはＳＥ1647で、17世紀以降であることから、**ＳＥ2480**は第Ⅶ期の遺構とみられる。

ＳＥ2466・2468・2472・2473・2533・2539はいずれも第Ⅳ期のＳＸ1397より新しい。ＳＥ2533で17世紀末～18世紀初頭の瀬戸美濃産煙硝擂が出土していることから第Ⅶ期に位置付けられる。他の５基も、ＳＥ2533の近くに位置することから第Ⅶ期とみられる。

【墓壙】

Ｂ３区北部で20基確認した。隣接する市教委分を含めると、総数は50基を超えるとみられる。墓域は東西30ｍ、南北20ｍほどである。Ｃ区で検出した近世墓（『Ⅱ』）と較べて、形態に楕円形や方形が認められる、棺の痕跡が認められない、といった違いが認められ、ＳＸ2467底面からは銭貨「永楽通寶」が６枚出土していることから、近世墓ではなく、15～16世紀代（第Ⅴ～Ⅵ期）の中世墓である可能性が考えられる。

【土壙】36基検出した。これらは規模や平面形から１類：大型土壙（２基）、２類：中型土壙（６基）、３類：小型土壙（18基）、４類：楕円形土壙（10基）に分けられる。

【ＳＫ1008土壙】（図版241）

Ｂ２区中央部で確認した大型土壙である。４層から常滑産甕、白磁椀、３層からロクロかわらけ皿、白磁四耳壺、２層から常滑産甕、在地産甕、２～３層より手づくねかわらけ皿・小皿（30）、ロクロかわらけ小皿（31）、常滑産片口鉢（32～34）・甕（36～38）、漆椀・片口鉢、白木皿、１層から在地産片口鉢（35）、白磁四耳壺、堆積土から常滑産甕やかわらけなどが出土している。常滑産陶器には２～３型式期（12世紀中頃～後葉）の甕（37）、３型式期（12世紀後葉）の片口鉢（34）、５型式期（13世紀第２四半期頃）の片口鉢（32・33）がある。かわらけはＳＸ1397に類例が認められることから、年代は13世紀代と考えられ第Ⅳ期に位置付けられる。

【その他の土壙】

ＳＫ2475は径が6.2ｍの大型土壙で、第Ⅳ期のＳＸ1397より新しい。堆積土から中Ⅲ期（14世紀第２四半期）の瀬戸産平碗、在地産片口鉢が出土していることから、14世紀中葉～後葉とみられ第Ⅳ期に位置付けられる。**ＳＫ2500**は長径が2.6ｍの中型土壙で、ＳＤ2501より新しく、ＳＫ2503・2508より古い。埋め戻される際、鉄鏃３点を含む遺物が廃棄されている。堆積土から常滑産甕やＳＸ1397と類似するかわらけが出土しており、第Ⅳ期に位置付けられる。中型土壙である**ＳＫ2461・2462**は、第Ⅴ～Ⅵ期とみられるＳＤ2241より新しく、堆積土から陶器碗が出土していることから第Ⅶ期に位置付けられる。

【ＳＤ1006溝跡】（図版241）

Ｂ２区中央部で確認したＬ字形の溝跡である。堆積土からロクロかわらけ皿（41・42）・小皿（43）、５型式期とみられる常滑産片口山茶碗（40）、常滑産片口鉢・甕、在地産甕などが出土している。ＳＤ1006とＳＸ1397上層のかわらけを比較すると、ＳＤ1006のロクロかわらけ皿は扁平で口縁に向けて直線的に開き、手づくねかわらけが認められないのに対し、ＳＸ1397上層は底部から内彎しながら立ち上がる椀形で、手づくねかわらけが共伴する。ＳＤ1006はＳＤ1007を介してＳＸ1397より新しいことから、両者の違いは時間差を示すと考えられる。したがって、年代は14世紀前半頃とみられ第Ⅳ期に位置付けられる。

【その他の溝跡】19条検出した。

ＳＤ1007は上幅0.8～1.3ｍの東西溝跡で、56.6ｍ分を検出した。第Ⅳ期のＳＫ1008、ＳＸ1397より新しく、同期のＳＤ1006より古いことから、第Ⅳ期に位置付けられる。**ＳＤ1017**は上幅0.7～1.3ｍの東西溝跡で、80.5ｍ分を検出した。第Ⅳ期のＳＫ1311、ＳＸ1397より新しいが、堆積土から在地産片口鉢、ロクロかわらけ、常滑産甕が出土しており、第Ⅳ期とみられる。

ＳＤ2241はＳＸ1397の中央に設けられた上幅は1.2～2.0ｍの南北溝跡で、232.1ｍ分を検出した。第Ⅳ期のＳＤ2474、ＳＸ1397より新しく、第Ⅶ期のＳＫ2461・2462より古いことから、第Ⅴ～Ⅵ期とみられる。**ＳＤ2474**は上幅2.5～3.0ｍの南北溝跡で、67.1ｍ分を検出した。第Ⅳ期のＳＸ1397より新しく、第Ⅴ～Ⅵ期とみられるＳＤ2241より古い。堆積土からロクロかわらけ小皿、在地産片口鉢、５

～６型式期の常滑産甕が出土しており、第Ⅳ期とみられる。**ＳＤ2485**は上幅0.8～1.3ｍの南北溝跡で、18.5ｍ分を検出した。堆積土から在地産片口鉢・甕、常滑産片口鉢・甕、かわらけ、龍泉窯系青磁盤が出土しており、第Ⅳ期に位置付けられる。

このほか、**ＳＤ2495**は第Ⅳ期のＳＤ1006より古いが、堆積土よりロクロかわらけが出土していることから第Ⅳ期、**ＳＤ2501**は第Ⅳ期のＳＫ2500より古く、銭「祥符通寶」が第Ⅳ期のＳＤ1007出土品と接合することから第Ⅳ期、**ＳＤ2509**は第Ⅳ期のＳＤ1006より古く、堆積土から常滑産や在地産の片口鉢が出土することから第Ⅳ期、**ＳＤ2469**は出土遺物がＳＤ1633Ｂに類例があることから第Ⅶ期に位置付けられる。また、**ＳＤ1019**は第Ⅳ期のＳＤ1006より古いことから第Ⅳ期以前、**ＳＤ2489**は第Ⅳ期以前のＳＤ1019より古いことから第Ⅳ期以前に位置付けられる。

（２） 掘立柱建物跡の検討

５区で33棟、Ｄ区で32棟、Ｂ区で14棟の掘立柱建物跡を確認した。これら89棟の建物跡について位置のまとまりから建物跡群を設定し、その特徴を整理する。

ａ． 建物群の設定

今回の報告する５・Ｂ・Ｄ区では多数のピットを確認し、これらの中から柱筋の通りが良く、柱穴相互の間隔に規則性が見いだせたものを、掘立柱建物跡の柱穴として抽出した。建物の数は５区で33棟、Ｄ区で32棟、Ｂ区で14棟である。抽出した建物跡を概観すると、位置ごとにある程度のまとまりがみられる。そこでそのまとまりを建物跡群として捉え、以下のように設定する（図版244）[註３]。

１群建物跡：５区北東部、ＳＤ1829区画溝跡以北の建物跡群。17棟検出した**（ＳＢ2031～2047）**。

２群建物跡：５区中央部、ＳＤ1494区画溝跡以北の建物跡群。10棟検出した**（ＳＢ2051～2060）**。

３群建物跡：５区南部からＤ区北端、ＳＤ1494区画溝跡以南、ＳＤ2301区画溝跡以北の建物跡群で、７棟検出した（ＳＢ2061～2066、2410）。

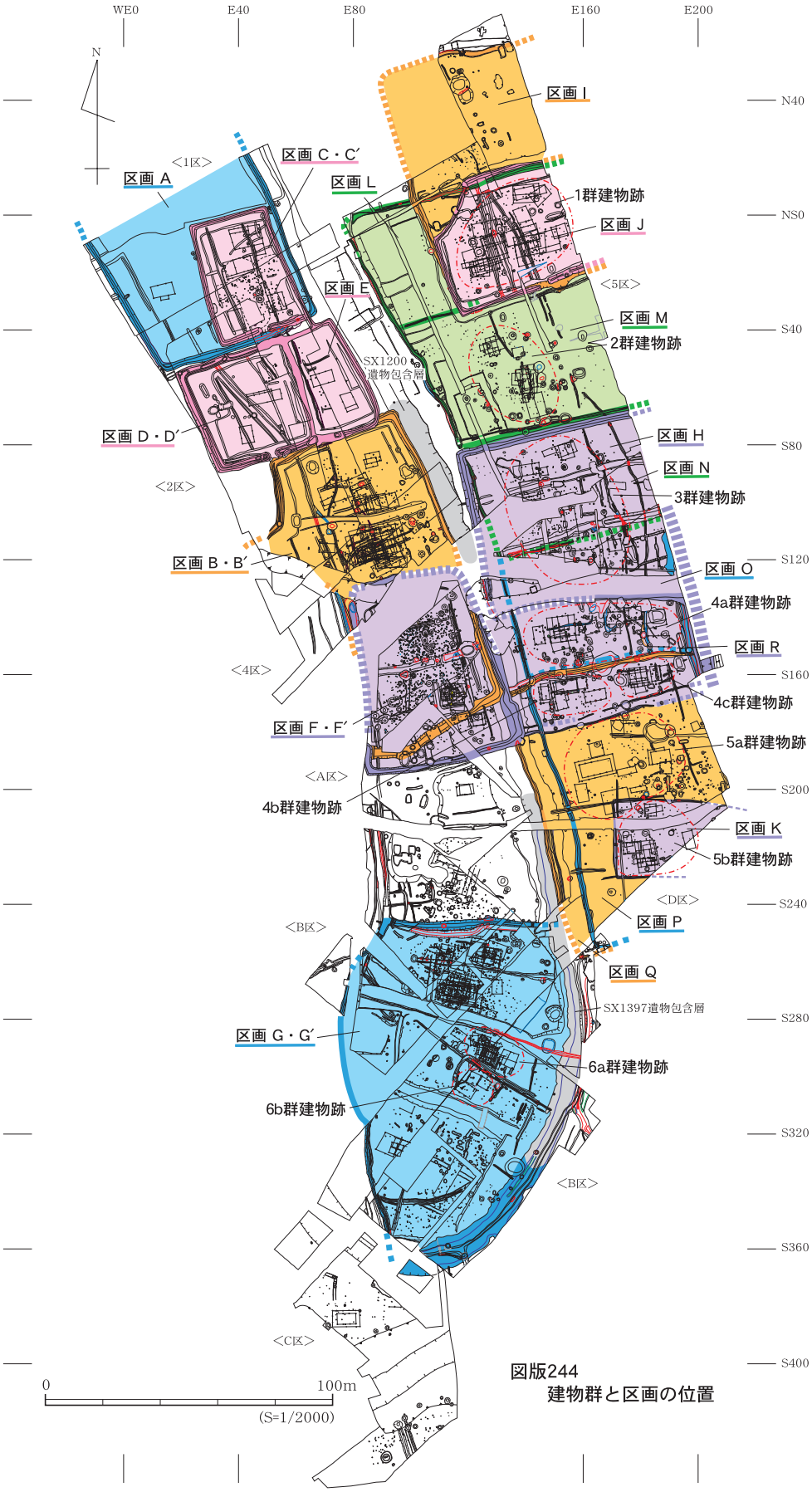
４群建物跡：Ｄ区北部、ＳＤ2301区画溝跡以南、ＳＤ2195溝跡以北の建物跡群。22棟検出した**（ＳＢ2411～2432）**。

５群建物跡：Ｄ区中央部から南部、ＳＤ2150溝跡以南の建物跡群。19棟検出した**（ＳＢ2433～2451）**。

６群建物跡：Ｂ２区東側の建物跡群。14棟検出した**（ＳＢ1054～1058・2551～2559）**。

ｂ． 各建物群の特徴

建物跡群の特徴をみるにあたって、二つの観点に着目した。一つは建物面積で、もう一つは建物跡の重複状況である。建物跡の面積をみたところ、60㎡を超えるものが散見されたため、建物面積60㎡前後を一つの境界値として、60㎡以上の建物跡を大型建物跡、60㎡未満の建物跡を中・小型建物跡と呼称する[註４]。その結果、１・４～６群に大型建物跡が認められ、また、大型建物がない２群でも、他より10㎡以上大きな建物が２棟存在することがわかった（第19表）。建物跡の重複状況については、同位置での建物跡の重複が２棟以下なのか、３棟以上重なりあうのかで建て替えの多少を判断



図版244
建物群と区画の位置

断し、さらに重複する建物跡の規模が同規模か異なる規模なのかについて着目した。以下、各建物跡群の特徴をみていく。その際、出土遺物から時期が特定可能な建物についても検討する。

１群建物跡

１群には17棟の建物跡が存在する。このうち大型建物跡は５棟（ＳＢ2035・2037・2041・2042・2044）認められる。大型建物はほぼ同位置にあり、その東や西、あるいは北東に中・小型建物が建てられ、それぞれが数度建て替えられている。ＳＢ2035は柱穴埋土から銭貨「至大通寶」（初鋳1310年）が出土しており、14世紀以降と考えられる。

２群建物跡

２群には10棟の建物跡が存在する。大型建物跡は認められないが、ＳＢ2056・2060は他と較べて10㎡以上大きい。建物は南と北の２箇所に分かれ、前者は南北棟の中心建物を含めて７棟が重複する。

３群建物跡

３群には仙台市教委が確認した４棟を加えた11棟の建物跡が認められる。大型建物跡はみられず、11棟とも中・小型建物である。同位置での重複は全体的に少なく、建物相互の位置も比較的散らばる。

４群建物跡

４群には22棟の建物跡が存在し、北側（４ａ群：ＳＢ2411～2420）、南西側（４ｂ群：ＳＢ2421～2428）と南東側（４ｃ群：ＳＢ2429～2432）の建物群に細分できる。

４ａ群は大型建物跡（ＳＢ2412）を除く９棟のうち、50㎡前後の建物跡が２棟（ＳＢ2417・2419）認められ、他の７棟より10㎡以上大きい。ＳＢ2412・2417・2419は重複せず、東西に並び、他の７棟はこれら３棟の建物跡と重複するが、中・小型建物跡どうしの重複は２棟を除いて認められない。ＳＢ2412・2417は柱穴埋土から近世陶磁器が出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。

	建物群	遺構名	桁行平均柱間	床面積（m２）
5区	1群	SB2031	4.5	51
		SB2032	3.5	36
		SB2033	3.3	30
		SB2034	2.3	44
		SB2035	2.3	60
		SB2036	3	29
		SB2037	3.7	74
		SB2038	2.4	35
		SB2039	3.8	55
		SB2040	2.5	21
		SB2041	3.4	82
		SB2042	2.6	105
		SB2043	3.9	51
		SB2044	3	68
		SB2045	2.6	53
		SB2046	2.4	28
		SB2047	1.6	22
	2群	SB2051	2.1	29
		SB2052	1.9	28
		SB2053	2	13
		SB2054	2	38
		SB2055	1.9	33
		SB2056	2.1	50
		SB2057	2.2	12
		SB2058	2.7	33
		SB2059	2.5	23
		SB2060	4.1	51
	3群	SB2061	3.4	36
		SB2062	2.6	24
		SB2063	2.2	35
		SB2064	3.1	8
		SB2065	2.4	39
		SB2066	2.2	42
D区		SB2410	2.3	18
	4a群	SB2411	2.1	23
		SB2412	1.9	80
		SB2413	1.8	28
		SB2414	2.9	33
		SB2415	2.5	20
		SB2416	2	14
		SB2417	2.2	51
		SB2418	1.9	27
		SB2419	4	46
		SB2420	1.9	29
	4b群	SB2421	1.4	12
		SB2422	1.9	19
		SB2423	1.9	19
		SB2424	2.4	55
		SB2425	2.5	31
		SB2426	2	33
		SB2427	2.2	32
		SB2428	1.8	27
	4c群	SB2429	1.7	61
		SB2430	3.4	52
		SB2431	1.7	18
		SB2432	1.9	16
	5a群	SB2433	4.9	25
		SB2434	4.8	22
		SB2435	2.3	92
		SB2436	3.3	16
		SB2437	2.1	24
		SB2438	2.2	38
		SB2439	2.1	16
		SB2440	2.4	73
		SB2441	1.8	9
	5b群	SB2442	4.1	17
		SB2443	2	13
		SB2444	2	11
		SB2445	1.2	18
		SB2446	1.3	26
		SB2447	1.7	60
		SB2448	2.4	33
		SB2449	3	5
		SB2450	3	28
		SB2451	2.1	22
B区	6a群	SB1054	2	24
		SB1055	1.9	20
		SB1056	1.3	22
		SB1057	1.9	26
		SB1058	1.7	17
		SB2551	1.6	17
		SB2552	2.1	16
		SB2553	2.1	22
		SB2554	2.2	20
		SB2555	2.7	25
		SB2556	2.8	30
	6b群	SB2557	4.2	15
		SB2558	1.9	13
		SB2559	2.1	25

第19表　建物面積と桁行平均柱間寸法

４ｂ・ｃ群では、４ｂ群に大型建物が１棟（ＳＢ2429）認められ、これに次ぐ50㎡以上の建物は、４ｂ群・４ｃ群で１棟ずつ認められる（ＳＢ2424･2430）。建物跡の重複状況は、４ｃ群がＳＢ2430とその東の建物で１回ずつ建替えがみられ、２棟の組合わせによる２時期の変遷が考えられる。４ｂ群は、ＳＢ2424とほぼ同位置にある３棟（ＳＢ2425～2427）が他の４棟より建物面積が大きい。したがって、規模の大きなＳＢ2424～2427とそれより小さな４棟が１棟ずつ組合う可能性が考えられる。ＳＢ2429は南西隅柱抜取穴から完形の土師質土器灯明皿が出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。

５群建物跡

５群には19棟の建物跡が存在する。これらは中央から北側の建物群（５ａ群：ＳＢ2433～2441）と南側のＳＤ2015区画溝跡内側の建物群（５ｂ群：2442～2451）に細分できる。大型建物は５ａ群で２棟（ＳＢ2435・2440）、５ｂ群で１棟（ＳＢ2447）認められる。建物跡の重複をみると、５ａ群は２棟（ＳＢ2438・2439）が重複するのを除いて全体的に散在するのに対し、５ｂ群はＳＢ2442・2443・2451を除く８棟がＳＢ2427近辺に集中する。ＳＢ2440は南東隅柱抜取穴の底面から手づくねかわらけ小皿が出土しており、第Ⅳ期に位置付けられる。一方、ＳＢ2445・2446は柱穴埋土から近世の燻し瓦が出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。

６群建物跡

６群は、『Ⅱ』で報告したＢ２区南東部の建物群に含まれるもの（６ａ群：ＳＢ1054～2556）とその南の建物群（６ｂ群：ＳＢ2557～2559）に細分できる。６ａ群は建物面積が30㎡以下の小型建物からなる。こうした点は『Ⅱ』で報告した他の建物（ＳＢ1052・1053・1061・1062）と共通しており、６ａ群は屋敷Ｇの副屋と考えられる。６ｂ群は６ａ群とＳＤ1006・1007で画された南に位置する。このうち２棟（ＳＢ2557・2558）は内部に柱を持たない方形建物であり、他と異なる性格が想定される。

（３）屋敷の様相

中野高柳遺跡では、溝が方形もしくはそれに近い形にめぐって囲われた空間を形成している状況を、一つの区画として捉え、これまで７区画（**区画Ａ～Ｇ**）を確認している（『Ⅰ』～『Ⅲ』）。今回、新たに５区で２区画、５区からＤ区で１区画、Ｄ区で１区画把握できたので、遺跡全体で11区画を確認したことになる[註５]（第20表）。ここでは、今回新たに確認した４区画を**区画Ｈ～Ｋ**と呼称し、規模や年代を考える（図版244）。その後、建物跡など内部施設について検討する。以下の説明では、区画溝内部に建物や井戸などの諸施設が配置された総体を屋敷と呼称する。

ａ．　区画の概要と屋敷の構成

ー区画Ｈー（図版245）

区画Ｈは、５区の南端からＤ区北端に位置する。北辺はＳＤ1494、西辺はＳＤ1494・1756によって画されており、南辺は後世の攪乱によって壊されているものの部分的にＳＤ2301を確認した。東辺は確認できなかった。区画溝の幅は2.5～3.4ｍ、深さは0.9～1.2ｍである。区画の規模は南北52～61ｍ、東西64ｍ以上である。ＳＤ2364南北溝跡はＳＤ2301と一連の遺構とみられることから、同溝は北へ延びて区画Ｈの東端を画する可能性がある。その場合、区画の東西は65ｍほどと推定される。区画

屋敷名	区画名	区 画 溝 跡	区画溝の幅	屋敷の規模	遺構期	年　代	備　考	掲載書
屋敷A		ＳＤ1101（西）・1129（南）・1106（東）	1.2～2.6m	南北59m以上、東西55～61m	Ⅳ	13Ｃ～14Ｃ		Ⅰ
屋敷B		ＳＤ1230（北～西）・1289（西）・1650（南～東）・1249（東）	1.9～2.8m	南北101～108m、東西43m	Ⅴ	15Ｃ～16Ｃ後半	南辺は市教委１次調査区の東西溝の可能性有り（南北80～83m）	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ
屋敷B'		ＳＤ1231（北～西）・1289（西）・1650（南～東）・1248（東）	2.0～2.8m	南北101～108m、東西43m	Ⅴ	15Ｃ～16Ｃ後半		Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ
屋敷C	区画C	ＳＤ1105Ａ	2.1m	南北39m、東西25～33m	Ⅵ	16Ｃ後半～17Ｃ前半	南辺中央に土橋（ＳＸ1197）	Ⅰ
	区画D	ＳＤ1208（北～西～南）・1237（南）・1400（東）	(2.1～2.9m)	南北34m、東西33～36m	Ⅵ	16Ｃ後半～17Ｃ前半	南辺中央に土橋（ＳＸ1399）	Ⅰ
屋敷E	区画C'	ＳＤ1105Ｂ	1.8～2.7m	南北44m、東西25～33m	Ⅵ	16Ｃ後半～17Ｃ前半		Ⅰ
	区画D'	ＳＤ1140（北・西・南）・1400（東）	2.1～2.9m	南北34m、東西33～36m	Ⅵ	16Ｃ後半～17Ｃ前半	南辺中央に土橋（ＳＸ1399）	Ⅰ
	区画E	ＳＤ1142（北～東～南）・1140（西）	1.8m	南北36m、東西17～22m	Ⅵ	16Ｃ後半～17Ｃ前半		Ⅰ
屋敷F		ＳＤ1275（北）・1288（西）・1633Ａ（西～南～東）	(2.0～3.0m)	南北59m、東西48m	Ⅶ	17Ｃ後半～19Ｃ		Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ
屋敷F'		ＳＤ1275（北）・1288（西）・1633Ｂ（西～南～東）	2.0～3.0m	南北59m、東西48m	Ⅶ	17Ｃ後半～19Ｃ		Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ
屋敷G		ＳＤ1500（北）・ＳＸ1600Ａ（西）・湿地（南～東）	2.5m	南北108m、東西60～75m	Ⅳ	13Ｃ～14Ｃ		Ⅱ・Ⅳ
屋敷G'		ＳＤ150１（北）・ＳＸ1600Ｂ（西）・湿地（南～東）	1.5～2.5m	南北108m、東西60～75m	Ⅳ	13Ｃ～14Ｃ		Ⅱ・Ⅳ
屋敷H		ＳＤ1494（北・西）・2301（南）・2364？（東）	2.5～3.4m	南北53～61m、東西65m？	Ⅶ	17Ｃ後半～19Ｃ		Ⅳ
屋敷Ⅰ		ＳＤ1466（北）・1828（西・南）	2.1～2.3m	南北81～85m、東西45m以上	Ⅴ	15Ｃ～16Ｃ後半		Ⅳ
屋敷J		ＳＤ1829（北・西・南）	2.1～2.8m	南北40m、東西45m以上	Ⅵ	16Ｃ後半～17Ｃ前半	南辺中央に土橋（ＳＸ1902）	Ⅳ
屋敷K		ＳＤ2015（北・西・南）	0.7～0.9m	南北26m、東西39m以上	Ⅶ	17Ｃ後半～19Ｃ		Ⅳ
屋敷L		ＳＤ1821（北）・1495（西）・1485（南）	0.6～2.4m	南北41m、東西70m以上	Ⅲ～Ⅳ	12Ｃ～13Ｃ		Ⅳ
屋敷M		ＳＤ1485（北）・1495（西）・1483（南）	0.6～1.1m	南北44m、東西65m以上	Ⅲ～Ⅳ	12Ｃ～13Ｃ		Ⅳ
屋敷N		ＳＤ1483（北）・1495（西）・2363？（東）	0.6～1.1m	南北43m、東西59m？	Ⅲ～Ⅳ	12Ｃ～13Ｃ	南辺は市教委２次調査区	Ⅳ
屋敷O		ＳＤ2020（西）・2247（南）・2363（東）	(0.7～2.5m以上)	南北43m、東西57m	Ⅲ～Ⅳ	12Ｃ～13Ｃ	北辺は市教委２次調査区	Ⅳ
屋敷P		ＳＤ2247（北）・2020（西）・2363（東）	0.7～2.5m以上	南北96m、東西54～57m	Ⅲ～Ⅳ	12Ｃ～13Ｃ		Ⅳ
屋敷Q		ＳＤ2165（北）・2241（西）	1.6～2.0m	南北96m、東西66m以上	Ⅴ	15Ｃ～16Ｃ後半		Ⅳ
屋敷R		ＳＤ2364（東）	5.9m	南北30～41m、東西63m	Ⅶ	17Ｃ後半～19Ｃ	北は屋敷H、西は屋敷F、南は道路？に囲まれる	Ⅳ
屋敷S		なし		？	Ⅶ	17Ｃ後半～19Ｃ	屋敷Ｆの南側　主屋、井戸を確認	Ⅲ
屋敷T		なし		？	Ⅶ	17Ｃ後半～19Ｃ	遺跡南端　主屋、付属建物、墓跡を確認	Ⅱ

※　区画溝跡名につづく（　）は、屋敷の東西南北の各辺を指す。（　）がない場合は、溝が四周を巡る
※　区画溝跡の幅で（　）としたものは、新しい屋敷の区画溝跡の幅から推定した値である
※　屋敷の規模は、区画溝の内法で計測した

第20表　屋敷の規模と区画溝跡

Ｈは、ＳＤ1494・2301出土遺物から**第Ⅶ期**に位置付けられる。

〈屋敷の構成〉３群建物跡は区画Ｈの内部に位置することから、**屋敷Ｈ**を構成する建物群と考えられる。その場合、屋敷Ｈ全体からみてやや西に片寄る。これらの中で中央やや北側に位置する東西棟のＳＢ2063・2065・2066が主屋、その南東の建物が副屋、主屋の北東が付属建物とみられ、それぞれ２～３時期の変遷が考えられる。主屋と東の副屋に囲まれた一画は広場的な空間とみられる。屋敷南東部の大型土壙のＳＫ2303はゴミ穴とみられ、東西両端付近は遺構がほとんど認められないことから、畑などの耕作地として利用されていた可能性がある。

屋敷Ｈは、西に隣接する第Ⅶ期の屋敷跡である屋敷Ｆと比較すると、建物規模が小さく、建替え回数が少ない、建物以外の施設の数が少なく全体に散在する、区画溝からの遺物の出土量が少ない、といった相違点が認められる。こうした違いは屋敷居住者の階層や使用期間の違いを反映していると考えられる。

ー区画Ｋー（図版245）

区画ＫはＤ区南部に位置する。ＳＤ2015によって南・西・北辺が画されており、東辺は確認できなかった。区画溝の幅は0.7～0.9m、深さは0.3mである。区画の規模は南北約26m、東西39m以上である。区画Ｋは、内部に位置するＳＢ2445・2446の年代から**第Ⅶ期**と考えられる。

〈屋敷の構成〉５ｂ建物群は区画Ｋの内部に位置することから、**屋敷Ｋ**を構成する建物群とみられる。大型建物のＳＢ2447は主屋と考えられ、これに次ぐ規模でＳＢ2447と重複するＳＢ2448・2450も別時期の主屋の可能性がある。ほかに中・小型建物は、主屋の西で４棟、北で２棟、東に１棟認められる。建物以外の施設としては土壙１基が認められ、区画内部の井戸跡２基はこの屋敷に伴うとみられる。屋敷内部は、西側に較べて東側の遺構密度が低い。

図版245　屋敷Ｆ・Ｈ・Ｋ・Ｒの構成

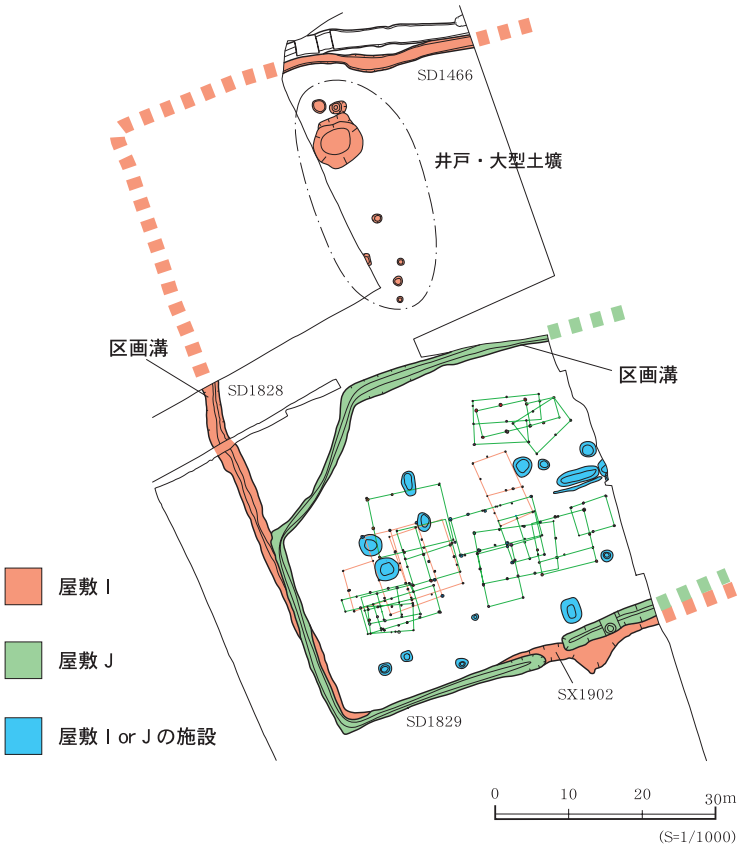
屋敷Ｋは、第Ⅶ期の屋敷跡である屋敷Ｆ・Ｆ’・Ｈと比較して区画溝の規模が小さい、主屋の位置が南西隅に片寄る、遺物の出土量が少ない、といった違いが指摘できる。したがって、第Ⅶ期の屋敷はＦ・Ｆ’→Ｈ→Ｋの順に居住者の階層が低くなると考えられる。

また、屋敷Ｋの北には第Ⅶ期の井戸・土壙が分布している。ＳＤ2015は規模が小さく、掘り直しが認められないこと、付近に第Ⅶ期の建物がないことから、ある時期の屋敷Ｋがこれらを含む規模であった可能性がある。その場合、屋敷の境界を示す遺構は確認できなかった。

ー区画Ｉ・Ｊー（図版246）

区画Ｉ・Ｊは５区北東部に位置し、**Ｉ→Ｊ**へと変遷する。区画Ｉは南辺から西辺がＳＤ1828、北辺はＳＤ1466によって画されており、東辺は確認できなかった。区画溝の幅は2.3ｍ、深さは0.6～1.0ｍである。区画の規模は南北81～85ｍ、東西46ｍ以上である。

区画Ｊは５区北東部に位置する。ＳＤ1829によって南・西・北辺が画されており、東辺は確認できなかった。区画Ｉとは南辺と西辺の南側が一致しており、北東部は角にならず内側に入り込む。また、南辺には土橋（ＳＸ1902）が設けられている。区画溝の幅は2.1～2.8ｍ、深さは0.6～0.9ｍである。区画の規模は南北39～41ｍ、東西45ｍ以上で、西端部の南北は26～40ｍである。ＳＸ1902土橋跡は、南辺の中央となる可能性があり、その場合、区画の東西は60ｍほどと推定される。ＳＤ1466・1828・1829は第Ⅳ期の遺構より新しく、第Ⅶ期より古いことから、区画Ｉ・Ｊは**第Ⅴ期～第Ⅵ期**とみられる（註６）。



図版246　屋敷Ｉ・Ｊの構成

〈屋敷の構成〉１群建物跡は区画Ｉ・Ｊの内部に位置することから、**屋敷Ｉ・Ｊ**を構成する建物群と考えられる。ＳＢ2035の柱穴埋土からは、銭貨「至大通寶」（初鋳1310年）が出土しており、前述の年代観と矛盾しない。本遺跡で３ｍ前後の区画溝で囲まれる屋敷は、中央に主屋、主屋の南東や南西、もしくは片方に副屋が設けられている。こうした視点で屋敷Ｊをみると、ＳＸ1902の北に位置する東西棟の大型建物４棟（ＳＢ2035・2037・2041・2042）が主屋、西から南西の３棟（ＳＢ2043・2045・2047）と東の３棟（ＳＢ2038～2040）が副屋もしくは付属建物、北東の３棟（ＳＢ2031～2033）が付属建物と考えられ、それぞれ３～４時期の変遷が考えられる。

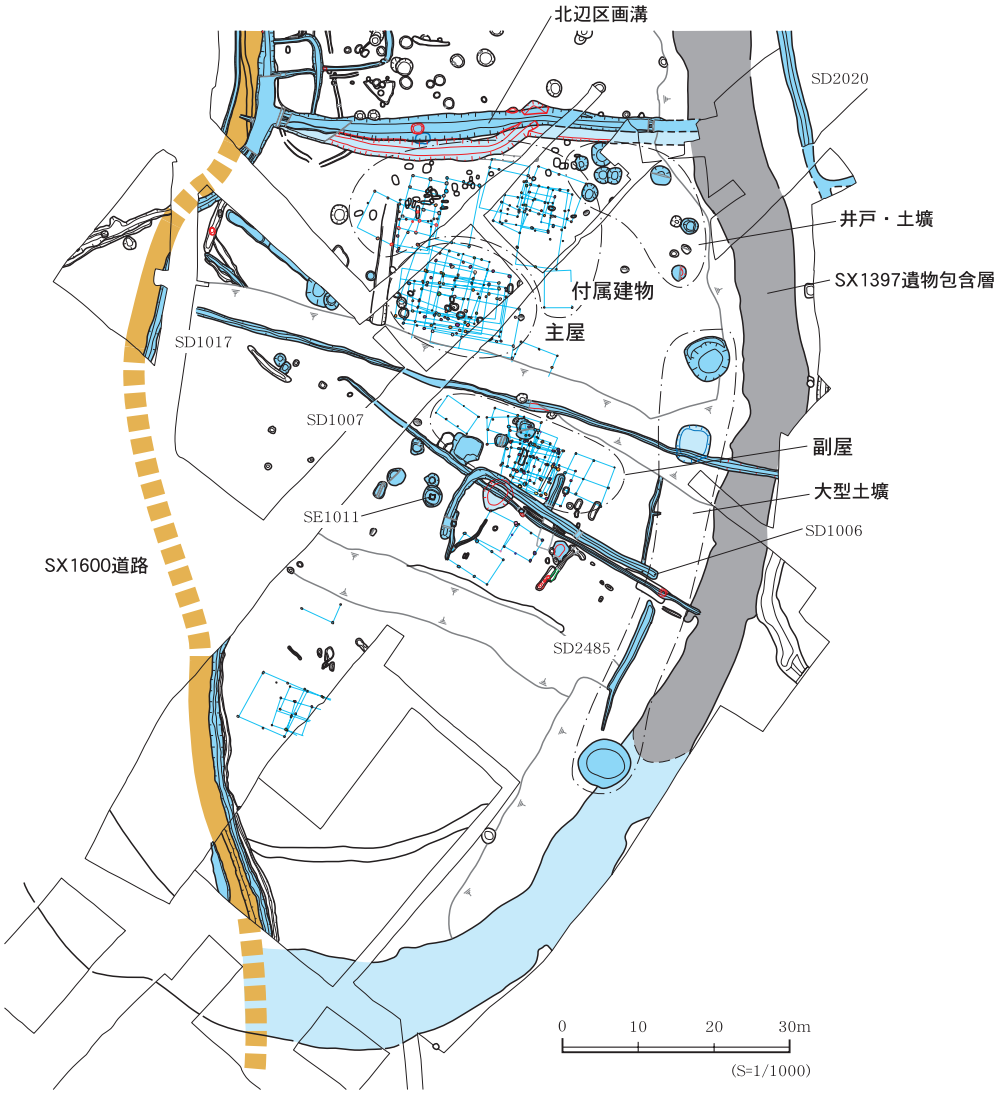
屋敷Ｉの建物は、屋敷Ｊの主屋と重複する３棟の南北棟（ＳＢ2034・2042・2044）が副屋となる可能性がある。主屋については屋敷北半部が削平されているため、失われたとみられる。また、ＳＤ1829北側の井戸跡７基（ＳＥ1453・1455・1457・1459・1461・1463・1464）、大型土壙ＳＫ1454は屋敷Ｉに属すとみられる。ＳＫ1454の年代は15世紀後半であり、第Ⅴ期の年代観の一端を示すと考えられる。

このほか、１群建物跡南の井戸跡４基（ＳＥ1825・1863・1897・1898）、大型土壙１基（ＳＫ2609）は屋敷Ｉもしくは屋敷Ｊに属すとみられる。

ー区画Ｇ・Ｇ’ー（図版247）

区画Ｇ・Ｇ’は、遺跡南部のＢ２区からＢ３区に位置する**第Ⅳ期**の屋敷跡である。東はＳＸ1397が形成された湿地跡、西はＳＸ1600南北道路跡に面し、北はＳＸ1397とＳＸ1600東側溝を結ぶＳＤ1500・1501・1572によって画されている。北辺の区画溝の幅は2.5m前後、深さは0.6～0.8mである。南は『Ⅱ』で部分的に確認したＳＤ1040で画されるとみたが、その後の調査で新知見が得られた。

ＳＤ1006は東西27.9m、南北10.9mのＬ字形をした溝跡で、東端の2.7m南には第Ⅳ期の遺構でＳＤ1006と同規模のＳＤ2485が南へ18.5m延びている。両者は南北方向がほぼ同じであることから同時期とみられる。その場合、ＳＤ2485は区画Ｇ・Ｇ’の南限とみたＳＤ1040のさらに南へ延びることとなる。また、ＳＤ2485の南には大型土壙のＳＫ2475が位置し、年代は14世紀中葉～後葉と考えられ、区画Ｇ・Ｇ’の屋敷の年代観（13～14世紀代）の中に収まる。したがって、区画Ｇ・Ｇ’の範囲は当初考えていたＳＤ1040ではなく、ＳＸ1600とＳＸ1397が形成された湿地跡の交点まで約55m南へ延びるとみられる。区画Ｇ・Ｇ’は南半部がすぼまる形をしており、規模は南北約108m、東西は北半部で60～75mである。



図版247　屋敷Ｇ・Ｇ′の構成

〈屋敷の構成〉６群建物跡は区画Ｇ・Ｇ’の内部に位置することから、屋敷Ｇ・Ｇ’を構成する建物群と考えられる。６ａ群は『Ⅱ』で報告したＢ２区南東部の建物群に属し、屋敷の副屋と考えられる。６ｂ群は６ａ群とＳＤ1006やＳＤ1007で画された南に位置し、うち２棟は内部に柱を持たない方形建物であることから、他と異なる性格が想定される。屋敷Ｇ・Ｇ’は、『Ⅱ』と市教委４次調査区、それに今回報告した部分を加えると、ほぼ全体について調査したことになる。以下、過去の調査成果を含めて屋敷Ｇ・Ｇ’の施設構成を概観する。

北半部の建物は中央北側に主屋、南東に副屋が配置される。主屋の南正面や南西は、建物が１棟のみで、井戸など他の遺構もまばらに分布することから広場的な空間と考えられる。主屋は東西棟が主体であり、他の建物に較べて大型で縁や廂をもつ傾向が認められる。これに対し、副屋は建物面積が20㎡以下の小型建物が多い。主屋北側の建物は厨や倉庫、納屋、作業小屋といった主屋に付属する建物と考えられる。これらの建物は、ほぼ同位置で建て替えを繰り返している。

今回新たに確認した６ｂ建物群は、副屋とＳＤ1006・1007で隔てられた南に位置し、うち２棟（ＳＢ2557・2558）は内部に柱を持たない方形建物である。前述したようにＳＤ1006・2485は同時期とみられ、６ｂ建物群は両者によって西・北・東の三方を囲まれた区域の西側に位置することとなる。３棟の建物のうち２棟が方形であることから、この区域は副屋とは別の機能を持った空間であると考えられる（註７）。

ＳＤ1017は主屋の南を東西に横断する溝跡で、方向はＥ10°～20°Ｓである。ＳＤ1007は副屋の前を東西に横断する溝跡で、方向はＥ30°～40°Ｓである。双方ともＳＸ1397より新しい。屋敷Ｇ・Ｇ’の建物は新しい時期に東への角度が大きくなることが指摘されている（『Ⅱ』）。また、ＳＤ1007は13世紀のＳＫ1008より新しく、14世紀前半のＳＤ1006とは新旧関係は古いが、方向はほぼ同じである。したがって、屋敷Ｇ・Ｇ’を細分する東西溝はＳＤ1017→ＳＤ1007へと変遷し、前者は主屋と副屋・広場、後者は主屋・副屋と広場とを隔てていたと考えられる。

井戸は広場や主屋の西、区画北東部に作られている。なかでも側を有し、構造的に他と異なる井戸（ＳＥ1011）が広場に設けられたことは、広場や前述した三方を溝で囲まれる空間の機能とかかわっていたと考えられる。ゴミ穴とみられる中・大型土壙は区画周縁部に位置するものが多い。さらに湿地跡からも焼土や灰・炭化物・植物遺体とともに遺物が多く出土することから、区画東縁部周辺はゴミ捨て場として長期間利用されていたと考えられる。

区画の南半部は、西端のＳＸ1600道路沿いに建物が４棟重複し、東端にゴミ穴とみられる大型土壙が１基認められるのみで、北半部に較べて遺構密度は非常に低い。こうした広い空閑地は、畑や馬場として利用されていた可能性が考えられる

屋敷の基本的な構成要素である建物・広場・井戸・ゴミ穴の配置状況は、第Ⅴ期の屋敷Ｂ・Ｂ’、第Ⅵ期の屋敷Ｃ・Ｅと同じである。したがって、屋敷内の場の使い方は、固定的であるとともに、中世をとおして変わらなかったといえる。

ｂ．その他の屋敷

ここでは、溝による空間形成が区画Ａ～Ｋほど明瞭でなかった区画について、規模や大別遺構期へ

の位置付けを行ったのち、屋敷の施設構成を検討する。

ー区画Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ・Ｐー（図版248・249）

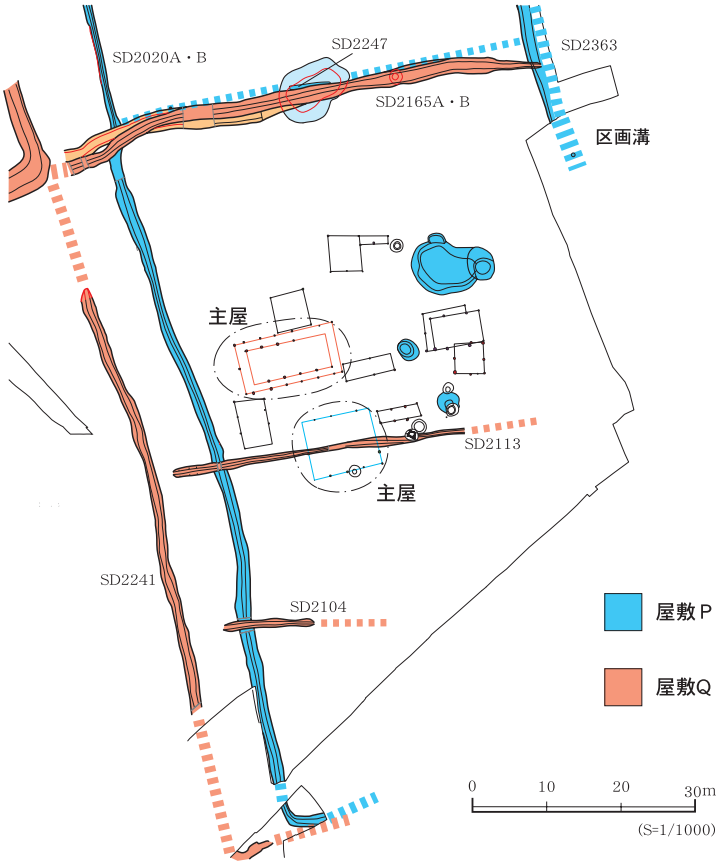
ＳＤ1495・2020は、ＳＸ1397が形成された湿地跡の東岸に沿って延びる南北溝跡で、検出総長は約260ｍである。上幅0.7～1.6ｍ、深さは0.6～0.7ｍあり、５区で３時期、Ｄ区で２時期の変遷が認められる。また、市教委５次調査区の成果からＳＤ1821溝跡と一連の遺構とみられ、東西長は70ｍ以上である。遺構の重複関係や出土遺物から**第Ⅲ～Ⅳ期**の遺構と考えられる。

図版247をみると、ＳＤ1495・2020の東にはＳＤ1821と同じ方向をとる東西溝跡を４条確認できる。北から**ＳＤ1485・1483**と**市教委２次調査区の溝跡・ＳＤ2247**である。これらはほぼ等間隔（41～44ｍ）で並んでおり、遺構の重複関係や出土遺物からみても第Ⅲ～Ⅳ期とみて矛盾はない。ＳＤ2020の南への延びは不明であるが、Ｄ区南端では東西溝跡のＳＤ2334が一連の遺構とみられる。また、Ｄ

図版248　屋敷Ｌ・Ｍ・Ｎの構成

区東端では同時期の遺構として幅が2.5m以上のＳＤ2363南北区画溝跡を検出している。したがって、第Ⅲ～Ⅳ期の遺跡東側は、ＳＸ1200・1397が形成された湿地跡の東岸に沿ってＳＤ1495・2020が南北に延び、５区北部とＤ南端で東へ折れて東端の南北区画溝ＳＤ2363に接続するとみられる。規模は南北約270m、東西がＤ区で約60mであり、５区は60～70mとみられる。

内部は４条の東西溝で５つに細分される。北の４区画はほぼ等間隔（南北41～45m）に分割されており、南端はそれらの２倍の広さ（南北約96m）をもつ。これらを北から**区画Ｌ・Ｍ・Ｎ・０・Ｐ**と呼称する。また、区画Ｌ・Ｍでは0.8～1.5m離れて併行する南北溝跡（ＳＤ1853・1854）を確認しており、検出総長はＳＤ1853が50.1m、ＳＤ1854は56.0mである。これらは第Ⅲ～Ⅳ期の道路側溝の可能性が考えられる。さらに、ＳＤ1854の南延長上にはＳＤ1776が認められ、両者が一連の遺構である可能性がある。その場合、推定道路跡は区画Ｎまで認められることになる。



図版249　屋敷Ｐ・Qの構成

次に区画Ｌ～Ｐの出土遺物をみてみると、北側の３区画（Ｌ～Ｎ）は常滑産陶器に較べて在地産陶器の出土が少なく、これに対して南の２区画（０・Ｐ）は、常滑産とともに在地産が安定して認められる。また、ＳＤ1495は３時期の変遷が認められるが、ＳＤ2020は２時期の変遷である。したがって、第Ⅲ期は北側の３区画が整備・利用され、13世紀以降、新たに南の２区画が付け足された可能性が考えられる。遺物包含層が第Ⅲ期は遺跡北部（ＳＸ1200）、第Ⅳ期は遺跡南部（ＳＸ1397）に形成されることもこうした考えを裏付けるものといえる（註８）。

〈屋敷の構成〉区画Ｌ～Ｐは第Ⅴ～Ⅶ期の遺構と重複しているため、内部施設の残りがよいのは区画Ｍである。**屋敷Ｍ**には２群建物跡が位置する。10棟の建物跡は南と北の２箇所に分かれ、前者は主屋とみられる南北棟建物跡（ＳＢ2056・2060）を含めて７棟が重複し、後者は２棟が重複する。上述した推定南北道路跡を屋敷の東限とみた場合、東西幅は43m前後となり、建物はほぼ中央の南北に位置する。これらの周辺には第Ⅲ～Ⅳ期の井戸跡（ＳＥ1769・1772・1789・1790・1890）や土壙（ＳＫ1761・1762・1773・1880・1883）が５基ずつ認められる。

屋敷Ｌには第Ⅲ～Ⅳ期のＳＤ1840・1845南北溝跡があり、これらは内部を細分する溝とみられる。

その場合、ＳＤ1495とＳＤ1840間は東西37～45ｍである。内部の施設は西半が屋敷に伴う遺構は認められない。東半は屋敷Ｊと重複するため、特定が困難である。

屋敷Ｐは他と較べて２倍の広さを有する。５ａ群建物跡はその内部に位置し、大型建物のＳＢ2440は出土遺物から第Ⅳ期であり、ある時期の主屋と考えられる。ＳＢ2440は区画中央西よりに位置し、その東から北側には第Ⅳ期の土壙が４基（ＳＫ2183・2185・2209・2213）認められる。周辺には５ａ群の８棟の建物跡が散在するが、屋敷Ｑと重複するため両者の識別はできなかった。

屋敷Ｐは、建物跡の重複がほとんどなく、同時期の屋敷Ｇ・Ｇ’のように主屋・副屋・付属建物がほぼ同位置で建て替えを繰り返し、その配置が固定的かつ継続的であったあり方とは明らかに異なる。屋敷Ｐと屋敷Ｇ・Ｇ’の間にはＳＸ1397遺物包含層が位置するが、遺物は西側（＝屋敷Ｇ・Ｇ’側）から多く出土している。両者を比較すると、屋敷Ｐは区画溝の規模が小さい、主屋の位置が片寄る、建物の建て替えが少ない、遺物の出土量が少ないという点が指摘でき、こうした違いは居住者の階層の違いを示すと考えられる。

屋敷Ｎ・Ｏは、後者の南東部で大型土壙（ＳＫ2300）が認められるほかは、屋敷Ｈ・Ｒと重複するため、内部施設の特定はできない。

ー区画Ｑー（図版249）

ＳＤ2165は東西溝跡で、検出長は約66ｍである。２時期（Ａ→Ｂ）の変遷があり、Ｂ期の上幅は1.6～2.0ｍ、深さは0.6ｍある。Ａ期は上幅や下幅はＢ期と同じとみられるが、深さは0.1ｍと浅い。ＳＤ2241はＳＸ1397が形成された湿地跡の中央部に設けられた南北溝跡で、検出総長は232.1ｍ、Ｂ２区北東部やＢ３区南東部では東へ分岐している。上幅は1.2～2.0ｍ、深さは0.6～0.9ｍある。両者は第Ⅳ期の遺構より新しく、第Ⅶ期より古い。

ここでＳＤ2165・2241をみると、前者を西へ、後者を北へ延ばすと屋敷Ｂの区画溝ＳＤ1650の南東コーナーに到ること、両者とも第Ⅳ期の遺構より新しいことから**第Ⅴ期**の遺構とみられる。ＳＤ2241はＢ２区北東部で東へ分岐しているため、北をＳＤ2165、西や南をＳＤ2241に囲まれ、北西コーナーは屋敷Ｂの南東隅と接する区画が考えられる。規模は東西66ｍ以上、南北は約96ｍあり、これを**区画Ｑ**と呼称する。区画Ｑは第Ⅳ期の区画Ｐとほぼ同位置で重複する。また、ＳＤ2104・2113東西溝跡は第Ⅳ期のＳＤ2020やＳＸ1397より新しいことから、区画Ｑを細分する溝の可能性がある。その場合、細分された小区画の南北長は北から46ｍ・21ｍ・29ｍほどとなる。

５ａ群建物跡は屋敷Ｑの内部に位置することから、屋敷Ｑを構成する施設と考えられる。なかでも大型建物のＳＢ2435はある時期の主屋の可能性がある。ＳＢ2435は屋敷Ｑの南北のほぼ中央にあるが、東西の中心からは西に片寄る。こうした主屋の占地は屋敷Ｐと共通する。周辺には５ａ群の７棟の建物跡が散在するが、主屋以外の建物については重複する屋敷Ｐの建物との識別ができなかった。屋敷Ｑは同時期の屋敷Ｂ・Ｂ’と比較すると、区画溝の規模が小さい、主屋の位置が片寄る、建物の建て替えが少ないという特徴が指摘できる。こうした状況は前代の屋敷Ｇ・Ｇ’と屋敷Ｐの関係と同じである。

ー区画Ｒー（図版245）

４群建物跡に属するＳＢ2412・2417は柱穴埋土から近世陶磁器が、ＳＢ2429は南西隅柱抜取穴から

完形の土師質土器灯明皿が出土しており、第Ⅶ期に位置付けられる。また、建物群の周辺に分布する遺構の大部分（井戸跡19基、土壙21基、溝跡４条）が第Ⅶ期のものであるため、４群建物跡は第Ⅶ期に位置付けられる。これらの遺構は、西が区画Ｆの東辺であるＳＤ1633、北は区画Ｈの南辺のＳＤ2301、東は第Ⅶ期のＳＤ2364区画溝跡で囲まれている。また、南は一部重複する遺構があるものの、ＳＤ2150・2195を側溝とする東西道路跡によって囲まれた区域に集中する。その規模は東西約63ｍ、南北30～41ｍあり、これを**区画Ｒ**と呼称する。

〈屋敷の構成〉４群には22棟の建物跡が存在し、北側の10棟（４ａ群）、南西の８棟（４ｂ群）と南東の４棟（４ｃ群）に細分できる。４ａ群では大型の３棟が重複せず、東西に並ぶ。他の７棟はこれら３棟の建物跡と重複するが、中・小型建物跡どうしの重複は２棟を除いて認められない。４ｂ・ｃ群は大型建物が４ｂ群に１棟認められ、これに次ぐ大型の建物は、ｂ群・ｃ群で１棟ずつ認められる。これら３棟は、細別建物群の中心建物と考えられる。４ｃ群は中心建物とその東の建物で１回ずつの建替えがみられ、２棟の組合わせによる２時期の変遷が考えられる。４ｂ群は、ＳＢ2424とほぼ同位置にある大型の４棟（ＳＢ2424～2427）とそれより小さな４棟が１棟ずつ組合う可能性が考えられる。したがって、３つに細分された建物群は、それぞれ大型の建物１棟と中・小型建物１～２棟がセットとなる組み合わせが考えられる。

なお、屋敷Ｒは第Ⅳ期の屋敷Ｏ・Ｐ、第Ⅴ期の屋敷Ｑと重複する。このため、４群建物跡のなかには屋敷Ｏ・Ｐ・Ｑに帰属するものがある可能性が考えられる。

屋敷Ｒは、敷地の制約から井戸や中・小型土壙の多くが建物に近接してつくられるが、５ａ群北側とＳＤ2301区画溝跡との間には認められない。こうした状況は幅３ｍの区画溝で囲まれた建物群とは様相が全く異なる。先に第Ⅶ期の区画溝を伴う屋敷について区画や溝の規模、建物の規模や配置、出土遺物の内容や量から階層性を指摘したが、屋敷Ｒの居住者は屋敷Ｋのさらに下層の階級と考えられる。

（４）黒漆二枚居木鞍について（図版250）

今回報告する遺物の中で特筆すべきものは、黒色漆塗りの鞍である。屋敷Ｇ・Ｇ’にともなうＳＸ1397遺物包含層の下層から出土した。東北地方における中世の鞍の出土例は、管見では岩手県志羅山遺跡74ＳＥ３井戸跡から出土した後輪と推定されるもの（12世紀後半）（岩手県埋蔵文化財センター2000）と山形県東屋敷遺跡ＫＹ１堀跡から出土した居木（15世紀後半～16世紀後半頃）（米沢市教育委員会1998）の２例を知り得たにすぎず、出土例はきわめて少ない。

狭義の鞍は、人が騎乗する部分の鞍橋（くらぼね）を指し、前後の板２枚（前輪（まえわ）・後輪（しずわ））とそれらを繋ぐ２枚もしくは４枚の板（居木（いぎ））で構成される。今回出土したのは逆Ｕ字形の前輪部分で、高さ28.0㎝、幅30.8㎝、厚さは1.7～4.0㎝ある。焼けて右の先端（爪先）付近が欠けており、漆は一部に残るのみとなっている。日本の鞍は、構造から唐鞍（からぐら）と和鞍（わぐら）に大別される（馬事文化財団1979）が、出土品は居木を装着する切り込み（切組（きりぐみ））が認められることから、和鞍に分類される。古代から中世の和鞍は、平安時代後期に出現した中世鞍とそれまでの古代鞍とに分けられ、その変遷過程は小松大秀氏によって

以下の３段階に整理されている（小松大秀1984・1990）[註９]。

Ａ段階）①前輪・後輪の周縁が覆輪状に造り出される

②前輪・後輪の内側が平滑に仕上げられる

③居木は四枚居木あるいは幅の広い二枚居木である

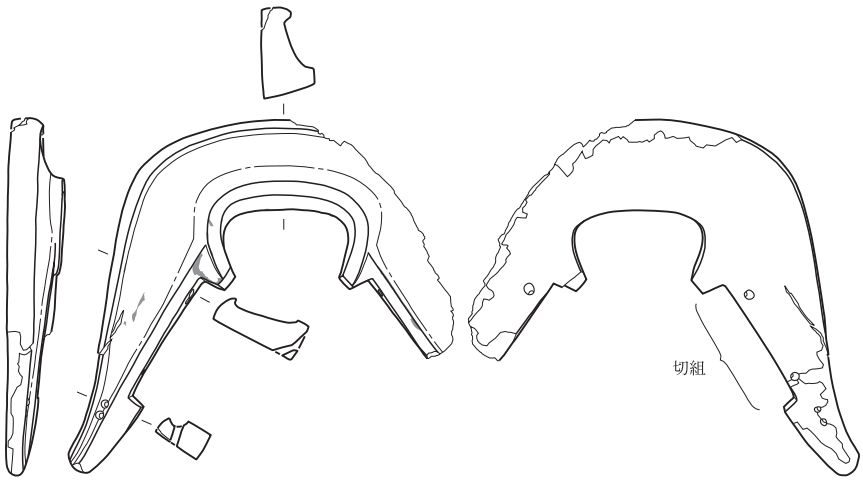
Ｂ段階）④前輪と後輪の周縁は、洲浜形・馬膚側（＝馬側）が厚く、山形側（＝外側）は薄く造られており、両者の境界は稜線で区切られる。前者は「磯」、後者は「海」と称し、海有鞍と呼ばれる

⑤前輪の肩に切り込み（手形）は認められない

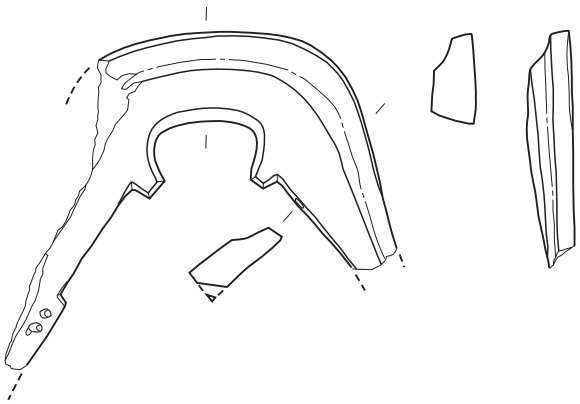
⑥居木は二枚居木である

Ｃ段階）⑦④と同じ

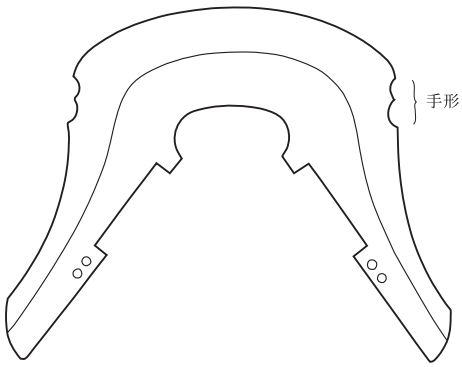
⑧前輪の両肩に手形が認められる



Ａ段階：古代鞍（中野高柳遺跡）



Ｂ段階：古代鞍と中世鞍の中間的様相（みやこ遺跡）



Ｃ段階：中世鞍（靖国神社所蔵品）

※みやこ遺跡は発掘調査報告書、靖国神社所蔵品は小松大秀 1984 の図を再トレース

図版250　鞍の変遷

③主要な装飾として螺鈿を用いる

Ａ段階の覆輪を持つ海無鞍は**古代鞍、Ｃ段階の手形を持つ海有鞍が中世鞍**の特徴とされ、Ｂ段階の手形のない海有鞍が両者の中間的な様相を示している。こうした視点で中野高柳の前輪をみると、周縁が隆帯状に造り出される（＝覆輪状に造り出される）、内側は平滑である、両肩に手形が認められない、居木は幅の広い**二枚居木**である、鞍（しおで）をとおす孔の位置が先端部（爪先）に近い、という特徴が指摘でき、出土品は古代鞍の特徴を持つといえる。小松分類のＤ類＝**黒漆二枚居木鞍**にあたる（小松大秀1984）。

実用品としての鞍は、馬の乗降時に山形を掴んで体を支えることから、大きな力がかかるため破損し易く、消耗品と考えられる。したがって製作年代と廃棄年代との間に大きな差はないとみられる。本遺跡から出土した鞍（前輪）の年代は、共伴する土器・陶磁器・漆椀から13世紀前半～中頃と考えられる。鞍の出土例は全国的にみても数がきわめて少ない。中野高柳遺跡から出土した鞍（前輪）は、伝世品を中心とした鞍の編年に具体的な年代を与える貴重な資料といえる[註10]。

Ｅ．中野高柳遺跡における遺構の変遷

これまでの発掘調査で検出された遺構を含め、中野高柳遺跡全体の遺構変遷について概要を述べる。遺跡は平安時代中頃の耕作地としての利用から始まり、同時代末期以降は近代にいたるまでほぼ継続的に集落が営まれる。集落は、同時期に機能した溝や道路等で囲まれた複数の屋敷で構成される。

【第Ⅰ期】（図版251）

基本層序第Ⅶ層上面で確認した遺構である。年代は10世紀前葉と考えられる。北部から中央部のＳＤ1100河川跡両岸の自然堤防は畑、外側の自然堤防縁辺から後背湿地は水田として利用されている。河川右岸はＳＦ1334・1593畑跡、左岸はＳＦ2401畑跡で、両者とも河川とコ字形に接続する溝で三方を区画されている。畝は河川や区画溝の際まで認められ、方向は河川の向きにほぼ直交する。耕作域はＳＦ1334・1593が東西16～32ｍ、南北約170ｍで、面積は約4,100㎡、ＳＦ2401は東西25～30ｍ、南北約297ｍで、面積は8,200㎡である。

次にＳＦ1334北側に目を向けてみたい。この区域は耕作痕が確認できなかったが、畑区画溝であるＳＤ1256は、北東コーナーから南へ折れるＳＤ1592のほかに西へ延びるＳＤ1257に分かれる。後者の西にはＳＤ1155南北水路が認められる。したがって、ＳＦ1334北側に東が河川、西と南はＳＤ1155・1257によって囲まれた区画が想定される。同じ場所は第Ⅱ期に畑（ＳＦ1303）として利用されていることを考えると、遺構は確認できなかったが、この場所に第Ⅰ期の畑が営まれた可能性がある。

水田は右岸がＳＦ1199、左岸はＳＦ1916で、自然堤防の縁辺部に設けた溝で画される。方向は前者が畑と同じで、後者は畑とは異なり、東へ傾斜する。水田１枚の規模はＳＦ1199が一辺6.0～7.5ｍ、ＳＦ1916が一辺12.0ｍ×7.3ｍ以上で、小さな区画に分割されている。

畑跡は、畝間の下層に灰白色火山灰の一次堆積が認められることから、灰白色火山灰の降灰で廃絶したと考えられる。ＳＦ2401南端の区画溝では、火山灰降下後の凹地から土器食器22個体が重なって出土（ＳＸ2030）しており、祭祀もしくは飲食儀礼に用いられた食器が、使用後置かれた跡と考えら

れる。一方、西側の水田跡は耕作土と火山灰層との間に間層が認められることから、火山灰の降下時に耕作を行っていなかったと考えられる。その後、第Ⅶ層の遺構は河川の氾濫によって埋没する（第Ⅴ層）。

図版251　第Ⅰ期の遺構

【第Ⅱ期】（図版252）

基本層序第Ⅴ層上面で確認した遺構である。年代は10世紀中葉と考えられる。北部から中央部のＳＤ1100河川跡右岸の自然堤防が畑（ＳＦ1303畑跡、ＳＦ1333畑跡）として利用され、左岸は自然堤防縁辺部でＳＦ1919畑跡が発見されている。ＳＦ1303・1333は第Ⅰ期と同じく区画溝が巡り、畝は河川や区画溝の際まで認められ、方向は河川の向きに直交する。一方、ＳＦ1919は畝の方向が河川とは直交せず、前代のＳＦ1916水田跡と同じである。耕作域の面積はＳＦ1303が東西53～55ｍ、南北約122ｍで、面積は6,600㎡以上、ＳＦ1333は東西約40ｍ、南北55ｍ以上で、面積は2,200㎡以上、ＳＦ1916は東西8.1ｍ、南北8.9ｍで、面積は72㎡以上である。

河川右岸のＳＦ1333は、第Ⅰ期のＳＦ1334と耕作域が重複する。その北のＳＦ1303も第Ⅰ期の耕作域と重複するとみられる。これに対し、左岸のＳＦ1919周辺は水田耕作域だったところであり、前代とは異なる土地の利用が行われた。ＳＦ1303はＳＤ1151東西溝跡によって南北に細分される。また、ＳＦ1303は広い畝間と狭い畝間が交互に認められ、他の畑とは異なる作物が栽培されていたと考えられる。

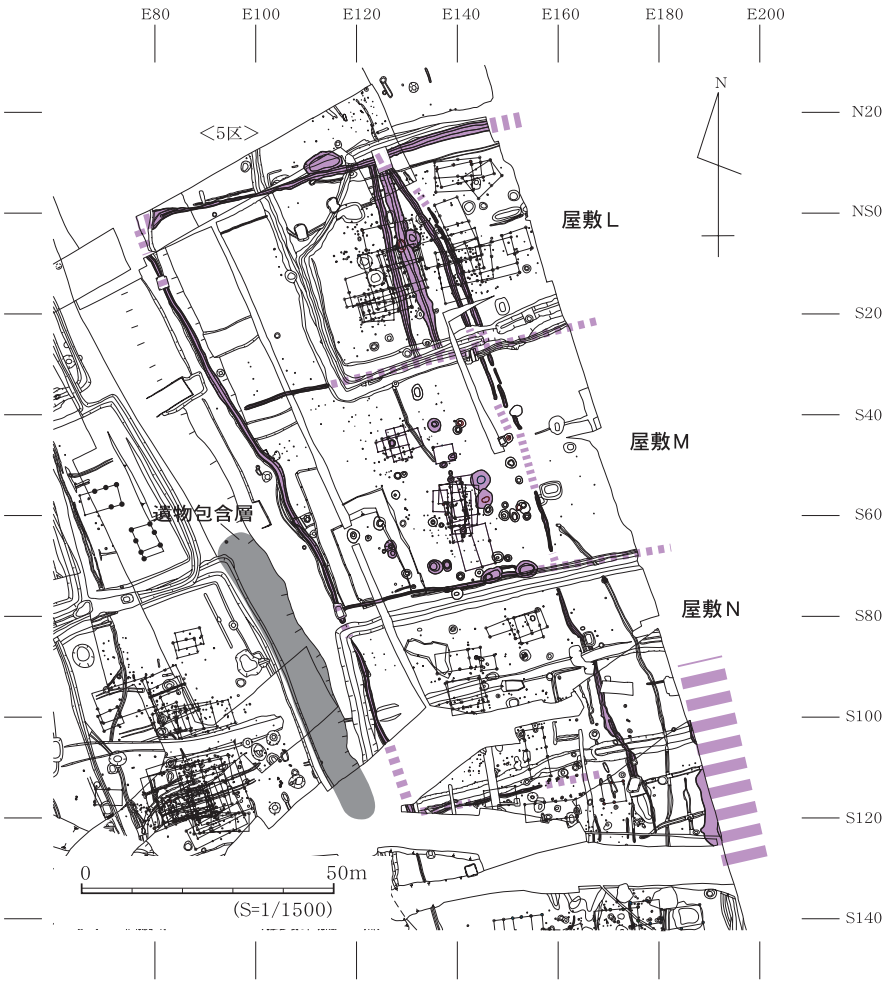
図版252　第Ⅱ期の遺構

ＳＦ1303・1333は河川側が壊され第Ⅳ層で覆われる。また、畑区画溝は河川や溝相互の接続部を中心に壊れた箇所が認められる。こうしたことから、第Ⅱ期の遺構は河川の氾濫によって埋没したと考えられる。とくに河川跡とＳＤ1151区画溝跡の接続部は大きく壊れ（ＳＸ1154）、第Ⅳ層堆積後の凹地から焼土や炭化物とともに土器が出土しており、祭祀もしくは飲食儀礼に使われた土器が廃棄されたものとみられる。

ＳＸ1154の出土土器は、ＳＸ2030と器形・調整技法に違いは認められない。したがって、第Ⅰ期の災害からは比較的早く復旧し、第Ⅱ期の遺構がつくられたが、再び起こった洪水で廃絶したと考えられる。

【第Ⅲ期】（図版253）

遺跡北東部に屋敷がつくられる。年代は12世紀と考えられ、第Ⅱ期の終末とは１世紀半以上のブランクがある。第Ⅲ期以降は遺跡内に様々な屋敷が構えられるようになり、古代とは土地利用のあり方が全く異なる。



図版253　第Ⅲ期の遺構

第Ⅰ～Ⅱ期の河川は、10世紀中葉の洪水によって埋没し、中央部分が湿地化する。湿地跡左岸北部には、幅１ｍほどの溝で画された屋敷Ｌ～Ｎがつくられる。全体の規模は南北約128ｍ、東西が70ｍ以上で、内部は東西溝によってほぼ等間隔（41～45ｍ）に分割される。それぞれの区画には建物・井戸・土壙などの施設が配置されたとみられ、湿地には遺物包含層（ＳＸ1200）が形成される。遺物包含層の花粉分析の結果によると、第Ⅲ期の屋敷の周りには森林と呼べるものはなく、数種類の樹木が点在する光景が復元されている。

屋敷内部や遺物包含層から出土した土器・陶磁器の構成は、当時の政治的・宗教的・経済的中心地であった平泉に特徴的に認められるものである。また、遺物包含層から出土した鉄地銅象嵌轡の製作技法は平泉と共通しており、同地で製作されたものと考えられる。したがって、屋敷の主は平泉藤原氏とかかわりを持った多賀国府の在庁官人クラスの有力者とみられる。

【第Ⅳ期】（図版254）

遺跡が最も整備された時期で、全体に遺構が認められる。年代は13～14世紀と考えられる。湿地右岸の南北に屋敷Ａ・Ｇがつくられ、両者は自然堤防西縁を南北に延びるＳＸ1600道路でつながる。

屋敷Ａ・Ｇは幅が３ｍほどの溝で区画されている。平面形や規模は前者が方形で東西55～61ｍ、南北59ｍ以上、後者は北半が方形で南はすぼまる形をしており、規模は南北約108ｍ、東西は北半で60～75ｍである。屋敷Ｇはほぼ全域を調査しており、内部の施設構成が具体的に検討できた。北半部は主屋を中心として前庭・副屋・北の付属建物といった建物や施設が配置され、区画の縁辺には井戸やゴミ穴とみられる大型土壙が分布する。このような主要施設の構成は、第Ⅴ期以降の屋敷にも継承されており、屋敷内の場の使われ方は、固定的かつ継続的であったと考えられる。また、副屋南の三方を溝で囲まれた一角には、内部に柱を持たない方形建物が認められることから、特別な空間であった可能性が考えられる。こうした屋敷北半部のあり方に対し南半部は施設密度が極端に低い。

一方、湿地左岸は前代につくられた屋敷Ｌ～Ｎの南に新たに０・Ｐが付設される。区画溝の幅は１ｍほどである。屋敷Ｐの建物は西に片寄り、全体に散在する。屋敷Ｇのように主屋・副屋・付属建物がほぼ同位置で建て替えを繰り返し、その配置が固定的かつ継続的であったあり方とは明らかに異なる。また、屋敷ＧとＰの間に位置する遺物包含層（ＳＸ1397）の出土傾向は、西側（＝屋敷Ｇ側）から多く出土している。両者の違いは居住者の階層の違いを示しており、湿地の西に有力者の屋敷、東はその家臣や従者などの住まいとみられる。こうした屋敷を取り巻く環境は、遺物包含層の花粉分析の結果によると、前代と同じく周囲には森林と呼べるものはなく、数種類の樹木が点在していた。

新たに付設された屋敷Ｏ・Ｐは、北のＬ～Ｎに較べて遺物の出土量が多く、常滑産陶器とともに在地産陶器が安定して認められる。なかでも南端の屋敷Ｐの敷地面積は他の２倍あることから、湿地東側の屋敷群の中では、有力者の屋敷に近い屋敷Ｐの居住者の階層が高いとみられる。これに対し、湿地西側の屋敷ＡとＧ、ＳＸ1600道路に囲まれた区域は、東側と地形的な条件は同じであるのに、明確な遺構は認められない。このことは、集落内部の空間利用に明確な規制があったことを示すと考えられる。畑や馬場として利用された可能性を考えておきたい。

図版254
第Ⅳ期の遺構

図版255　第Ｖ期の遺構

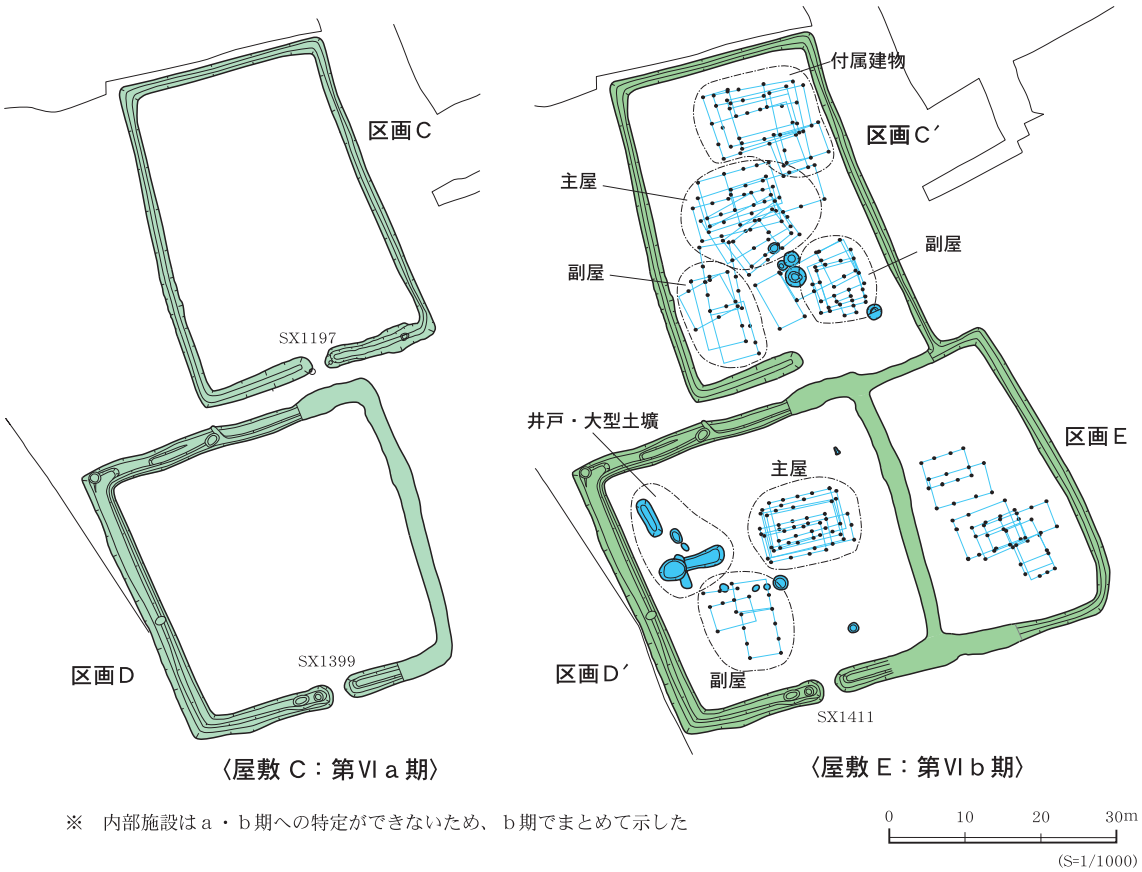
【第Ⅴ期】（図版255）

幅３ｍの溝で囲まれる有力者の屋敷は、遺跡西側中央部（屋敷Ｂ・Ｂ’）と北東部（屋敷Ｉ）で認められる。年代は15世紀～16世紀後半とみられる。屋敷Ｂ・Ｂ’の平面形は西辺の一部が西へ張り出す長方形で、規模は南北101～108ｍ、東西約43ｍである。中央に主屋、その北に付属建物が配され、周縁に井戸や大型土壙が分布しており、主要な施設の構成は屋敷Ｇ・Ｇ’とほぼ同じである。また、市教委１次調査区で中央に土橋をもつ東西溝跡が確認されている。位置からみて屋敷Ｂ・Ｂ’のある時期の南辺とみられ、第Ⅴ期から屋敷の南正面に土橋が採用されたと考えられる。屋敷Ｂ・Ｂ’の南東に位置する屋敷Ｑは、前代の屋敷Ｐとほぼ同位置、同規模で、建物は西に片寄り、全体に散在するといった傾向も同じである。

ＳＤ2241は屋敷Ｂ・Ｂ’の区画溝南東コーナーから南へ派生し、屋敷Ｑの西を画しつつさらに南へ延びている。区画溝の排水という機能とともに南に想定される水田への用水路としての機能を有していたと考えられる。また、屋敷Ｉは幅３ｍの区画溝が巡る屋敷として初めて遺跡東側につくられる。平面形は長方形で規模は東西45ｍ以上、南北81～85ｍで、屋敷Ｂ・Ｂ’より小さい。第Ⅴ期は遺跡中央部から北部に遺構は認められるが、遺跡南部に屋敷は営まれず、前代に較べて遺跡内の使う場所が縮小する。

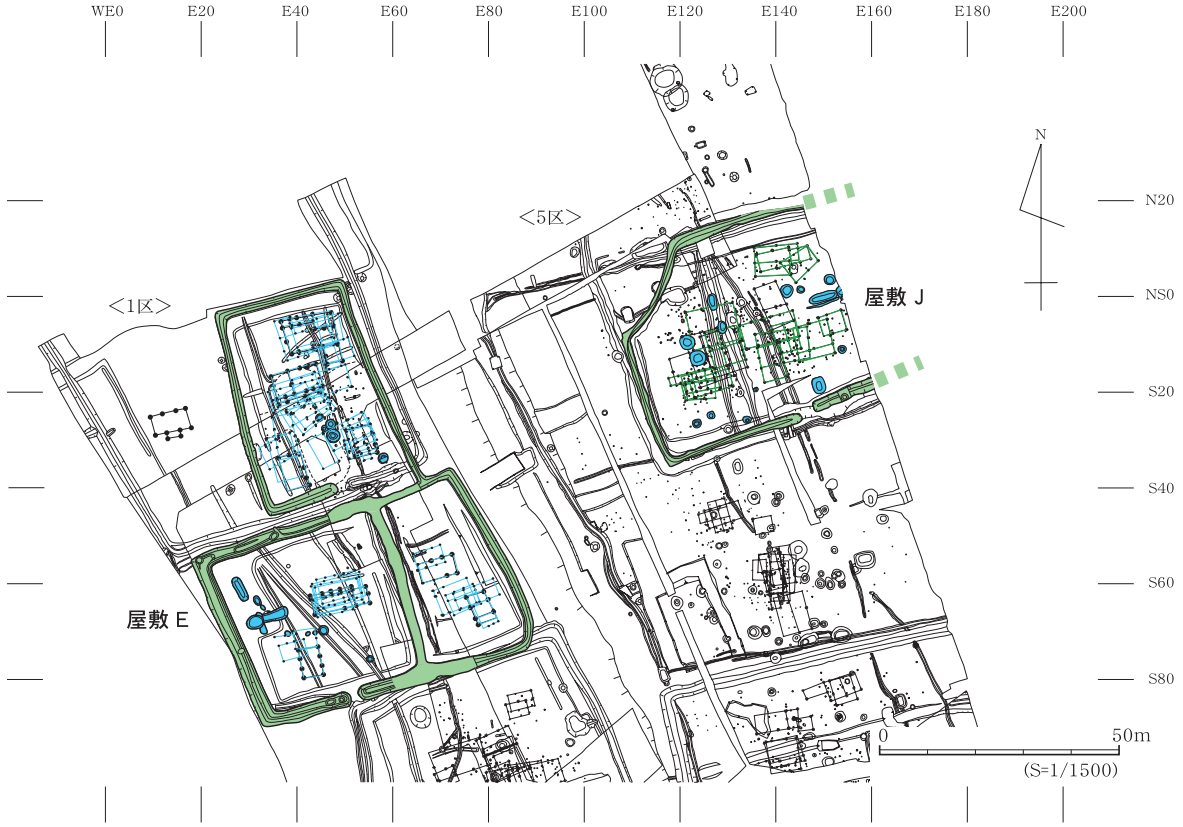
【第Ⅵ期】（図版256・257）

遺跡北部の東西に幅３ｍの溝で囲まれた屋敷が認められるのみで、遺跡内の空間利用が最も縮小する。西側は区画Ｃ・Ｄで構成される屋敷Ｃから新たに区画Ｅが付け足される屋敷Ｅに変遷する。東側



※　内部施設はａ・ｂ期への特定ができないため、ｂ期でまとめて示した

図版256　屋敷Ｃ・Ｅの構成



図版257　第Ⅵ期の遺構

は屋敷Ｊが営まれる。年代は出土遺物がきわめて少ないため、前後の遺構期の年代観から16世紀後半から17世紀前半とみられる。区画の規模や平面形は、Ｃが南北39～40ｍ、東西24～29ｍの長方形、Ｄは一辺が32～35ｍの方形、Ｅは南北35～38ｍ、東西16～21ｍの長方形、Ｊは南北39～41ｍ、東西45ｍ以上の方形で北西隅が内側に入り込む。

屋敷Ｃ・Ｅは、本遺跡で初めて複数の区画で構成されるが個々の規模が小さく、大きい方の屋敷Ｅでも一つの区画からなる第Ⅳ期の屋敷Ｇ・Ｇ’、第Ⅴ期の屋敷Ｂ・Ｂ’より小さい。また、屋敷Ｊは前代の屋敷Ｉの1/2以下に縮小している。こうした遺跡内の使用空間や屋敷の縮小、出土遺物がほとんどない点は、屋敷居住層の力が前代よりさらに縮小したことを示すと考えられる。

【第Ⅶ期】（図版258）

遺跡中央部の東西に幅３ｍの溝で囲まれた屋敷Ｆ・Ｆ’・Ｈ、南東部では幅１ｍの溝で囲まれた屋敷Ｋが認められる。また、Ｆ・Ｆ’の東には三方を区画溝、南を道路で囲まれた屋敷Ｒがあり、内部はさらに細分されるとみられる。年代は17世紀後半～19世紀である。屋敷の規模や平面形は、Ｆ・Ｆ’が南北約59ｍ、東西約48ｍの方形、Ｈは南北52～61ｍ、東西65ｍ以上の方形、Ｒが南北30～41ｍ、東西約63ｍの方形、Ｋが南北約26ｍ、東西39ｍ以上の方形である。

これらは屋敷や区画溝の規模、内部の建物構成とその重複状況、出土遺物に違いが認められ、屋敷Ｆ・Ｆ’→Ｈ→Ｋ→Ｒという階層性が指摘できる。屋敷Ｆ・Ｆ’の居住者は、出土遺物に高級品や奢侈品がきわめて少なく、日常雑器が主体を占めることから、有力農民層（豪農）とみられる。近世の

図版258　第Ⅶ期の遺構

農民は経営規模に階層性があることが指摘されており、前述した屋敷の階層性はこれを反映したものと考えられる。仙台藩領の近世農村の代表的な光景は、居久根林に包まれた大きな農家であるが、幅の広い溝で囲まれた屋敷Ｆ・Ｆ’・Ｈはこうした居久根林を持つ農家と考えられる。また、細分された屋敷Ｒは有力農民に隷属した名子や水呑の屋敷、もしくは借家とみられる。

第Ⅶ期の屋敷は、これら以外に遺跡北東部や南部でも認められ、南端では四面に廂もしくは縁を持つ東西棟の南に井戸、北に墓が検出されている（屋敷Ｔ）。第Ⅶ期は北西部を除いた区域で遺構が認められるが、継続して使われたのは中央部の屋敷Ｆと屋敷Ｒである。

以上、中野高柳遺跡で発見された遺構について概略を述べた。本遺跡の発掘は仙台市教育委員会の分を含めると11年にわたり、その結果、遺跡の約91％が調査されたことになった。

遺跡の利用は平安時代中頃に始まる。この時期は遺跡の北部から中央部に畑や水田が営まれた。畑の面積は、第Ⅰ期が12,300㎡以上、第Ⅱ期は8,900㎡以上あり、一般集落に伴う畑と考えるには規模が大きすぎる。また、両時期とも耕作を行った人々の居住域が確認できず、周辺でも同時期の遺跡は

確認されていない[註11]。このことから、本遺跡の畑は大規模な農地経営にかかわるものの可能性が想定されよう。

平安時代末期以降はほぼ継続して集落が営まれ、各時期の集落の空間構成＝有力者とその家臣・従者といった人々の屋敷から成る集合体について、ある程度具体的に提示できたのが最大の成果といえる。屋敷は、居住者の階層によって規模や区画溝の大きさ、建物構成と建替えの回数、出土遺物の量や内容に違いが認められた。遺物では宮城県内でも出土例が少ない第Ⅲ期～第Ⅳ期（12世紀～14世紀）が注目される。遺物包含層を中心に土器・陶磁器・漆器・木製品・金属製品・石製品が出土しており、花粉分析、植物遺体や木製品の樹種同定も行ったことから、屋敷を取り巻く環境を含め当時の生活を復元する上で貴重な資料が得られた。

（註１）ＳＸ1397から出土した胎土が白い手づくねかわらけは、湿地の上流に位置する12世紀代のＳＸ1200（『Ⅲ』）からの流れ込みと考えられる。

（註２）北陸地方の漆器編年では、Ｖ－２期（12世紀後半代）の漆椀は、従来の体部の開きが大きなタイプに加えて、身が内彎する漆椀らしい新タイプが共伴すると指摘されている（四柳嘉章1997）。

（註３）建物群は位置のまとまりから設定したもので、建物配置や出土遺物から同時代と認定可能な例は少ない。しかし、建物の方向に大きな違いは認められなかったことから、個々の建物群はある程度の時間幅（＝大別遺構期）におさまるものと仮定して論を進める。

（註４）建物の面積の算定にあたっては、発掘調査で知られた建物跡の最も外側の柱列をつなぐ平面形の面積を計測した。また、60㎡未満の建物は明瞭な境界が認められなかったため、中・小型建物跡と一括する。

（註５）区画の規模は溝の内法で計測した。内部の施設は年代が特定できる遺構が少ないため、出土遺物等から明らかに別時期と判断できるものを外した残りについては、基本的に施設が位置する区画に属すると考えた。屋敷の構成はこうした条件の下に検討した結果である。

（註６）区画Ｊは南辺に土橋を有するが、中野高柳遺跡で土橋をもつ屋敷跡は第Ｖ期～第Ⅵ期に認められる。

（註７）６ｂ建物群が建つ場所は、溝によって副屋とは画されており、建物は３棟中２棟が内部に柱のない方形建物であることから、他と異なる空間として認識されていたと考えられる。玉井哲雄氏は、絵巻物や発掘調査の事例から中世武士の館内に持仏堂的な建物があった可能性は大きいと指摘している（玉井哲雄1996）。６ｂ建物群の性格は持仏堂であった可能性も考慮しておきたい。

（註８）12世紀前半の底部穿孔ロクロかわらけ椀が２枚重なった状況で出土したＳＸ1405（『Ⅲ』）は、ＳＸ1200の東岸で検出されている。こうした点も第Ⅲ期の屋敷が遺跡北東部にあったことを示唆する。

（註９）段階の呼称は、筆者が便宜的に設けた。

（註10）Ｂ段階の出土例としては、佐賀県武雄市みやこ遺跡ＳＥ104井戸跡出土品（武雄市教育委員会1986）が知られている。年代は、共伴遺物からみて下限が平安時代末期と考えられている（小松大秀1990）。Ａ段階の中野高柳例が13世紀前半～中頃、Ｂ段階のみやこ例が平安末期であることから、古代鞍から中世鞍への移行は、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて漸移的に行われたと考えられる。

（註11）平安時代中頃に起きた２度の洪水によって旧地形が埋没・改変されたため、周辺の集落（遺跡）が認識できていない可能性は考えられる。

〈引用・参考文献〉　（著者別、五十音順）

秋田県教育委員会（2000）『洲崎遺跡』　秋田県文化財調査報告書第303集

飯村均（1996）「平泉から鎌倉へ－出土かわらけからみえる東国－」（財）サントリー文化財団研究助成報告書　pp.～

飯村均（1997）「中世食器の地域性－東北南部－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　pp.58～76

飯村均（1998）「東国のかわらけ」『中近世土器の基礎研究』XⅢ　日本中世土器研究会　pp.13～26

飯村均（2002）「中世奥州の村」『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書４　高志書院　pp.159～178

飯村均（2004）「土器から見た中世の成立」『中世の系譜』考古学と中世史研究１　高志書院　pp.169～178

石黒伸一朗（1988）「仙台市東光寺出土の板碑と七北田川下流の板碑概説」『東光寺遺跡　第１・２次調査』　仙台市文化財調査報告書第112集　pp.110～137

和泉匡剛（1991）「多賀城市内の供養碑」『多賀城市史　４　考古資料』　pp.655～694

伊藤一義（2000）「鎌倉の御家人たち」『仙台市史　通史編２－古代中世－』　仙台市史編さん委員会　pp.214～236

入間田宣夫・大石直正編（1992）『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』　平凡社

入間田宣夫・本澤慎輔編（2002）『平泉の世界』奥羽史研究叢書３　高志書院

岩手県埋蔵文化財調査センター（1995）『柳之御所跡第21・23・28・31・36・41次発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集

岩手県埋蔵文化財調査センター（2000）『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集

宇野隆夫（1989）『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』　真陽社

宇野隆夫（1997）「中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　pp.377～428

馬の博物館（1990）『日本の漆芸　鞍と鐙』

馬の博物館（2004）『馬と人を結ぶもの　―鞍の世界―』

及川司（1998）「岩手県における11～19世紀の土器－かわらけを中心として－」『東北地方の在地土器・陶磁器Ⅱ』　東北中世考古学会・福島県考古学会　pp.65～69

及川司・杉沢昭太郎（2003）「陸奥北部１－岩手県－」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会　pp.37～48

大石直正（1992）「みちのくの都の中世」「くらしを支える市場」『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』　平凡社　pp.28～37、99～107

大石直正（1995）「平泉と多賀国府」『中世都市研究』第２号　中世都市研究会　pp.73～102

大石直正（1998）「仙台市の板碑」『仙台市史　特別編５－板碑－』　仙台市史編さん委員会　pp.494～505

大石直正（2000）「深まる動乱」『仙台市史　通史編２－古代中世－』　仙台市史編さん委員会　pp.354～375

岡田清一（2000）「村と市と在家」「板碑のこころ」『仙台市史　通史編２－古代中世－』　仙台市史編さん委員会　pp.237～257、263～270

小野正敏編（2001）『図解・日本の中世遺跡』　東京大学出版会

小野正敏（2004）「中世武士の館、その建物系譜と景観」『中世の系譜』考古学と中世史研究１　高志書院　pp.179～206

川俣町教育委員会（2002）『河股城跡』　川俣町文化財調査報告書第19集

久保智康（2000）「鴛鴦文銅象嵌鏡轡について」『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集　pp.413～422

久保智康（2002）『飾金具』日本の美術第437号　至文堂

熊谷公男（2000）「公民と蝦夷」『仙台市史通史編２―古代中世―』　仙台市史編さん委員会　pp.112～138

古代学協會（1984）『法住寺殿跡』　平安京跡研究調査報告第13輯

小松大秀（1984）「日本の鞍」『東京国立博物館紀要』第19号　東京国立博物館　pp.81～168

小松大秀（1990）「日本の中世鞍」『日本馬具大鑑』第２巻中世　日本馬具大鑑編集委員会　pp.１～23

近藤好和（1994）「乗馬と鞍」『歴史を読みなおす８　武士とは何だろうか』　日本の歴史別冊　朝日新聞社　pp.31～33

斎藤利男（1992）「多賀国府の都市プラン」『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』　平凡社　pp.44～62

佐藤洋（2003）「陸奥南部２－宮城県－」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会　高志書院　pp.29～36

佐藤正人（1992）「東光寺墓所・町場の板碑」『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』　平凡社　pp.130～161

柴垣勇夫ほか（2004）『東海地方山茶碗研究の現在と課題』　文部科学省科学研究費・特定領域研究（２）「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」班

白鳥良一（2003）「多賀城から中世多賀国府へ」『白い国の詩』平成15年11月号（通巻567号）　pp.４～13

白根靖大（2000）「荘園と公領」『仙台市史　通史編２－古代中世－』　仙台市史編さん委員会　pp.176～187

末崎真澄（1999）「馬具から見る馬」『研究紀要』第12号　馬の博物館

関根達人（1998）「木製品・漆器」『東北大学埋蔵文化財調査年報９』　東北大学埋蔵文化財調査研究センター　pp.208～231

関根達人（2000）「陶磁器・土器の検討」『東北大学埋蔵文化財調査年報13』　東北大学埋蔵文化財調査研究センター　pp.169～178

瀬戸市埋蔵文化財センター（2002）『江戸時代の瀬戸窯』

仙台市教育委員会（2000）『王ノ壇遺跡』　仙台市文化財調査報告書第249集

仙台市史編さん委員会編（1998）『仙台市史　特別編５－板碑－』　仙台市

仙台市史編さん委員会編（2000）『仙台市史　通史編２－古代中世－』　仙台市

多賀城市教育委員会（1990）『新田遺跡　第４・11次調査』　多賀城市文化財調査報告書第23集

多賀城市教育委員会（1991）『山王遺跡　―第９次調査報告書―』　多賀城市文化財調査報告書第26集

多賀城市教育委員会（1995）『高崎遺跡　―第11次調査報告書―』　多賀城市文化財調査報告書第37集
武雄市教育委員会（1986）「みやこ遺跡」『みやこ遺跡』　武雄市文化財調査報告書第15集　pp. 73～240
太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』　太宰府市の文化財第49集
高桑登（2003A）「奥羽南半における「伊達氏系遺物」の分布について」『研究紀要』創刊号　山形県埋蔵文化財調査センター　pp. 136～145
高桑登（2003B）「東北」『中世土器研究の今日的課題－土器研究と中世史研究－』　日本中世土器研究会　pp. ５～18
高桑弘美（2003）「瓦質土器」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会編　高志書院　pp. 95～110
高橋博志（2002）「陶器生産と陶磁器流通」『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書４　高志書院　pp. 228～249
田中則和（1992）「川沿いの屋敷群」「丘の上の世界」『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』
平凡社　pp. 93～98、145～161
田中則和（1995）「仙台市域の中世城館・集落跡」『中世都市研究』第２号　中世都市研究会　pp. 32～48
田中則和（2000ａ）「屋敷と路の跡から探る中世」「戦国期のまちとくらし」『仙台市史　通史編２－古代中世－』　仙台市史編さん委員会　pp. 271～282
田中則和（2002）「陸奥国「国府域」の考古学的様相」『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書４　高志書院
pp. 50～77
玉井哲雄（1996）「武家住宅」『絵巻物の建築を読む』　東京大学出版会　pp. 77～104
千葉孝弥（1992）「武士の屋敷の発見」『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』　平凡社　pp. 66～92
千葉孝弥（1995）「多賀城から府中へ」『中世都市研究』第２号　中世都市研究会　pp. 13～31
千葉孝弥（1997）「考古学からみた中世の多賀城」『多賀城市史１－原始・古代・中世－』　pp. 549～591
築館町教育委員会（1993）『伊治城跡-平成４年度発掘調査報告書-』　築館町文化財調査報告書第６集
東北学院大学中世史研究会編（1994）『中世陸奥国府の研究』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター（2000）『東北大学埋蔵文化財調査年報13』
東北中世考古学会編（1998）『東北地方の在地土器・陶磁器Ⅱ』
東北中世考古学会編（2001）『掘立と竪穴－中世遺構論の課題－』　高志書院
中井さやか（1992）「近世の漆椀について」『江戸の食文化』　江戸遺跡研究会編　吉川弘文館　pp. 180～204
仲田茂司（1999）「東国中世の漆器」『考古学研究』第46巻第１号　考古学研究会　pp. 72～90
中野晴久（1994）「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所　pp. ７～181
中野晴久（1997）「瓷器系中世陶器の生産」『研究紀要』第５輯　瀬戸市埋蔵文化財センター　pp. ７～24
永原慶二編（1995）『常滑焼と中世社会』　小学館
日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会編（2001）『都市・平泉－成立とその構成－』　日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
日本中央競馬会（1990）『日本馬具大鑑』第３巻中世　日本馬具大鑑編集委員会
日本中央競馬会（1991）『日本馬具大鑑』第２巻古代下　日本馬具大鑑編集委員会
日本中世土器研究会編（2003）『中世土器研究の今日的課題－土器研究と中世史研究－』
根津美術館学芸部（1996）『甦る鎌倉－遺跡発掘の成果と伝世の名品』　根津美術館
野中奈津子・松本秀明（2004）「阿武隈川下流沖積低地に発達する自然堤防－旧河道地形の形成時期と形成環境」『日本地理学会発表要旨集』65　pp. 216
羽柴直人（2001）「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』第13号　岩手考古学会　pp. 41～62
羽柴直人（2003）「平泉におけるかわらけの用途と機能」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会　pp. 289～302
馬事文化財団（1979）『日本の鞍』
兵庫埋蔵銭調査会（1994）『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
平泉文化研究会編（1992）『奥州藤原氏と柳之御所跡』　吉川弘文館
平泉町文化財センター編（2000）『常設展示図録』　柳之御所資料館
平田禎文（2003）「陸奥南部１－福島県－」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会　pp. 17～28
福島県考古学会中近世部会編（1996）「かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀－（その１）」『福島考古』第37号　pp. 65～85
福島県考古学会中近世部会編（1997）「かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀－（その２）」『福島考古』第38号　pp. 67～85
福島県考古学会中近世部会編（2000）『東北地方南部における中近世集落の諸問題－掘立柱建物跡を中心として－』
藤澤良祐（1996）「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集　瀬戸市教育委員会・瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐（1997）「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第５輯　瀬戸市埋蔵文化財センター　pp. 43～58
藤澤良祐（1997）「中・近世瀬戸焼の編年」『東北地方の在地土器・陶磁器Ⅰ』　東北中世考古学会
藤沼邦彦（1991）「東北地方出土の常滑焼・渥美焼について」『知多半島の歴史と現在』№.３　校倉書房　pp. 29～56
藤沼邦彦（1992）「石巻市水沼窯跡の再検討と平泉藤原氏」『石巻の歴史』第６巻　特別史編　pp. 364～419
北陸中世考古学研究会（2001）『中世北陸の井戸』
堀江格（2003）「岸窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会編　高志書院　pp. 255～266
松本建速（1993）「柳之御所跡出土かわらけ編年試案」『紀要』ⅩⅢ　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　pp. 53～60
松本建速（1994）「ロクロかわらけと手づくねかわらけ」『岩手考古学』第６号　岩手県考古学会　pp. 23～44

松本建速（1995）「平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較」『紀要』ＸＶ　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　pp.72～82
松本建速（1996）「絵巻物に見る器とその解釈」『物質文化』第60号　pp.46～59
松本建速（2002）「かわらけは語るー平泉の宴ー」『白い国の詩』平成14年４月号（通巻548号）　pp.４～11
松本秀明（1984）「海岸平野に見られる浜堤列と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』57　pp.720～738
松本秀明・伊藤晶文（1998）「宮城県沖積平野に於ける後氷期の海面変動」『日本地理学会発表要旨集』53　pp.392～393
松本秀明・野中奈津子（2005）「仙台平野北部，七北田川下流域に発達する自然堤防地形の形成年代と潟湖埋積過程」『日本地理学会発表要旨集』67　pp.233
馬淵和雄（1997）「中世食器の地域性ー鎌倉ー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　pp.311～330
宮城県教育委員会（1990）「花山寺跡」『大貫館山館跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第137集　pp.127～148
宮城県教育委員会（1995）『山王遺跡Ⅱ　ー多賀前地区遺構編ー』　宮城県文化財調査報告書第167集
宮城県教育委員会（1998Ａ）『山王遺跡町地区の調査』　宮城県文化財調査報告書第175集
宮城県教育委員会（1998Ｂ）『一本柳遺跡Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第178集
宮城県教育委員会（1999）『発掘ダイジェストー山王・市川橋遺跡ー』
宮城県教育委員会（2001）『一本柳遺跡Ⅱ』　宮城県文化財調査報告書第185集
宮城県教育委員会（2003）『中野高柳遺跡Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第194集
宮城県教育委員会（2004）『中野高柳遺跡Ⅱ』　宮城県文化財調査報告書第197集
宮城県教育委員会（2005）『中野高柳遺跡Ⅲ』　宮城県文化財調査報告書第201集
宮城県多賀城跡調査研究所（1982）『多賀城跡　ー政庁跡本文編ー』
宮城県多賀城跡調査研究所（1988）「第50次調査」『年報1987』　pp.３～47
村田晃一・吉野武（2002）「中野高柳遺跡」『木簡研究』第24号　pp.76～77
村田晃一（2004）「中野高柳遺跡の中世道路跡と屋敷跡」『中世みちの研究会第７回研究集会』資料　pp.39～54
村田晃一・吉野武「竹ノ内遺跡」『木簡研究』第26号　pp.140・141
村田晃一（2005）「沖積地の遺跡と自然災害　―仙台市中野高柳遺跡の例―」『七北田川下流域　陸奥国府多賀城周辺の人類遺跡と地表環境の変化』資料　東北地理学会一般公開シンポジウム2005
八重樫忠郎（1994）「常滑・渥美窯産甕の12世紀後半における変化ー国産陶器一括廃棄事例からー」『岩手考古学』第６号　pp.34～44
八重樫忠郎（2001）「東北における中世初期陶磁器の分布」『都市・平泉ー成立とその構成ー』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集　pp.67～76
八重樫忠郎（2002）「平泉藤原氏の支配領域」『平泉の世界』奥羽史研究叢書３　高志書院　pp.112～126
八重樫忠郎（2003）「奥羽における輸入陶磁器の受容」『中世奥羽の土器・陶磁器』　東北中世考古学会　高志書院　pp.269～278
柳原敏昭・飯村均編（2002）『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書４　高志書院
山形県埋蔵文化財調査センター（1997）『荒川２遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査センター調査報告書第43集
山形県埋蔵文化財調査センター（1999）『米沢城跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査センター調査報告書第66集
山形市史編さん委員会編（1968）『山形市史別巻１　嶋遺跡』
吉岡康暢（1994）『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
四柳嘉章（1995ｂ）「漆器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会　pp.522～538
四柳嘉章（1997ｂ）「北陸の漆器考古学」『北陸の漆器考古学ー中世とその前後ー』第１分冊　北陸中世土器研究会　pp.１～41
米沢市教育委員会（1998）『東屋敷館跡』　米沢市埋蔵文化財調査報告書第58集
Saito, Y., Matsumoto, E. and Kashima, K.(1989) : Sea level of the Last Graciation Maximum based on in-place sediments on the shelf off Sendai, Northeast Japan. 「第四紀研究」28　pp.111～119.

第Ⅳ章　竹ノ内遺跡（たけのうちいせき）

SD12区画溝跡出土木簡

目　次

Ａ．遺跡の概要と調査の方法・経過……315
Ｂ．発見した遺構と遺物
（１）古代……316
（２）近世……318
Ｃ．まとめ……330

調　査　要　項

遺跡名　：竹ノ内遺跡（宮城県遺跡登録番号　01152）
遺跡記号：ＲＢ
所在地　：宮城県仙台市蒲生字竹ノ内地内
発掘対象面積：11,600㎡
発掘面積：1,850㎡
調査期間：平成15年８月４日～10月14日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調査員　：村田晃一

Ａ．遺跡の概要と調査の方法・経過

１．概要

竹ノ内遺跡は仙台平野の北東部にあり、標高２ｍの浜堤に立地する。遺跡の南0.7ｍを七北田川が東へ流れ、約２㎞で河口に至る。遺跡は東西に細長く、規模は最も広い部分で南北約80ｍ、東西約190ｍあり、面積は約11,600㎡である。

２．調査の方法

測量原点（第Ｘ系国家座標　Ｘ＝－192,633,000　Ｙ＝13,829,000）は、遺跡のほぼ中央に位置し、それをもとに東西・南北に基準線を延長して調査区全域に３ｍ方眼を設定した。方向は真北を基準とし、グリッドの呼称は原点からの東西・南北方向の距離で表した（図版１）。

検出した遺構の実測図は、平面図がトータルステーションを用いてパソコンの画面で描画を行い、断面図は従来通り縮尺1/20で実測図を作成した。遺構写真は通常６×７㎝モノクロフィルムとデジタルカメラで撮影し、重要度が高いものについては６×７㎝カラーリバーサルフィルムを用いた。

３．調査の経過

本遺跡は平成13年度の確認調査により、堆積土に灰白色火山灰が認められる古代の東西溝跡（ＳＤ１溝跡）と柱穴跡、土壙、溝跡などが確認された。また、柱穴跡や土壙、溝跡は古代の溝跡より新しく、出土遺物のほとんどが近世陶磁器であったことから、遺構の主体は近世以降であると予想された。

平成15年度の発掘調査は、前回の未調査部分について確認調査を実施し、遺跡全体の内容を把握することを目的とした。トレンチは、移転の完了していない神社の東に８本（面積：約860㎡）、西に２本（面積：770㎡）を設定した。８月４日から重機で表土剥ぎを行い、21日からトレンチ内の遺構確認作業を行った。その結果、中世以前の遺構はＳＤ１溝跡を除いて認められず、ＳＤ１についても遺跡を東西に横断して遺跡外へと延びること、上幅が一定せず、断面形が浅い皿形であることから自然流路の可能性が高いと考えられた。こうした成果を受け、県文化財保護課で竹ノ内遺跡の取り扱いについて協議を行ったところ、本遺跡の発掘調査はＳＤ１がトレンチで検出した部分についてのみ精査を行い、他の遺構は確認に止めることとなった。

９月30日からは、神社部分（面積：220㎡）の表土剥ぎと遺構確認を行ったが、遺構の内容は他と同じであった。本遺跡は、浜堤上に立地するため地山や遺構の堆積土が柔らかく、また、発掘中は雨に祟られることが多かった。このため、遺構堆積土を予定より深く下げるケースがあり、遺物の多くはこうした作業によって出土した。10月１日からは、トータルステーションによって遺構平面図を作成し、14日に発掘調査を終了した。

Ｂ．発見した遺構と遺物

竹ノ内遺跡の発掘調査は、遺跡全体の遺構の把握を目的として10本のトレンチを設定した。これらは、西から１・２……10トレンチと呼称する（図版１）。調査の結果、古代の東西溝跡と柱穴跡、土壙、溝跡などを確認した。遺構は遺跡西側の神社付近に多く認められ、東へ行くほど密度が希薄となる。南東部の10トレンチは、現代の撹乱が最もひどかったこともあり、遺構は確認できなかった。こ

図版１　遺跡の範囲とトレンチの位置

れらのほとんどは近世以降であり、遺構が集中する神社付近には、幅４ｍ前後の溝で囲まれた屋敷跡が存在したことがわかった。

（１）古代

【ＳＤ１溝跡】（図版１～５）

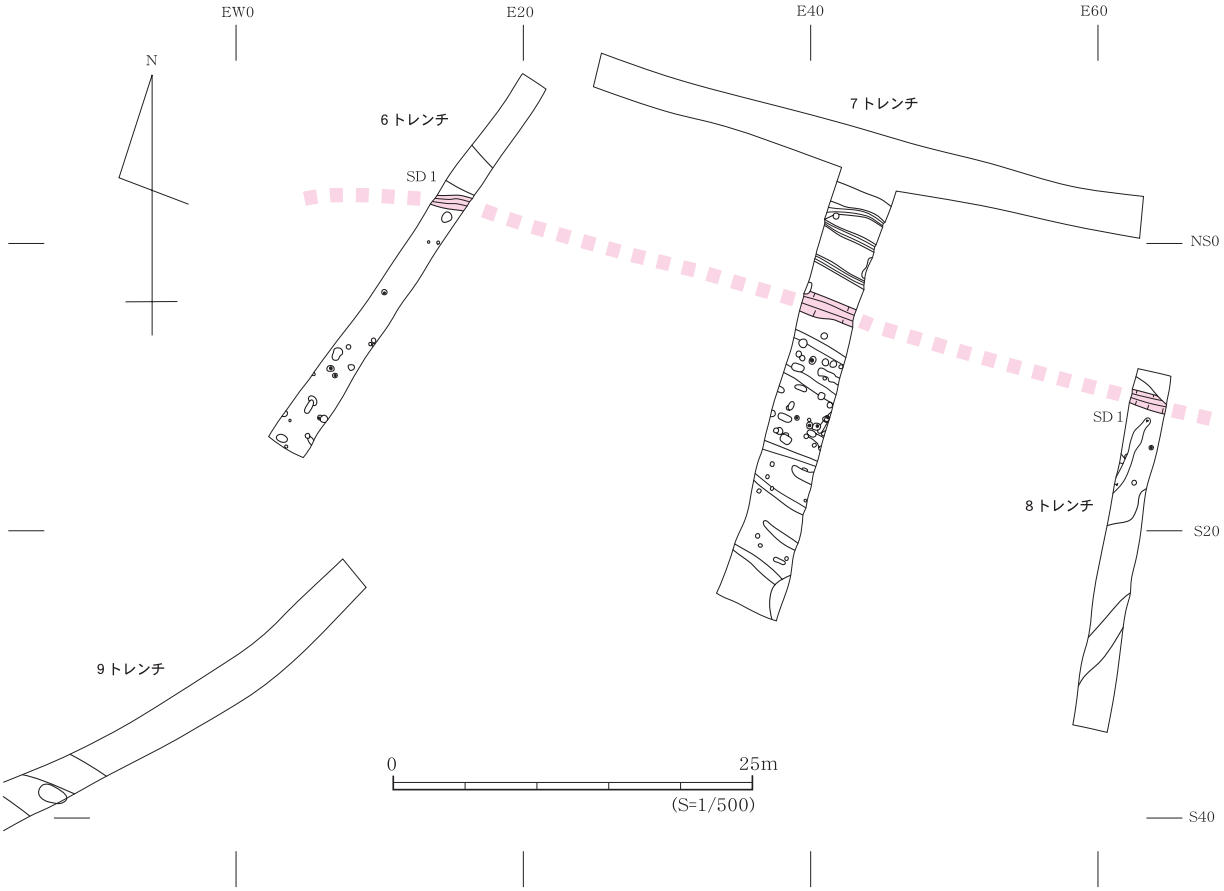
遺跡を東西に横断する溝跡で、１～８トレンチで確認した。検出長は141.6ｍで、重複するすべての遺構より古い。上幅1.9～3.0ｍ、下幅1.5～2.0ｍ、深さは0.2ｍほどである。方向はＥ-10°～20°-Ｓ、断面形は皿形である。堆積土は５層に分けられるが、いずれも自然堆積である。底面もしく

2トレンチ南半部（北から）

2トレンチ中央部（南から）

図版２　１～５トレンチの検出遺構

はそれを覆う薄い層の上に灰白色火山灰の再堆積層が認められる。２トレンチでは二股に分かれること、上幅や下幅が一定しないこと、断面形が皿状であることから、自然流路跡の可能性が高い。堆積土から平安時代の土師器がわずかに出土した。



2トレンチ全景（南から）

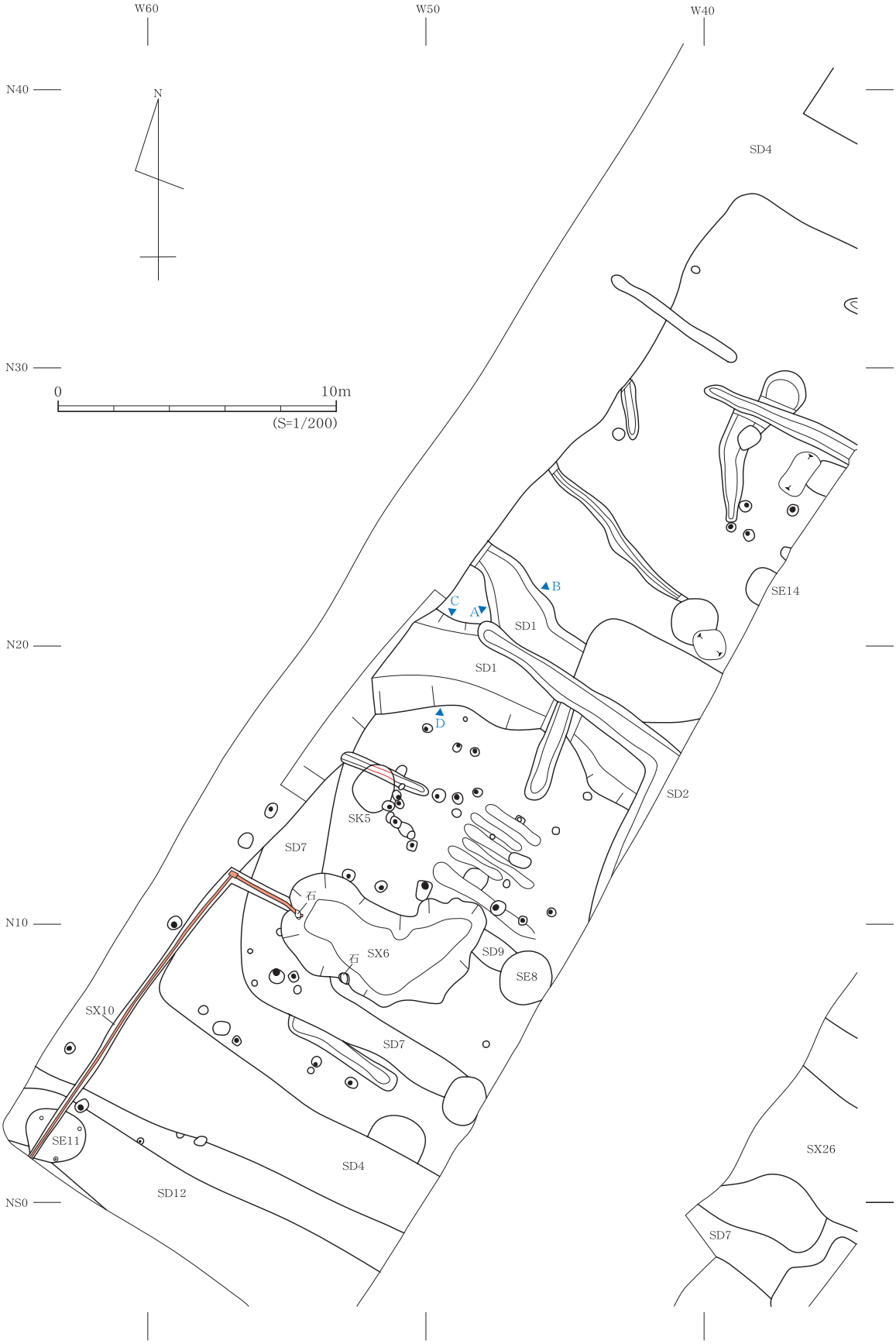
7トレンチ北半部（東から）

図版３　６～９トレンチの検出遺構

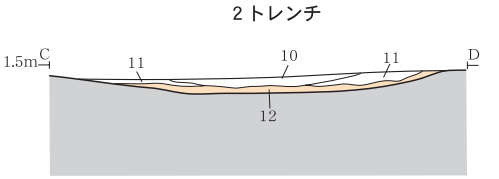
（２）近世

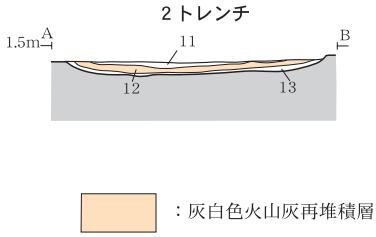
【ＳＤ４区画溝跡】（図版２・４）

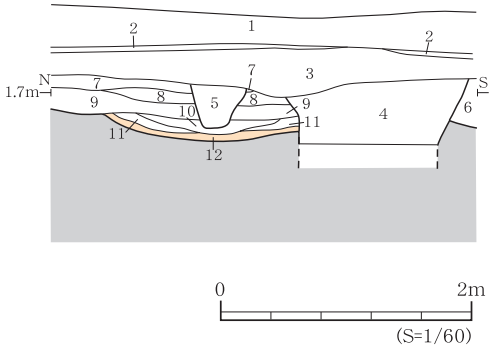
２～４トレンチで確認したコ字形の溝跡である。東西は南辺で40.0m、北辺で37.6m、南北は西辺で42.4m確認した。５トレンチで確認したＳＤ24南北溝跡は一連の遺構とみられ、その場合、東西約48m、南北約36mの範囲を区画する。ＳＤ１溝跡より新しく、ＳＤ７溝跡やＳＸ10暗渠跡より古い。上幅は南辺で4.2m、西辺で4.8m以上、北辺で3.3mある。方向は西辺でN−36°−E前後である。ま



図版４　２トレンチの検出遺構







No.	土色・土性	混入物など	備考
1			現代の盛土
2	褐灰色(10YR5/1)粘土		水田耕作土
3	黒褐色(10YR3/2)砂質シルト	炭化物を含む	
4	黒褐色(10YR3/1)砂質シルト	地山(粘土・砂)を含む	井戸跡堆積土　人為堆積
5	黒褐色(10YR2/2)シルト		Pit堆積土
6	暗褐色(10YR3/3)砂質シルト	地山ブロックを含む	溝跡堆積土
7	黒褐色(10YR3/1)砂質シルト		近世の表土？
8	暗褐色(10YR3/3)砂質シルト		
9	黒褐色(10YR3/2)砂質シルト		
10	黒色(10YR2/1)粘土	炭化物を多く含む	SD１堆積土
11	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山小ブロック、炭化物を含む	
12	灰白色(10YR7/1)		
13	褐灰色(10YR4/1)粘土	地山(砂)を多く含む	

A―B断面写真（東から）

断面写真（７トレンチ）（西から）

図版５　SD１溝跡

た、北西コーナーから北へ延びる上幅3.9mの溝や１トレンチ南端で確認したＳＤ50溝跡は一連の遺構である可能性がある。

堆積土から土師質土器皿（７－11）・灯明皿、瓦質土器火鉢（８－10）・火消壺蓋（７－８）、軟質施釉陶器焙烙、陶器甕（８－２）、堤産陶器甕（８－１）、岸産陶器香炉（７－１）・鉢（７－３）、大堀相馬産陶器香炉（７－４）・土瓶（７－７）、肥前産陶器碗（７－２）・皿・急須・擂鉢・甕、瀬戸産染付磁器碗（７－10）・仏飯器（７－６）、肥前産染付磁器皿（７－９）、磁器碗・皿（７－５）、瀬戸産陶器瓶子、硯、キセル（８－８）、刀子、不明鉄製品（８－６・７・９）、銭貨「元豊通寶」（初鋳1078年）（８－３）・「元祐通寶」（初鋳1086年）（８－４）・「紹聖元寶」（初鋳1094年）（８－５）、砥石、転用砥、軒瓦、桟瓦などが出土した（図版７・８）。

【ＳＤ12区画溝跡】（図版２・４）

２・３トレンチで確認した東西溝跡で、27m分を検出した。ＳＥ11井戸跡やＳＸ10暗渠跡より古い。

SX10屈曲部（西から）

SX6池跡とSX10暗渠跡（南から）

SX10屈曲部の木箱

図版６　SX６池跡と関連施設

上幅3.6ｍで、方向はＥ-30°－Ｓ前後である。１トレンチ南端で確認したＳＤ30溝跡は一連の遺構である可能性がある。堆積土から土師質土器灯明皿、瓦質土器火鉢・瓦灯、陶器碗・擂鉢、磁器碗、連歯下駄（10－２・３・４）、差歯下駄（10－１）、漆椀（14－８）、木簡（10－５）、砥石、銭貨「寛永通寶」（14－６）、モモ核などが出土した（図版９・10・14）。

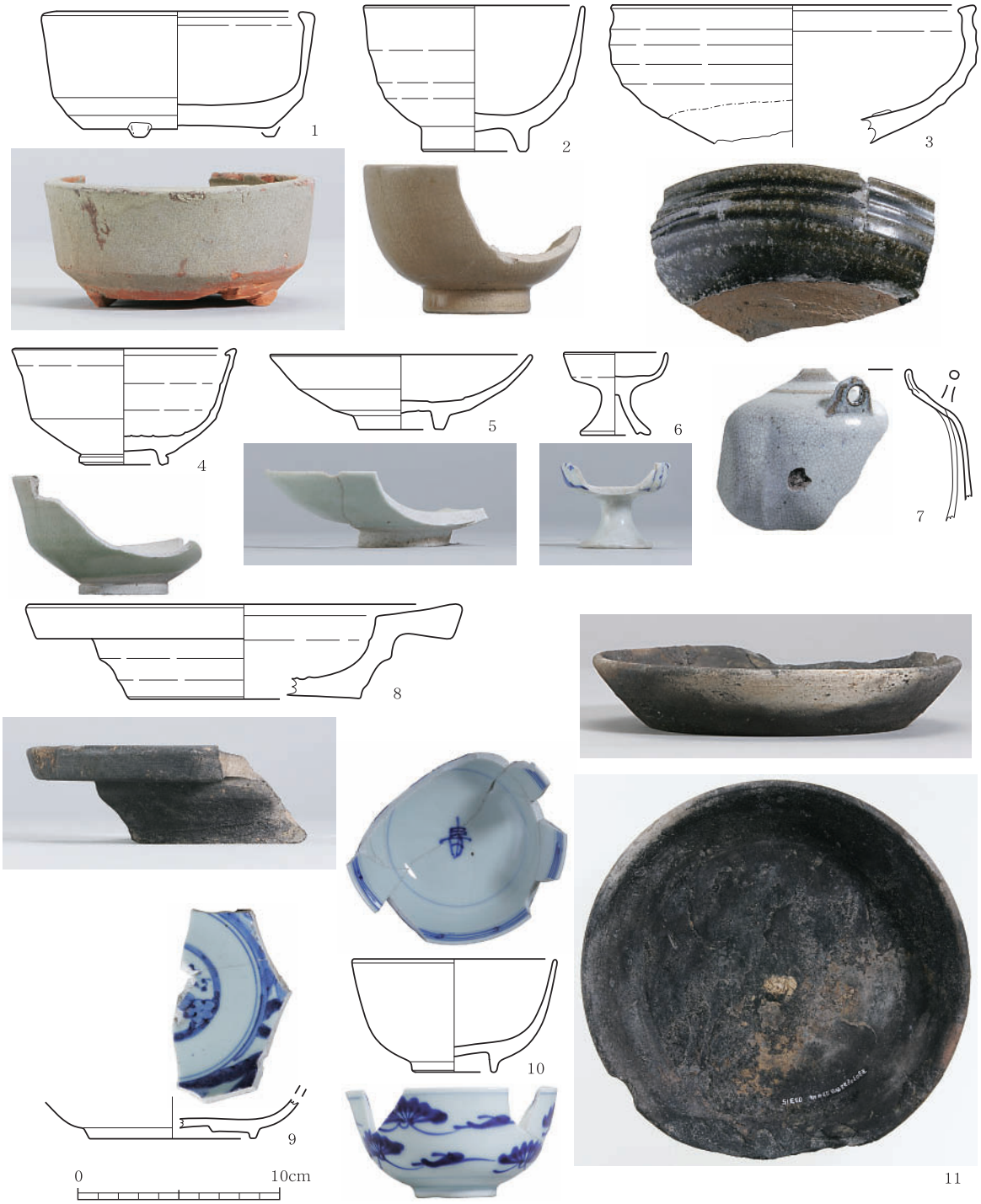
木簡は直径20㎝、長さ30㎝ほどの丸太の外縁部を縦に割り、平らに削った面に文字が記されている。裏面は樹皮を剥いだだけである。４行にわたって文字が記されており、「此かしこ　藤□□　右者　宝永□□〔七年カ〕」と判読できた。釈文中の「藤□□」は、中世期、本遺跡の周辺に存在した八幡荘内の地名である「藤木田」を指す可能性がある。

【ＳＤ２溝跡】（図版４）

２トレンチで確認したＬ字形の溝跡である。検出長は東西8.7ｍ、南北7.4ｍである。ＳＤ１溝跡より新しい。上幅は0.8～1.1ｍで、方向は北辺で測るとＥ-35°－Ｓ前後である。堆積土から土師質土器皿（９）、軟質施釉陶器焙烙（８）、小野相馬産陶器端反皿（２）、陶器小坏（６）・碗・皿・擂鉢・甕、平清水産染付磁器碗（３）、瀬戸産染付磁器小碗（４・５）、肥前産染付磁器皿（１）、磁器碗・皿、瀬戸産陶器瓶子（７）、鬼瓦、軒瓦、桟瓦、梵鐘（鐘座）鋳型（10）などが出土している（図版11）。

【ＳＸ６池跡、ＳＤ９溝跡、ＳＸ10暗渠跡】（図版４・６）

ＳＸ６は、２トレンチで確認した池跡である。ＳＤ７溝跡より新しい。平面形はＬ字形で、東西6.



（単位：cm）

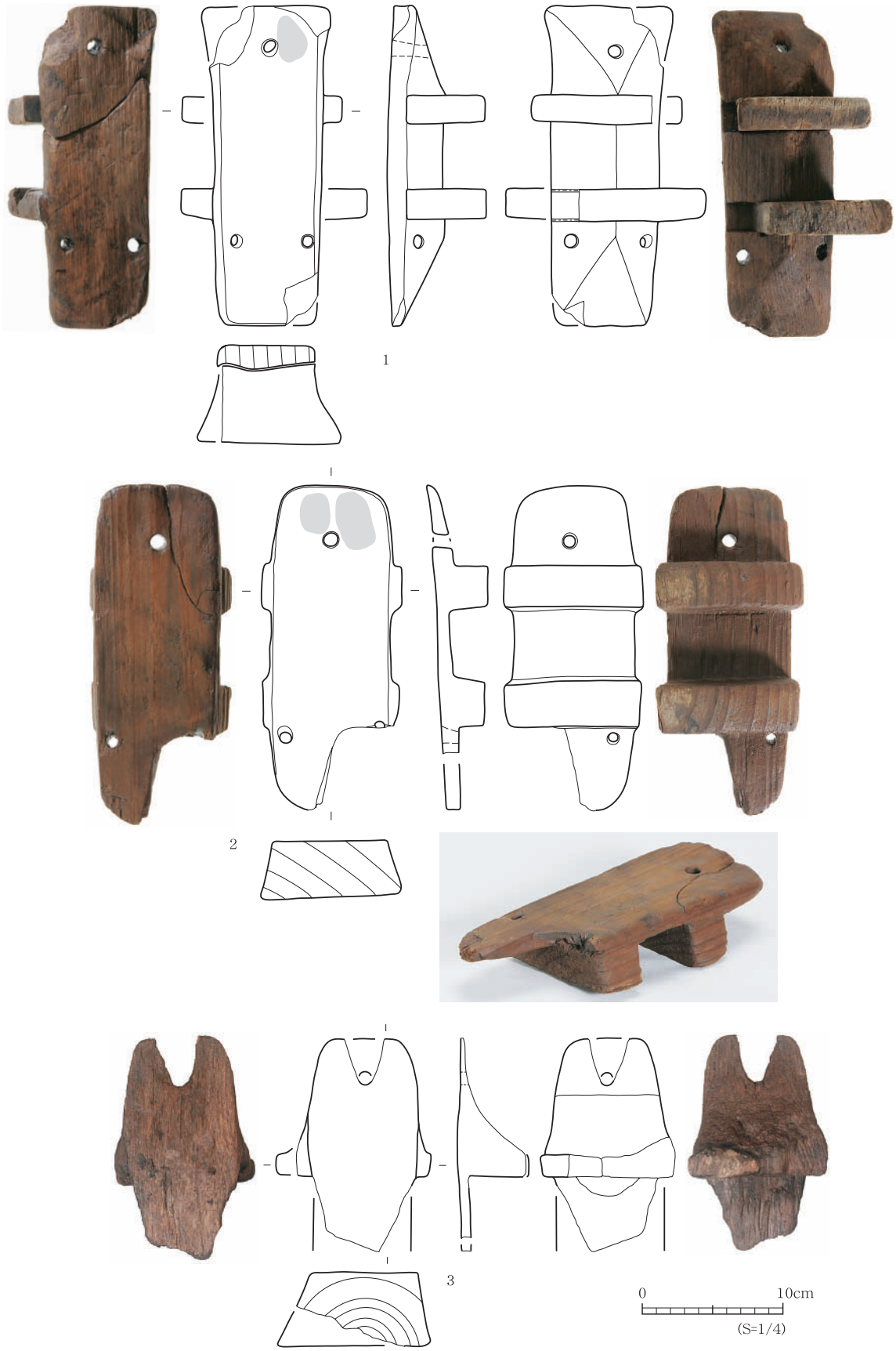
No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	堆積土	陶器	香炉	岸	口径6.1　底径9.2　器高6.2　残存：4/5　底：回転糸切　【17c後半～18c前半】	03320
2	堆積土	陶器	碗	肥前	口径10.8　高台径5.1　器高7.2　残存：2/5　【17c中葉～後葉】	03321
3	堆積土	陶器	鉢	岸	口径18.0　残存1/4　内面目跡1カ所　【17c中頃～18c前半】	03332
4	堆積土	陶器	香炉	大堀相馬	口径11.1　高台径3.8　器高5.8　残存：一部　【18c】	03322
5	堆積土	磁器	皿	肥前	口径12.8　高台径4.2　器高3.7　残存：1/3　【17c末～18c前半】	03335
6	堆積土	染付	仏飯器	瀬戸	口径5.0　器高4.1　高台径3.4　残存：1/2　コバルト釉　【19c中頃】	03336
7	堆積土	陶器	土瓶	大堀相馬	口縁部は折り曲げて作製　【19c前半】	03326
8	堆積土	土師質土器	火消し壺蓋(落とし蓋)	不明	口径21.2　底径11.4　器高4.7　残存：1/3　内外面煤付着　底：回転糸切	03333
9	堆積土	染付	皿	肥前	高台径8.2　残存：一部　【18c後半】	03338
10	堆積土	染付	碗	瀬戸	口径10.0　高台径4.0　器高5.6　残存：1/3　内外文様(コバルト釉)　高台細砂付着　【19c後半】	03334
11	堆積土	土師質土器	皿		口径17.9　底径12.7　器高3.5　残存：ほぼ完形	03315

図版7　SD4区画溝跡出土遺物（1）

(単位：cm)

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	堆積土	陶器	甕	堤？	口径(36.4)　残存：1/3	03328
2	堆積土	陶器	甕		口径(18.5)　残存：1/3	03327
3	堆積土	銅製品	銭貨		「元豊通寶」(初鋳1078年)	03344
4	堆積土	銅製品	銭貨		「元祐通寶」(初鋳1086年)	03345
5	堆積土	銅製品	銭貨		「紹聖元寶」(初鋳1094年)	03343
6	堆積土	鉄製品	不明鉄製品		長7.0　幅0.9　厚0.6　真中に鉄の芯板(桃色)があり、上下を茶、橙、焦茶の順で銅板が囲み、3カ所でビス止めしている	03346
7	堆積土	鉄製品	不明鉄製品		長(7.3)　幅2.8　厚2.0	03348
8	堆積土	銅製品	キセル		長7.0　火皿径1.4　口径0.9　(羅宇一部残存)	03347
9	堆積土	鉄製品	不明鉄製品		長3.1　幅1.4　厚1.3	03349
10	堆積土	瓦質土器	火鉢		獅子面　長(5.0)　幅(4.8)　厚(2.1)	03319

図版8　SD4区画溝跡出土遺物（2）



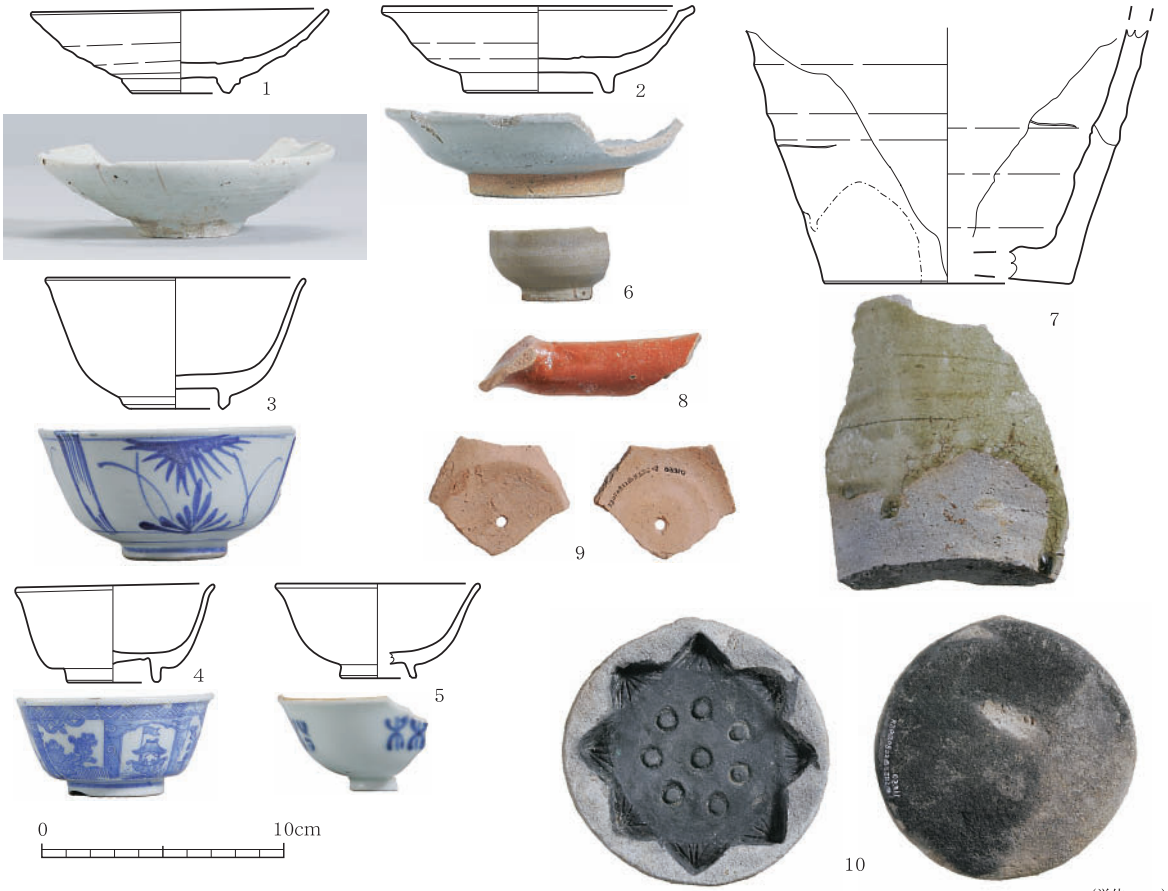
図版9　SD12区画溝跡出土遺物（1）

(単位：cm)

No.	出土層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
1	堆積土	木製品	差歯下駄	長22.6　幅12.7　高7.1　残存：4/5	03367
2	堆積土	木製品	連歯下駄	長23.0　幅10.0　高5.1　残存：9/10	03368
3	堆積土	木製品	連歯下駄	残存長15.1　幅(9.4)　高5.1　残存：2/5	03370
4	堆積土	木製品	連歯下駄	長22.6　幅9.0　高4.4　残存：ほぼ完形	03369
5	堆積土	木製品	木簡	長31.3　幅15.8　厚4.2	03364

図版10　SD12区画溝跡出土遺物（2）

8m、南北は東側で5.1m、西側で3.5m、深さは0.8mある。南岸中央に方形（50×40㎝）で平らな石が置かれていた。ＳＤ９溝跡は、ＳＸ６の北東に接続する上幅1.0mの溝跡である。ＳＸ10暗渠跡は、ＳＸ６の西壁に接続する暗渠跡で、西へ2.5m延びたのち、南へ折れて12.8m以上続く。ＳＥ11井戸



(単位：cm)

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	堆積土	染付	皿	肥前	口径12.1　高台径4.0　器高3.4　残存：4/5　【17c後半】	03306
2	堆積土	陶器	端反皿	小野相馬	口径12.8　高台径6.0　器高3.6　残存：2/5　内面底部印花文　【18c中葉】	03305
3	堆積土	染付	碗	平清水	口径10.6　高台径3.8　器高5.4　残存：1/2　内文様(コバルト釉)　底部に文字(釉で判別不明)　【19c後半】	03302
4	堆積土	染付	小碗	瀬戸	口径8.0　高台径3.8　器高(4.0)　残存：2/3　外面文様(コバルト釉、銅板転写)　【19c末～20c】	03303
5	堆積土	染付	小碗	瀬戸	口径8.4　高台径3.0　器高3.9　残存：2/5　外面文様　【19c中頃】	03304
6	堆積土	陶器	小坏		口径(5.4)　高台径2.8　器高3.0　残存：3/5	03307
7	堆積土	陶器	瓶子	瀬戸	底径10.2　【藤澤Ⅱ類】	03308
8	堆積土	土師質土器	焙烙			03309
9	堆積土	土師質土器	皿		底径(5.3)　燭台　底部焼成前穿孔	03310
10	堆積土	鋳型	鐘座		口径10.4　厚2.4	03311

図版11　SD2溝跡出土遺物

跡、ＳＤ４・12溝跡より新しい。掘方は上幅50cm前後、深さは50～60cmで、断面形は箱形である。底面の上に径10cmの節を抜いた竹が連接して埋設されている。南へ折れる部分は、内部がＬ字に刳り抜かれた30×20cmの木製の箱が置かれ、そこに竹を差し込んで連結していた（図版６）。また、ＳＸ６との接続部は、竹の先が10cmほど池内に延び、その上には竹を固定するための幅70cm、厚さ30cmの礫が置かれていた。ＳＤ７とＳＸ10の底面レベルと周辺の地形から、ＳＤ９はＳＸ６の給水施設、ＳＸ10は配水施設と考えられる。

ＳＸ６の堆積土から土師質土器灯明皿（13－２・３）、瓦質土器火鉢（12－９）、大堀相馬産陶器碗（12－１）・香炉（12－２）、小野相馬産陶器碗（12－４）、陶器擂鉢、染付磁器皿（12－３）、磁器碗・皿、漆椀（12－５・７）・小杯（12－６）、差歯下駄、燭台用の木製小皿（12－８）、不明木製品（13－１・５・６）、羽口（13－８）、砥石、硯、碁石、鰐口（13－４）、五徳？（13－７）モモ核、ＳＸ10の埋土から土師質土器灯明皿、陶器碗、磁器碗などが出土している（図版12・13）。

(単位：cm)

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	堆積土	陶器	碗	大堀相馬	口径10.8　高台径4.2　器高6.7　残存：3/5　鉄釉流しかけ　【18c末～19c】	03375
2	堆積土	陶器	香炉	大堀相馬	口径11.2　高台径5.2　器高7.1　残存：2/5　【18c】	03374
3	堆積土	染付	皿	肥前	口径12.8　高台径5.8　器高3.1　残存：1/2　内面に文様　【17c中葉】	03377
4	堆積土	陶器	碗	小野相馬	口径11.3　高台径4.4　器高6.9　残存：3/4　内面底部に目跡3個　底部墨書　【18c】	03376
5	堆積土	漆器	椀		高台径(6.0)　残存高2.8　残存：1/3　内：赤色漆塗り　外・底部：黒色漆塗り	03354
6	堆積土	漆器	小杯		口径8.0　高台径4.1　器高3.0　残存：ほぼ完形　内外底部：赤色漆塗り	03355
7	堆積土	漆器	椀		口径(12.2)　高台径(5.6)　器高(7.4)　残存：ほぼ完形　内外：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り→赤色漆塗りで文様	03356
8	堆積土	木器	小皿		口径10.0　高台径7.6　器高1.0　残存：1/3　底部穿孔	03357
9	堆積土	土師質土器	火鉢		獅子面　高10.5　幅(6.4)　厚6.7	03373

図版12　SX6池跡出土遺物（1）

（単位：cm）

No.	出土層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
1	堆積土	木製品	不明木製品	長26.2　幅9.3　柄幅4.5　厚1.2	03358
2	堆積土	土師質土器	灯明皿	口径10.7　底径7.0　器高(2.1)　残存：完形　内外面油煙付着	03378
3	堆積土	土師質土器	灯明皿	口径(10.9)　底径(6.4)　器高(2.3)　残存：1/2　底部穿孔	03379
4	堆積土	鉄製品	鍔口	長(11.1)　幅(4.2)　厚0.3	03386
5	堆積土	木製品	不明木製品	長9.3　径2.0	03361
6	堆積土	木製品	不明木製品	長4.5　幅厚1.5	03360
7	堆積土	鉄製品	五徳ヵ	脚　長30.7　幅(1.0～2.4)　厚0.7	03387
8	堆積土	土製品	羽口	長(2.5)　幅(2.4)	03384

図版13　SX6池跡出土遺物（2）

(単位：cm)

No.	出土遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	SK13　堆積土	瓦質土器	瓦灯		口径12.0　器高14.0　底径16.4　残存：2/3	03399
2	SX22　堆積土	陶器	土瓶	大堀相馬	口径8.3　高台径9.6　器高14.5　残存：2/3　【19c中葉】	03403
3	SX22　堆積土	染付	輪花皿	肥前系(東北在地ヵ)	口径(14.2)　高台径8.8　器高4.5　残存：1/3　【19c前半～中葉】	03402
4	SD21　堆積土	陶器	仏飯器	小野相馬	高台径4.2　残存：1/3　底部：回転糸切　【18c末～19c初】	03400
5	SD25　堆積土	陶器	灯明皿		口径5.4　底径3.5　器高2.1	03404
6	SD12　堆積土	銅製品	銭貨		「寛永通寶」(初鋳1636年)	03397
7	SK5　堆積土	鉄製品	鎹		長(11.3)　幅0.8　厚0.6	03372
8	SD12　堆積土	漆器	椀		高台径(6.0)　残存高5.1　残存：2/3　内外底部：赤色漆塗り	03365
9	SD12　確認面	漆器	椀		高台径(5.2)　残存高3.1　残存：1/3　内外底部：赤色漆塗り	03363

図版14　その他の遺構出土遺物

Ｃ．まとめ

１．竹ノ内遺跡は標高２ｍの浜堤に立地する。遺跡は最も広い部分で南北約80ｍ、東西約190ｍあり、面積は約11,600㎡である。

２．検出した遺構は、幅４ｍ前後の屋敷区画溝跡、柱穴跡、土壙、溝跡などである。このうち、堆積土に灰白色火山灰が入るＳＤ１溝跡は、自然流路とみられる。他の遺構については、堆積土出土の土器・陶磁器・漆器・瓦・金属製品からみて近世以降と考えられる。

３．ＳＤ４・24溝跡は、東西約48ｍ、南北約36ｍの範囲を区画する。屋敷の居住者は、区画溝から出土した遺物が日常雑器を主体としていることから、 有力農民層とみられる。

４．近世屋敷より新しいＳＸ６池跡と関連施設は、池跡出土遺物の中に鰐口が含まれることからみて、本遺跡の上に建っていたとされる天台宗「耳取山冷徳寺」に関わる遺構とみられる。

附編　　中野高柳遺跡の古環境および植物利用等の分析

三村昌史・新山雅弘・植田弥生（パレオ・ラボ）

仙台市宮城野区に位置する中野高柳遺跡では、遺跡北部から平安時代末頃～戦国時代の在地領主層の屋敷跡や平安時代中頃の畑跡・水田跡が、遺跡南部からは鎌倉時代～室町時代の屋敷跡が検出されている。ここでは、平成13・14年度発掘調査で出土した植物質遺物の調査を通じて当時の暮らし振りの一端を復元することとしたい。分析は花粉・種実・木製品の３項目であり、花粉分析により12世紀～13世紀頃の遺跡周辺の古植生を、種実及び木製品の分析により12世紀～近世に至る植物利用・木材利用をそれぞれ明らかにすることを目的として行った。以下では、花粉・種実・木製品のそれぞれの分析及び考察を順次記すと共に、末尾に総合的な考察を加えたい。なお、それぞれの分析及び考察は花粉・種実を新山が、木製品を三村と植田がそれぞれ担当した（註１）。

第１節　花粉分析

Ⅰ．試料と方法

花粉分析による花粉化石群集の検討は、遺跡北部の４区ＳＸ1200遺物包含層の下層（17層）（試料１）と下層（19層）（試料２）、遺跡南部のＢ区ＳＸ1397遺物包含層の中層（23層）（試料３）の堆積物合計３試料について行った（図１参照）（註２）。

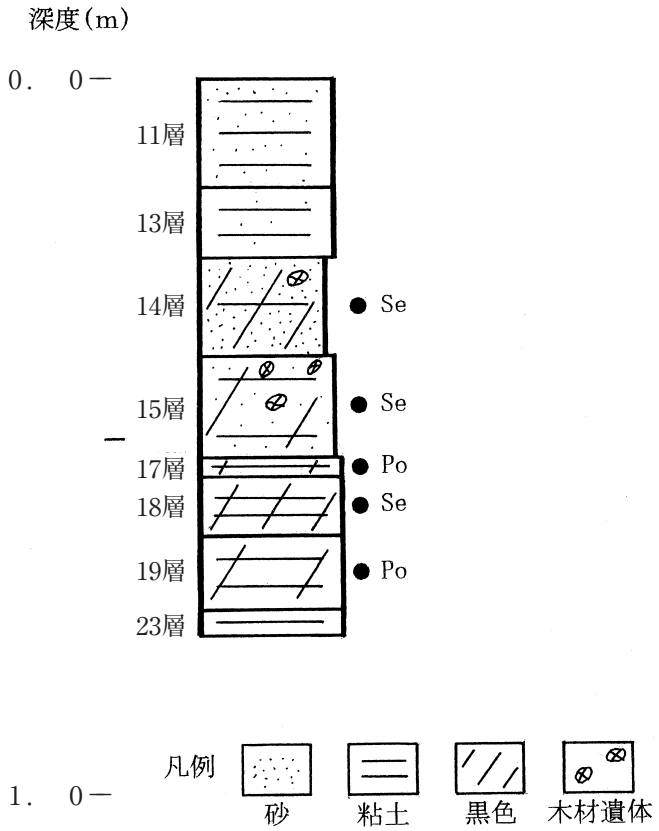


図１　4区SX1200の地質柱状図と試料採取層準
（●:サンプル、Po:花粉分析、Se:種実分析）

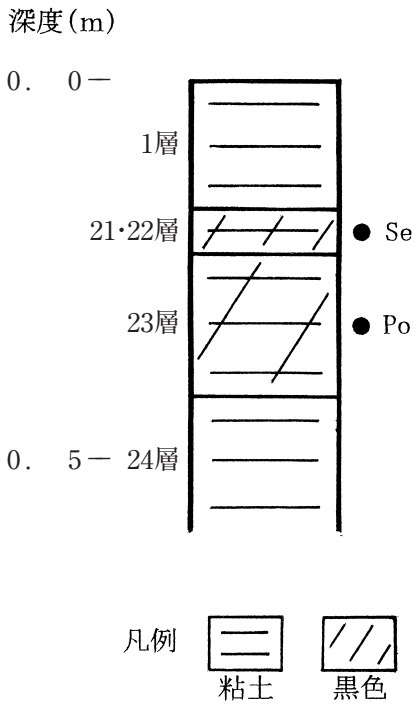


図２　B区SX1397の地質柱状図と試料採取層準
（●:サンプル、Po:花粉分析、Se:種実分析）

分析対象の４区ＳＸ1200の下層（17層）と下層（19層）の堆積物は黒褐色粘土で植物遺体を含む。Ｂ区ＳＸ1397の下層（24層）の堆積物は黒褐色粘土で炭化物を含み褐鉄鉱が認められる。時代については４区ＳＸ1200が12世紀、Ｂ区ＳＸ1397が13世紀と考えられており、その時代における本遺跡周辺の古植生の復元を試みる。

花粉化石の抽出は、試料約２～３ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理･化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取ってグリセリンで封入した。検鏡はプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定･計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉･胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科，バラ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なためここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

Ⅱ．結果

同定された分類群数は、樹木花粉26、草本花粉27、形態分類を含むシダ植物胞子３である。以下に各試料の花粉化石群集の記載を示す。

４区ＳＸ1200（12世紀頃）の花粉化石群集

下層（17層）（試料１）は樹木花粉の占める割合が約12％と非常に低率である特徴がある。その中でブナ属が約25％で最優占し、次いでコナラ亜属が約18％と高率である。比較的高率なのは、ハンノキ属・アカガシ亜属の約11％、クマシデ属－アサダ属の約８％、カバノキ属の約６％である。他にマツ属単維管束亜属・スギ属・クリ属が各４％、トネリコ属が約２％、クルミ属・ユズリハ属・シラキ属・トチノキ属・ブドウ属などが約１％以下で出現する。草本花粉では、イネ科が約49％と最も高率であり、次いで、ヨモギ属が約13％、クワ科が約12％である。他に、ガマ属－ミクリ属が約４％とやや目立ち、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科が約２％、ヒルムシロ属・ギシギシ属・サナエタデ節-ウナギツカミ節・コウホネ属・ヒツジグサ属・ツリフネソウ属・セリ科・ナス属・オオバコ属・ゴキヅル属・他のキク亜科・サンショウモなどが１％未満で出現する。

下層（19層）（試料２）も同様に樹木花粉の占める割合が約21％と非常に低率である。その中で、ブナ属が約25％で最優占し、次いでコナラ亜属が約17％と高率である。比較的高率なのは、ハンノキ属の約12％、スギ属の約11％、クマシデ属－アサダ属の約10％である。他に、マツ属単維管束亜属・ヤナギ属・アカガシ亜属・ニレ属－ケヤキ属が約３～４％、モミ属・クリ属・ユズリハ属・ブドウ属などが１％未満で出現する。草本花粉ではヨモギ属が約36％と最も高率であり、次いでイネ科が約33％である。他に、カヤツリグサ科が約４％、ガマ属－ミクリ属・ヒルムシロ属・オモダカ属・サナエ

和名	学名	1	2	3
樹木				
モミ属	*Abies*	1	1	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	6	6	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	1	1	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	2	5	-
スギ属	*Cryptomeria*	6	24	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	1	-
ヤナギ属	*Salix*	-	6	-
サワグルミ属	*Pterocarya*	1	-	-
クルミ属	*Juglans*	2	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	1	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	13	23	3
ハシバミ属	*Corylus*	-	4	-
カバノキ属	*Betula*	10	10	1
ハンノキ属	*Alnus*	19	26	7
ブナ属	*Fagus*	41	56	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	30	37	3
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	18	10	-
クリ属	*Castanea*	6	1	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	8	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	1	1	-
シラキ属	*Sapium*	1	-	-
カエデ属	*Acer*	1	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	2	-	-
ブドウ属	*Vitis*	1	1	-
エゴノキ属	*Styrax*	-	1	-
トネリコ属	*Fraxinus*	4	-	-
草本				
ガマ属－ミクリ属	*Typha - Sparganium*	54	6	-
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	12	4	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	1	-
イネ科	Gramineae	699	351	3
カヤツリグサ科	Cyperaceae	34	38	-
クワ科	Moraceae	176	-	-
ギシギシ属	*Rumex*	6	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	9	4	-
タデ属イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	1	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	24	14	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	-
コウホネ属	*Nuphar*	1	4	-
ヒツジグサ属	*Nymphaea*	1	1	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	1	-	-
アブラナ科	Cruciferae	9	-	-
バラ科	Rosaceae	4	-	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	1	5	-
フサモ属	*Myriophyllum*	-	1	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	4	-
セリ科	Umbelliferae	7	4	-
ミツガシワ属－イワイチョウ属	*Menyanthes - Fauria*	-	1	-
ナス属	*Solanum*	6	-	-
オオバコ属	*Plantago*	4	1	-
ゴキヅル属	*Actinostemma*	7	1	-
キュウリ属	*Cucumis*	-	1	-
ヨモギ属	*Artemisia*	183	378	9
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	4	-
シダ植物				
サンショウモ	*Salvinia natans* All.	5	11	-
単条型胞子	Monolete spore	7	4	3
三条型胞子	Trilete spore	2	1	-
樹木花粉	Arboreal pollen	167	223	15
草本花粉	Nonarboreal pollen	1239	825	12
シダ植物胞子	Spores	14	16	3
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	1420	1064	30
不明花粉	Unknown pollen	28	12	9

表1　花粉化石一覧表

試料1:4区SX1200下層(17層)、試料2:4区SX1200下層(19層)、試料3:B区SX1397下層(24層)

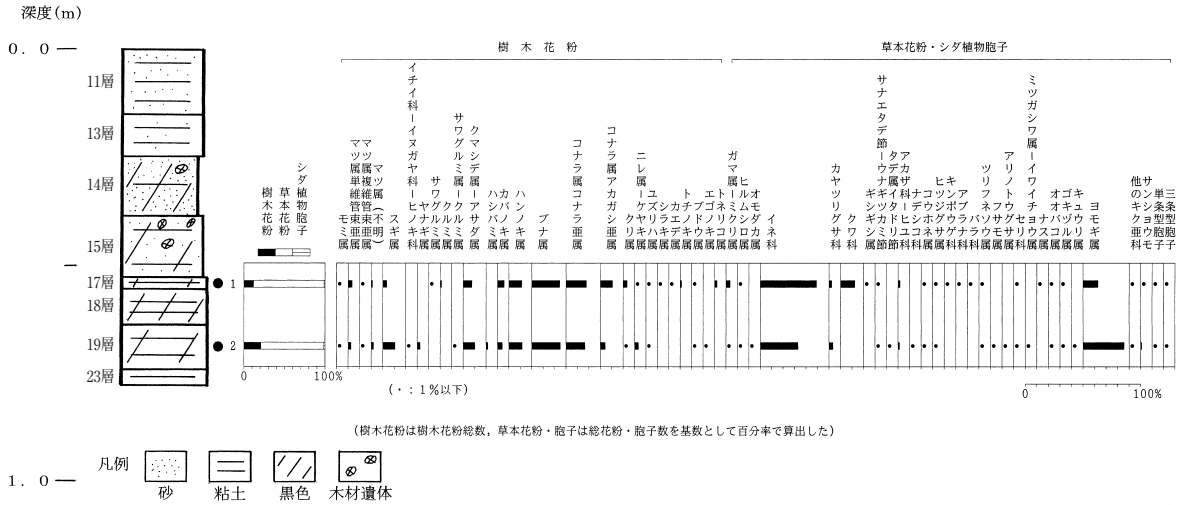


図3　4区SD1200の花粉化石分布図

タデ節－ウナギツカミ節・アカザ科－ヒユ科・コウホネ属・ヒツジグサ属・ツリフネソウ属・フサモ属・セリ科・ミツガシワ属－イワイチョウ属・オオバコ属・ゴキヅル属・キュウリ属・他のキク亜科・サンショウモなどが約１％以下で出現する。

<u>Ｂ区ＳＸ1397（13世紀頃）の花粉化石群集</u>

十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった(表１参照)。ハンノキ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属がやや目立ち、カバノキ属、ブナ属が僅かに産出した。草本花粉では、イネ科とヨモギ属のみが得られた。

Ⅲ．考察

12世紀の遺跡周辺には、ブナ属、コナラ亜属が優勢でハンノキ属、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属を主要な構成要素とした落葉広葉樹林が成立していたと予想される。他に、針葉樹のスギ属、常緑広葉樹のアカガシ亜属も生育していたと思われる。しかし、樹木花粉の占める割合は極めて低率であり、また、大型植物化石でも木本の種類・個数は共に少なく、上記した分類群に対応するものはコナラ属芽が１個体出土しているのみである。従って、比較的多産した分類群の花粉化石の大半は、遠方からの飛来花粉によるものではないかと思われ、上記したような森林は、周辺丘陵地など遺跡からやや離れた場所に成立していたのではないかと予想される。周辺の遺跡の一つである山王遺跡では植物遺体の検討が行われており（辻誠一郎ほか1994）、古墳時代中期と本遺跡より時期は古いものの、花粉群の産状からイヌブナ、ブナ、クマシデ属、ケヤキを主とする落葉広葉樹林が分布していたと考えられている。本遺跡と比較すると、大きな違いとしては、スギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ亜属、アカガシ亜属の出現率の差があると思われる。コナラ亜属は12世紀になってより人間活動が活発化し、二次林要素として分布を拡大した可能性が考えられる。また地域による差もあるかもしれないが、少なくとも12世紀の本遺跡周辺においては、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科はあまりみられず、逆にスギ属、アカガシ亜属は普通の要素であったと思われる。

一方、草本類については大型植物化石と同様に多様な水生植物が出現している。具体的には、湿地

性ないし抽水植物のガマ属－ミクリ属、オモダカ属、ツリフネソウ属、ミツガシワ属－イワイチョウ属、ゴキヅル属、浮葉ないし沈水植物のヒルムシロ属、コウホネ属、ヒツジグサ属、フサモ属、サンショウモなどである。ＳＸ1200はもともと河川であったものが12世紀代に氾濫によって埋没し、その後湿地化したものと考えられており、これら水生植物花粉の検出はそうした背景と同調的である。多産するイネ科の花粉も、おそらくこれら水生植物と共に河川や湿地に生育していた種から由来したものではないだろうか。

なお、13世紀の試料であるＳＸ1397の下層（24層）（試料３）は十分な花粉化石が産出せず、周辺植生の推定はできなかった。

第２節　出土種実の分析

Ⅰ．試料と方法

分析試料の一覧を表２に示した（土層断面図は図１参照）。

これらの資料のうち、洗い出しが行われていない４区ＳＸ1200遺物包含層の下層（14層）、下層（15層），下層（18層）およびＢ区ＳＸ1397の中層（23層）の堆積物については、堆積物から各約200ｃｃを取り出して0.25㎜目の篩を用いて水洗篩い分けを行った。その他の試料は既に洗い出し済みであり、種実のみ、あるいは篩目に残った種実や種実以外の残渣がタッパー・袋・プラスチックケースに入れられた状態であった。ただし、４区ＳＸ1200の６層は処理済のものとは別に堆積物試料も処理した。これらの大型植物化石を実体顕微鏡下で同定した。

Ⅱ．結果

出土した大型植物化石の一覧を表３～５に示した。なお、Ａ区ＳＥ1643井戸跡については複数の試料があったため、便宜的に１～21の通し番号を付けた。ただし、大型植物化石として同定し得るもの

調査区	遺　構	出 土 層 位	年代or遺構期	状　態	堆積物の処理量	篩　　目
2	ＳＫ1205	５層	第Ⅵ期	処理済	54×34×14cm	最小1mm
2	ＳＤ1140	埋土	第Ⅵ期	処理済		
2	ＳＥ1212	３層	第Ⅵ期	処理済		
2	ＳＫ1235	埋土	第Ⅴ期	処理済		
4	ＳＫ1282	ベルト	第Ⅴ期	処理済		
4	ＳＤ1284	埋土	第Ⅴ期	処理済		
4	ＳＸ1200	上層（９～10層）	12世紀後半	処理済		
4	ＳＸ1200	上層（12層）	12世紀後半	処理済		
4	ＳＸ1200	下層（14層）	12世紀前半	堆積物	200cc	0.25mm
		下層（15層）		堆積物	200cc	0.25mm
		下層（14～17層）		処理済	54×34×14cm	最小1mm
4	ＳＸ1200	下層（18層）	12世紀前半	堆積物	200cc	0.25mm
				処理済	54×34×14cm	最小1mm
4	ＳＸ1200	下層（19層）	12世紀前半	処理済	54×34×14cm	最小1mm
4	ＳＸ1200	下層（19層）	12世紀前半	処理済		
B	ＳＫ1310	埋土	13世紀	処理済		
B	ＳＫ1310	７層	13世紀	処理済	54×34×14cm	最小1mm
B	ＳＫ1311	６層	13世紀	処理済	54×34×14cm	最小1mm
B	ＳＸ1397	下層	13世紀前半～中頃	堆積物	200cc	0.25mm
		中層		処理済	54×34×14cm	最小1mm
		上層	13世紀後半	処理済		
B	ＳＤ2474	埋土	第Ⅳ期？	処理済		
B	ＳＤ1501Ｂ	埋土	第Ⅳ期	処理済		
B	ＳＥ1543	埋土	第Ⅶ期	処理済		
A	ＳＥ1643	埋土	第Ⅶ期	処理済		

表2. 大型植物化石分析試料一覧

を全く含んでいなかった２試料については、一覧表から省いた。以下に、出土した大型植物化石を記載する。

２・４区から出土した大型植物化石（表３）

（１）２区

ＳＫ1205土壙５層は、木本ではニワトコ１個体のみが出土した。草本ではサナエタデ近似種、 ホタルイ属Ａ、 イボクサ、 ヒシ、 ドクゼリ属またはセリ属が多産ないし目立った産状を示し、イネ、イヌビエ－ヒエ、エノコログサ属、アサ、ヤナギタデ近似種、ヒメビシ、シロザ近似種、ナス、メナモミなどが少量出土した。ＳＤ1140区画溝跡、ＳＥ1212井戸跡、ＳＫ1235土壙では、モモ核のみが少量出土した。

（２）４区

ＳＫ1282土壙はモモ核（完形）１個体、ＳＤ1284区画溝跡はオニグルミ核（破片）２個体のみが出土した[註３]。

ＳＸ1200遺物包含層は、下層（19層）でミクリ属やイネが多産し、ヒルムシロ属、オオムギ、イヌビエ－ヒエ、イボクサ、サナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種、イヌコウジュ属またはシソ属、ナスが比較的目立った。他に、コムギ、ホタルイ属Ａ、ホタルイ属Ｂ、アサ、サデクサ、シロザ近似種、ヒユ属、ドクゼリ属またはセリ属、シソ属，イヌコウジュ属，メロン仲間，モモ核(完形，破片)などが出土し、コウホネ属、マメ科なども僅かに出土した。

下層（18層）では、イネが圧倒的に多産し、特に炭化胚乳が目立った。他にはイヌビエ－ヒエ、ホタルイ属Ｂも多産し、ミクリ属、コムギ、オオムギ、ホタルイ属Ａ、イボクサ、ヤナギタデ近似種、イヌタデ近似種、シロザ近似種、ヒユ属、ナスも比較的目立った。他に、クリ、モモ、アサ、マメ科、ヒシ属、シソ属、メロン仲間なども出土した。

下層（14～17層）では、イネ、イヌビエ－ヒエ、ヒシ属が非常に多産し、クリ、モモ、オオムギ、ホタルイ属Ｂ、サナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種、シロザ近似種、シソ属などが比較的目立った。他に、ウメ、コムギ、アサ、マメ科、ナス、メロン仲間なども出土した。

下層（14～17層）については、14層と15層の堆積物試料を処理したが、15層ではイネが多産し、イヌビエ－ヒエ、ヒシ属がやや目立った。14層ではヒユ属がやや目立ち、イネ、オオムギ、アサなどが出土した。上層（12層）では、モモとヒシ属のみが僅かに出土した。上層（９～10層）では、モモ核のみが少量出土した。

Ｂ区から出土した大型植物化石（表４）

ＳＫ1310土壙は、７層でイネが非常に多産し、オオムギ、イヌビエ－ヒエも比較的多産した。他に、モモ、コムギ、アサ、マメ科、シソ属などが出土した。ＳＫ1311土壙は、６層でイネ、オオムギ、イヌビエ－ヒエ、ホタルイ属Ａ、アサ、ヤナギタデ近似種、シロザ近似種、ヒユ属が比較的多産ないし目立った。他に、ウメ、コムギ、カナムグラ、サナエタデ近似種、ギシギシ属、ナデシコ科、メナモミなどが出土した。ＳＤ2474溝跡はモモのみが出土し、ＳＤ1501Ｂ区画溝跡及びＳＥ1543井戸跡では、モモ核の縫合線に沿って半分に割れた片方が１個体ずつ出土した。

分類群・部位 ＼ 地区・遺構・層位		2 区				4 区		4 区						
		SD1205	SD1140	SE1212	SK1235	SK1282	SD1284	SX1200						
		5層		3層		ベルト		上層(9～10)	上層(12)	下層(14)	下層(15)	下層(14～17)	下層(18)	下層(19)
モミ属	葉													(1)
オニグルミ	核												(1)	(1)
	核(打撃痕)						(2)						(1)	
コナラ属	芽											1		
クリ	果実											(78)	(18)	
コブシ	種子											1		
キイチゴ属	核												1	(2)
ウメ	核											1		
モモ	核		1	(4)	2	1		1	2			23(18)	(2)	2(2)
サンショウ	種子													(2)
ブドウ属	種子													1(3)
ヒサカキ	種子													(1)
クマノミズキ	核											1		
ニワトコ	種子	1												
ミクリ属	核											6	37	194
ヒルムシロ属	核												5	34
ヘラオモダカ	果実												1	
オモダカ科	種子													1
イネ	未炭化穎(基部)	2								1	51	135	344	
	炭化穎果	1									2	20(10)	63(4)	1
	炭化胚乳	3(2)								2(1)	1	511(120)	1680(537)	109(37)
	炭化穎(基部)									1	4	252	152	1
コムギ	炭化胚乳										2	1	41	10
オオムギ	炭化穎果											19	3	
	炭化胚乳									4		14	24	25(1)
イヌビエーヒエ	未炭化穎	3									5	108(46)	9(8)	1
	炭化穎果										1	191(64)	43	6
	炭化胚乳										1	721	364(8)	30(1)
エノコログサ属	穎	3										18		
	炭化穎果											9		
スゲ属	果実	8												1
カヤツリグサ属	果実									2	1			
ウキヤガラ	果実											9	1	2
ホタルイ属A	果実	120(3)										9	39	15
ホタルイ属B	果実											145	241	14(1)
イボクサ	種子	34										45	30	28
アサ	種子	1(2)								(1)		2(1)	4(20)	1(16)
カナムグラ	種子													(1)
ミゾソバ	果実													1
	炭化果実													1(2)
サデクサ	果実													10
	炭化果実													1
サナエタデ近似種	果実	202(46)										99	10(1)	19(11)
ヤナギタデ近似種	果実	7									2	81	40	48(6)
イヌタデ近似種	果実	2											33	6(1)
シロザ近似種	種子	1								2(1)		135	37(1)	11
ヒユ属	種子									10			55	9
ナデシコ科	種子	2								2				3
コウホネ属	種子													1
マメ科	炭化種子											1	4(2)	2
カタバミ属	種子										(1)			
エノキグサ	種子												2	
ツリフネソウ	種子													1(2)
ノブドウ	種子	2(2)										2		(3)
ヒシ	果実	1												
ヒメビシ	果実	15(17)												
ヒシ属	果実								(3)		(18)	(1400)	(3)	
ドクゼリ属またはセリ属	果実	70								(2)			2	11
シソ属	果実											45(27)	6(16)	10(6)
イヌコウジュ属	果実	1												9(10)
イヌコウジュ属またはシソ属	果実									(1)		18	8(9)	16(43)
ナス	種子	1										5(18)	43(16)	22(2)
ナス属	種子	3										32(9)	1	3
	炭化種子											1	2	
ヒョウタン仲間	種子											1		
メロン仲間	種子											4(1)	1(2)	1(9)
タカサブロウ	果実												1	
メナモミ	果実	6										1	1	
オナモミ	果実													(2)

数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す

表3. 2・4区の大型植物化石一覧表

分類群・部位 ＼ 地区・遺構・層位		B区								
		SK1310		SK1311	SX1397			SD2474	SD1501B	SE1543
			7層	6層	下層	中層	上層			
オニグルミ	核(打撃痕)						(1)			
イヌシデ	果実		(1)							
キイチゴ属	核			(1)		(4)				
ウメ	炭化核			(1)						
モモ	核	7(9)	1(3)			3(6)	14(4)	6(2)	(1)	(1)
トチノキ	種子					(1)				
ブドウ属	種子			4(4)						
不明	芽		1							
イネ	未炭化穎(基部)			2						
	炭化胚乳		527(188)	49(34)	1(2)	705(199)				
	炭化穎(基部)			1	1	4				
コムギ	炭化胚乳		12	8		9				
オオムギ	炭化穎果			1		9(4)				
	炭化胚乳		142(15)	19(7)	1	66				
コムギまたはオオムギ	炭化胚乳		2(3)							
イヌビエーヒエ	炭化穎果		2							
	炭化胚乳		112	10		111(4)				
エノコログサ属	穎			(1)						
ホタルイ属A	果実		11	21(4)						
ホタルイ属B	果実		1			3				
	炭化果実					1				
イボクサ	種子			1						
アサ	種子		4(15)	1(68)		8(18)				
	炭化種子		1							
カナムグラ	種子		6(5)	2(7)						
サナエタデ近似種	果実			6(6)		9				
ヤナギタデ近似種	果実		2	52(9)						
イヌタデ近似種	果実			1						
ギシギシ属	果実			10(1)						
シロザ近似種	種子		7	88						
ヒユ属	種子			48						
ナデシコ科	種子			18						
オニバス	種子					1				
マメ科	炭化種子		6(8)			(4)				
エノキグサ	種子			1						
ノブドウ	種子		1(2)			(4)				
ヒシ属	果実					(23)				
シソ属	果実		6(1)			9(4)				
イヌコウジュ属	果実		2(1)	1(1)						
イヌコウジュ属またはシソ属	果実		6(1)							
ナス	種子					(1)				
ナス属	種子			2						
	炭化種子		1							
スズメウリ	種子		3							
ヒョウタン仲間	果実						(3)			
メナモミ	果実			6(5)						

表4. B区の大型植物化石一覧表

数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す

ＳＸ1397遺物包含層は上層（14～20層）でモモ、オニグルミ、ヒョウタン仲間が出土し、モモはやや目立った。中層（21～23層）では、イネが非常に多産し、オオムギ、イヌビエーヒエも比較的多産した。他に、モモ、コムギ、アサ、オニバス、マメ科、ヒシ属、シソ属、ナスなどが出土した。下層（24層）は、イネとオオムギのみが僅かに出土した。

<u>Ａ区ＳＥ1643井戸跡から出土した大型植物化石</u>（表５）

木本は稀で、ケヤキ、クワ属、バラ科刺？、サンショウ、ブドウ属が僅かに出土した。草本は、分類群数（27分類群）・個数ともに多かった。圧倒的に多産したのは、イネであり、炭化胚乳が6000個余り、炭化穎果が3000個程度であった。穎（籾殻）の小片も多産し、特に炭化したものが多かった。次いで多産したのは、ヒエであり、未炭化穎が100個余り、炭化穎果が300個余りであった。比較的多産したのは、オオムギ炭化穎果、アワ（炭化穎果が多い）、ホタルイ属、ツユクサ属、アサ未炭化種子、ヤナギタデ、タデ属、シロザ近似種、ヒユ属、マメ科炭化種子、シソ近似種未炭化果実であり、中でもアサ、マメ科が多かった。他は稀で、ヘラオモダカ、エノコログサ属、ウキヤガラ、サナエタデ近

分類群・部位＼試料番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
ケヤキ	果実									1												
クワ属	種子														1							1
モモ	核																					
バラ科？	刺												28									
サンショウ	種子									1												
ブドウ属	種子									1											1	
ヘラオモダカ	果実																					1
イネ	未炭化穎									(2)					(3)						213(71)	(小片多数)
	炭化穎果										166				(1)						2696(71)	
	炭化穎														(6)						(284)	(小片極多数)
	炭化胚乳		2												(1)	2					6172(284)	10(14)
オオムギ	炭化穎果																				29(1)	
ヒエ	未炭化穎					2(1)	29(2)	3		3(1)					50			5				24(10)
	炭化穎果						1	30							277						8	10
アワ	未炭化穎														2							
	炭化穎果	1				1									8							3
	炭化胚乳	1													1							
エノコログサ属	穎																					1
ウキヤガラ	果実														1							
ホタルイ属	果実														13							2
ツユクサ属	種子									2		8								1	3	
アサ	種子									69(109)				(1)							2(4)	(1)
サナエタデ近似種	果実														2							1(1)
ボントクタデ	果実														1							
ヤナギタデ	果実														23							4
タデ属	炭化果実	5						1							13							4
シロザ近似種	種子	25																				8
ヒユ属	種子	15								2					1					1	1	4
マメ科	炭化種子				2(1)					1				57(28)	1						6(1)	
エノキグサ	種子	2				1																(1)
シソ近似種	果実					7									2				1			
イヌコウジュ属	未炭化果実														1							2
	炭化果実																		1			
イヌコウジュ属またはシソ属	果実																					1
ナス属	種子														2							
メロン仲間	種子			1					(4)													
ヒョウタン仲間	種子								(4)													
メナモミ	果実																					1
ベニバナ	炭化種子													1								
キク科	果実																1					1

表5. A区SE1643井戸跡の大型植物化石一覧表 数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す

似種、ボントクタデ、エノキグサ、イヌコウジュ属（未炭化果実･炭化果実）、イヌコウジュ属またはシソ属未炭化果実、ナス属、メロン仲間、ヒョウタン仲間種子、メナモミ、ベニバナ、キク科が出土した。

Ⅲ．考察

平安時代末期（12世紀頃）の栽培･利用状況および周辺植生（４区ＳＸ1200）

出土したもののうち、栽培植物と考えられるものは、ウメ、モモ、イネ、コムギ、オオムギ、アサ、シソ属、ナス、ヒョウタン仲間、メロン仲間であり、イヌビエーヒエ、マメ科もその可能性が考えられる。他に、オニグルミ、クリも利用されていたであろう。河川は氾濫によって埋没した後に湿地化し、ゴミ捨て場となった（ＳＸ1200）と推定されているが（村田晃一2001、 村田晃一・茂木好光2002）、これら栽培・利用植物は、利用後に投棄されたものと予想される。なお、周辺の遺跡の山王遺跡では、６世紀後半から10世紀前半にかけての大型植物遺体が検討されている（阿部美和・辻誠一郎2001）。これと比較すると、栽培・利用植物は概ね類似しており、本遺跡で出土した栽培・利用植物は、この地域一帯に普及していたのではないかと思われる。しかし、山王遺跡のスモモ、ソバ、ベニバナは本遺跡では出土せず、逆に本遺跡で比較的多産するイヌビエーヒエは、山王遺跡ではヒエ？とされ

ているものが１個体出土している程度といった違いもある。両遺跡では対象としている時期が異なるので、はっきりとしたことは言えないが、スモモ、ソバ、ベニバナ、イヌビエ－ヒエといった一部の分類群については、両遺跡間に栽培・利用状況の差異があった可能性も考えられる。

古植生についてみると、草本において多様な水生植物が目立つ特徴がある。具体的には、湿地性ないし抽水植物のミクリ属、ヘラオモダカ、オモダカ科、ウキヤガラ、ホタルイ属A、ホタルイ属B、イボクサ、ミゾソバ、サデクサ、サナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種、ツリフネソウ、ドクゼリ属またはセリ属、タカサブロウ、浮葉ないし沈水植物のヒルムシロ属、コウホネ属、ヒシ属である。これらは、河川や湿地に生育していたと考えられるが、ヒルムシロ属、コウホネ属、ヒシ属の出土から、幾分水深のある水域が存在していたことが予想される。緩やかな流水中に生育する分類群を含むヒルムシロ属は下層（19層）では比較的目立つが、下層（18層）では減少し、17層より上では全く出土しなくなる。これは、堆積層が下層（14～17層）から砂質に変化することと対応している。

一方、エノコログサ属、カナムグラ、シロザ近似種、ヒユ属、カタバミ属、エノキグサ、メナモミ、オナモミなども出土しており、畑地や路傍のような幾分乾き気味の場所も存在していたことが予想される。木本については、ゴミ捨て場に投棄されたと予想されるオニグルミ、ウメ、モモを除くと、下層（19層）でモミ属、キイチゴ属、サンショウ、ブドウ属、ヒサカキ、下層（18層）でキイチゴ属、下層（14～17層）でコナラ属、コブシ、クマノミズキが僅かに出土したのみである。これらが付近に生育していたと思われるが、出土分類群数・個数共に少なく、森林植生についての情報は乏しい。このような状況から、ＳＸ1200遺物包含層の付近には森林と呼べるほどの林分はみられなかった可能性が考えられる。

鎌倉時代～南北朝時代（13～14世紀頃）の栽培･利用状況および周辺植生（Ｂ区ＳＫ1310・ＳＫ1311、ＳＸ1397）

出土した栽培･利用植物は、クリ、メロン仲間が出土していないことを除いて12世紀と同様である。これらは鎌倉時代～南北朝時代（13～14世紀代）を中心とした屋敷跡（屋敷Ｇ・Ｇ’）に関わる遺構土したが、直接投棄されたものや、生活の場で投棄されたものが流入したと予想される。古植生については、ＳＸ1397遺物包含層の中層からホタルイ属Ｂ，サナエタデ近似種，オニバス，ヒシ属が出土しており、湿地跡にこれらが生育していたと考えられる。オニバス、ヒシ属の出土から、幾分水深のある水域も存在していたであろう。

ＳＫ1310・1311土壙では、ホタルイ属Ａ、ホタルイ属Ｂ、イボクサ、ナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種、スズメウリが出土しており、湿地跡からの流入や遺構自体が水溜りのような環境であったことが予想される。また、エノコログサ属、ギシギシ属、シロザ近似種、ヒユ属、エノキグサ、メナモミは、特にＳＫ1311で目立つ為、これらの生育に適した幾分乾き気味の場所も存在していたと予想される。木本では、オニグルミ、ウメ、モモは利用後に投棄されたと考えられ、トチノキもその可能性がある。これらを除くと、ＳＫ1310でイヌシデ、ＳＫ1311でキイチゴ属、ブドウ属、ＳＸ1397中層でキイチゴ属が僅かに出土したのみであり、森林植生についての情報に乏しく、これら遺構の付近には森林と呼べるほどのものはみられなかった可能性が考えられる。

室町時代(15～16世紀後半頃)の栽培・利用状況および周辺植生(２区ＳＫ1205、４区ＳＤ1284)

４区ＳＤ1284区画溝跡はオニグルミ、その他はモモを出土したのみであった。２区ＳＫ1205土壙では、栽培植物としてイネ、アサ、ナスが出土したが、個数としては多くはない。多産ないし目立つのは、ホタルイ属Ａ、イボクサ、サナエタデ近似種、ヒシ、ドクゼリ属またはセリ属であり、これらが生育するような湿地がみられ、ヒシの出土から若干水深のある場所もみられたであろう。また、エノコログサ属、シロザ近似種、イヌコウジュ属、メナモミが生育するような路傍ないし畑地といった幾分乾き気味の場所もみられたであろう。木本についてはニワトコが１個体出土したのみであり、森林植生についての情報は乏しい。

江戸時代（17世紀後半以降）の栽培・利用状況および周辺植生（Ａ区ＳＥ1643）

出土したもののうち、栽培植物ないしその可能性が高いものは、イネ、オオムギ、ヒエ、アワ、アサ、マメ科、シソ近似種、メロン仲間、ヒョウタン仲間、ベニバナである。ムギ類ではオオムギは出土したがコムギが出土せず、キビ族ではヒエ、アワは出土したがキビが出土しない特徴があり、このことはムギ類・キビ族の栽培・利用状況を反映している可能性が考えられる。マメ科については大半がササゲ属（アズキやリョクトウの類）と考えられる。また、採油用などとして栽培・利用されるベニバナが１点と少ないながら出土したことは注目される。

周辺植生については、木本は出土分類群数・個数ともに少なく、森林植生についての情報量に乏しい。出土したのは、落葉広葉樹のケヤキ、クワ属、サンショウ、蔓性のブドウ属であった。草本類についてみると、湿地ないし抽水性のヘラオモダカ、ウキヤガラ、ホタルイ属、サナエタデ近似種、ボントクタデ、ヤナギタデが出土することから、水位の低い湿地ないし水溜りの存在が予想されるが、イネが多産していることから水田が存在していた可能性も考えられる。また、エノコログサ属、シロザ近似種、ヒユ属、エノキグサ、メナモミなどが出土することから、路傍ないし畑地のような乾いた場所もみられたと考えられる。

第３節　出土木製品の分析

ここでは、本遺跡から出土した木製品のうち計121点についての樹種同定結果を報告する。対象とする木製品の器種は、遺跡北部および南部の井戸、土坑、区画溝跡、遺物包含層などから出土した櫛・漆器類・折敷・曲物・柄杓・エブリ・横槌・下駄（差歯・連歯）・木錘・井戸枠・棺桶など多岐にわたっており、これらの木製品の樹種を比較することで、器種別の用材選択がより明瞭になることが期待される。また、これら木製品の時代は12世紀～17世紀以降までと様々であり、時代的な樹種選択の変容についても注目される。特にいままで宮城県内では類例の少なかった12世紀・13世紀代の木製

調査区	遺　構	点数
2	ＳＢ1358(S1・W1)	1
	ＳＤ1209南辺	1
	ＳＥ1211	2
	ＳＫ1205	1
	ＳＫ1241	1
	ＳＤ1202	1
3	ＳＤ1100	1
	ＳＫ1260	2
	ＳＫ1260	1
4	ＳＸ1200	39
	ＳＤ1284	1
	ＳＫ1285	3
5	ＳＥ1455	3
	ＳＥ1456	1
	ＳＫ1454	13
	ＳＫ1458	5
	ＳＫ1471	1
	ＳＤ1494	2
A	ＳＤ1633	1
	ＳＤ1633Ａ	3
	ＳＥ1652	1
	ＳＥ1643	3
B	ＳＤ1319	1
	ＳＤ1501Ｂ	1
	ＳＥ1534	4
	ＳＥ1539	8
	ＳＫ1310	1
	ＳＸ1397-中層	7
	ＳＸ1397-上層	4
	ＳＤ2241	2
C	ＳＥ1604	1
	ＳＥ1611	1
	ＳＸ1607	1
	ＳＸ1616	3
計		121

表6. 樹種同定対象一覧

品が含まれているということは、資料の蓄積という面においても貴重であるといえる。

Ⅰ．方法

出土木製品から直接、剃刀を用いて破損面などを中心に横断面・放射断面・接線断面の３断面の切片を作成し、ガムクロラール(アラビアゴム，抱水クロラール，グリセリン，蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとした。検鏡は光学顕微鏡を用いて40～400倍で行い、同定は現生標本との対照に拠った。なお、井戸枠材の中には樹皮の残存が認められるものがあった為、作成した切片の最外年輪および形成層の状態により、伐採季節の推定を行った。同定したプレパラートはMIG-の頭文字と通し番号を付してパレオ・ラボに保管した（MIG-1093～1213)。

保管番号MIG-	番号	調査区	遺構名	層位	器種	登録No.	樹種	時代
1093	1	B	ＳＸ1397	中層	横槌	01201	コナラ節	13世紀
1094	2	2	ＳＤ1209-南辺	底面付近	不明	01202	クマノミズキ類	16世紀後半～17世紀前半
1095	3	2	ＳＢ1358(S1･W1)		柱材	01203	クリ	16世紀後半～17世紀前半
1096	4	4	ＳＸ1200	下層(19層)	杓子	01204	モミ属	12世紀前半
1097	5	4	ＳＫ1285	堆積土	連歯下駄	01205	ケヤキ	15世紀～16世紀後半
1098	6	3	ＳＫ1260	堆積土	漆椀	01206	ブナ属	15世紀～16世紀後半
1099	7	2	ＳＤ1233	堆積土	漆椀	01207	ブナ属	
1100	8	4	ＳＤ1284	堆積土	皿	01208	ブナ属	15世紀～16世紀後半
1101	9	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	不明	01209	モミ属	12世紀前半
1102	10	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	不明	01210	モミ属	12世紀前半
1103	11	2	ＳＫ1205	堆積土	建築部材	01211	モクレン属	15世紀～16世紀後半
1104	12	B	ＳＸ1397	中層	鞘	01212	モミ属	13世紀頃
1105	13	B	ＳＸ1397	中層	漆鉢	01213	ケヤキ	13世紀頃
1106	14	B	ＳＸ1397	中層	不明	01214	アサダ	13世紀頃
1107	15	B	ＳＸ1397	中層	建築部材	01215	コナラ節	13世紀頃
1108	16	B	ＳＸ1397	中層	円形曲物底板	01216	モミ属	13世紀頃
1109	17	B	ＳＸ1397	上層	漆椀	01217	ケヤキ	13世紀頃
1110	18	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	漆箆	01218	モミ属	12世紀前半
1111	19	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	箸	01219	モミ属	12世紀前半
1112	20	3	ＳＫ1260	６層	底板楕円形曲物底板	01220	ヒノキ科	15世紀～16世紀後半
1113	21	2	ＳＫ1241	堆積土	井戸枠(刳抜き)	01221	サワグルミ	15世紀～16世紀後半
1114	22	B	ＳＫ1310	堆積土	漆小皿	01222	ケヤキ	13世紀頃
1115	23	4	ＳＸ1200	下層(18層)	櫛	01223	イスノキ	12世紀前半
1116	24	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	櫛	01224	モッコク	12世紀前半
1117	25	4	ＳＸ1200	下層(18層)	櫛	01225	イスノキ	12世紀前半
1118	26	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	鞘	01226	ヒノキ	12世紀前半
1119	27	B	ＳＸ1397	上層	手火	01227	スギ	13世紀頃
1120	28	B	ＳＸ1397	上層	薪(曲物底板or折敷)	01228	アカマツ	13世紀頃
1121	29	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	曲物側板	01229	モミ属	12世紀前半
1122	30	B	ＳＸ1397	上層	不明	01230	ケヤキ	13世紀頃
1123	31	B	ＳＤ1319	堆積土	柄or部材	01231	モミ属	15世紀～16世紀後半
1124	32	B	ＳＤ2241	堆積土	盆	01232	ケヤキ	15世紀～16世紀後半
1125	33	2	ＳＥ1211	堆積土	建築部材	01233	ナシ亜科	16世紀後半～17世紀前半
1126	34	2	ＳＥ1211	堆積土	部材(炭化材)	01234	ブナ属	16世紀後半～17世紀前半
1127	35	4	ＳＸ1200	下層(18層)	板材	01235	モミ属	12世紀前半
1128	36	4	ＳＸ1200	下層(18層)	手火	01236	アカマツ	12世紀前半
1129	37	4	ＳＫ1285	堆積土	火鑽杵のオサ工具?	01237	モミ属	15世紀～16世紀後半
1130	38	4	ＳＫ1285	堆積土	折敷	01238	モミ属	15世紀～16世紀後半
1131	39	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	手火	01239	アカマツ	12世紀前半
1132	40	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	手火	01240	アカマツ	12世紀前半
1133	41	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	薪	01241	アカマツ	12世紀前半
1134	42	B	ＳＤ2241	堆積土	手火	01242	カラマツ属	15世紀～16世紀後半
1135	43	3	ＳＫ1260	堆積土	漆椀	01243	ブナ属	15世紀～16世紀後半
1136	44	B	ＳＸ1397	中層	部材	01244	モミ属	13世紀頃
1137	45	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	部材	01245	コナラ節	12世紀前半
1138	46	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	部材	01246	コナラ節	12世紀前半
1139	47	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	部材	01247	イヌシデ節	12世紀前半
1140	48	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	薪	01248	クヌギ節	12世紀前半
1141	49	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	手火	01249	スギ	12世紀前半
1142	50	4	ＳＸ1200	下層(14-17層)	手火	01250	アカマツ	12世紀前半
1143	51	3	ＳＤ1100	河床	自然木	01251	ヤナギ属	11世紀以前

(2001年度委託分)

表7. 中野高柳遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

保管番号MIG-	番号	調査区	遺構名	層位	器種	登録No.	樹種	木取り	時代
1144	1	A	ＳＥ1643	堆	漆椀	02201	ブナ属	横木取り	17世紀以降
1145	2	4	ＳＸ1200	中層(13)	連歯下駄	02202	クリ	横木取り(柾目)	12世紀中頃
1146	3	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	漆椀	02203	ケヤキ	横木取り	12世紀後半
1147	4	5	ＳＫ1458	３層	木錘	02210	ナシ亜科	芯持	14世紀前半
1148	5	5	ＳＫ1458	３層	樹皮製底板	02211	ケヤキ	柾目	14世紀前半
1149	6	5	ＳＥ1455	４層	柄杓・側底板	02218	モミ属	柾目	
1150	7	5	ＳＥ1455	４層	柄杓・底板	02219	モミ属	板目	
1151	8	5	ＳＫ1454	堆	木錘	02220	クリ	芯去	15世紀後半
1152	9	5	ＳＫ1454	堆	木錘	02221	クリ	芯去	15世紀後半
1153	10	5	ＳＫ1454	堆	木錘	02222	クリ	芯去	15世紀後半
1154	11	5	ＳＫ1454	堆	木錘	02223	クリ	芯去	15世紀後半
1155	12	A	ＳＤ1633Ａ	堆	漆椀	02226	ブナ属	横木取り	17世紀以降
1156	13	C	ＳＥ1604	底面	折敷・底板	02235	スギ	柾目	13世紀？
1157	14	5	ＳＫ1454	堆	漆椀	02245	ブナ属	横木取り	15世紀後半
1158	15	5	ＳＫ1458	２層	漆盃	02246	ニレ科	横木取り	14世紀前半
1159	16	5	ＳＫ1454	堆	漆大皿	02247	トチノキ	横木取り	15世紀後半
1160	17	5	ＳＥ1456	下層	漆椀	02248	ブナ属	横木取り	13世紀
1161	18-１	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	折敷・底板	02249	スギ	斜め	12世紀後半
1162	18-２				折敷・側板	02249	スギ	柾目	
1163	19	5	ＳＫ1458	３層	エブリ	02250	モクレン属	板目	14世紀前半
1164	20	5	ＳＥ1455	３層	竪杵	02251	クヌギ節	芯去	
1165	21	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	櫂	02252	コナラ節	板目	12世紀後半
1166	22	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	漆椀	02204	ケヤキ	横木取り	12世紀後半
1167	23	5	ＳＫ1454	堆	横櫛	02205	ツツジ科	縦木取り(柾目)	15世紀後半
1168	24	4	ＳＸ1200	上層(12)	横櫛	02206	イスノキ	縦木取り(柾目)	12世紀後半
1169	25	5	ＳＫ1471	堆	底板	02207	クロベ	柾目	
1170	26	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	弓？	02208	モミ属	芯持	12世紀後半
1171	27	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	エブリ？	02209	コナラ節	柾目	12世紀後半
1172	28	5	ＳＫ1454	上層(9・10)	不明（筒状）	02212	アスナロ	柾目	15世紀後半
1173	29	5	ＳＫ1454	堆	柄杓・側板	02213	アスナロ	柾目	15世紀後半
1174	30	5	ＳＫ1454	堆	横槌	02214	ブナ属	芯持？	15世紀後半
1175	31	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	柄	02215	ケンポナシ属	芯去	12世紀後半
1176	32	5	ＳＫ1458	２層	折敷・底板	02216	クロベ	柾目	14世紀前半
1177	33	5	ＳＫ1454	堆	木錘	02224	クリ	芯去	15世紀後半
1178	34	A	ＳＥ1652	底面	差歯下駄（歯）	02227	ケヤキ	板目	17世紀以降
1179	35	A	ＳＤ1633Ａ	堆	漆椀	02229	ブナ属	横木取り	17世紀以降
1180	36	C	ＳＸ1616	堆	数珠	02230	カキノキ属	削り出し	17世紀以降
1181	37	B	ＳＤ1501Ｂ	堆	不明（球状）	02232	ヒノキ	削り出し	13～14世紀頃
1182	38	C	ＳＸ1607	堆	漆椀	02241	ケヤキ	横木取り	13世紀頃
1183	39	5	ＳＫ1454	堆	漆椀	02242	トチノキ	横木取り	15世紀後半
1184	40	4	ＳＸ1200	上層(12)	柄杓・底板	02244	スギ	柾目	12世紀後半
1185	41	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	漆椀	02216	ケヤキ	横木取り	12世紀後半
1186	42	5	ＳＫ1454	堆	底板	02225	クロベ	板目	15世紀後半
1187	43	A	ＳＤ1633Ａ	堆	鎌柄	02228	ケンポナシ属	芯去	17世紀以降
1188	44	C	ＳＥ1611	堆	板草履	02231	アスナロ	柾目	
1189	45	4	ＳＸ1200	イカク	曲物・側板	02223	モミ属	柾目	12世紀後半？
1190	46	4	ＳＸ1200	イカク	手火	02234	クロマツ	半裁状	12世紀後半？
1191	47	4	ＳＸ1200	上層(12)	手火	02236	マツ属複維管束亜属	芯去り	12世紀後半
1192	48	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	底板	02237	モミ属	板目	12世紀後半
1193	49	4	ＳＸ1200	上層(9・10)	不明（捧状）	022378	スギ	柾目	12世紀後半
1194	50	A	ＳＤ1633	上層(12)	漆小皿	02240	—		17世紀以降
1195	51	4	ＳＸ1200	上層(12)	折敷・側板	02243	スギ	角状(ニ方柾)	12世紀後半
1196	52	B	ＳＥ1534	埋	枠横桟・東	02253	17世紀以降？	芯持	17世紀以降？
1197	53	B	ＳＥ1534	埋	枠横桟・西	02254	エゴノキ属	芯持	17世紀以降？
1198	54	B	ＳＥ1534	埋	枠横桟・南	02255	カエデ属	芯持	17世紀以降？
1199	55	B	ＳＥ1539	埋	枠上段横桟・東	02256	コナラ節	芯持	17世紀以降？
1200	56	B	ＳＥ1539	埋	枠上段横桟・西	02257	クリ	芯持	17世紀以降？
1201	57	B	ＳＥ1539	埋	枠上段横桟・南	02258	クリ	芯持	17世紀以降？
1202	58	B	ＳＥ1539	埋	枠上段横桟・北	02259	クリ	芯持	17世紀以降？
1203	59	B	ＳＥ1539	埋	枠下段横桟・東	02260	クリ	半裁	17世紀以降？
1204	60	B	ＳＥ1539	埋	枠下段横桟・西	02261	クリ	半裁	17世紀以降？
1205	61	B	ＳＥ1539	埋	枠下段横桟・南	02262	クリ	みかん割(四分割)	17世紀以降？
1206	62	B	ＳＥ1539	埋	枠下段横桟・北	02263	クリ	みかん割(四分割)	17世紀以降？
1207	63	C	ＳＸ1616	埋	棺桶底板	02264	マツ属複維管束亜属	斜め	17世紀以降？
1208	64	C	ＳＸ1616	埋	棺桶側板	02265	針葉樹材	柾目	17世紀以降？
1209	65	A	ＳＥ1643	堆	底板	02266	ハンノキ亜属	柾目	17世紀以降
1210	66	A	ＳＥ1643	堆	自在鉤	02267	ユズリハ属類似種	柾目	17世紀以降
1211	67	5	ＳＤ1494	堆	差歯下駄（歯）	02268	ケヤキ	板目	17世紀以降
1212	68	5	ＳＤ1494	堆	不明（円柱状）	02269	ケヤキ	板目	17世紀以降
1213	69	B	ＳＤ1534	埋	枠側板	02239	タケ亜科		17世紀以降？

(2002年度委託分)

表8. 中野高柳遺跡出土木製品の樹種同定結果

Ⅱ．結果

樹種同定の結果の一覧を表７・８に示す。樹種同定の結果検出された分類群は計31分類群で、内訳は針葉樹材でカラマツ属・アカマツ・クロマツ・モミ属・スギ・ヒノキ・クロベ・アスナロの計８分類群、広葉樹材でサワグルミ・ヤナギ属・ハンノキ亜属・イヌシデ節・アサダ・ブナ属・コナラ節・クヌギ節・クリ・ケヤキ・モクレン属・モッコク・イスノキ・ナシ亜科・カエデ属・トチノキ・ケンポナシ属・クマノミズキ類・ツツジ科・カキノキ属・エゴノキ属の計22分類群、そのほかタケ亜科である。なお、伐採季節についてはMIG-1196・1197・1198の井戸枠材は夏に伐採されており、MIG-1199の井戸枠材は早春にそれぞれ伐採されていた。下に、検出された分類群の解剖学的な記載を行って同定の根拠を提示するとともに、写真図版に代表的な切片の光学顕微鏡写真を掲げる。なお、記載に示さないもので、表中にマツ属複維管束亜属とあるのはアカマツ・クロマツのどちらの材か、ニレ科としたものはケヤキ・エノキ属・ニレ属のいずれの材か、ヒノキ科としたものはヒノキ・サワラ・アスナロ・クロベ・ビャクシン属のいずれの材か、それぞれ材組織の乾燥や保存不良などで区別がなし得なかったものである。また対象とした木製品のうち、MIG-1194の漆盃は皮膜のみで木胎部が残存しておらず、切片の採取が不可能であった。

Ⅲ．考察

器種別の構成樹種の傾向

ここでは、主な器種別にその樹種構成の特徴とその背景についてみていくこととする。

（1）櫛

まず櫛には、５点中３点とイスノキが最も多く見出されている（表９）。イスノキは日本産の木材の中でも最も重硬かつ強靭な部類の材で、非常に割れにくいので櫛の用材として優れており、各地で出土例がある。木取りも製作過程で割れにくいように繊維方向を製品の縦方向に取った縦木取りである。イスノキは現在の分布からみても過去に本遺跡周辺に自生していた可能性は考えられなく、製品(あるいは木材)自体が搬入されたものであることを示唆している。その他では、イスノキ製のものと同時期のものでモッコクの材が、また15世紀後半のものでツツジ科の材がそれぞれ１点ずつみいだされており、イスノキには及ばないもののいずれも緻密で肌目が細かく、硬く割れにくい材が用いられていることがわかる。モッコクも時として櫛の用材として見出される材で、イスノキ製のものと同様に分布からみて搬入品であると考えられる。一方ツツジ科の材が櫛に見出されることは珍しく、こちらは木材が現地調達された可能性が残されている。なお、同じツツジ科の材利用としては、仙台市高田Ｂ遺跡出土の下駄にヨウラクツツジ属が用いられている事例がある（鈴木三男・能城修一2000）。

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	15世紀後半頃
櫛(5)	イスノキ(3)	3	
	モッコク(1)	1	
	ツツジ科(1)		1

表9. 櫛の用材

周辺の遺跡における櫛の樹種同定例を参照してみると、多賀城市市川橋遺跡においてイスノキ，ツゲ，カナメモチが(松葉礼子2001ａ)、仙台市下飯田遺跡や仙台市中在家南遺跡においてイスノキが(高橋利彦1995、 鈴木三男ほか1996)、多賀城市山王遺跡多賀前地区でツゲが見出されており(松葉礼子・

鈴木三男1996)、イスノキ製の櫛が見出されているという点で共通性を有するものの、モッコクやツツジ科製の櫛が使用されていた点は特徴的であるといえる。

（2）手火・薪

手火としては12世紀・13世紀頃のものが出土しており、アカマツ・クロマツ・カラマツ属・マツ属複維管束亜属といった火付きが良く樹脂分の多い針葉樹材が多く用いられている(表10)。このなかで注目されるのはカラマツ属である。母植物はカラマツと考えられるが、現在の分布からみると県内の一部の高海抜地域にしか生育していない。周辺の遺跡における手火の用材としてもアカマツやクロマツといったマツ類が圧倒的に多く用いられており(例えば、松葉礼子・鈴木三男1996、 松葉礼子 2001a)、本遺跡の結果はこれらと調和的である。

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	13世紀頃
手火(9)	アカマツ(4)	4	
	カラマツ属(1)		
	クロマツ(1)	1	
	スギ(2)	1	1
	マツ属複維管束亜属(1)	1	
薪(3)	アカマツ(2)	1	1
	クヌギ節(1)	1	

表10. 手火・薪の用材

薪としては３点中２点とアカマツが、その他にクヌギ節が１点用いられている。クヌギ節の材は燃料材として最も典型的なものの一つで、原木の乾燥により広放射組織(木口面で放射方向に走る髄線として確認される)に沿って割れが入り、そのため火付きがよい特徴がある。木材の採取という観点からは、クヌギ節(クヌギと考えられる)の樹種は高い萌芽特性を有し、幹が株立ち状になることも多いことから薪を採取し易かったことも想定される。アカマツはクヌギ節の樹種のように栄養繁殖はしないので幹が株立ち状になることはないが、植生への過度の干渉により周辺で増加し始めており、薪の採取に適度な個体もみられたものと想定される。

（3）挽物・刳物

挽物・刳物の類としては椀・大皿・小皿・鉢・盃・盆があり、ほとんどは漆塗りの製品である。これらの製品に使用されていた樹種は広葉樹材のケヤキ・トチノキ・ブナ属で、かつ日本における刳物・挽物の用材として最も典型的なものである(表11)。ケヤキ・トチノキ・ブナ属の材はいずれも均質な材質を有し、また木目が美しいことで知られている。全体でみるとケヤキが最も多く、椀・小皿・鉢・盆など形状的にも様々な製品に用いられている。材質に着目してみると、椀には硬く回転成形に適するケヤキ・ブナ属材が用いられているのに対して、大皿には軽軟で切削り容易なトチノキ材が見出されていて対称的であり、製作過程で要求される材質に見合った樹種が選択されているといえる。

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	13～14世紀頃	15～16世紀後半	17世紀以降
漆椀(13)	ケヤキ(4)	3	2		
	ブナ属(7)		1	3	3
	トチノキ(1)			1	
漆小皿(2)	ケヤキ(1)		1		
	ニレ科(1)		1		
漆鉢(2)	トチノキ(1)			1	
	ケヤキ(1)		1		
漆盆(1)	ケヤキ(1)			1	
皿(1)	ブナ属(1)				1

表11. 挽物・刳物の用材

（4）農具・漁撈具

木錘にはクリ，ナシ亜科といった重い材質の樹種が選択されており、木錘の使用法を考えれば納得のいく樹種選択である。６点中５点とクリが多用されていることや、またその法量が揃っていることは、なるべく同じ重さのもので揃えようとした結果とみられる。木取りは芯を外してあり、おそらく

一本の原木から効率よく取られたものであろう。対してナシ亜科のものは芯持であるが、これはナシ亜科に小高木程度の樹種が多く適度な幹材をそのまま利用できたことや幹の中心が空洞になることもほとんどない樹種であることが要因に考えられる。一般に、木錘には決まった樹種が選択されるわけではないが、このように重い材質のものがその用材に選択される傾向にある。

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	13～14世紀頃	15～16世紀後半	17世紀後半以降
木錘(6)	クリ(5)			5	
	ナシ亜科(1)		1		
横槌(2)	コナラ節(1)		1		
	ブナ属(1)			1	
竪杵(1)	クヌギ節(1)			1	
櫂(1)	コナラ節(1)	1			
鎌柄(1)	ケンポナシ属(1)				1
エブリ(1)	モクレン属(1)		1		
エブリ？(1)	コナラ節(1)	1			

表12. 農具・漁撈具の用材

横槌にはコナラ節・ブナ属といった樹種が、竪杵にクヌギ節の材が、櫂にはコナラ節の材が用いられていた。いずれも重硬な弾性のある材であり、これらの製品の使用法を考慮した用材選択が認められる。

鎌柄にはケンポナシ属の材が用いられているが、これは珍しい結果とも考えられる。ケンポナシ属の材質はケヤキやヤマグワなどに似て靭性があり、材質からみれば柄の用材として選択されていても不思議ではない。これ以外にも本遺跡では柄にケンポナシ属の材が見出されている(表16)。時代は異なるが高田Ｂ遺跡出土の弥生中期のもので直柄平鍬未製品と農具の柄とみられる製品に用いられている例が知られている(鈴木三男・能城修一2000)。

エブリにはコナラ節，モクレン属が各１点ずつ見出されている。コナラ節の材は重硬かつ弾性に富む材質を有するので耕起に耐え得るよう丈夫な材が選択されていると考えられる。コナラ節の材はクヌギ節に比べれば圧倒的に少ないが県内では古くからこうした農具の用材に認められている。対してモクレン属の材は概して軽軟であり、材質のみからみると物足りない面があるが、操作性を意図して軽快な作りにしたのか、また時代的には12～14世紀頃と考えられており耕起の面で時代的な差異が影響しているのか今のところ不明である。

（5）曲物・柄杓・折敷その他の食膳具

曲物・柄杓・折敷といった容器・食膳具の類にはそのほとんどに針葉樹材が用いられているという点で、一般的な傾向に合致する結果である。広葉樹材はケヤキとハンノキ亜属の材が各1点ずつ見出されているのみであり、いずれも底板に用途が限定されている。用いられていた針葉樹材はモミ属・スギ・アスナロ・クロベと実に様々な樹種が用いられており、こうした針葉樹材が通直でかつ板目・柾目のどちらにも割裂容易で板材をとり易いことから用いられたのであろう。モミ属材の多用は山王遺跡多賀前地区や市川橋遺跡といった近隣の遺跡において確認されてきた傾向であり（松葉礼子・鈴木三男1996、松葉礼子 2001ａ）、またスギ材の多用は本遺跡と離れた一本柳遺跡において確認されてきた傾向であるが（松葉礼子1998・2001ｂ）、本遺跡ではモミ属とスギの材がほぼ同等に用いられている特徴が認められる。また、クロベの材が用いられている点も本遺跡の特徴として挙げられる。周辺の遺跡でクロベが見出されている事例は少なく、押口遺跡・高田Ｂ遺跡などに限られる（鈴木三男ほか1996、鈴木三男・能城修一 2000)。

木取りをみると、曲物・柄杓の側板は柾目取りされているのに対し、曲物・柄杓・折敷の底板では板目取り・柾目取り・斜め取り（追柾目）と一般的傾向はなく、木取りに限定されていないことがわかる。側板に柾目板が用いられているのは、板目に取るのと比べて薄板にし易く、また曲げやすい為であろう。

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀頃	13～14世紀	15～16世紀後半	17世紀後半以降
曲物・側板(２)	モミ属(２)	２			
円形曲物底板(１)	モミ属(１)		１		
楕円形曲物底板(１)	ヒノキ科(１)			１	
柄杓・側底板(１)	モミ属(１)			１	
柄杓・側板(１)	アスナロ(１)			１	
柄杓・底板(２)	スギ(１)	１			
	モミ属(１)			１	
折敷(１)	モミ属(１)			１	
折敷・側板(１)	スギ(１)	１			
折敷・底板(４)	クロベ(２)		１	１	
	スギ(２)	２			
底板(１)	クロベ(２)			１	
	ハンノキ亜属(１)				１
	モミ属(１)	１			
樹皮製底板(１)	ケヤキ(１)		１		
箸(１)	モミ属(１)	１			
漆箆(１)	モミ属(１)	１			
杓子(１)	モミ属(１)	１			

表13. 曲物･柄杓･折敷･その他の食膳具の用材

（６）履物類

これまで県内で確認されてきた下駄の用材としてはケヤキが多く、その次にクリが多い傾向にあり、また中には差歯下駄（特に歯）にはケヤキが多く、連歯下駄にはクリが多い傾向も認められる（例えば、高橋利彦1994、松葉礼子1998ｂ・2001ｂ）。本遺跡の結果においてもケヤキは多用されており、また差歯下駄にはすべてケヤキが，連歯下駄にはケヤキだけでなくクリが見出されており、県内の一般的な傾向に付随するものであるといえる。

器種(点数)	樹種(検出数)	12世紀	15～16世紀後半	17世紀後半以降	時期不明
差歯下駄(２)	ケヤキ(２)			２	
連歯下駄(２)	クリ(１)	１			
	ケヤキ(１)		１		
板草履(１)					１

表14. 履物の用材

板草履としてはアスナロが見出されている。こちらも用材としてはスギ・ヒノキ属・モミ属といった針葉樹材が用いられており（高橋利彦1995、松葉礼子1998ｂ・2001ｂ）、針葉樹材が用いられているという点で共通性が見出せる。こうした傾向は、製作過程での板材への製材のし易さや、材が軽いことから軽快な作りにできることなどが影響しているものとみられる。

（７）井戸枠

対象とした井戸枠材は、２区ＳＫ1241土坑が1点，Ｂ区ＳＥ1534井戸跡が3点，Ｂ区ＳＥ1539井戸跡が９点である。ＳＫ1241の井戸枠は刳貫きの井戸側材で、切削り加工の容易なサワグルミの材が用いられていた。サワグルミは通直な伸長をし、かつ大径になる為、材質と合わせて刳貫きの井戸枠を製作する条件を備え

遺構	器種(点数)	樹種(検出数)	15～16世紀後半	17世紀後半以降
ＳＫ1241	井戸枠(刳貫き)(１)	サワグルミ(１)	１	
ＳＥ1534	井戸枠(横桟)(４)	エゴノキ属(１)		１
		カエデ属(２)		２
ＳＥ1539	井戸枠(横桟)(８)	コナラ節(１)		１
		クリ(７)		７
	井戸枠(１)	タケ亜科(１)		１

表15. 井戸枠の用材

ているといえる。遺跡周辺の低地や丘陵の渓畔にはそうしたサワグルミがみられたのであろう。

ＳＥ1534とＳＥ1539の構造は共通する。タケ亜科（竹笹類）の材を簾状に組み、数段の横桟で保持している。ＳＥ1534の横桟は３点中カエデ属の材が２点、エゴノキ属の材が１点用いられており、丈夫な材が用いられている。木取りは芯持材を加工したものである。なお、この井戸枠材はすべて夏の伐採であり、このことはおそらく原木が同じ林で採取されたことを示唆しているのであろう。

ＳＥ1539は２段分の横桟で、全８点中７点とほとんどにクリが用いられている。残りの1点はコナラ節で、いずれも丈夫な材である。特にクリの材は水質に対する耐性が高いことで知られている。木取りをみると斉一ではなく、芯持，半裁，みかん割材から加工した材が用いられている。これは、例えばたまたま大径のクリ材があってその分割材を井戸材に用いたのではなく、わざわざ比較的小径の原木を少なくとも数本用いていることを意味しており、クリ材の重点的な使用の背景には丈夫で水質に強いクリの材質への認識と嗜好性が働いたものと考えられる。なお、7点あるクリ材のうち、1点は早春に伐採されており、コナラ節の1点は夏に伐採されている。仮に残りの6点のクリ材が同じ時期に伐採され、それほど時間をおかず井戸枠が構築されたのならば、コナラ節の材が1点のみ用いられているのは補修されたことを示している可能性もある。

（８）その他

棺桶は側板・底板が１点ずつあり、そのうちの１点は材組織の保存が悪く針葉樹材であることまで

器種（点数）	樹種（検出数）	11世紀以前	12世紀	13～14世紀	15～16世紀後半	16世紀後半～17世紀前半	17世紀後半以降	不明
棺桶側板（１）	針葉樹材（１）						1	
棺桶底板（１）	マツ属複維管束亜属（１）						1	
柄（１）	ケンポナシ属（１）		1					
柄or部材（１）	モミ属（１）						1	1
鞘（２）	ヒノキ（１）		1					
	モミ属（１）			1				
数珠（１）	カキノキ属（１）						1	
弓？（１）	モミ属（１）		1					
火鑽杵のオサ工具?（１）	モミ属（１）				1			
自在鉤（１）	ユズリハ属類似種（１）						1	
柱材（１）	クリ（１）					1		
建築部材（３）	コナラ節（１）			1				
	ナシ亜科（１）					1		
	モクレン属（１）					1		
部材（５）	イヌシデ節（１）		1					
	コナラ節（２）		2					
	モミ属（１）			1				
	ブナ属（１）					1		
不明（円柱状）（１）	ケヤキ（１）						1	
不明（球状）（１）	ヒノキ（１）			1				
不明（筒状）（１）	アスナロ（１）				1			
不明（捧状）（１）	スギ（１）		1					
不明（５）	アサダ（１）			1				
	ケヤキ（１）			1				
	クマノミズキ類（１）					1		
	モミ属（２）		2					
自然木（１）	ヤナギ属（１）	1						

表16. その他の器種の用材

しか同定し得なかったが、もう一方の1点（底板）にはマツ属複維管束亜属の材が用いられており、対朽性を意図した使用が伺える。柄or部材とされたものにはモミ属が見出されているが、材質は軽軟であり樹種のみからみれば柄よりも部材であろうか。刀の鞘にはヒノキ・モミ属が各1点ずつ見出されている。ヒノキは宮城県内には分布しない為、製品あるいは木材の搬入が示唆される。同様にヒノキが用いられ搬入品と考えられるものに球状の不明木製品がある。

建築材や柱材には、コナラ節・クリ・ナシ亜科といった丈夫な材が多い。自在鉤には粘りのあるユズリハ属とみられる材が選択されていた。数珠にはカキノキ属の材が用いられていたが、カキノキ属の材は硬く光沢が出るほか色の濃淡に富み、また板目面（接線断面）でリップルマークを呈し、心材部分ではしばしば黒色の縞が入り混じって独特の紋様となる。作成した切片の色からみると出土した数珠に心材部分は用いられてはいないが、材が硬いことから数珠にしたときに数珠玉が突き合う音も良く、また独特の美しい材色を有するために数珠に用いたときに映えることから選択されたのであろう。ＳＸ1200が湿地化する前の河川跡ＳＤ1100河川跡出土の自然木は河畔に多いヤナギ属であり、周囲の環境と整合的な結果である。

時代別の変遷の特徴

時代別の変遷で注目されるものに、椀の用材の変容が挙げられる。用材としては12～14世紀頃にはケヤキが用いられていたのに対し、15世紀以降になるとブナ属がケヤキにとって変わるようになる特徴がある。このように挽物の用材がケヤキから次第にブナ属材への移行することは県内における中世の遺跡において特徴的に認められるようである。例えば、ブナ属材が用いられているのは最も早いもので山王遺跡多賀前地区出土の９世紀末～10世紀初頭の漆器があり、それ以前にはケヤキが用いられているのみでブナ属は用いられていない(松葉礼子・鈴木三男1996)。また市川橋遺跡における10世紀後半以降の漆器、仙台市中田南遺跡における中世後半の漆器、および山王遺跡町地区における近世の漆器はすべてブナ属材が用いられており(松葉礼子1998ａ・2001a、高橋利彦1994)、仙台市高田Ｂ遺跡では近世の漆器のほとんどにブナ属材が用いられている(鈴木三男・能城修一2000)。したがって、現在蓄積されている資料に鑑みる限り、およそ10世紀前後を境にして挽物へのブナ属材の導入が開始されていることがわかる。

この変化の要因として平地林としてのケヤキが開発により失われたため、より遠方の材が用いられるようになったという考えがある(松葉礼子1998b)。このように現在の植生からみて、一見県内の比較的高標高の山域からもたらされたと考えられる材は今回の調査で他にもいくつか検出されており、手火に用いられていた13世紀頃のカラマツ属の材、折敷などの底板に用いられていた15世紀～16世紀後半頃のクロベの材がある。しかしながら、本遺跡では10世紀以降も13世紀頃までケヤキが挽物に見出されており、それ以降も底板や下駄にケヤキが見出されている。また、山王遺跡町地区や高田Ｂ遺跡では近世の下駄(差歯の歯・台、連歯含む)にケヤキが多用されている例もある(松葉礼子1998a、 鈴木三男・能城修一2000)。その上、今回同時に行われた花粉分析結果や数例の花粉分析結果(古環境研究所1996ａ・1996ｂ、 守田益宗2000)からは、かつては低標高の丘陵にもブナやイヌブナが生育してい

たことが読み取れ、ブナ属材を用いていることがそのまま遠距離材の使用を示しているものではないことがわかる。同様にクロベもかつてはより低標高の丘陵に生育していた可能性があり、カラマツについても現在の自生地よりも近辺に単木的に分布していたとしてもおかしくない。したがって、単に短距離材の使用から遠距離材の使用という一面では説明しきれない部分がある。本遺跡において13世紀以降になってブナ属・カラマツ属・クロベの材が見出されるようになるのは、中世多賀国府の存在とそれに伴う工人や木地屋といった職人の活動に関連しており、15世紀以降における椀の用材の変化についてはそれ以外に本遺跡の遺構の変遷に関連していることも考えられる。

その他では、いくつかの器種を除いてこれまで宮城県内で行われてきた用材の傾向とほぼ調和的な結果であるといえる。

第４節　まとめ

ここでは、花粉・種実・木製品の各分析での考察を踏まえて、遺跡を取り巻く古環境や、遺跡の人々の栽培植物・木材利用について、12世紀～16世紀における遺構の変遷と併せて総合的に考察したい（註４）。

遺跡およびその周辺の古植生

まず、遺跡を取り巻く古植生であるが、12世紀頃における遺跡の周囲には森林は広がっていなく、数種類の樹木が点在していたに過ぎなかったと考えられる。ただし、遺跡と距離のある周辺の丘陵部には、ブナ・イヌブナ・ナラ類(コナラ・ミズナラなど)を始めとして、シデ類(イヌシデ・サワシバなど)やケヤキなどの落葉性の広葉樹林が広がっており、そこには常緑広葉樹のカシ類（アカガシなど）や、常緑針葉樹のスギも混生していたと考えられる。

13世紀以降の遺跡を取り巻く古植生については、花粉がほとんど産出しなかったことや、分析対象外であることから詳細については明らかでないが、種実分析から推測すると引き続き遺跡の周囲には森林と呼べるようなものはなく、開発の進んだ環境であったとみられる。

次に、局所的な植生についてであるが、多くの遺物が出土した遺跡北部の12世紀頃に相当する湿地跡（ＳＸ1200）には、岸辺～岸辺上部を中心にヤナギタデ・イヌタデ・サナエタデなどのタデ科植物が生育しており、より湿り気のある岸辺を中心にガマ類やヨシ・オギ・カサスゲといったイネ科やカヤツリグサ科の高茎草本が生育していたのではないかとみられる。

これらの植物にさほど覆われないやや水深のある場所にはミクリ類やミツガシワなどが、またぬかるんだ場所にはヘラオモダカ・ツリフネソウ類などの比較的低茎の草本が生育していた。やや岸辺から離れたより水深のある場所には、ヒシ類・ヒルムシロ類・コウホネ類・ヒツジグサ・オニバス・サンショウモなどの多様な水生植物の葉が浮いていたとみられる。これら植物の中には現在希少な種も多く含まれているが、かつてはこうした立地にふつうにみられたのであろう。コウホネ類・ヒツジグサ・ヒルムシロ類・オニバスの生育から水の流れはあってもそれほど早いものではなかったとみられるが、その後、分析地点周囲は堆砂が進み、多様な水生・湿生植物は減少したものとみられる。遺跡南部の13世紀頃に相当する湿地跡(ＳＸ1397)には、やはりオニバスやヒシといった水生植物が生育し

ており、やや水深があり、流れはあっても緩やかであったとみられる。

また、土坑内やその周囲には周囲に比べて比高が低いことを反映して、ヤナギタデやサナエタデなどのタデ科，フトイやサンカクイなどのホタルイ属といったやや湿った立地を好む植物が時代を通じて繁茂していたと考えられる。道端などのやや乾燥した立地にはギシギシ・オナモミ・メナモミ・オオバコなど、現在でもそうした立地に身近な植物がみられたと考えられる。

栽培植物利用・木材利用

栽培植物の検出の傾向は、12～14世紀頃と15～16世紀頃とで異なっていた特徴がある。12～14世紀頃における栽培植物、あるいはその可能性のある植物としては、ウメ・モモ・イネ・コムギ・オオムギ・アサ・シソ属・ナス・ヒョウタン仲間・メロン仲間・イヌビエ－ヒエ・マメ科・ヒシ属・クリ・オニグルミなどがあり、種類・量ともにかなり多いといえるのに対し、15～16世紀頃のものは種類・量ともに僅かである。また、木製品においてもいくつかの器種の用材が12～14世紀頃と15～16世紀頃とで異なっていた。例えば、櫛では12世紀のものはイスノキ，モッコクといった分布圏外の樹種が見出され、15～16世紀頃のものにはそうした樹種ではなく、現地で調達された可能性があるツツジ科の材が用いられていた。同様に分布圏外の樹種としてはヒノキがあり、用いられていたのは刀鞘と不明木製品（球状）で、時代はやはり12世紀頃と13世紀頃のものに限られる。また、椀では12～14世紀頃にはケヤキが用いられていたのに対し､15世紀以降はブナ属の材が用いられていた傾向も認められた。

こうした傾向は、本遺跡の遺構の変遷と深くかかわっていると考えられる。本遺跡では12世紀頃の居住施設は遺跡北東部（屋敷Ｌ～Ｎ）、13～14世紀頃は、南部（屋敷Ｇ・Ｏ・Ｐ）と北部（屋敷Ａ・Ｌ～Ｎ）で確認されている。北部のＳＸ1200遺物包含層の出土遺物は、屋敷Ｌ～Ｎの居住者により廃棄され、また同様に南部のＳＸ1397遺物包含層出土遺物は主として屋敷Ｇの居住者である在地領主層によって廃棄された。したがって、多種類・多量の栽培植物はこうした人々によって大規模に栽培され、流入あるいは利用後廃棄されたものと考えられ、特に近辺で栽培されていた可能性が高い。

例えば、12世紀頃においては、北部の湿地跡からキュウリ属の花粉が検出されている。種子ではメロン仲間に対応するキュウリ属の花粉は、虫媒性であり、その花粉の検出は近辺で花をつけた個体が成育していた、つまり栽培されていたことを指し示しているからである。15世紀頃以降になるとこうした栽培植物がほとんど検出されなくなるのは、この時期のものが北部の武士階級の屋敷跡に伴う遺構から出土したものであるためとみられ､栽培植物は利用されてはいたが量的にも種類的にも少なく、栽培されていても屋敷内の一部で細々としたものであった可能性がある。

同様に木材利用の時代別の特徴も遺構の変遷と併せてみてみると興味深い。12～14世紀の在地領主層とみられる人々は折敷などの木製品の器種からみてもある一定以上の生活水準にあったことは間違いなく、櫛などは搬入品を使用していたとみられる。対して、15世紀以降の人々は明確に遠方からの搬入品といえるものは使用しておらず、県内で材が調達されて製作された製品を使用していたとみられる。本遺跡においてブナ属材が挽物の用材に見出されるのは15世紀以降であるが、周辺遺跡である山王遺跡の多賀前地区や市川橋遺跡ではそれよりも早い時期の10世紀前後から確認されており、ずれ

がある。これらの遺跡はいずれも多賀城周辺の都市的な場の遺跡であり、多賀城内には工房跡とみられる地区も確認されていることから、ブナ属材を提供する木地師の存在が想定されるところである。

本遺跡の北約３㎞には中世多賀国府が想定されている地域があり、そこでは轆轤師・塗師・木地師といった職人が活動していたと考えられる。12～14世紀における木製品の豊富な器種構成やその中に遠隔地からの搬入品が認められることは、こうした多賀国府の存在を抜きに語ることができないであろう。これに対し、15世紀以降の木製品の樹種構成には特徴的な変化がみられ、明確な遠方からの搬入品がないことを考慮すると、請負生産的な契約を結んだ職人から製品が供給されていた可能性も想定される。

（註１） 本稿は、㈱パレオ・ラボから平成15年３月に授受したものである。その後、中野高柳遺跡の報告書は『Ⅱ』・『Ⅲ』を刊行しているが、発掘調査の事実報告を優先したため、本書への収録となった。このため、遺構の解釈や時期については編集者が校正を行った。（註）は、パレオ・ラボからの報告にはなかったものであるが、必要に応じて編集者が新たに設けた。

（註２） ＳＸ1200とＳＸ1397の層位は、前者が『中野高柳遺跡Ⅲ』の図版54、後者は、本書の図版67に対応する。下層（18層）の場合、最初の層名は大別層位、（　）の中は図版の細別層位を示す。

（註３） ＳＤ1284は、『中野高柳遺跡Ⅰ』で報告しているが、その後の検討でＳＤ1289と同一の遺構であり、区画Ｂの西を画する区画溝跡と考えられた。

（註４） 12～14世紀は湿地に遺物包含層が形成されたが、15～16世紀（第Ⅴ期）は調査区内に遺物包含層が確認できなかった。このため、両者の木製品や植物遺体の出土量に大きな違いがみられた。今回の検討は、こうした状況に基づくものであることをあらかじめお断りしておく。

〈引用文献〉

阿部美和・辻　誠一郎(2001)山王遺跡の古代植物遺体群．「山王遺跡八幡地区の調査2―県道『泉―塩釜線』関連遺跡調査報告書Ⅳ―古墳時代後期SD2050B河川跡編」宮城県教育委員会，pp.181-206

古環境研究所(1996a)山王遺跡第24次調査の花粉分析．「多賀城市文化財調査報告書第45集　山王遺跡Ⅰ－仙塩道路建設に係る発掘調査報告書－」多賀城市教育委員会・建設省東北地方建設局，pp.174-179

古環境研究所(1996b)中在家南遺跡の花粉分析．「仙台市文化財調査報告書第213集　中在家南遺跡他　仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書　第2分冊　分析・考察編」仙台市教育委員会，pp.25-38

鈴木三男・能城修一・松葉礼子(1996) 仙台市中在家遺跡群出土木材の樹種．「仙台市文化財調査報告書第213集　中在家南遺跡他　仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書　第2分冊　分析・考察編」仙台市教育委員会，pp.339-413

鈴木三男・能城修一(2000) 仙台市高田B遺跡出土木材の樹種と木材利用．「仙台市文化財調査報告書第242集　高田B遺跡　第2分冊　分析・考察編」仙台市教育委員会・宮城県道路公社，pp.1-66

高橋利彦(1994) 仙台市中田南遺跡出土材の樹種．「仙台市文化財調査報告書第182集　仙台市中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査－」仙台市教育委員会，pp.406-422

高橋利彦(1995) 仙台市下飯田遺跡出土材の樹種．「仙台市文化財調査報告書第191集　下飯田遺跡発掘調査報告書」仙台市教育委員会・日本道路公団，pp.271-289

高橋利彦(2000) 仙台市王ノ壇遺跡出土材の樹種．「仙台市文化財調査報告書第249集　仙台市王ノ壇遺跡　－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡－　発掘調査報告書Ⅰ　第2冊　分析・写真図版編」仙台市教育委員会，pp.41-48

辻　誠一郎・住田雅和・伊藤由美子・植田弥生(1994)植物遺体とその産状．「山王遺跡Ⅰ―仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書―古墳時代中期遺物包含層編」，宮城県教育委員会，pp.86-92

藤下典之(1984)　出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．「古文化財に関する保存科学と人文･自然科学―総括報告書」同朋社，pp.638-654

松葉礼子・鈴木三男(1996) 宮城県多賀城市山王遺跡多賀前地区出土木材の樹種．「宮城県文化財調査報告書第170集　山王遺跡Ⅲ　－仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書－多賀前地区遺物編」宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局，pp.239-289，図版479-495

松葉礼子(1997) 船場遺跡出土木質遺物の樹種同定．「宮城県文化財調査報告書第173集　船場遺跡ほか」宮城県教育委員会，　pp.67-68

松葉礼子(1998a) 山王遺跡町地区出土木製品の樹種同定.「宮城県文化財調査報告書第175集　山王遺跡町地区の調査－県道塩釜線関連調査報告書Ⅱ－」宮城県教育委員会，pp.197-202，図版256-260

松葉礼子(1998b) 一本柳遺跡出土木製品の樹種．「宮城県文化財調査報告書第178集　一本柳遺跡Ⅰ」宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局，pp.115-123

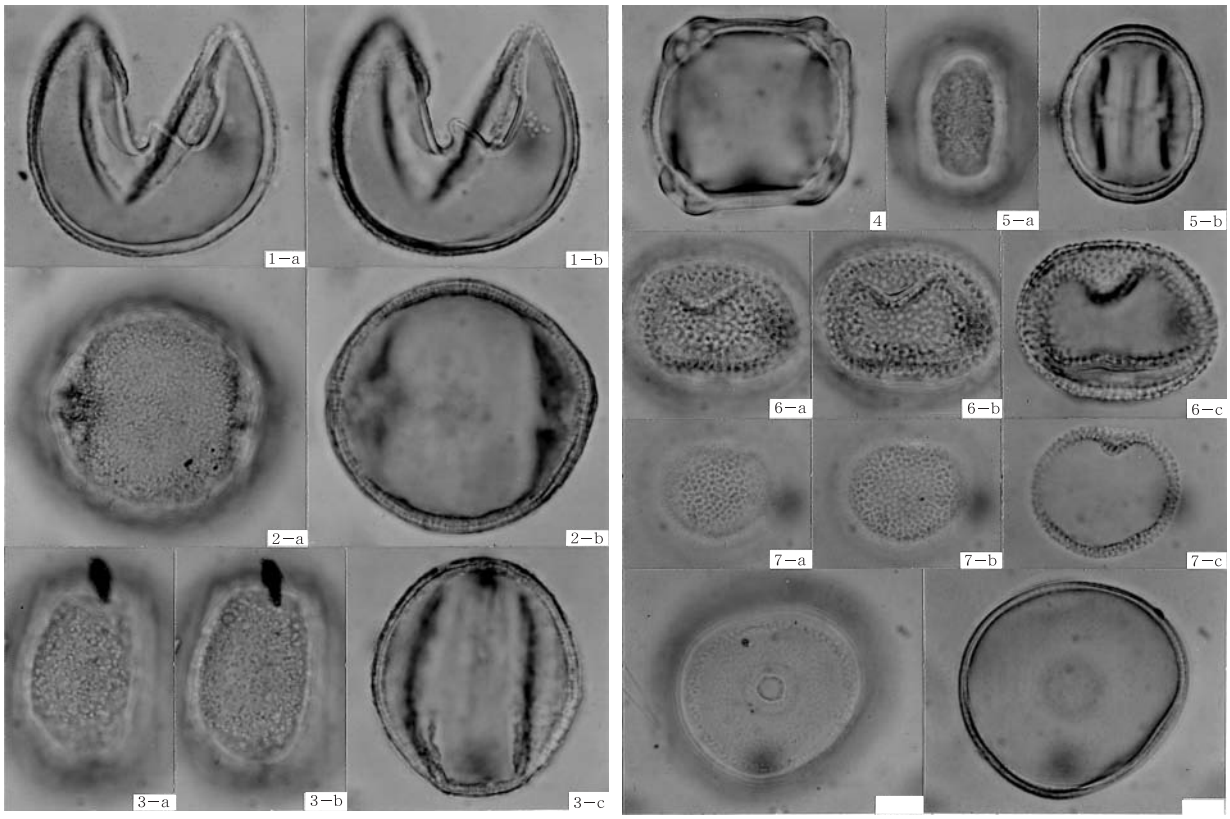
松葉礼子(2001a) 木製品の樹種同定．「宮城県文化財調査報告書第184集　市川橋遺跡の調査　－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅲ－　第一部：本文編」宮城県教育委員会・宮城県土木部，pp.304-339

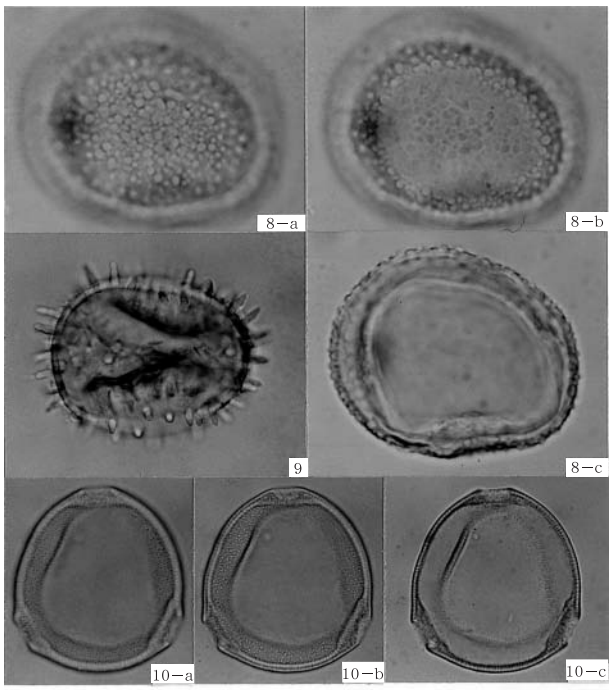
松葉礼子(2001b) 一本柳遺跡出土木製品の樹種同定．「宮城県文化財調査報告書第185集　一本柳遺跡Ⅱ」宮城県教育委員会・国土交通省東北地方整備局，pp.355-376

村田晃一(2001)仙台市中野高柳遺跡．「平成13年度宮城県遺跡成果発表会発表要旨」宮城県考古学会，pp.49-54

村田晃一・茂木好光(2002) 仙台市中野高柳遺跡．「平成14年度宮城県遺跡成果発表会発表要旨」宮城県考古学会，pp.99-102

守田益宗(2000)高田B遺跡の花粉分析．「仙台市文化財調査報告書242集　高田B遺跡　第2分冊　分析・考察編」仙台市教育委員会・宮城県道路公社，pp.93-106





a　b
(scale　bar：10μm　a：1～9　b：10)

1．スギ属、試料2(4区SX1200-遺物7層)、PAL．MN　1601

2．ブナ属、試料2(4区SX1200-遺物7層)、PAL．MN　1603

3．コナラ属コナラ亜属、試料1(4区SX1200-5層)、PAL．MN　1604

4．ハンノキ属、試料2(4区SX1200-遺物7層)、PAL．MN　1602

5．ガマ属ーミクリ属、試料1(4区SX1200-5層)、PAL．MN　1606

6．ヒルムシロ属、試料1(4区SX1200-5層)、PAL．MN　1607

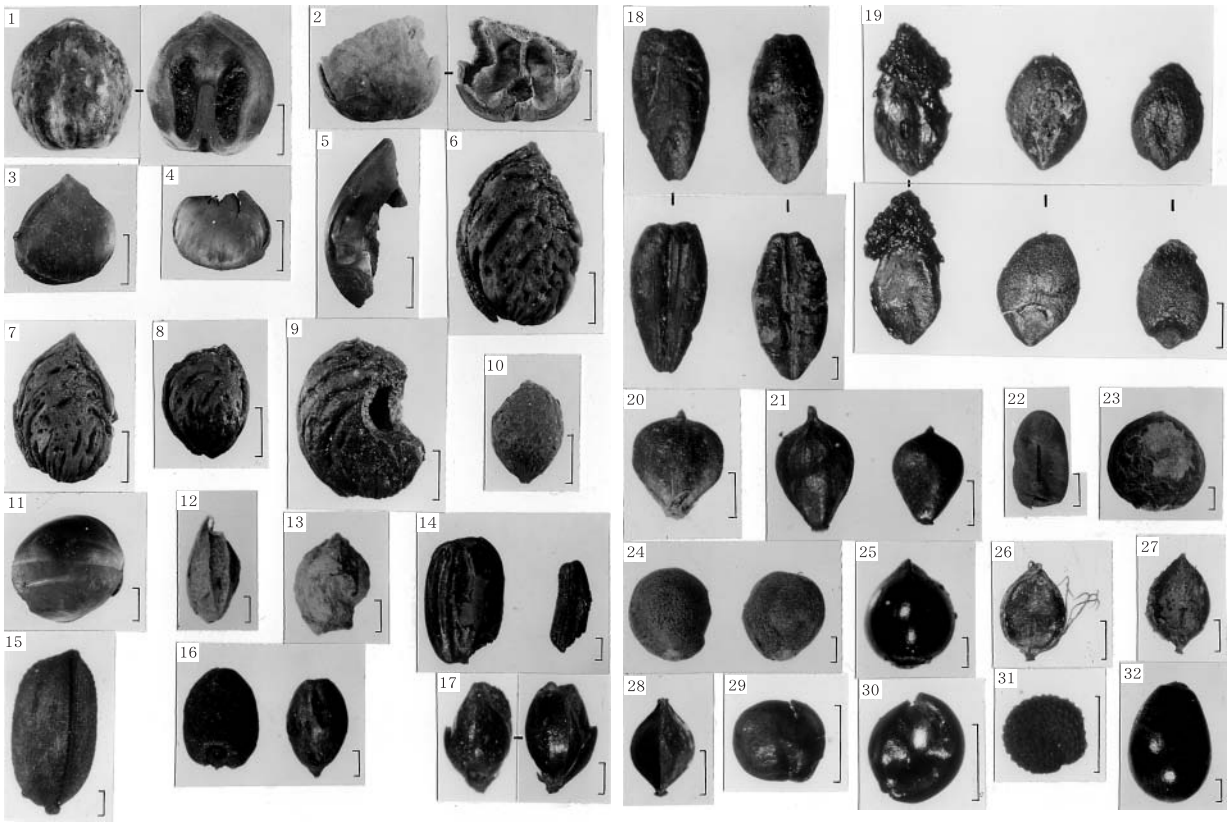
7．イネ科、試料1(4区SX1200-5層)、PAL．MN　1608

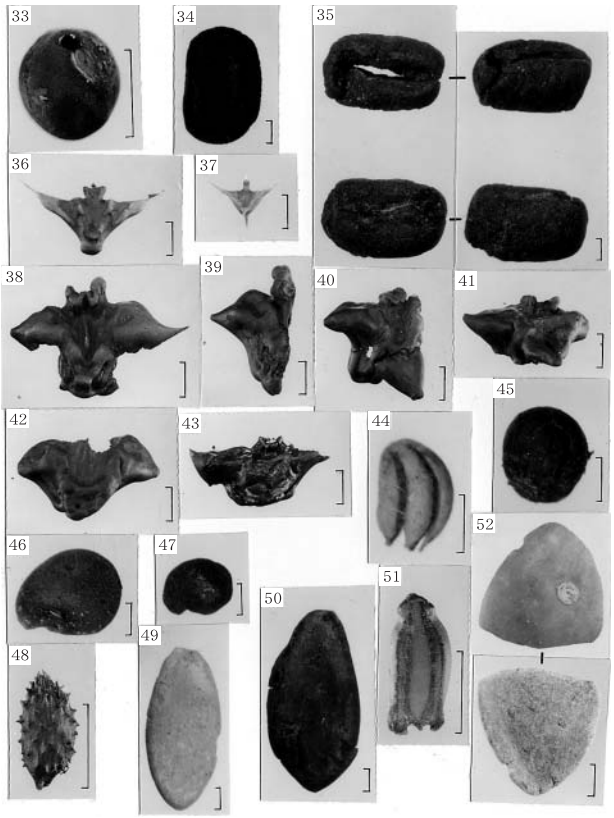
8．ヒツジグサ属、試料2(4区SX1200-遺物7層)、PAL．MN　1600

9．コウホネ属、試料2(4区SX1200-遺物7層)、PAL．MN　1599

10．キュウリ属、試料2(4区SX1200-遺物7層)、PAL．MN　1598

図版1　産出した花粉化石

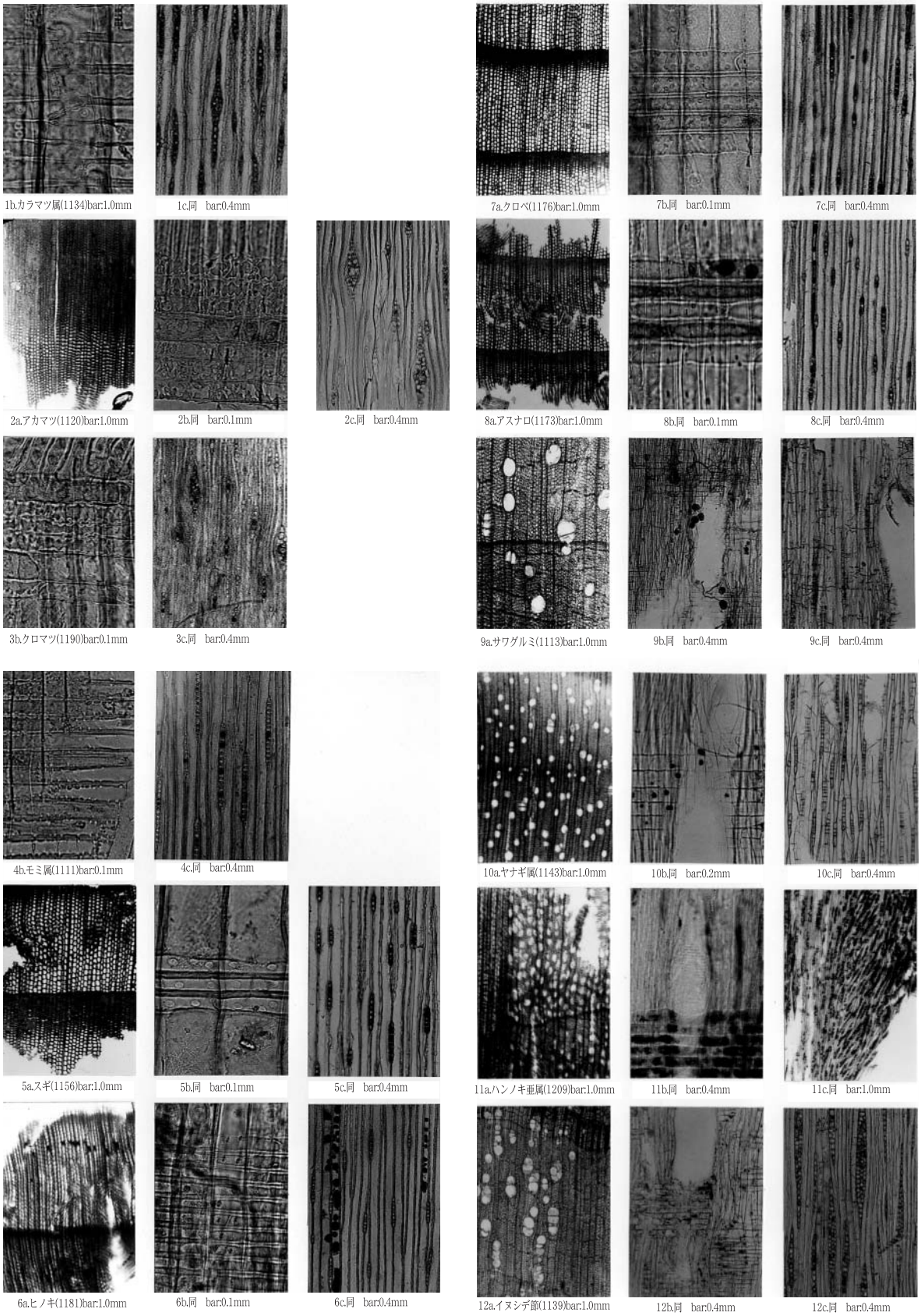




スケールは1～11、33、36～43、、51、52が1cm、12～32、34、35、44～50が1mm

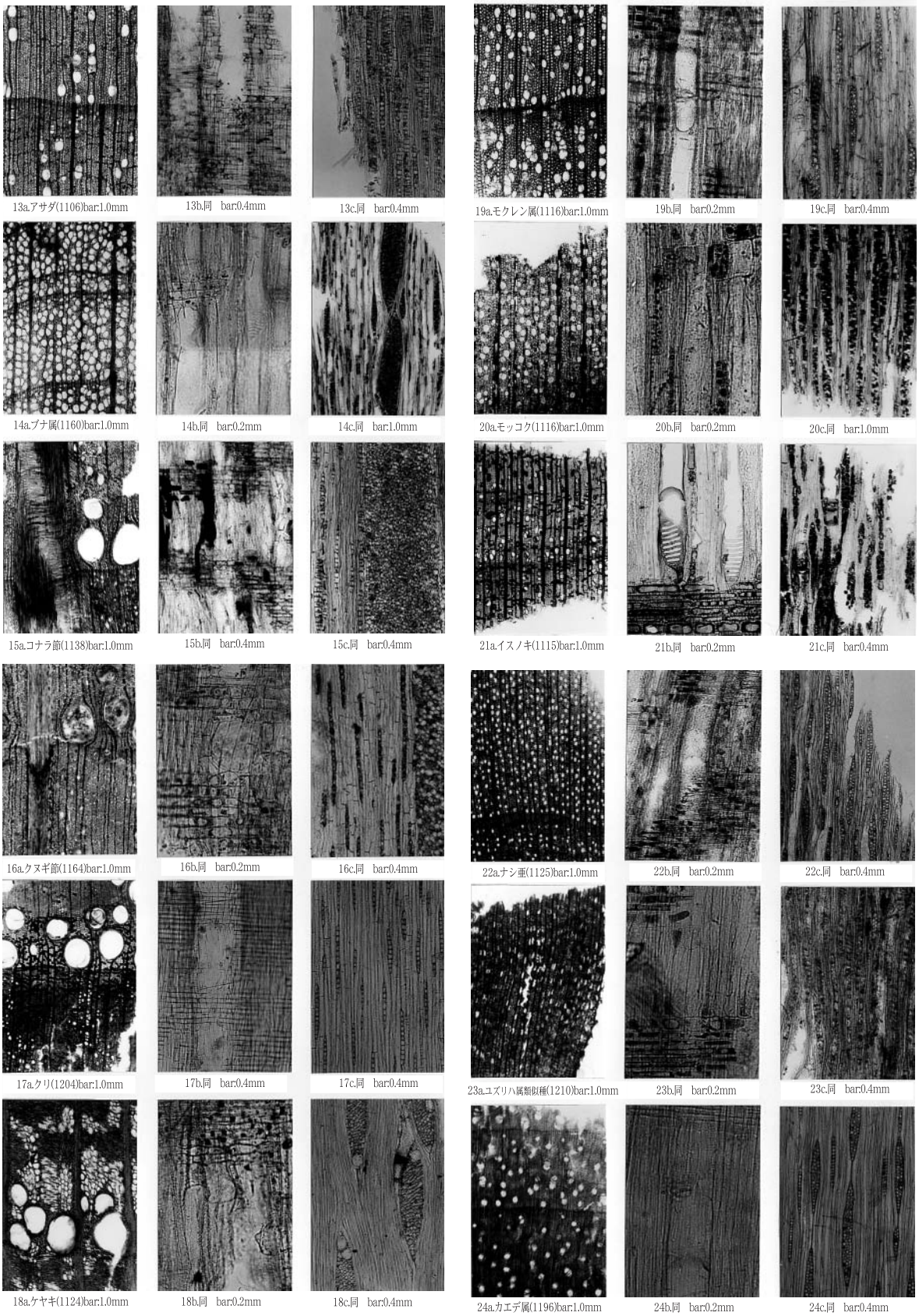
1．オニグルミ、核(自然半割)、4区SX1200-遺物7層
2．オニグルミ、核(打撃痕・上～側部破損)、4区SD1284
3～5．クリ、果実破片、4区SX1200-5層
6～8．モモ、核、4区SX1200-5層
9．モモ、核(げっ歯類食害痕)、B区SK1310
10．ウメ、核、4区SX1200-5層
11．トチノキ、種子破片、B区SX1397-中層
12．ミクリ属、核、4区SX1200-遺物7層
13．ヒルムシロ属、核、4区SX1200-遺物7層
14．イネ、炭化胚乳、4区SX1200-6層
15．イネ、炭化穎果、4区SX1200-6層
16．コムギ、炭化胚乳、4区SX1200-6層
17．ヒエ、炭化穎果、4区SX1200-5層
18．オオムギ、炭化胚乳、B区SK1310-7層
19．ヒエ、炭化胚乳、4区SX1200-6層
20．ホタルイ属A、果実、2区SK1205-5層
21．ホタルイ属B、果実、4区SX1200-5層
22．イボクサ、種子、4区SX1200-5層
23．カナムグラ、種子、B区SK1310-7層
24．アサ、種子、B区SX1397-中層
25．サデクサ、果実、4区SX1200-遺物7層
26．サナエタデ近似種、果実、2区SK1205-5層
27．ヤナギタデ近似種、果実、4区SX1200-5層
28．ギシギシ属、果実、B区SK1311-6層
29．シロザ近似種、種子、4区SX1200-5層
30．ヒユ属、種子、4区SX1200-5層
31．ナデシコ科、種子、4区SX1200-5層
32．コウホネ属、種子、4区SX1200-遺物7層
33．オニバス、種子、B区SX1397-中層
34．マメ科、炭化種子(半割)、4区SX1200-6層
35．マメ科、炭化種子、B区SK1310-7層
36．ヒシ、果実、2区SK1205-5層
37．ヒメビシ、果実、2区SK1205-5層
38～43．ヒシ属、果実破片、4区SX1200-5層
44．ドクゼリ属またはセリ属、果実、4区SX1200-5層
45．シソ属、果実、4区SX1200-5層
46．ナス、種子、4区SX1200-6層
47．ナス属、炭化種子、4区SX1200-6層
48．オナモミ、果実、4区SX1200-5層
49・50．メロン仲間、種子、4区SX1200-6層
51．ヒョウタン仲間、種子、4区SX1200-5層
52．ヒョウタン仲間、果実破片、B区SX1397B

図版２　出土した大型植物化石



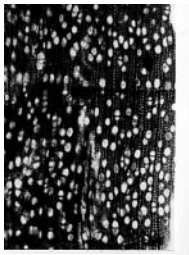
a：横断面　b：放射断面　c：接続断面
() 内の番号は保管番号MIG－を表す

図版３　出土木製品の樹種同定（３）



a：横断面　b：放射断面　c：接続断面
() 内の番号は保管番号MIG－を表す

図版４　出土木製品の樹種同定（４）


25a.トチノキ(1159)bar:1.0mm

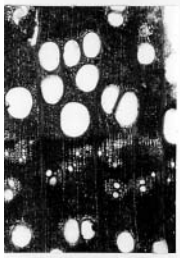
25b.同　bar:0.2mm

25c.同　bar:0.4mm

28a.ツツジ科(1167)bar:1.0mm

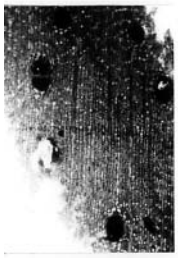
28b.同　bar:0.2mm

28c.同　bar:0.4mm


26a.ケンポナシ属(1094)bar:1.0mm

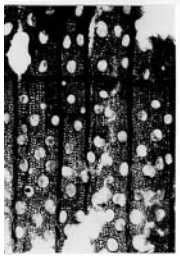
26b.同　bar:0.4mm

26c.同　bar:0.4mm


29a.カキノキ属(1180)bar:1.0mm

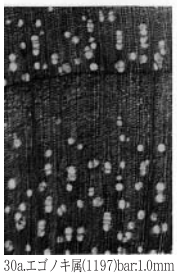
29b.同　bar:0.4mm

29c.同　bar:0.4mm


27a.クマノミズキ類(1175)bar:1.0mm

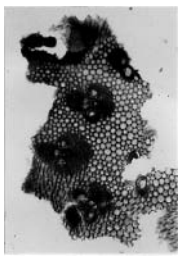
27b.同　bar:0.2mm

27c.同　bar:0.4mm


30a.エゴノキ属(1197)bar:1.0mm

30b.同　bar:0.2mm

30c.同　bar:0.4mm


31タケ亜科(1213)

a：横断面　b：放射断面　c：接続断面
()内の番号は保管番号MIG－を表す

図版５　出土木製品の樹種同定（３）

附編　中野高柳遺跡の動物遺体

No.	遺　構	出土層位	種	部位	LR	部分	登録No.	遺構期	報告書	備考
1	ＳＤ1129	５層	同定不能骨片				00101	Ⅳ期	Ⅰ	
2	ＳＤ1129	６層	ウマ	上顎歯	L	P3-M2	00102	Ⅳ期	Ⅰ	
3	ＳＤ1106		ウマ	上顎歯	L	P3-M2	00103	Ⅳ期	Ⅰ	
4	ＳＤ1106		同定不能骨片				00104	Ⅳ期	Ⅰ	
5	ＳＤ1106		同定不能骨片				00105	Ⅳ期	Ⅰ	火熱を受けて白化
6	ＳＤ1129		ウマ	下顎歯	L	M3	00106-1	Ⅳ期	Ⅰ	咬耗ほとんど進んでいない、若齢
7	ＳＤ1129		ウマ	上顎歯	L	M3?	00106-2	Ⅳ期	Ⅰ	咬耗ほとんど進んでいない、若齢
8	ＳＤ1129		ウマ	下顎歯	R	P2	00106-3	Ⅳ期	Ⅰ	咬耗ほとんど進んでいない、若齢
9	ＳＤ1129		同定不能骨片				00107	Ⅳ期	Ⅰ	大型獣骨片
10	ＳＤ1109	炭層	同定不能骨片				00108		Ⅰ	大型獣四肢骨片
11	ＳＸ1600Ｂ東溝	堆積土	ウマ	歯破片			01581	Ⅳ期	Ⅰ	上顎歯
12	ＳＸ1600Ｂ東溝	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	01582	Ⅳ期	Ⅰ	
13	ＳＥ1211		同定不能骨片				01583	Ⅳ期	Ⅰ	小破片多数
14	２区・Pit1		ウマ	上顎歯	L	P3-M2	01584		Ⅰ	
15	ＳＫ1255		ウマ	上顎歯	R	P3-M2	01585	Ⅴ期？	Ⅰ	
16	ＳＤ1140	１層	ウマ	上顎歯	R	M3	01586	Ⅵ期	Ⅰ	
17	ＳＸ1397	中層（遺物Ａ堆）	ドブガイ？	殻表皮	?	殻頂部	01572-1	Ⅳ期	Ⅱ	
18	ＳＸ1397	中層（遺物Ａ堆）	ドブガイ？	殻表皮片			01572-2	Ⅳ期	Ⅱ	
19	ＳＸ1397	中層（遺物Ａ堆）	同定不能骨片				01574	Ⅳ期	Ⅱ	大型獣四肢骨片
20	ＳＸ1397	上層（遺物Ｂ堆）	貝？	殻表皮片？			01571	Ⅳ期	Ⅱ	
21	ＳＸ1397	上層（遺物Ｂ堆）	同定不能骨片				01576	Ⅳ期	Ⅱ	
22	ＳＸ1397	中層（遺物Ａ堆）	ウシ／ウマ	大腿骨	R	骨幹	01587-1	Ⅳ期	Ⅱ	近位側スパイラル割れ
23	ＳＸ1397	中層（遺物Ａ堆）	シカ	角	?		01587-2	Ⅳ期	Ⅱ	切断痕
24	ＳＸ1397	堆積土	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	94072-1	Ⅳ期	Ⅱ	
25	ＳＸ1397	堆積土	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	94072-2	Ⅳ期	Ⅱ	
26	ＳＸ1657		同定不能骨片				02319	Ⅳ期	Ⅱ	小破片・火熱（白ー灰）多数
27	ＳＤ1501Ｂ	堆積土	同定不能骨片				02318	Ⅳ期	Ⅱ	火熱を受けて白化
28	ＳＤ1501Ｂ	上層	同定不能骨片				02416	Ⅳ期	Ⅱ	火熱を受けて白化
29	ＳＤ1501Ｂ		ウマ	歯破片			02413	Ⅳ期	Ⅱ	
30	ＳＤ1501	遺構確認	同定不能骨片				02414	Ⅳ期	Ⅱ	火熱を受けて白化
31	ＳＤ1501	遺構確認	ウマ	上／下顎歯	?	I	02415-1	Ⅳ期	Ⅱ	
32	ＳＤ1501	遺構確認	ウマ	上／下顎歯	?	I	02415-2	Ⅳ期	Ⅱ	
33	ＳＤ1501	遺構確認	ウマ	上顎歯	R	P2	02415-3	Ⅳ期	Ⅱ	
34	ＳＤ1501	遺構確認	ウマ	上顎歯	L	P3-M2	02415-4	Ⅳ期	Ⅱ	
35	ＳＤ1501	堆積土	同定不能骨片				02471	Ⅳ期	Ⅱ	火熱を受けて白化
36	ＳＤ1321	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	01577-1	Ⅳ期?	Ⅱ	
37	ＳＤ1321	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	01577-2	Ⅳ期?	Ⅱ	
38	ＳＤ1321	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	01577-3	Ⅳ期?	Ⅱ	
39	ＳＤ1321	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	01577-4	Ⅳ期?	Ⅱ	
40	ＳＤ1709	１層	同定不能骨片				03285		Ⅱ	大型獣、保存不良
41	ＳＥ1603	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P2	02417-1		Ⅱ	
42	ＳＥ1603	堆積土	ウマ	上顎歯	L	P3-M2	02417-2		Ⅱ	
43	ＳＥ1603		同定不能骨片				02418		Ⅱ	大型獣四肢骨片
44	ＳＥ1603		同定不能骨片				02419		Ⅱ	大型獣四肢骨片
45	ＳＥ1011	３層	ウシ	下顎歯	?	M1/M2	94079	Ⅳ期	Ⅱ	
46	ＳＫ1018	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	94080-1	Ⅶ期以降	Ⅱ	
47	ＳＫ1018	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	94080-2	Ⅶ期以降	Ⅱ	
48	ＳＫ1018	底面	ウマ	上顎骨	L	中間部破片	94081-1	Ⅶ期以降	Ⅱ	P3,P4,M1,M2　土ごと採取
49	ＳＫ1018	底面	ウマ	上顎骨+下顎骨	L+R	前位破片	94081-2	Ⅶ期以降	Ⅱ	上下の切歯が並んで出土　土ごと採取
50	ＳＫ1018	底面	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	94081-3	Ⅶ期以降	Ⅱ	
51	ＳＫ1018	底面	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	94081-4	Ⅶ期以降	Ⅱ	
52	ＳＫ1018	底面	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	94081-5	Ⅶ期以降	Ⅱ	
53	ＳＫ1018	底面	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	94081-6	Ⅶ期以降	Ⅱ	
54	ＳＫ1013	３・４層	ツルの一種	脛骨	L	遠位	94082	Ⅳ期	Ⅱ	化骨化　タンチョウよりやや小さい
55	ＳＫ1310	堆積土	シカ？	尺骨	R	骨幹	01578	Ⅳ期	Ⅱ	近位側イヌの噛痕
56	ＳＫ1310	堆積土	ウシ／ウマ	上腕骨	L	骨幹	01579	Ⅳ期	Ⅱ	遠位側イヌの噛痕？
57	ＳＫ1310	最下部	ウシ／ウマ	脛骨	R	近位	01580	Ⅳ期	Ⅱ	化骨化
58	ＳＫ1504	堆積土	同定不能骨片				02317	Ⅳ期？	Ⅱ	大型獣、火熱を受けて白化
59	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-1	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
60	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-2	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
61	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-3	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
62	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-4	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
63	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-5	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
64	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-6	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
65	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-7	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
66	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-8	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
67	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-9	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
68	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-10	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
69	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-11	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
70	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-12	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
71	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-13	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
72	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-14	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
73	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-15	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
74	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-16	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
75	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-17	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック

第１表　中野高柳遺跡出土の動物遺体（１）

No.	遺　構	出土層位	種	部位	LR	部分	登録No.	遺構期	報告書	備考
76	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-18	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
77	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-19	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
78	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	01573-20	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
79	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-21	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
80	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-22	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
81	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-23	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
82	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-24	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
83	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-25	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
84	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-26	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
85	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-27	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
86	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-28	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
87	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-29	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
88	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-30	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
89	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-31	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
90	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-32	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
91	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-33	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
92	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-34	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
93	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-35	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
94	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-36	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
95	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-37	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
96	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-38	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
97	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-39	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
98	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-40	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
99	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-41	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
100	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-42	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
101	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-43	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
102	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-44	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
103	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-45	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
104	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-46	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
105	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-47	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
106	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-48	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
107	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-49	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
108	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-50	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
109	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-51	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
110	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-52	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
111	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-53	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
112	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-54	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
113	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	01573-55	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
114	ＳＸ1200	下層（遺物７層）	ドブガイ	殻	?	破片	01573-56	Ⅲ期	Ⅲ	貝の廃棄ブロック
115	ＳＸ1200	上層（遺物１層）	ウマ	下顎骨	L	中間部破片	02465-1	Ⅲ期	Ⅲ	P3,P4,M1,M2,M3
116	ＳＸ1200	上層（遺物１層）	ウマ	下顎骨	R	中間部破片	02465-2	Ⅲ期	Ⅲ	P3,P4,M1,M2　ほとんど歯のみ
117	ＳＸ1200	上層（遺物３層）	ウマ／ウシ	大腿骨		遠位端破片	02466	Ⅲ期	Ⅲ	
118	ＳＸ1200	上層（遺物１層）	ウマ	中手骨	L	骨幹	02467-1	Ⅲ期	Ⅲ	
119	ＳＸ1200	上層（遺物１層）	ウマ	踵骨	R	中間部	02467-2	Ⅲ期	Ⅲ	
120	ＳＸ1200	上層（遺物１層）	同定不能骨片				02467-3	Ⅲ期	Ⅲ	大型獣四肢骨骨端、化骨化
121	ＳＸ1200	上層（遺物１層）	シカ	角破片			02468	Ⅲ期	Ⅲ	
122	ＳＤ1650	堆積土	ドブガイ	殻表皮	?	破片	02438-1	Ⅴ期	Ⅲ	
123	ＳＤ1650	堆積土	ドブガイ	殻表皮	?	破片	02438-2	Ⅴ期	Ⅲ	
124	ＳＤ1650	堆積土	ドブガイ	殻表皮	?	破片	02438-3	Ⅴ期	Ⅲ	
125	ＳＤ1650		ウマ	中足骨	R	遠位	02427	Ⅴ期	Ⅲ	化骨化
126	ＳＤ1650	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P2	02432-1	Ⅴ期	Ⅲ	
127	ＳＤ1650	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P3	02432-2	Ⅴ期	Ⅲ	
128	ＳＤ1650	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P4	02432-3	Ⅴ期	Ⅲ	
129	ＳＤ1650	堆積土	ウマ	下顎歯	R	M1	02432-4	Ⅴ期	Ⅲ	
130	ＳＤ1650	堆積土	ウマ	下顎歯	R	M2	02432-5	Ⅴ期	Ⅲ	
131	ＳＤ1650	堆積土	ウマ	下顎歯	R	M3	02432-6	Ⅴ期	Ⅲ	
132	ＳＤ1650	上層	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	04603	Ⅴ期	Ⅲ	
133	ＳＤ1633Ｂ	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	02424	Ⅶ期	Ⅲ	
134	ＳＤ1633Ｂ	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	02425	Ⅶ期	Ⅲ	
135	ＳＤ1633Ｂ	上層	同定不能骨片				04273	Ⅶ期	Ⅲ	大型獣四肢骨片、上腕骨？大腿骨？
136	ＳＤ1633Ｂ	下層	アカニシ？	殻	M	殻軸破片	04595	Ⅶ期	Ⅲ	
137	ＳＤ1633Ｂ	下層	アカニシ？	殻	M	殻軸－殻口部破片	04596	Ⅶ期	Ⅲ	
138	ＳＤ1633Ｂ	下層	同定不能骨片				04597	Ⅶ期	Ⅲ	大型獣四肢骨片、脛骨？
139	ＳＤ1633Ｂ	下層	同定不能骨片				04598	Ⅶ期	Ⅲ	火熱を受けて白化
140	ＳＤ1633Ａ	堆積土（底近い）	ドブガイ？	殻表皮片			02470	Ⅶ期	Ⅲ	
141	ＳＤ1633	堆積土	ウシ／ウマ	橈骨	?	骨幹	02420	Ⅶ期	Ⅲ	
142	ＳＤ1633	堆積土	同定不能骨片				02421	Ⅶ期	Ⅲ	大型獣四肢骨片
143	ＳＤ1633	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	02422	Ⅶ期	Ⅲ	
144	ＳＤ1633	堆積土	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	02426-1	Ⅶ期	Ⅲ	
145	ＳＤ1633	堆積土	ウマ	上顎歯	L	P3-M2	02426-2	Ⅶ期	Ⅲ	
146	ＳＤ1633	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	02426-3	Ⅶ期	Ⅲ	
147	ＳＤ1633	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	02426-4	Ⅶ期	Ⅲ	
148	ＳＤ1633	堆積土	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	02428-1	Ⅶ期	Ⅲ	
149	ＳＤ1633	堆積土	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	02428-2	Ⅶ期	Ⅲ	
150	ＳＤ1633	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	02428-3	Ⅶ期	Ⅲ	
151	ＳＤ1633	堆積土	クルミ	核			02428-4	Ⅶ期	Ⅲ	
152	ＳＤ1633	堆積土	ドブガイ？	殻表皮片			02440	Ⅶ期	Ⅲ	
153	ＳＤ1633		ウマ	距骨	L	完形	02469	Ⅶ期	Ⅲ	
154	ＳＥ1637	堆積土	ウマ	上顎歯？	L?	I	02429	Ⅶ期	Ⅲ	完形
155	ＳＥ1643	堆積土	同定不能骨片				02320	Ⅶ期	Ⅲ	歯破片？
156	ＳＥ1648	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	02423-1	Ⅶ期	Ⅲ	咬耗進む、10才ぐらいか
157	ＳＥ1648	堆積土	ウマ	下顎骨	L	関節突起	02423-2	Ⅶ期	Ⅲ	化骨化

第２表　中野高柳遺跡出土の動物遺体（２）

No.	遺　構	出土層位	種	部位	LR	部分	登録No.	遺構期	報告書	備考
158	ＳＥ1648	堆積土	ウシ／ウマ	上腕骨	L	骨幹	02431	Ⅶ期	Ⅲ	遠位側　シカより大きい
159	ＳＫ1649	堆積土	同定不能骨片				02430	Ⅶ期	Ⅲ	大型獣
160	ＳＸ1397	下層（遺物Ｗ下層）	シカ	下顎骨	R	中間部破片	04108	Ⅳ期	本書	M2,M3、M3長：27.0mm
161	ＳＸ1397	下層(遺物４層)	同定不能骨片				05074	Ⅳ期	本書	鹿角片？
162	ＳＸ1397	下層(遺物４層)	同定不能骨片				05075	Ⅳ期	本書	大型獣四肢骨片？　鹿角片？
163	ＳＸ1397	下層(遺物４層)	ウマ	上顎歯	L	P3-M2	05076-1	Ⅳ期	本書	咬耗あまり進んでない
164	ＳＸ1397	下層(遺物４層)	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	05076-2	Ⅳ期	本書	咬耗あまり進んでない
165	ＳＸ1397	下層(遺物４層)	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	05076-3	Ⅳ期	本書	
166	ＳＸ1397	上層(遺物２層)	同定不能骨片				05077	Ⅳ期	本書	大型獣四肢骨片・骨端？
167	ＳＤ1495Ｃ	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	02474-1	Ⅳ期	本書	
168	ＳＤ1495Ｃ	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	02474-2	Ⅳ期	本書	
169	ＳＤ1494	堆積土	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	02472-1	Ⅶ期	本書	
170	ＳＤ1494	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	02472-2	Ⅶ期	本書	
171	ＳＤ1494	堆積土	ウマ	下顎歯	R	P3-M2	02472-3	Ⅶ期	本書	
172	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-1	Ⅶ期	本書	
173	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-10	Ⅶ期	本書	
174	ＳＤ1494		ウマ	上顎歯	L	P2	02473-11	Ⅶ期	本書	
175	ＳＤ1494		ウマ	上顎歯	L	P3	02473-12	Ⅶ期	本書	
176	ＳＤ1494		ウマ	上顎歯	L	M3	02473-13	Ⅶ期	本書	
177	ＳＤ1494		ウマ	上顎歯	R	P2	02473-14	Ⅶ期	本書	
178	ＳＤ1494		ウマ	上顎歯	R	P3	02473-15	Ⅶ期	本書	
179	ＳＤ1494		ウマ	上顎歯	R	P4	02473-16	Ⅶ期	本書	
180	ＳＤ1494		ウマ	上顎歯	R	M1	02473-17	Ⅶ期	本書	
181	ＳＤ1494		ウマ	上顎歯	R	M2	02473-18	Ⅶ期	本書	
182	ＳＤ1494		ウマ	上顎歯	R	M3	02473-19	Ⅶ期	本書	
183	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-2	Ⅶ期	本書	
184	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	L	P2	02473-20	Ⅶ期	本書	
185	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	L	P3	02473-21	Ⅶ期	本書	
186	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	L	P4	02473-22	Ⅶ期	本書	
187	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	L	M1	02473-23	Ⅶ期	本書	
188	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	L	M2	02473-24	Ⅶ期	本書	
189	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	L	M3	02473-25	Ⅶ期	本書	
190	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	R	P2	02473-26	Ⅶ期	本書	
191	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	R	P3	02473-27	Ⅶ期	本書	
192	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	R	P4	02473-28	Ⅶ期	本書	
193	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	R	M1	02473-29	Ⅶ期	本書	
194	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-3	Ⅶ期	本書	
195	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	R	M2	02473-30	Ⅶ期	本書	
196	ＳＤ1494		ウマ	下顎歯	R	M3	02473-31	Ⅶ期	本書	
197	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-4	Ⅶ期	本書	
198	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-5	Ⅶ期	本書	
199	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-6	Ⅶ期	本書	
200	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-7	Ⅶ期	本書	
201	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-8	Ⅶ期	本書	
202	ＳＤ1494		ウマ	上／下顎歯	?	I	02473-9	Ⅶ期	本書	
203	ＳＤ1494		同定不能骨片				02475	Ⅶ期	本書	大型獣四肢骨片
204	ＳＤ1494	２層	ウマ	歯破片			03281	Ⅶ期	本書	保存不良
205	ＳＤ1828	下層	イヌ	下顎骨	L	完形	05193	Ⅴ期	本書	×,×,×,C,P1,×,P3,P4,M1,M2,×、下顎骨全長(Id-Goc):137mm（復元値）、下顎枝高(Cr-Gov):55mm（復元値）、Hight of the Mandible behind M1:23.8mm、M1長:20.2mm。05188とほぼ同じ大きさ、同一個体か。
206	ＳＤ1828	下層	イヌ	頭骨	M	ほぼ全体	05194	Ⅴ期	本書	破片化
207	ＳＤ1829		同定不能骨片				03282	Ⅵ期	本書	中型獣四肢骨片　火熱を受けて白化
208	ＳＤ1829	２層	ウマ	下顎骨	R	中間部	03286	Ⅵ期	本書	M1,M2,M3　土ごと採取
209	ＳＤ1845	ベルト２層	ウマ	歯破片			03284	Ⅲ～Ⅳ期	本書	破片多
210	ＳＤ2020Ｂ	１層	ウマ	下顎歯	R	M1	04599-1	Ⅳ期	本書	
211	ＳＤ2020Ｂ	１層	ウマ	下顎歯	R	M2	04599-2	Ⅳ期	本書	
212	ＳＤ2020Ｂ	１層	ウマ	下顎歯	R	M3	04599-3	Ⅳ期	本書	
213	ＳＤ2020Ｂ	確認面	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	04600-1	Ⅳ期	本書	
214	ＳＤ2020Ｂ	確認面	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	04600-2	Ⅳ期	本書	
215	ＳＤ2020Ｂ	確認面	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	04600-3	Ⅳ期	本書	
216	ＳＤ2020Ｂ	確認面	ウマ	下顎歯	L	P3-M2	04600-4	Ⅳ期	本書	
217	ＳＤ2020Ｂ	堆積土	ウマ	下顎骨	R	中間部破片	04601	Ⅳ期	本書	P3-M2,P3-M2
218	ＳＤ2241	下層	ウマ	下顎骨	L	完形	04593	Ⅴ期	本書	土ごと採取　かなり脆い
219	ＳＤ2241	下層	同定不能骨片				04594	Ⅴ期	本書	大型獣頭骨？　土ごと採取　保存不良
220	ＳＤ2241	堆積土	シカ	角破片			05081	Ⅴ期	本書	
221	ＳＤ2241	堆積土	同定不能骨片				05083	Ⅴ期	本書	大型獣肋骨片？　火熱を受けて白化
222	ＳＤ2165Ｂ	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	04602-1	Ⅴ期？	本書	
223	ＳＤ2165Ｂ	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	04602-2	Ⅴ期？	本書	
224	ＳＤ2165Ｂ	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	04602-3	Ⅴ期？	本書	
225	ＳＤ1007	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	05274	Ⅳ期	本書	
226	ＳＤ2474	上層	同定不能骨片				05092	Ⅳ期?	本書	大型獣肋骨片？　火熱を受けて白化
227	ＳＤ2363	堆積土	ウマ	上顎歯	L	P3-M2	04498	Ⅳ期	本書	
228	ＳＤ2360	堆積土	同定不能骨片				04499	Ⅳ期以前	本書	火熱を受けて白化or炭化
229	ＳＤ2363	堆積土	ウシ	下顎歯	?	M1/M2	04507	Ⅳ期	本書	保存良
230	Pit913		同定不能骨片				04532		本書	火熱を受けて白化
231	ＳＥ2105	６層	ウマ	下顎歯	R	i	04604-1	Ⅳ期以降	本書	
232	ＳＥ2105	６層	ウマ	下顎歯	R	m1	04604-2	Ⅳ期以降	本書	
233	ＳＥ2105	６層	ウマ	下顎歯	R	m2	04604-3	Ⅳ期以降	本書	
234	ＳＥ2105	６層	ウマ	下顎歯	R	m3	04604-4	Ⅳ期以降	本書	
235	ＳＥ2105	６層	二枚貝	殻	?	破片	04606	Ⅳ期以降	本書	イシガイ科？
236	ＳＥ2212	堆積土	同定不能骨片				04607	Ⅶ期	本書	

第３表　中野高柳遺跡出土の動物遺体（３）

No.	遺　構	出土層位	種	部位	LR	部分	登録No.	遺構期	報告書	備考
237	ＳＥ2128	堆積土	アカニシ	殻	M	破片	04608	Ⅶ期？	Ⅲ	
238	ＳＥ2152	堆積土	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	04609-1	Ⅶ期？	本書	
239	ＳＥ2152	堆積土	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	04609-2	Ⅶ期？	本書	
240	ＳＥ2152	堆積土	ハマグリ	殻	L	殻頂部破片	04609-3	Ⅶ期？	本書	
241	ＳＥ2152	堆積土	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	04609-4	Ⅶ期？	本書	
242	ＳＥ2152	堆積土	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	04609-5	Ⅶ期？	本書	
243	ＳＥ2152	堆積土	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	04609-6	Ⅶ期？	本書	
244	ＳＥ2152	堆積土	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	04609-7	Ⅶ期？	本書	
245	ＳＥ2152	堆積土	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	04609-8	Ⅶ期？	本書	
246	ＳＥ2152	堆積土	ハマグリ	殻	R	殻頂部破片	04609-9	Ⅶ期？	本書	
247	ＳＥ2356	堆積土	シカ	橈骨	L	近位	04610		本書	化骨化
248	ＳＥ2601	３層	マグロ	腹椎	M	椎体	05187-1		本書	椎体幅:43～48mm
249	ＳＥ2601	３層	マグロ	腹椎	M	椎体	05187-2		本書	椎体幅:43～48mm
250	ＳＥ2601	３層	マグロ	腹椎	M	椎体	05187-3		本書	椎体幅:43～48mm
251	ＳＥ2601	３層	イヌ	下顎骨	R	中間部	05188		本書	×,×,P3,P4,M1,M2,M3、Hight of the Mandible behind M1:23.9mm、M1長:20.0mm。05193とほぼ同じ大きさ、同一個体か。
252	ＳＫ1454	下層	ドブガイ	殻表皮片			02439	Ⅴ期	本書	
253	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	I	02434-1	Ⅴ期	本書	
254	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	M3	02434-10	Ⅴ期	本書	
255	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	R	I	02434-11	Ⅴ期	本書	
256	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	R	I	02434-12	Ⅴ期	本書	
257	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	R	I	02434-13	Ⅴ期	本書	
258	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P2	02434-14	Ⅴ期	本書	
259	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P3	02434-15	Ⅴ期	本書	
260	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	R	P4	02434-16	Ⅴ期	本書	
261	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	R	M1	02434-17	Ⅴ期	本書	
262	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	R	M2	02434-18	Ⅴ期	本書	
263	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	R	M3	02434-19	Ⅴ期	本書	
264	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	I	02434-2	Ⅴ期	本書	
265	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	I	02434-3	Ⅴ期	本書	
266	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	I	02434-4	Ⅴ期	本書	
267	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	P2	02434-5	Ⅴ期	本書	
268	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	P3	02434-6	Ⅴ期	本書	
269	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	P4	02434-7	Ⅴ期	本書	
270	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	M1	02434-8	Ⅴ期	本書	
271	ＳＫ1454	堆積土	ウマ	上顎歯	L	M2	02434-9	Ⅴ期	本書	
272	ＳＫ1454	上層	ウマ	距骨	L	完形	02435	Ⅴ期	本書	
273	ＳＫ1454	下層	ウシ／ウマ	中手骨	R	近位	02436	Ⅴ期	本書	化骨化
274	ＳＫ1458	３層	ウマ	基節骨	?	近位－遠位	02437-1	Ⅳ期	本書	化骨化
275	ＳＫ1458	３層	ウシ	中手／中足骨	?	遠位	02437-2	Ⅳ期	本書	片側
276	ＳＫ1492	堆積土	ウマ	歯破片			02476		本書	上顎歯　左右
277	ＳＫ1761	２層	同定不能骨片				03290	Ⅳ期	本書	大型獣　保存不良
278	ＳＫ1846	２層	同定不能骨片				03291		本書	大型獣　ほとんど土壌化
279	ＳＫ1846		同定不能骨片				03283	Ⅶ期以前	本書	
280	ＳＫ1869	２層	ヒト	歯破片			03289		本書	破片多い
281	ＳＫ1878	４層	ウマ／ウシ	頸椎	M	前位	03287	Ⅶ期	本書	化骨化
282	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	L	殻頂部破片	03288-1	Ⅶ期	本書	
283	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	R	殻頂部破片	03288-10	Ⅶ期	本書	
284	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	R	殻頂部破片	03288-11	Ⅶ期	本書	
285	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	R	殻頂部破片	03288-12	Ⅶ期	本書	
286	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	R	殻頂部破片	03288-13	Ⅶ期	本書	
287	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	R	殻頂部破片	03288-14	Ⅶ期	本書	
288	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	R	殻頂部破片	03288-15	Ⅶ期	本書	
289	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	R	殻頂部破片	03288-16	Ⅶ期	本書	
290	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	L	殻頂部破片	03288-2	Ⅶ期	本書	
291	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	L	殻頂部破片	03288-3	Ⅶ期	本書	
292	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	L	殻頂部破片	03288-4	Ⅶ期	本書	
293	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	L	殻頂部破片	03288-5	Ⅶ期	本書	
294	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	L	殻頂部破片	03288-6	Ⅶ期	本書	
295	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	L	殻頂部破片	03288-7	Ⅶ期	本書	
296	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	L	殻頂部破片	03288-8	Ⅶ期	本書	
297	ＳＫ1878	４層	シジミ	殻	R	殻頂部破片	03288-9	Ⅶ期	本書	
298	ＳＫ2300	底付近	ウマ	上顎歯	L	P3-M2	04417	Ⅳ期	本書	保存良　ほぼ完形
299	ＳＫ2209	底面	ウマ	上顎歯	R	P3-M2	04611	Ⅳ期	本書	
300	ＳＫ2209	１層	同定不能骨片				04612	Ⅳ期	本書	火熱を受けて白化
301	ＳＫ2209	確認面	同定不能骨片				04613	Ⅳ期	本書	火熱を受けて白化
302	ＳＫ2238	９層	同定不能骨片				04614	Ⅳ期	本書	貝の破片？
303	ＳＫ2246	２・３層	同定不能骨片				04615	Ⅳ期	本書	
304	ＳＫ2258	堆積土	同定不能骨片				04616	Ⅶ期	本書	火熱（白）を受けて白化
305	ＳＫ2475	下層	シカ	角	R?	第2枝+角幹?	05098	Ⅳ期	本書	角幹前側に横方向のカットマーク２箇所　枝角切断
306	ＳＫ2475	下層	同定不能骨片				05099	Ⅳ期	本書	大型獣四肢骨片　火熱を受けて白化
307	ＳＫ2475	下層上面	クジラ	椎骨	M	椎体	05102	Ⅳ期	本書	摩滅
308	ＳＸ2514	２層	ヒト	歯	?	M?	05122-1	Ⅶ期	本書	
309	ＳＸ2514	２層	ヒト	歯	?	M?	05122-2	Ⅶ期	本書	
310	ＳＸ2514	２層	ヒト	歯	?	M?	05122-3	Ⅶ期	本書	
311	ＳＸ2514	２層	ヒト	歯	?	P?	05122-4	Ⅶ期	本書	
312	ＳＸ2514	２層	ヒト	歯	?	P?	05122-5	Ⅶ期	本書	
313	ＳＸ2514	２層	ヒト	歯	?	P/M?	05122-6	Ⅶ期	本書	

第４表　中野高柳遺跡出土の動物遺体（4）

報　告　書　抄　録

ふりがな	なかのたかやなぎいせき
書　　名	中　野　高　柳　遺　跡　Ⅳ
副 書 名	宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書Ⅳ
巻　　次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第２０４集
編著者名	村田晃一・保原恒雄・白崎恵介
編集機関	宮城県教育委員会
所　在　地	〒９８０－８４２３　宮城県仙台市青葉区本町３－８－１　TEL　０２２－２１１－３６８５
発行年月日	西暦　２００６年　３月　３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調　査　期　間	調査面積 ㎡	調査原因
なかのたかやなぎ 中野高柳 遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 みやぎのく 宮城野区 なかのあざけんどうまえ 中野字県道前	０４１００	０１１４６	３８度 １６分 １１秒	140度 ５８分 ５５秒	１次調査 199410～11 ２次調査 199907～08 ３次調査 20000703～0929 ４次調査 20010409～1106 ５次調査 20020408～1112 ６次調査 20030407～1117 ７次調査 20040412～1109 ８次調査 20050418～0704	約 1,050 約　950 約 3,250 約 6,500 （確認300） 約10,400 （確認1,120） 約 6,930 約 8,200 約 2,900	土地区画整理事業に伴う事前調査
				使用測地系				
				日本測地系（改正前）				
たけのうち 竹ノ内遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 みやぎのく 宮城野区 がもうあざたけのうち 蒲生字竹ノ内	０４１００	０１１５２	３８度 １５分 ５０秒	140度 ５９分 ２６秒	20030804～1014	約 1,850	
				使用測地系				
				日本測地系（改正前）				

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	特　　記　　事　　項
中野高柳 遺跡	畑跡	平安時代 中頃	畑跡 区画溝跡 河川跡	土師器 須恵器 赤焼土器	南に流れる河川両岸の自然堤防上を畑として利用している。畑は、河川に接続する溝で「コ」字状に区画されている。灰白色火山灰の降灰で廃絶したのち復旧されるが、洪水で埋没する。
	集落跡	平安時代末期～江戸時代	屋敷跡 区画溝跡 掘立柱建物跡 井戸跡 土壙 溝跡	かわらけ 中世陶器 近世陶磁器 青磁・白磁 土師質土器 木製品 漆製品 石製品 金属製品 動物遺体 植物遺体	平安時代末期～江戸時代は、ほぼ連続して集落が営まれた。平安時代末期は幅１ｍの溝で囲まれた屋敷を３区画確認し、その居住者が西側の湿地に遺物包含層を形成したことがわかった。　鎌倉時代から室町時代の集落は、幅３ｍの大溝によって区画された屋敷と幅１ｍの溝で囲まれた屋敷で構成される。前者は在地領主層、後者は家臣や従者などの住まいと考えられる。在地領主の屋敷は、主屋・副屋・雑舎・前庭・井戸・ゴミ穴などが一定の場所に配置されていることがわかった。こうしたあり方は他の屋敷と共通しており、屋敷内部の場の使い分けは、時代を超えて基本的に変わらなかったことを示すと考えられる。　江戸時代の集落は、中世期と同じ構成をとるが、出土遺物からみて規模の大きなものは、有力農民増の屋敷と考えられる。　発掘によって遺跡の９割以上が調査されたことになり、平安時代末期から江戸時代の集落の実態をある程度具体的に提示できたことが最大の成果といえる。また、植物遺体の分析も行っており、平安時代末期から南北朝時代は、屋敷とそれを取り巻く環境を含め、当時の生活を復元する上で貴重な資料が得られた。
竹ノ内遺跡	集落跡、寺跡	江戸時代	屋敷跡 区画溝跡 掘立柱建物跡 井戸跡 土壙 溝跡	土師質土器 近世陶磁器 青磁・白磁 木製品 漆製品 石製品 金属製品	幅４ｍの大溝で囲まれた有力農民層の屋敷跡ののち、寺が営まれたと考えられる。寺名は天台宗「耳取山冷徳寺」と考えられる。

黒漆二枚居木鞍

宮城県文化財調査報告書第204集

中 野 高 柳 遺 跡 Ⅳ

-宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書Ⅳ-

平成18年３月25日印刷
平成18年３月31日発行

発 行 宮 城 県 教 育 委 員 会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号
印 刷 株式会社 佐 々 木 印 刷 所
〒983-0035 仙台市宮城野区日の出町2丁目2番16号
TEL.022-236-1281(代) FAX.022-236-1284
E-mail sasaki_insathu3@syd.odn.ne.jp